

---

# このまま東方寝巻巻。

もっぷす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

このまま東方寝巻巻。

### 【Nコード】

N2599S

### 【作者名】

もっぷす

### 【あらすじ】

魔理沙は考えた。

この話、本当にパジャマである必要はあるのだろうか。  
まあ、いいか。

なんせ、このパジャマを着て、くるりと回って「ZE」なんか言  
った日には、もうすごい。はず。

1 魔理沙、パジャマパーティーをしようぜの巻。(前書き)

二重カギカッコは、主人公的な人の発言です。

それぞれのキャラがイメージと異なるかもしれませんが。

原作のイメージを大切にする方は、ご注意ください。

また、あらゆる点で、異常な表現方法が取られていますので、ご了承ください。

1 魔理沙、パジャマパーティーをしようぜの巻。

魔「なあ」

『ん?』

魔「パジャマパーティーをしようと思う」

『はは、それはいいね』

魔「明日やるから用意していてくれ」

『何を?』

魔「お菓子とか晩飯とかレクリエーションとか」

『…本当にやる気?』

魔「もちろんだ」

『俺は魔理沙のパジャマ姿を拝めるのかい?』

魔「高くつくぜ?」

『多少の尊い犠牲はいとわないよ』

魔「じゃあ、準備は頼んだぜ」

『明日のいつ?』

魔「夕方頃だな」

『どうして?』

魔「ここで」

『誰が?』

魔「沢山呼んで来るぜ」

『……………』

魔「そゆことだ。じゃ」

『じゃ、じゃないよお』

魔「じよ」

『じよ、でもないよお』

魔「霊夢も誘っぜ?」

『…で?』

魔「駄目か?」

『男の家に泊まるの?』

魔「女の家がいいのか?」

『そういつわけでは…』

魔「博麗神社だとありきたりだからな」

『……………』

魔「じゃあ頼んだぜ」

『…うん…』

…

…

…

『詭弁だ！　これは謀略だ！』

魔「誰と喋ってるんだ？」

『ほんとにやるの？』

魔「そろそろ誰か来るぜ」

『みんなに布団持参だっけ言ってくれた？』

魔「ばつちしだぜ」

『ちなみに魔理沙は？』

魔「誰かに入れてもらえばいいだろ」

『……………』

魔「いよいよとなれば、お前のを借りるぜ」

『え……………』

魔「……………」

『……………』

魔「いや違う！ お前の所に入るんじゃないなくて、その…お前がどっかで寝て、私がお前の布団で寝るっていう…」

『……………』

ピンポン

魔「あ…だ、誰か来たぜ」

『はい、誰ですか？』

ガチャリ

霊「おじやまします」

『おお、いらつしやい』

魔「早かったな」

霊「まあ、やることもなかったからね」

『あの…お布団は？』

霊「そんな嘘に引つ掛かる奴いないわよ」

『いや、本気なんですけど…』

霊「…布団なんか持って来る訳ないでしょ」

『…ですよね』

魔「このままだと、霊夢は誰かさんの布団に詰めて寝ることになる

ZE  
」

霊「困ったわね」



『……………』

霊「……………」

『……………』

霊「詰めても大丈夫ね」

『え……何で……?』

ピンポオン

霊「誰か来たわね」

『どござー』

ア「…お邪魔します…」

『あ、あります!?!』

ア「なっ……何よお…」

『あ…いや…ちょっと珍しい客だな、と』

ア「ま…魔理沙が呼んだから…」

魔「ああ、呼んだぜ」

『で、お布団は？』

ア「やっぱり必要なの？」

『…うん…』

ア「でも…布団なんか何に使うのよ？」

魔「もちろん、寝るためだぜ」

ア「え…じゃあ布団無い人は？」

魔「誰かに入れてもらうしかないな」

ア「…誰か…　っ！」

魔「アリス、顔が赤いぜ」

ア「な…なんでもない…」

『果たして、布団を持って来る人はいるんでしょうか？』

魔「このままだと私以外は床で寝ることになるな」

『……………』

ピンポーン

『はい、どじろー』

「開けてくださいー」

『はいよ』

ガチャ

『おおー！』

妖「な、なんですか？」

『布団だ！』

妖「え…持って来いって…」

『うんうん』

妖「あ、また魔理沙が持って来なかったとか」

『まあ、そんなところ』

妖「お邪魔しますよ」

『どろどろどろどろ』

魔「よっ」

霊「あ、布団」

ア「え、本当だ」

妖「誰も持って来てなかった!」

## 2 霊夢、布団を取りに行くの巻。

『ねえ』

霊「ん？」

『霊夢は布団持って来られるんじゃない？』

霊「面倒だからいい」

『俺が持って来ようか？』

魔「変態だ」

『…なんで？』

魔「霊夢の布団の匂いを堪能しようとしてるから」

『違ってます』

霊「別に、いい匂いしないわよ」

魔「いや、ほんのり汗の匂いの染み込んだ布団は、細菌の絶好の繁殖場だぜ」

『バイ菌扱い？』

霊「私が見張るから、一緒に取りに行きましょう」

『…見張る…』

魔「変な気は起こすなよ」

『大丈夫だ。問題ない』

霊「じゃ、行きましょう」

『うん。とりあえず、行ってくる』

ガチアリ  
ヴァタム

妖「魔理沙、下品ですよ」

魔「あいつは年頃の男なんだ。気をつけようぜ」

ア「確かに危険ね」

妖「…どうして信頼の置けない人の家に招待するんですか」

魔「そっぴや、幽々子は？」

妖「ああ！ 忘れてた！」

ドタドタ  
ガチャン

ボタン

魔「…道中にでも忘れてきたのか？」

ア「さあ」

魔「しかし、この部屋には何人入れるんだろうな」

ア「6人分の布団は敷けそうよ」

魔「キッチンにも敷けるな」

ア「トイレにも敷けるわ」

魔「いや、それは…」

ア「ところで、今日は何するの」

魔「パーティーだぜ」

ア「具体的には？」

魔「酒を飲む」

ア「結局それなのね」

魔「何かしたい事でもあるか？」

ア「人形作り」

魔「いつもしてるだろ…」

ア「子作り」

魔「…えっと…確かに…いい機会かもな…がんばれよ…」

ア「…は？ ち、違うわよ！ あいつじゃなくてよー！」

魔「他に誰がいるんだよ…」

ア「だ…だから…その…それよりも、魔理沙はどこで寝るの？」

魔「もちろん、布団だぜ」

ア「持って来てないじゃない」

魔「持って来た人から借りるんだぜ」

ア「あんたの場合は奪い取るんですよ」

魔「人間きが悪いぜ」

ガチャ



ボタン

霊「ただいま」

『た、ただいま…』

魔「お、帰ってきたな」

『つかれた』

霊「ありがとう。お礼に、今晚は一緒に寝てあげる」

『え、いや…』

魔「何誘惑してるんだよ」

霊「ふふ…冗談よ」

『……………』

魔「お前は残念そうにしてるな」

『してないもん』

ア「私も持って来ようかしら」

『魔理沙と一緒に寝t…』

ア「ち、違うわよ…!」

霊「……………」

魔「……………?」

ア「…い、行ってくる」

『……………』

ア「…とにかく行ってくるから」

魔「お土産よろしくー」

ガチャン

『ところで、あとは誰が来るの?』

魔「秘密」

『いじわる』

魔「咲夜は来ないぜ」

『だろうね。あの人は俺のこと嫌いみたいだし』

魔「だな」

『パチユリー様は？』

魔「来ないと思うが、呼んでみるか？」

『うん、頼む』

魔「どうして呼びたいんだよ？」

『仲間だからに決まってるじゃないか』

魔「パチユリーだけでいいんだな？」

『と、小悪魔さんね』

魔「……………」

『……………』

魔「と、警察だな」

『勘弁してください』

## 2・5(前書き)

○・5シリーズは、本編や実在の地名・人物・団体とは一切関係ありません。

妖「魔理沙、下品ですよ」

魔「あいつは年頃の男なんだ。気をつけようぜ」

ア「確かに危険ね」

妖「…どうして信頼の置けない人の家に招待するんですか」

魔「そっぴゃ、幽々子は？」

妖「ああ！ 忘れてた！」

ドタドタ

ガチャン

バタン

魔「…道中にでも忘れてきたのか？」

ア「さあ」

魔「しかし、この部屋には何人入れるんだろうな」

ア「6人分の布団は敷けそうよ」

魔「キッチンにも敷けるな」

ア「トイレにも敷けるわ」

魔「いや、それは…」

ア「ところで、今日は何するの？」

魔「パーティーだぜ」

ア「具体的には？」

魔「きのこ狩り」

ア「…いやよ」

魔「マッシュルーム・ハント」

ア「同じじゃないの」

魔「流しそうめん」

ア「ちょっと子供っぽいと思っちゃうわ」

魔「流し蕎麦」

ア「たぶん流れ悪いわよ」

魔「流し音威子府蕎麦」

ア「ローカル過ぎて、誰も知らないどころか、読めないわ」

魔「流しうどん」

ア「永遠亭でやれ」

魔「流しトイレットペーパー」

ア「途中で溶けるわよ」

魔「流しシンク」

ア「ほとんど同じ意味じゃない」



魔「流星」

ア「あなたの専売特許でしょ」

魔「流し聖」

ア「…あ、さっきの星って虎のこと!？」

魔「河童の川流し」

ア「…事件ね」

魔「じゃあ、アリスは何がしたいんだ？」

ア「私？」

魔「ああ」

ア「そうね…強いて言うなら…」

魔「言うなら？」

ア「下ネタじゃねえか！」

魔「……………何が？」

### 3 幽々子、何をするの？の巻。

魔「パチユリーは来ないってさ」

『小悪魔さんは？』

魔「発情期の男と一緒にには寝られないってさ」

『虚言な言ひそ』

魔「何語だ…」

『他には来る人いるの？』

魔「幽香は来るらしい」

『まじか』

霊「あんなの呼んで大丈夫？」

魔「ちよつと男を誘惑するくらいだろ、きつと」

『誰か男の人来るの？』

魔「いんや」

『俺だけが被害者か…』

魔「とか言っつて、期待してるんだろ？」

『そんな変態だったら、もう魔理沙に手を出してるよ』

魔「かわいいもんな」

霊「……………」

『…否定はできないが』

ピンポンー

霊「お出ましかもね」

『……………』

霊「…幽香が苦手なの？」

魔「とりあえず出るぜ」

ガチャン

バタン

妖「幽々子様、扉押さえててくださいよお」

@「はい」

霊「幽香じゃなかったわね」

『助かった』

魔「…いずれ来るぜ？」

霊「幽々子の布団を取りに行ったの？」

妖「そうですよ」

霊「この部屋でそんな大人数の布団敷ける？」

魔「詰めれば大丈夫だろ」

『厳しいと思うな…』

魔「お前は押し入れだぜ」

『俺はネコ型ロボットか』

魔「ぜ？」

霊「？」

妖「？」

@「？」

『…いや、なんでもない』

ガチャン  
バツタン

ア「ただいま」

『枕と毛布だけ?』

ア「冷静に考えたら、私の家はベッドだったわ」

『…戻る前に気付け』

ア「瑣末なことよ」

『でも、ベッドのことは想定してなかった』

霊「幽香もベッドなんじゃないの?」

魔「だろうな」

『床で寝てもらおう?』

ア「誰かさんと二人で仲睦まじく寝ればいいじゃない」

『誰か、って誰だろう?』

ア「あなたよ」

『…困る』

@「ところで何をするの？」

霊「言われてみれば、私も何をするか聞いてないわ」

妖「私も聞いてません」

ア「私も」

『俺も聞いてない』

魔「私も聞いてないぜ」

『あなたが主催者だからね！』

魔「とりあえず酒でも飲むか」

霊「結局いつも通りね」

『うちにお酒ないよ』

魔「じゃあ、どうするんだよ」

『俺に聞くな』

妖「…帰っていいですか？」

『えーと、パジャマパーティーだから…』

魔「とりあえずパジャマになる」

『なるの？』

魔「見たいか？」

『…少しね』

魔「変態野郎だな」

『そういつつもりではないんだけど…』

ア「何でこんな変態野郎の家に泊まらなきゃならないの？」

『…じゃあ帰れ』

魔「私は襲われるに違いない」

『俺より寧ろ、幽香さんが危ないでしょ』



ア「はいはい、幽香さんに襲われるといいわね」

『…もうやだな…』

ピンポーン

『誰だろう？』

霊「幽香かもね」

『…今開けるで…』  
『おん』

妖「ござるって…」

ア「…動揺なの？」

ガチャ

『…お』

慧「少し久しぶりかな？」

『慧音と妹紅じゃないか!』

妹「…うん」

魔「知り合いだって言うから呼んでおいたぜ」

『いやー久しぶり』

魔「嬉しそうだな」

『そうかな?』

慧「お邪魔します」

妹「…お邪魔します」

慧「お…随分大人数だな…」

妹「……………」

慧「持つては来たが、布団は敷けるんだろうか…」

霊「ねえ、魔理沙」

魔「なんだ?」

霊「呼び過ぎ」

魔「多い方が楽しいぜ?」

霊「寝られないでしょ」

魔「…実は少し後悔してる」

#### 4 幽香、襲来の巻。

『お風呂とご飯とどっち先にする？』

魔「お前」

『…選択肢の中から選んでください』

魔「風呂にするか」

霊「そうね。お酒飲んでから風呂はちょっと…」

慧「食事の直後の入浴は体によくないと言っしな」

『じゃあ、もう順番に入った方がいいね』

魔「湯、沸いてるのか？」

『お湯入れたら入れるから、15分くらいかかる』

霊「その間に順番決めておけばいいわね」

『ところで、ご飯はどうしよう？』

魔「用意してないのか？」

『お寿司を頼もうと思ったんだけど…』

@「やった〜」

慧「この人数だと凄い金額になりそうだな……」

@「……………」

妖「お寿司は無理そうですね」

@「…おるず」

妖「…どこで覚えたんですかそれ」

『仕方ない。出前はやめて普通に作るかな』

魔「御馳走を頼むぜ」

『何人分作ればいいのか？』

魔「9人分くらいだな」

妖「すみませんが、それだと全然足りませんよ」

@「そんなにたくさん来るの？ 賑やかね」

妖「……………」

@「？」

『俺の貴重な食料が……』

慧「…何か持って来た方がいいたるうか？」

『出来ればお願いしたい』

慧「わかった。持って来よう」

妹「あ、私も行く」

妖「私も持って来ます」

ガチャ

バタン

『もうご飯作り始めるかな』

霊「手伝う？」

『きつと霊夢はいいお嫁さんになるよ』

魔「お、プロポーズだ」

『違っつて』

霊「確かに嫁にしたくなるわよね」

『少しね』

ア「こうして霊夢は悪霊に憑かれたのです」

『…あの…とにかく始めようか…』

霊「わかったわ、あなた」

魔「…おお…」

ア「凄いこと言ったわね」

『……………』

霊「顔赤いけど大丈夫？」

『…もうやだ…』

魔「嬉しそうだけだな」

ピンポン

ア「もう帰って来たのかしら？」

『……………』

霊「顔青いけど大丈夫？」

『…もうやだ…』

魔「幽香っばいな」

ガチャ

幽「お邪魔します」

ア「お出ましたわ」

幽「ご機嫌いかが？」

『……………』

幽「ふふっ、今晚は楽しみましょっね？」

魔「何をする気だよ？」

幽「ふふ…何でしょっね」

『…霊夢、ご飯作ろっ』

霊「はいはい」

ア「魔理沙、子供作ろっ」

魔「…何言ってるんだ？」

ア「…なんでもない…」



魔「お湯入ったぜ」

『順番どうする？』

霊「魔理沙からでいいんじゃない」

魔「ラッキー、一番風呂だ」

『あ、湯舟あわあわにしないでね』

魔「わかってるって……あ、覗くなよ？」

ア「わわわわわわわわわわよ！！」

『……何この人危ない』

……

ガチャ

妖「戻りました」

@「お帰り、妖夢」

ア「随分たくさん持ってきたわね」

妖「まあ、これくらいは」

@「これで、いっぱい食べられるわね」

妖「そうですね。あ、私も台所を手伝います」

幽「暇ね」

ア「テレビでも見る？」

幽「遠慮するわ」

ア「じゃあ台所を手伝うとかは？」

幽「そうね」

トタトタ

ふにっ

「だ〜れだ？」

『…ちよ…危ないです…』

幽「だって暇なのよ？」

『危ないです、ワタシ包丁、持ってるです。白い線まで、お下がりにください』

幽「…素敵な短歌ね」

『…あの…離れてください…』

幽「離れていいの？」

むにゅむにゅ

『うあぁ…許して…ください』

幽「ふふ、仕方ないわね」

霊「お疲れ」

『……………』

妖「……………」

霊「感想は？」

『いや…まあ…』

霊「大きい胸は好きじゃないの？」

『…そういうわけでは…ないけども…』

霊「ちょっと嬉しかった？」

『…まあ…』

妖「あんなのただの脂肪の塊ですよ！ 目を覚ましてください！」

『…落ち着いて。まず涙を拭こつか』

『とろろで、ご飯はどうしよう?』

魔「用意してないのか?」

『お寿司を頼もうと思ったんだけど……』

@「やった〜」

慧「この人数だと凄い金額になりそうだな……」

@「……………」

妖「お寿司は無理そうですね」

@「……おるず」

妖「……どこで覚えたんですかそれ」

@「私だって流行語くらい知ってるわ」

妖「流行語なのでしょうか?」

@「ええ。他には、もはや戦後ではない、とか」

慧「それは、幽　　白書じゃないか」

『……経済白書じゃなかったっけ?』

慧「そうそう。別名は確か…ターヘル・アナ…ア…アナ…うう…」  
／／／／／」

『卑猥な言葉じゃないよ!? しかもターヘルアナトミアは解体新書だよね?』

慧「と…とにかく流行りの言葉ではないぞ」

『というか、幻想郷入りしてる時点で流行語ではない気もする』

妖「じゃあ、どんなのが流行ってるんですか?」

@「KYとか?」

妖「少し古い気もしますが…どういう意味ですか?」

@「今後ともよろしく」

妖「なるほど」

『…違いよ』

@「DQNとかも流行りね」

妖「意味は?」

@「ド○ゴンクエストよ」

妖「ほほう」

『…違いよ』

@「PADとかもあるわ」

妖「はい。他には？」

『スルーした！？』

@「んー、ちよい気持ちー、とか」

妖「…あ…あゝ。あの人のあれですか」

『…何で知ったかぶりするの？』

@「あとは、オバタリアンとか」

紫「誰がババタリアンだ！」

『…どっから沸いて来た』



@ 「あと、あな とは違うんです、とか」

『変なところ伏せ字にしないでください』

@ 「あとTNTNとか」

妖 「意味は？」

@ 「夜雀の鳴き声で」

妖 「どんな鳴き声ですか？」

@ 「ちん…」

『ストップ！』

@ 「…？」

『ほ…他には？』

@ 「あとTNTとか」

妖 「Nが減りましたね。意味は？」

@「トロ・ニトリ・トルエンね」

妖「ふむふむ」

『…河童が混入してしまった』

慧「河童というか、輝夜だな」

『カゲヤ違いだよ!』

## 5 霊夢、パジャマを着るの巻。

魔「霧雨魔理沙、入浴完了したぜ」

ア「魔理沙の次は誰にも譲らないわー!!」

幽「気持ち悪い女ね」

魔「…そうだな」

ア「……………」

幽「吐き気がするわ」

魔「…そうか」

ア「……………」

幽「オエ」

魔「……………」

ア「……………」

霊「お風呂、誰も入らないなら私入るわよ?」

『いいんじゃない?』

霊「覗かないですよ？」

『覗かないってば』

ア「……………」

ピンポーン

『誰だろ？』

魔「開けるぜ？」

『うん。お願い』

ガチャ

慧「お邪魔します」

魔「なんだ、慧音か」

慧「悪かったな」

妹「お邪魔します」

慧「野菜ばかりになってしまったが…」

『おお、こんなに。ありがとう』

慧「台所、手伝おうか？」

『ん、じゃあ、必要になったら呼んでいい？』

慧「わかった。遠慮なく呼んでくれ」

『うん。助かるよ』

幽「私も必要なら呼んで頂戴ね」

『勘弁してください…』

霊「上がったわよ」

魔「お、早いな」

霊「ん？ 普通だけど」

妖「次は私が入りますね」

@「…いつてらっしやい」

霊「で、どっ？」

『な…何が？』

霊「そりゃパジャマでしょ。似合ってる？」

『…上下紺とは予想だにできなかった…』

霊「ふふ、照れちゃって」

『…正直、カッコイイっす』

魔「さすが、私のパジャマ姿が目的のパジャマフェチのコメントだ」

霊「そうだったの？」

ア「不潔ね」

『…目的ではないが楽しみだと思わないことも無きにしもあらず…』

霊「…って、まだ魔理沙はパジャマじゃないの？」

魔「ああ。私も着替えようかな」

ア「…ごくり…はぁ…はぁ…」

霊「あなたの方が不潔なんだけど…」

ア「…はぁ…はぁ…」

『…聞いてないみたいだね』

霊「ダメだ、こいつ」

魔「なんてな。私は主役だから、お披露目はまた後で」

霊「…主役なんだ」

@「そういえば、晩ご飯は何なの？」

ア「…ご馳走、だそうよ」

@「何なのかしらね？」

魔「美味しければ何でもいいぜ」

ア「あんたらしいわ」

魔「そういうアリスは何がいいんだ？」

ア「高い物なら何でも」

魔「嫌な女だな」

ア「余計なお世話よ」

魔「幽香はどうだ？」

幽「ん？ 食べたい物？」

魔「下ネタじゃねえか」

幽「…まだ答えてないんだけど…」

……



妖「上がりました」

@「あら、浅葱色。かわいいわね」

妖「ありがとうございます」

@「次は私でいい？」

慧「構わないと思うぞ」

@「じゃあ入るわ」

妖「あ、私は台所を手伝わないと」

ア「しかし平和ね」

魔「暇って意味だろ？」

ア「まあね」

魔「テレビゲームでもやるか？」

ア「そうするわ」

魔「それじゃ、ゲーム大会と洒落込むか」

幽「別にいいけど」

魔「慧音と妹紅は？」

慧「どうする、妹紅？」

妹「暇だからやる」

魔「よし、全員参加だな」

幽「何するの？」

魔「げ：パーティー用のゲームがないぜ……」

幽「ギャルゲばかりね（笑）」

ア「出来ないってこと？（笑）」

魔「すこし待っててくれ（笑）」

トタトタ

魔「みんなで出来るゲームはないのか？」

「俺は一人暮らしです」

魔「友達とワイワイしないのか？」

『…友達いないんです』

魔「じゃあ何すればいいんだよ」

『神社に行つてよ』

魔「は？」

『霊夢がお酒取りに行つたんだよ』

魔「いつの間に…」

『ついさっきね』

魔「手伝えと？」

『飲みたくば』

魔「それが人にものを頼む態度か？」

『…あんたに言われたくないよ』

## 6 妖夢、ご飯作りましたの巻。

魔「おい、やっぱりゲーム大会は中止だ」

幽「えー」

魔「仕方ないだろ。ゲームがないんだから」

妹「探したらあるかも」

慧「おいおい、漁ったら悪いだろう」

魔「とにかく、私は酒を取りに行つて来るぜ」

ア「結局飲むのね」

幽「宴にお酒は付き物よ」

妹「確かに」

慧「こらこら、妹紅は漁るんじゃないって」

魔「…行つてくるぜ」

ガチャン  
バタン

@「上がったわ。次の人どうぞ」

ア「…私が入るわ」

@「うん、どうぞ」

慧「その次はどうする？」

幽「私は食後でいいわよ」

慧「お言葉に甘えて、次は妹紅が入るといい」

妹「わかった」

@「妖夢、パジャマは？」

妖「そこに置いてありますよ」

@「小さいわね」

妖「パジャマはそれしかなかったの…」

@「胸のボタンが留められないわよ」

妖「……………」

@「留められないわ」

妖「1番上のボタンは外してもいいですよ」

@「外してるわよ」

妖「……………」

@「外してるわ」

妖「じゃあ、パジャマは無理ですね」

@「え〜」

妖「無理です」

@「じゃあ、どうするの?」

妖「いつもの服で我慢してください」

@「残念」

……………

ガチャン  
ボタン

霊「ただいまー」

『お帰り』

霊「持って来たわよ」

『ありがとう』

妖「食事の用意ももうすぐ終わります」

霊「あら、早いわね」

魔「ただいま。疲れたぜ」

『お疲れさん』

ア「魔理沙、おかえり」

魔「お、風呂入ったんだな」

ア「…うん。どう？ このパジャ」

魔「妖夢、メシはまだか？」

ア「……………」

『ドゥンマイ』

ア「黙れ」

『……………』

ア「……………」

『…せっかくきれいな桜色にしたのにね』

ア「全くよ」

『魔理沙は花より団子みたい』

ア「今、ひしひしと感じたわ」

……………

妹「上がったぞ」

慧「妹紅、寝巻がそれそこに」



妹「…大きくないか？ 袖もかなり余る…」

慧「それが流行だ。次は私が風呂に入ろうかと思ったが…」

ア「そろそろ食事ね」

@「慧音と幽香は食後に入ることになりそうね」

慧「まあ、それもいいだろう」

妖「ご飯ができましたー」

@「おっ！ もーお腹ぺこぺこ」

『やっと終わっ…うわ…妹紅…鎖骨がせくしー…』

慧「どうだ？ ナイスチョイスだろ？」

『…うん』

霊「はい、唐揚げよー」

幽「あら、おいしそう」

妖「お刺身が通りますよ」

妹「うお、刺身だ」

慧「ほらほら、ゲーム漁ってる場合じゃないぞ、妹紅」

妹「もう漁ってないよ…」

魔「よっ、酒だぜ」

ア「食卓が狭いんだけど」

『ごめん。俺、独り暮らしなんだよ』

魔「さっき聞いたぜ」

霊「まあ、とにかく食べましょ」

妖「料理は少しずつ持って来ますから」

魔「とりあえず杯に酒を注ごう」

『コップしかないけど大丈夫だよね？』

ア「はあ、仕方ないわね」

妖「準備完了です」

霊「じゃ、主催者の魔理沙が挨拶して」

魔「えっ、私か？」

ア「当たり前でしょ」

魔「えっとじゃあ…」

魔「とりあえずカンパイ！」

「「「カンパイ！」」」

@「うん、美味しい」

ア「魔理沙、こぼしたわ」

魔「悪い悪い」

妹「ん、何これ？」

慧「それはラザニアとってだな」

妖「はい、唐揚げの追加ですよ」

幽「ねえ、右肘が私の胸に当たってるんだけど」

魔「デカすぎるから悪い」

幽「何それ、嫉妬？」

霊「あ、お酒注ぐわね」

『あ…ありがとう』

@「霊夢、私にもお願い」

妖「幽々子さま、こっちにもありますよ」

『…っ！ 妖夢ストップ！ 俺が取るから！』

妖「はい！？」

霊「…第1ボタンしなさい。スキマ祭よ」

妖「？」

『…危なかつたぜ』

慧「すまない、醤油を取ってもらえないか？」

『はいよ』

妹「それ私の皿なんだけど」

ア「え…あ、ごめん」

霊「慧音は飲まないの？」

慧「折角だから頂くことにしよう」

@「はい、お酒」

妹「慧音、私にも」

『妹紅つてお酒飲めるの？』

妹「当たり前でしょ！」

魔「ぷ、怒られてやんの」

『…うるさいわ』

妖「そろそろ次の料理持って来ますね」

@「よっ、待ってました」

『俺は空いた皿でも洗おうかな』

霊「ん、私も洗うわ」

『いいよ。霊夢はゆっくり食べさせて』

魔「ポイント稼ぎだな」

幽「媚とも言っわ」

ア「卑劣で最低なやり口だわ」

『君たちはちょっとくらい働けっか！』

妖「準備完了です」

霊「じゃ、主催者の魔理沙が挨拶して」

魔「えっ、私か？」

ア「当たり前でしょ」

魔「えっとじゃあ…」

魔「とりあえずカンパイ！」

「「「カンパイ！」」」

@「うん、美味しい」

ア「魔理沙、こぼしたわ」

魔「悪い悪い」

妹「ん、何これ？」

慧「それは五色米といってだな、食用ではなく、暗号に用いるものだ」

『…忍者か』

妖「五穀米ですよ」

妹「じゃあ、これは？」

慧「XO醬といって、コークと非常によく似た炭酸飲料だな」

『XO醬は飲まないし、これはオイスターソース』

妹「あれは？」

慧「ブロッコリーだな。孔子は弟子に、ブロッコリーとカリフラワ―、白いのはどっち？ という奇問を出し、正解しても銃殺した」



『あれはパセリだ』

妹「これは？」

慧「ビーフ・ストロング・ガノンドロフ。通称BSGといって、特定保健用食品にも選ばれそうな感じ」

『…ビーフストロガノフね』

妹「そつちのは？」

慧「サーモンの…カルパッチョだかパルカッチョだか」

『鮭のムニエルね』

妹「こつちは？」

慧「練乳汁」

妖「シチューです」

妹「それは？」

慧「つくし」

『アスパラガス』

妹「これは？」

慧「…テポ井じゃね？」

妖「天井です」

慧「…テポ井じゃね？」

妖「天井です」

慧「テポ井じゃね？」

妖「天井です」

## 7 慧音、酔うの巻。

妖「皆さん、野菜の和え物ですよ」

魔「肉の方がいいぜ」

妹「確かに」

@「好き嫌いは駄目よ」

霊「肉食系女子だから仕方ないわね」

魔「私はおしとやかだぜ」

『はっ、ぬかしおる』

魔「お前と二人きりの時だけは、な」

ア「…チッ」

『ないよ、嘘だよ』

幽「とか言っつて、実は…」

『何もありませんよ』

ア「……………」

『何、その目は？』

ア「別に」

霊「でも、魔理沙が甘えたらギャップがあるわね」

魔「どんな奴もイチコロなんだぜ」

ア「っ！」

『「っ」かはばつぐんだ！』

幽「見上げた妄想力ね」

妹「うわ！ 鼻血が！」

@「私の胡麻和えに！」

妖「…みんなの、です」

霊「ギャップって強いわね」

幽「霊夢は何が反対なのかしら？」

魔「霊夢は巫女だから…」

霊「巫女の反対って？」

慧「悪霊だろっか」

幽「…それは可愛いのかしら…」

魔「アリスは何だろう」

『ト変態』

幽「そうね」

ア「違うわよ！」

霊「じゃあ、何変態よ？」

ア「変態じゃないわよ！」

幽「変態は大変よ」

魔「変態の反対は？」

霊「変態の戦隊」

ア「反対じゃないじゃん！」

魔「変態戦隊エロレンジャー？」

ア「変態じゃないってば！」

『戦隊だよ』

ア「戦隊でもない！」

幽「今日のパンツの色は？」

ア「ピン…言うわけ無いわー！」

霊「そういう幽香は？」

幽「白」

『ぶっ…げほ』

幽「あら、黒かと思った？」

魔「そこじゃないだろ」

幽「見たい？」

『…いえ』

幽「本当にそうかしら？」

『…食事中ですよ』

幽「そうね。夜はまだ長いもの」

@「妖夢、次の料理を」

妖「それが最後ですよ」

@「え……」

妖「最後です」

@「……残念……」

魔「酒持って来〜い！」

霊「らによっはやつへりゆるよー」

『こいつらベロンベロンだ！』

ア「……魔理沙の……膝枕……うふふ……」

『こいつもダメだ！』

慧「しかし、しどいな……ひっく……」

『慧音先生まで！』

幽「ひどいわね」

『まあいいや。そろそろ風呂入ろつかない』

魔「私と!?!」

靈「あらひとれひよ?」

『…おまえらもう入っただろ』

妹「ひっく」

ア「…うっふふ…」

『…酒なんか飲ますんじゃないよ!』

『……………ひっく』

……………

慧「軽く酔ってしまったな」

『…軽くないよ』

慧「酔いもだいが醒めたし、風呂に入ってくる」



『…本当に醒めたのかな…』

妹「就寝まで退屈」

幽「王様ゲームする？」

『…何故そうなる』

幽「あら、それが目的でしょ？」

『何のですか？』

幽「パジャマパーティー」

『ちやいます』

妹「王様ゲームって何？」

魔「王様が色々やらしい命令をできるゲーム」

妹「げ…何だそれ…」

『…違うけどね』

魔「実演してやろう」

幽「じゃあ私が王様ね」

『まさかの立候補制！？』

魔「いや、こっちはお前に任せるぜ」

『俺かよ』

魔「ほら命令しろよ」

『うん…』

魔「ほらほら」

『じゃあ…悩殺ポーズを』

魔「……………」

幽「……………」

妹「……………」

魔「病院へ連れていこう」

幽「そうね」

『ゴメンナサイ』

妹「主旨が全く理解出来なかった」

『…すみません』

幽「やっぱりオトナのアンビにしましょ」

『…なんですかそれ』

幽「勝者が敗者の人権を手に入れる遊び」

「…この人、鬼か悪魔だ」

幽「ん？」

「鬼か悪…」

幽「あん？」

「…」

幽「…」

「…ててて天使か女神だ」

## 8 幽香、入浴するの巻。

魔「この後、何をするんだ？」

『就寝だね』

幽「ただし、指名された女性1名は…」

ア「…朝まで寝かせてもらえない…？」

幽「正解」

『ないから』

幽「いつからタメ口になったのかしら？」

『…すみません』

魔「でも、すぐ寝るのはつまらないぜ」

妹「確かに」

『人生ゲームならあるけど…』

魔「じゃあ、それで」

『でも、そんなに時間あるだろうか？』

魔「夜通しでもいいぜ」

『美容と健康に悪いよ』

ア「…女々しいわね」

魔「とりあえず、みんな揃うまで暇を潰そう」

霊「花札なんてどう？」

幽「あら、いいじゃない」

霊「みんなやるわよね？」

魔「望むところだぜ」

『…俺はちよつと…』

霊「何だよ」

『賭けでしょ？』

霊「当然」

『俺は…ごめん』

霊「そう。まあ、いいわ」

妹「私はやる」

@「私も参加していいかしら？」

ア「私もやるわ」

魔「じゃ、始めるか」

霊「レッツ、一獲千金！」

魔「…暇だ」

「花札は？」

魔「終わった」

「早っ」

ア「お金無いくせに賭けしようとする輩がいるから」

霊「手に入れる予定のカネを賭けて悪い？」

「…ダメでしょ」

幽「で、どっにするの？」

霊「そうね…そろそろ寝る？」

幽「カネの話よ」

霊「結局、布団は幾つあるの？」

幽「おい」

ア「やり過ぎす気ね」

『布団は…5かな』

魔「足りないじゃないか」

『わかりきってたでしょうが』

ア「どうするのよ」

『俺は床で寝るよ』

幽「あら…いいのよ、甘えて」

『いやいや…』

魔「折角だから、寝てもらえよ」

ア「そっよ」

幽「あつたかいわよ？」

『聞こえない聞こえない聞こえない…』

霊「よいしょ、と」

魔「どさくさに紛れて布団敷くなよ」

霊「全部敷けるかしら？」

妖「よいしょ、と」

魔「おまえも」

妖「出番が少ないので…」

@「私は妖夢と一緒に寝るわ」

魔「幽々子の布団が余るってことか」

ア「しかたないわね」

魔「何がだ？」

ア「余ってる人は…私と魔理沙だけ…よね」

『まだ二人しか決まっていって』

魔「ああ、アリスは霊夢と寝てくれ」

ア「何だよ！ 何でそうなるのよ！」



魔「実は私……」

ア「な……なによ……」

魔「一人で寝たいんだ」

『…… 凄い自己本位ですね』

慧「上がったぞー」

幽「じゃ、入るわよ」

魔「いてら」

幽「ほら、入るわよって」

ア「お呼びよ」

『…俺!?!』

幽「入らないの?」

『…ここ、今度』

幽「…そう…」

霊「……………」

魔「……………」

ア「……………」

妖「……………」

@「……………」

妹「……………」

慧「……………?」

…ガラガラ…

魔「あゝあ」

ア「あゝあ」

妹「あゝあ」

霊「ふあゝあ」

@「あゝあ」

『…あくびしてる人いなかった?』

魔「もったいない」

『…つるせ』

ア「最初で最後のチャンスが潰えた」

『……………』

霊「…ドンマイ」

『……………』

魔「落ち込むなよ（笑）」

『……………』

慧「まあ、なんだ…がんばれ」

『……………』

妹「夢食つ虫も好きずきって言っし」

『…ほぼ悪口じゃないか…』

霊「一時間後には後悔するわね」

『……………』

ア「あほ」

『……………』

魔「ま、今日は一緒に寝てやるから」

『…どうしようかな』

ア「一緒に寝るなら、もう目は覚めないからね」

『無駄な長生きより、一瞬のチャンスを逃したくない気もする』

魔「で、いくらだ？」

『霊夢にしよじ』

霊「いくらだ？」

『やっぱり世の中は金なんだね』

ア「いくらだ？」

『いや、アリスには頼んでないから』

ア「……………」

『霊夢！』

霊「ん？」

『500円』

霊「なめんな」

『1000円』

霊「了承」

魔「安っ」

ア「どれだけ困窮してるのよ」

霊「冗談よ」

『5000円』

霊「……………」

魔「本気で葛藤しはじめたぞ」

ア「安い女ね」

霊「失礼ね。リーズナブルな女って言うてよ」

『それでいいのが主人公』

魔「この後、何をするんだ？」

『就寝だね』

幽「ただし、指名された女性1名は…」

ア「…朝まで寝かせてもらえない…？」

幽「正解」

『ないから』

幽「いつからタメ口になったのかしら？」

『…すみません』

魔「でも、すぐ寝るのはつまらないぜ」

妹「確かに」

『人生ゲームならあるけど…』

魔「じゃあ、それで」

『でも、そんなに時間あるだろうか？』

魔「夜通しでもいいぜ」

『美容と健康に悪いよ』

ア「…女々しいわね」

魔「とりあえず、みんな揃うまで暇を潰そう」

霊「花映塚なんてどう？」

魔「二人用じゃん」

霊「野球拳」

魔「それはマズイ」

霊「波動拳」

魔「それは出ない」

霊「ストリップ」

橙「藍しゃまか」

霊「ダブルスパイラー」

魔「一人用じゃん」

霊「脱衣麻雀」

魔「お前、そんなに脱ぎたいのか？」

霊「脱衣神経衰弱」

魔「…本当に神経使うからやめようぜ」

霊「脱衣ブラックジャック」

魔「男は好きそうだな」

霊「          によろしく」

魔「…変態紳士じゃないか」



霊「トランプタワー」

魔「うん、自宅で一人でやろうか」

霊「カナスタ」

魔「ルールを知らない」

霊「三並べ」

魔「偏りすぎだな」

霊「大貧民」

霊「誰が大貧民だ！」

魔「…大丈夫か？」

霊「じゃあどうするの？」

魔「普通にババ抜きでいいだろ」

紫「そっね」

藍「誰がババタリアンだ！」

紫「…藍、ちょっと来なさい」

## 9 魔理沙、お披露目の巻。

ア「魔理沙、パジャマ着ないの?」

霊「そういえば、幽々子と魔理沙だけパジャマじゃないわね」

@「私はサイズがないから」

妖「自業自得です」

@「私、何か悪いことしたかしら?」

妖「……………」

霊「魔理沙は?」

魔「楽しみは最後に取っておこうと、な?」

『…パジャマ着るのが楽しみなの?』

魔「見たいんだろ?」

ア「別に、ちょっとだけよ!」

霊「何であんたが答えるのよ」

妖「幽香さんのあとにお披露目ですか?」

魔「…そうなるのか…」

霊「無謀ね」

ア「そんなことないわよ！」

霊「何であんたが答えるのよ」

@「どうして無謀なの？」

妖「……………」

魔「……………」

霊「……………」

『…女の子も大変だね』

魔「うるさい」

『え…ごめんなさい…』

ア「ぶっ…くすくす」

霊「先に見せた方がいいわよ」

魔「…そうだな。着替えてくる」

ア「手伝う？」

魔「うるさい」

ア「え…ごめん…」

『ぶっ』

妖「幽香さんが上がるのと、どっちが早いですかね？」

霊「…魔理沙がんばれ」

魔「着替えたぜ！ じゃん」

ア「うっは、青地に星柄まじパネエ！！」

@「…この人怖いわ」

妖「見てはいけません」

霊「ほら、感想」

『え…あ…その…すごく似合ってる…よ』

霊「抱いて寝たいくらいかわいいってさ」

魔「それほどでもあるぜ」

『…すごい誇張して伝えたね』

幽「上がったわよ」

霊「間髪だったわね…って」

ア「なんて格好してるのよ」

幽「タオル巻いてるじゃない」

魔「服を着ろ」

幽「暑いんだもの」

『幽香さん…パジャマを着てください』

幽「仕方ないわね、そんなにパジャマ姿が見たいなら」

霊「着替えに行ったわね」

ア「何興奮してるのよ」

『…してないよ?』

魔「……………」

幽「着たわよ」

霊「つつあ」

魔「…つわ」

ア「…いいのあれ？」

妖「…破廉恥で、いけない」

@「どうしてみんな自分の胸に手を当ててるの？ 懺悔？」

『幽香さん、もっと大きいサイズなかったんですか？』

幽「きついのは胸だけよ」

ア「ボタンもう一つ閉めれ」

幽「閉めるときつい。閉めなくてもきついけど」

霊「先に着替えてよかったわね」

魔「…だな」

幽「胸が小さいからって気にすることないわよ」

霊「言った!」

魔「…ほっとけ」

霊「しかも花柄って…」

幽「似合わない？」

『いえ、似合ってますよ』

ア「魔理沙のパジャマ姿の方が断ッ然イイわ！」

妹「この魔女気持ち悪い」

慧「全くだな」

ア「……………」

『風呂入ってくる』

霊「そういえば入ってなかったのね」

幽「残り湯、飲まないでよ」

『…飲みませんよ』

とじとじ

『きせー…』



魔「どうした？」

『なんで皆うちの洗濯カゴに服入れてんだよ！』

霊「ケチくさいわね。洗濯くらいしてくれたっていいでしょ」

『そついうことじゃない！』

霊「どうしろと」

『持って帰ってくれ』

霊「クリーニングサービスは？」

『受け付けておりません』

ア「何興奮してるのよ」

『してない！』

ア「…してるわよ」

『…洗濯カゴ見たときの俺の気持ちかわかるか？』

ア「神に感謝」

『…変態じゃん』

魔「女の服の匂いを嗅ぐのが趣味なんだろ？」

『言ったことないわ』

ア「下着とか見てないでしょうね？」

『見てない見てない。つてか、見られたくないなら入れないで』

幽「見せてあげたい人は？」

『入れないでください』

ア「今までに女の下着を見たことは？」

『……………』

ア「当然、数え切れなくらいあるわよね？」

『……………』

ア「数え切れるの？ 百くらい？」

『……………』

ア「まさか一桁ってことはないわよね？」

『……………』

ア「え？ どうしたの？ 具合でも悪いの？」

『……………』

ア「どうして涙目なの？」

『……………』

ア「え！ うそっそ！？ まさか…まさか」

『……………』

ア「ゼロってこと…？」

『……………』

霊「……………」  
魔「……………」  
妖「……………」  
幽「……………」  
慧「……………」  
妹「……………」  
@「……………」

『…スカートをめくる程度の能力が欲しい』

10 魔理沙、運命のルーレットの巻。

『みんな揃ったので人生ゲームですーどんどんどんどんぱふぱふー』

妖「…彼、疲れてますね」

ア「とりあえず始めるわよ」

妹「やり方は？」

霊「双六みたいなものよ」

『まずルーレットを回して順番を決めます』

魔「待った。オリジナルルーレットを持ってきた」

『そういう気遣いノーサンキュー』

魔「まあまあ、そう言わずに」

霊「見せてみなさいよ」

魔「ほれ」

幽「右隣の人に命令、とか書いてあるわよ」

魔「パーティーゲームらしいだろ？」

『そんなことせずとも、人生ゲームは立派なパーティーゲームだよ』

慧「しかし数字が少なくて、あまり進まない気がするな」

魔「……………」

霊「…よく考えてなかったのね」

『普通のルーレットで、2が出たら命令もできるとかにすればよかったのに』

魔「それだ!」

ア「頭いい!」

慧「天才!」

『しまった! つまらないことを口走った!』

霊「馬鹿ね」

『…反省してる』

幽「まあ、命令できるからいいじゃない」

『しなくていいです』

魔「じゃあ、2が出たら右隣の人に命令できる」

幽「5が出たら全裸」

『全裸は無しで』

幽「半裸」

『半裸も無しで』

魔「9が出たら左隣の人から命令される」

『あんまりキツイ命令は無しでお願いします』

霊「まあ、やりながら調整しましょう」

慧「まずは場所決めか」

幽「好きな人の左に行く人はサド、右に行く人はマゾね」

ア「なるほどね」

『待った。場所はくじ引きで決めよう』

ア「ほわ〜い？」

『…お前が輪からあぶれるからだ』

幽「私の隣じゃなかったらどうするのよ？」

『小躍りします』

幽「…明日も頭と胴体が繋がっているといいわね」

『嘘です。『ごめんなさい』』

『はい、みんなくじ引きしましたか?』

魔「オツケーだぜ」

霊「それじゃ、始めましょう」

『まずルーレットで順番を決めます』

『はい、決まりましたね?』

魔「オツケーだぜ」

霊「やっと始まるのね」

『えーと、次に全員に1000万円ずつ配ります』

霊「!?!?!」

『…ちなみに、このお金はゲーム内でのみ使用できるお金だからね』

霊「…チッ」

『……………』

魔「いよいよスタートだな。私からだぜ」

カラカラ

魔「よし、7だ」

ア「悪徳商法に騙される。300万円払う、だってさ」

魔「よし、私は用心深いから騙されなかった。危なかったぜ」

『…ちゃんと払おうね』

……

霊「2が出たわ」

魔「財布を拾う。700万円もらう、だって」

『…すぐインモラルだね』

幽「そして命令タイムよ」



霊「そうね…この中で今晚一緒に寝たい人の名前を叫ぶ」

『…別のにしない？』

霊「しない」

『…ちよつと考えさせて』

幽「ほら、早くしなさい」

魔「恥ずかしがるなよ。修学旅行の夜だと思って」

『決まった』

霊「ではどつぞどつぞ」

『アリス』

魔「!？」

霊「!？」

幽「!？」

慧「!？」

妹「!？」

妖「!？」

ア「…え？」

『アリス』

魔「ふざけんな!！」

ア「…え」

幽「そうよ」

ア「…それってどういう…」

霊「真面目に答えなさい！」

ア「…目から水が…」

妹「ネタじゃん」

ア「…私、ネタなんだ…」

『変な気を起こさずに済みそうだから、アリス』

ア「…うわ理由もひどかった…」

霊「変な気を起こしそうな相手を言っの!！」

『アリス以外』

ア「……………」

霊「一人に絞れない？」

『…うん、選べないよ』

幽「優柔不断ね」

魔「その決断力の無さは、自分の身を滅ぼすぜ」

『…ごめん』

慧「ゲームが終わらないと困るから、今回は見逃したらどうだ？」

霊「…そうね。やむを得ないわね」

『ごめんね』

魔「次は誰の番だ？」

『俺の番だ』

カラカラ

幽「…9ね」

霊「……………」

『……………』

霊「…じほん」

『……………』

霊「…誰」

『…えっ…』

霊「……………」

魔「……………」

慧「……………」

妹「……………」

幽「……………」

『小傘だ小傘！ 小傘！ 俺だ！ 結婚してくれ！』

霊「この中って言うてんだろこのチキン野郎」

霊「やっと始まるのね」

『えーと、次に全員に1000万円ずつ配ります』

霊「……!」

『……ちなみに、このお金はゲーム内でのみ使用できるお金だからね』

霊「……チッ」

『……………』

魔「いよいよスタートだな。私からだぜ」

カラカラ

魔「よし、7だ」

ア「アリスは1000万円もらっ、だってさ」

『そんな指令は無い』

霊「霊夢は無条件で1位、だってさ」

『…そんなゲーム面白い？』

幽「幽香はケーキを振る舞われる、だって」

『…只今準備致します』

慧「慧音は明日休みをもらえる、だそうだ」

『…先生って大変なんだね』

妹「輝夜は敷居につまづいて転べ、だって」

『…それは君の願望じゃないか』

@「美味しいものが食べたい」

『…さようですか』

妖「巨乳滅べ」

『…この人…俺の知ってるみょんじゃない』

ア「アリスは悩みがなくなる、だって」

『…元々無いのでは？』

霊「賽銭」

幽「ケーキ」

慧「休暇」

妹「輝夜の命」

@「美味しい物」

妖「胸」

『…人生ゲームにねだるな』

魔「魔理沙は男の人から告白される、だって」

『…へー』

魔「何か言うことは？」

『…特に無し』

魔「断られて気まずくなるくらいなら友達でいたいんだな？」

『…はい？』

魔「私は…いいんだぜ？」

『……………』

魔「付き合ったり…その…結婚…とかも…」

『……………』

魔「……………」

『……………』

魔「ただしイケメンに限る」

『やっぱり無理なんじゃねえか』



11 妖夢、笑われるの巻。

ア「次は誰の番？」

幽「私ね」

カラカラ

魔「8だな。町内会長になる、600万円もらう、だって」

『…どついう理屈だ』

幽「8ってことは…よし、ふたつ隣の人に命令ね」

『…ルールを曲げないでください』

幽「…だめえ？」

『…色気を使わないでください…』

魔「何を命令する気なんだ？」

幽「イス」

ア「…サディストの鑑ね」

『ちびぢぢむむっ』

魔「余計なこと言わなくていい」

『じめんなさい』

霊「次やるわよ」

カラカラ

霊「5だわ」

妹「財布を落とす、400万円払う、だってさ」

霊「……………」

@「霊夢、払うのよ」

霊「……………」

『…あの…もしもし…』

霊「……………やだ」

『…はい?』

霊「嫌だ! 落とすわけないわ!」

魔「おい、落ち着け」

霊「財布を持ち歩く習慣がないもの！」

『…この人どうやって生きてるの?』

幽「大人しく払いなさい」

霊「やだーやだー」

魔「駄々をこねはじめたぞ」

幽「いいから払いなさい」

霊「あー私のお金ー」

『…次いつていい?』

魔「いいぜ」

霊「……………」

ア「お金って怖いわね」

『いきますよー』

カラカラ

『…9だ』

魔「…お前マゾだろ」

『不可抗力だよ!』

ア「転ぶ、100万円払う、だって」

『めっちゃ適当じゃん』

魔「あと命令な」

霊「じゃあ、土下座」

『…なんで?』

霊「いいから土下座しなさいよ」

『…はい』

ぺいり

@「妖夢、これが機嫌が悪いときの霊夢よ」

妖「…主人公にあるまじき姿ですね」

ア「次は私ね」

カラカラ

ア「1だわ」

慧「風邪を引く、一回休み、だそうだ」

『アリスは休まなくていいよ』

ア「馬鹿って言いたいの？」

『冗談冗談』

幽「休まなくていいわね」

ア「馬鹿って言いたいの？」

幽「……………」

ア「……………」

幽「…ふっ」

ア「…すごい腹立つんだけど」

魔「次は私だな」

カラカラ

魔「6だ」

妖「趣味で描いた絵が売れる、300万円もらっ、です」

魔「やったな。わかるやつにはわかるんだな」

幽「ねえ、命令の数増やさない？」

ア「賛成」

『…どうして普通に遊べないかな』

幽「じゃあ、5が出たら左に命令ね」

ア「異議無し」

『あの…』

幽「訂正。ふたつ右に命令」

『えつと…』

幽「これで満足でしょ？」

『そういうのはよくないと思う…人もいるかもしれない可能性がありませんかね？』

幽「で？」

『…なんでもないです』

ア「…サディストの鑑ね」

@「次は私ね」

カラカラ

@「あ、9だわ」

妖「外食にハマる、200万円払う、だそうです」

@「そうね、外食もいいわね」

ア「あと命令ね」

魔「私が命令するんだな。そうだな…明日一日断食とか」

がしっ

@「あなたは私を殺す気なの!？」

ゆちゆち

@「ねえ！ そうなの！？ そうなんでしょ！？」

ゆさゆさ

魔「…よ…む…なん…とか…して…」

妖「幽々子様、落ち着いてください！」

@「だって！ だってえっ！」

妖「唐揚げあげますから、とりあえず落ち着いてください！」

@「うん」

『…めっちゃ素直だ』

魔「…川が見えた…」

妹「…次いくよ」

カラカラ

妹「5」

『お宝を見つける、1200万円もらっ、だって』







妖「いい加減にしてほしいですぜ！」

「  
幽 妹 ア 魔 霊 @  
……  
」

妖「え……何ですか……」

慧「……やっぱり3回目は無いわ」

妖「……」

12 アリス、インしたおの巻。

妖「これで、私が最初に上がりですね」

@「妖夢すごいー！」

魔「じゃあ終わりでいいな」

『全員ゴールするまでやらないの？』

魔「やりたいか？」

『……………』

幽「キリのいいところでやめましょう」

『…やっぱりグダグダになったよ』

霊「で、このお金は換金できないの？」

『できません』

妹「この後はどうするんだ？」

『もう寝ようか』

魔「まだ遊び足りないぜ」

『…子供か』

幽「夜遊びの時間よ」

魔「なるほど」

『いやいや』

霊「とりあえず、布団はどつするの?」

慧「私は妹紅と寝るぞ」

@「私は妖夢と」

霊「じゃあ、あと布団3枚に5人ね」

『俺は床で寝ますよ』

幽「空気読め」

『……………』

魔「足が震えてるぞ」

『……………』

霊「で、どつするつもりなの?」

幽「ジャン拳で決めましょう」

霊「…殴るの？」

幽「勝った人は一人で寝る」

魔「あとは二人ずつだな」

『…あの、俺は…』

幽「なあに？」

『…なんでもないです…』

魔「さっさと決めようぜ」

霊「そうね。最初はグー、じゃんけん、そおい」

幽「霊夢の一人勝ちね」

霊「よかったわ」

幽「あとは負けた人が地獄行きね」

『地獄つてのは俺との同伴就寝ですよね？』

幽「もちろん」

『…はい』

魔「いくぜ。じゃんけん、そおい」

幽「…それ流行ってるの？」

魔「あ、アリスの負けだ」

ア「……………」

幽「じゃあ決まりね」

『皆さん、枕の足りない分は、座布団やクッションで補ってください』

魔「んじゃ、おやすみ」

『……………』

ア「……………」

『…大丈夫？』

ア「よ…よろしくね」

『…へ！？』

ア「…お邪魔…します」

『…』

ア「…もうちよっただけ、詰めてもいい？」

『…』

ア「…ありがとう…」

『…』

ア「…じゃあ…おやすみ…」

『…』

ア「…」

『…』

ア「…もう寝ちゃった？」

『…』



ア「…寝ちゃったよね」

『……………』

ア「結局、何もしてこなかったなあ」

『……………』

ア「魅力無いのかな…」

『……………』

ア「私だって…女の子なんだけどな…」

『……………』

ア「私なんか…かわいくないよね…」

『…そんなことは…ないよ…』

ア「…やっぱり…起きてたんだ」

『…うん』

ア「…ねえ、ちょっとくらい…構ってよ…」

『え…いや…その…』

ア「…ダメ？」

『し』

ア「……………」

『ダメ…と…いつか…あの…その…』

ア「…変な気は全く無い？」

『…そりではない…と思し』

ア「本当？」

『しし』

ア「……………」

『……………』

ア「……………」

『……………』



『…あい…ずびばせん…』

ア「…ずびばせん」

魔「一体、何がそんなに可笑しいんだ？」

ア「こいつの女性経験の無さ加減が…」

魔「なるほどな」

幽「狼狽して、あの…その…、とか言う程度の能力ね」

『やっぱり俺には無理でした』

魔「アリスとなら大丈夫なんだろう？」

『もうアリスが女の子に見える』

ア「…今までは何に見えてたのか疑問だわ…」

幽「チェンジ使う？」

『使います』

幽「駄目」

『…じゃあ何で聞いたんですか』

幽「いいから早く寝なさい」

ア「……すう……すう……」

……

『……』

ア「……」

『……』

ア「……」

『……うん……おやすみ』

ア「じゃ、おやすみ」

『……はい』

『……………』

ア「……すう……すう……すう……」

『……あんなのの後で、眠れるわけがない』

ア「……すう……すう……すう……」

『……………』

ア「……すう……すう……すう……」

『……………』

ア「……すう……すう……ん……すき……」

『……え……』

ア「……るどねいん」

『……どんな夢だよ……』

ア「じゃ、おやすみ」

『…うん…おやすみ』

ア「……」

『……』

ア「……」

『……』

……

ア「……すう……すう……」

『……』

ア「……すう……すう……」

『…あんなのの後で、眠れるわけがない』

ア「…すう…すう…」

『……………』

ア「…すう…すう…」

『……………』

ア「…オムレッツ…」

『…なかなかかわいい寝言だ』

ア「…オムレッツ風呂…」

『…卵風呂じゃダメなのか…』

ア「…オムレッツ温泉…」

『…どんな効用があるの？』

ア「…カツレッツ温泉…」

『…ベタベタになるわ…』



ア「…組んずほぐれつ温泉…」

『…エロチックな名前の温泉ですね…』

ア「…鬼怒川温泉…」

『…ずいぶん具体的な夢みたいだな』

ア「…天塩川温泉…」

『…ずいぶんローカルな夢みたいだな』

ア「…全裸温泉…」

『…エロ……くないのか。普通だな』

ア「…の足湯…」

『…全裸じゃなくていいじゃん…』

ア「…下半身浴…」

『エロ……くないのか。半身浴って言えよ』

ア「…右半身浴…」

『想像してみると、かなりシユールだ』

ア「…前半身浴…」

『怖い……』

ア「…すう……」

『……』

ア「…すう……」

『……やっと静かになった』

ア「…すう」

『俺も寝たじ。おちすみ』

ア「…すう」

『……………』

ア「…すう…ん…すき…」

『…え…』

ア「…焼き…」

『…まあ、人生こんなもんだよね』

13 魔理沙、早起きするの巻。

魔「おはよう」

『……………』

魔「みんな、おはよう」

『……………』

魔「起きるのが早すぎた」

『……………』

魔「みんなが起きるまで待ってみるか」

……………

魔「…こいつら…全然起きない…」

『……………』

慧「…ん…」

がさがさ

慧「…まだ誰も起きてないのか」

魔「私は起きてるぜ」

慧「おお、おはよう」

魔「まあ、まだしばらく誰も起きない気がする」

慧「そうか。私は出掛ける支度をするよ」

魔「わかった」

………

慧「では、先にお暇するが…」

魔「…誰も起きないな」

慧「起きたらよろしく言っておいてくれ。あと、妹紅を頼む」

魔「おう。じゃあな」

慧「お邪魔しました」

ガチャ  
バタン

魔「…穏やかな朝だな。二度寝でもするか」

……

魔「…ふあ…おはよう」

『……………』

魔「…まじか」

『……………』

魔「おい、いい加減起きろ」

『…ん…なに…?』

魔「朝だぞ」

『んーわかった』

魔「起きる気ないだろ」

『んー…』

魔「起きないのか？」

『んー…』

魔「……………」

『…きのーのきょーだからねかしてくれ』

魔「…何があつたんだよ」

「じすっ

幽「…るさい」

魔「…いてて…静かだったのに」

妖「…ん…」



魔「お、起きたか」

妖「あ、おはようございます」

魔「ああ」

妖「朝食の用意でも……って、もうこんな時間……」

魔「だな」

妖「……」

魔「……」

妖「……」

魔「……」

妖「じゃあいいや。寝よう」

魔「……」

妖「おやすみなさい」

魔「……」

妖「……」

魔「……」

妖「……ぐーすかぴー……」

魔「…………」

妖「……むにゃ……もう食べられない……」

魔「……もう何でもいいや……」

……

@「……おはよう」

妖「…………」

@「……あら、妖夢が寝てる」

妖「…………」

@「…………」

妖「……………」

@「…ということは、まだ朝じゃないのね」

妖「……………」

@「では、おやすみなさい」

妖「……………」

@「……………」

妖「……………」

@「…ぐーすかぴー…」

妖「……………」

@「…むにゃ…まだ食べられる…」

霊「…ふぁ…」

『……………』

霊「何？ 誰も起きてないの？」

』……………』

霊「ま、ご飯できたら呼んでくれるでしょう？」

』……………』

霊「二度寝二度寝っ」と

妹「…ん…あれ…慧音…？」

がさがさ

妹「…いない…まだ寝てても怒られない…勝っ…た…」

ア「…あれ…」は…」

『……………』

ア「ああ、パジャマパーティーか」

『……………』

ア「またからかってみよつと」

『……………』

ア「目覚めた瞬間に驚かす」

『……………』

ア「準備完了」

『……………』

ア「ふはは、泣き叫ぶ姿が目には浮かぶわ」

『……………』

ア「……………」

『……………』

ア「……………」

『……………』

ア「ふぁ……寝て待とうかな」

『……………』

ア「果報は寝て待って言うし。おやすみ」

幽「……………」

『……………』

幽「……皆だらしないわね」

『……………』

幽「私の食事も用意しないで、惰眠貪っちゃって」

『……………』

幽「本当に使えない奴ら」

『……………』

幽「次起きたとき、食事ができてなかったら…」

『……………』

幽「できてなかったら…」

『……………』

幽「……………」

『……………』

幽「…困る」

『……………』

幽「では、おやすみ」

『…ん』

ア「……………」

『…うわめ』

ア「……………」

『……………』

ア「……………」

『…もしもし、アリスちゃん…?』

ア「……………」

『…男は才オカミなのーよー気をつけなさいー』

ア「……………」

『……………』

ア「…むにゃ…」

『……………』

ア「…もみあげは普通で…」

『…何そのレアな夢』

ア「…すう…」

『…朝ごはん作らなきゃ…』

ア「…あふん…」



『……すう』

幽「……すう」

妹「……すう」

@「……すう」

妖「……すう」

霊「……すう」

魔「……すう」

……

『……もっただけ……いいよ……』

ア「……」

『……』

「ア妹@妖霊幽  
……」

魔「……肩過ぎじゃねえか！」

……

……

……

ア「……横と後ろは刈り上げで……」

「誰か起せよ……」

#### 14 魔理沙、お開きだぜの巻。

魔「反省会をします」

『……………』

魔「誰が悪いか」

『ゆっくりできたから、いいんじゃない？』

魔「美少女の寝顔も堪能できたしな!!」

『…っ…っ』

ア「てへ」

幽「午前中に何かする予定でもあったの？」

魔「無い」

幽「…やっぱり」

霊「それに、あんただって寝てたでしょ」

魔「…まあな」

霊「ま、そんなことより、昼ご飯食べましょ」

妖「今、準備しますね」

『あ、俺も作るよ』

幽「急いで作ってもいいのよ?」

『…急いで作ります』

……

妖「できましたー」

『ふう…がんばったよ、俺』

霊「いただきます」

@「いただきます」

魔「うん、なかなかだ」

幽「まあまあね」

『…ほっ、よかった』

妹「んで、この後は何するの?」

魔「……………」

ア「……………」

霊「……………」

妖「……………」

幽「……………」

『……………』

@「んーおいしい」

妹「結局、最後まで何一つ予定はなかったのか」

『魔理沙らしいね』

魔「でも楽しかっただろ?」

『まあね』

魔「美少女の寝顔も堪能できたしな!」

『…まだ言っか』

霊「じゃあ、この後は解散ってこと?」

魔「いやいや」

霊「何するのよ?」

魔「うーん…宝探し?」

『やめてくれ』

幽「エロ本探しってこと？」

『…俺の宝はエロ本ではありません』

霊「じゃあ、何が宝なの？」

魔「美少女の寝顔」

『もう勘弁してくれ…』

魔「トランプでもするか」

幽「豚のしっぽ？」

霊「叩きたいだけでしょ？」

幽「ええ」

『…幽香…おそろしい子…』

ア「ルールわからないから、ちょっとやってみて」

幽「わかったわ。ちょっと手伝って」

『結末は分かっているんですが…』

幽「同じマークだったら殴る」

霊「…手を置くのよ」

ぺら

『…よかった』

ぺら

幽「…違ったわね」

ぺら

『…ふうふう…』

ぺら

ぽじっ

じすっ



「すっ

幽「こんな風にね」

『どうして2回も拳を振り下ろしたんですか…』

幽「足りない？」

『…充分でございます』

ア「ふーん。じゃあポーカーやりましょ」

『…何故やらせた…』

魔「私は2枚交換するぜ」

霊「私は1枚ね」

幽「私は全部」

『もう始まつてるんだ…』

妖「私は2枚」

@「お腹すいた」

妖「おばあちゃん、さっき食べたでしょ」

妹「私は3枚な」

ア「私は換えないわ！」

魔「ツーパー」

霊「スリーカード」

幽「ワンペア」

『役無し』

妖「ワンペアです」

@「うーん…役無し」

妹「ワンペア」

『アリスは？』

ア「ワンペア」

『…どうして換えなかったのかな』

霊「私の勝ちね」

『…ってか、みんなポーカーはわかるんだね』

ア「ナポレオンとかもわかるわよ」

『恐るべし幻想郷』

.....

ア「ロイヤルストレートワンペア」

『ワンペアに、ストレートもスライダーも無いわ』

魔「ロイヤルストレート役無し」

『...更にひどい』

魔「飽きてきたな」

霊「ねえ、いつお開きなの？」

魔「決まってないぜ」

妖「自由解散ですか」

ア「じゃあ、私はそろそろ帰ろっかしら」

魔「お、早いな」

ア「帰って、エアロビしなきゃ」

魔「…そんなのやってたのか…」

幽「私も帰ろうかしら」

魔「早いな」

幽「植物の世話しなきゃ」

魔「…お、おう」

幽「何か変だった？」

魔「…いや、ボケるのかと思ってたから」

霊「私も帰ろうかな」

魔「霊夢は何だ？」

霊「お賽銭入ってるか確認しなきゃいけないから」

魔「…入ってないと思う」

『とじろでね』

魔「なんだ？」

『どうしてパジャマパーティーなんかしようと思ったの？』

幽「いやね。自分が所望したくせに、白々しい」

『…違います』

魔「お前、本当にわからないのか？」

『…え？』

魔「お前は一人暮らしだろ？」

『うん』

魔「友達と遊ぶことも、あまりしないんだろ？」

『うん』

魔「昨日と今日楽しかっただろ？」

『…あ…もしかして…魔理沙…』

魔「…へへ」

『俺に、仲間の大切さを教えてくれようと…』

魔「いや、タダ飯目当て」

『…早く帰ってきてくれる？』

……

妖「それでは、帰ります」

『…大丈夫？ 布団2組も持って…』

妖「何言ってるんですか、余裕ですよ」

『…本当に大丈夫かなあ』

@「私は枕を持つわ」

魔「じゃあな」

妖「おじやましました」

@「楽しかったわ」

魔「それはよかったぜ」

とたとた

@「妖夢、大丈夫？」

妖「…っ余裕です」

魔「……………」

『……………』

じゅわじゅわじゅわ

@「まあ！ お布団が泥んこに！」

妖「…余裕ですよ」

『……………何が？』

……………

妹「んじゃ、私も輝夜をボコリに行くから」

『…結構暇なの?』

妹「んじゃね」

『うん、じゃあね』

幽「私もお暇するわ」

魔「おう、じゃあな」

幽「今度はお風呂ね」

『…何のことでしょう?』

幽「じゃあね」

ア「私も帰るけど」

魔「じゃあ、またな」

ア「また一緒に寝ようね」



『…勘弁して』

ア「冗談に決まってるでしょ。じゃあね」

霊「私も賽銭箱の確認があるから」

魔「だから無いって」

霊「じゃあ、またね」

『うん、ばいばい』

『ふう』

魔「一気に静かになったな」

『魔理沙は、まだ帰らないの?』

魔「うーん…仕方ない。私も帰るぜ」

ガチャ

『じゃ、またね』

魔「楽しかったか？」

『うん。楽しかったよ。ありがとう』

魔「そうか。ならよかった。んじやな」

『またやろうね』

魔「ああ。また一週間後な」

ボタン

『……………は？』

おまけ 雛と漫才してみた

『ごーもー。よろしくお願ひしますー』

雛「どうも。鍵山雛です。よろしくお願ひします」

『いやいや、お忙しい中、来て頂いて、ありがとっじょいます』

雛「いえいえ。気にしないでください」

『お客さんに言ったんですよ』

雛「あら、そうでしたか。うっかり」

『ちよっとかわいいと思ってしまった』

雛「え、今かわいって言いました？」

『はい。とってもキューティクルです』

雛「髪の毛の表皮みたいに言わないでください。それを言っならキュー  
トです」

『なるほど。自分で言いますか』

雛「あなたが間違っからですよ」

『しゅめんね』

雛「いいよ」

『で、キョートな雛さん』

雛「もう言わなくていいです。恥ずかしくなってきました」

『了解であります』

雛「でも、私も本当に暇ではなかったんですよ」

『ああ、忙しい中来てくださって』

雛「私にも役目がありますからね。本当は忙しいんです」

『そうですね。ありがとうございます』

雛「今日だって、集めるのを中断して来てるんです」

『ああ、厄を？』

雛「いや、町内会費を」

『町内会費！？』

雛「ええ、町内会費。ご存知ありませんか？」

『いや、知ってますけど…』

雛「私の役目なんです」

『町内会長なんですか？』

雛「いいえ」

『あれ？ 違うんですか？』

雛「町内会長は、町内を統轄する役目です。だから違います」

『じゃあ、何なんですか？』

雛「町内会計次長です」

『町内会計次長！？』

雛「町内会計次長です」

『町内会計長じゃなくて？』

雛「町内会計次長です」

『会計長とは違うんですか？』

雛「町内会計長は、町内の会計を管理する役目です。だから違います」

『町内会計次長は？』

雛「町内会費の集金が役目です」

『かなり役割が細分化されていますね』

雛「会費集めも大変なんですよ？」

『ああ、お金の問題は複雑になりますからね』

雛「ちゃんと払ってくれない妖怪もいて」

『人間にも妖怪にもいるんですね、そういうのは』

雛「あ、人間にもいるんですか？」

『はい。人間では大概、ババタリアンですね』

雛「そうですね。うちの町内のは、ババタリアンではありませんが」

『へえ。どんな人なんですか？』

雛「河城にとり」

『にとり!?!?』

雛「あつ、今、イーヨーカードー想像しましたね？」

『二〇リじゃなくて!?!?』

雛「ああ、それぞれ。マークが似てるから、ごっちゃになってしまいました」

『ええ、独特な感性をお持ちのようで』

雛「まあ、とにかく、にとりが払わないんですよ」

『何か理由があるんでしょうかね?』

雛「彼女が言うにはですね…」

『言うには?』

雛「ほんなもん払わなアカンのか? 皆払つとるんか?」

『おお、訛つとる』

雛「法律で決まつとるんか? 何時何分何秒誰が決めたんや?」

『…小学生か』

雛「とにかく私は払わんで。帰れ帰れ。つて言うんです」

『夕子悪いですね』

雛「つて言うんです」

『あ、そこまでがセリフ!?にとりは誰の話をしてたの!?!』

雛「まあ、そんな感じで払わないんですよ」

『ええ、どんな感じかさっぱり分からなかったんですけど』

雛「だから私も言うてやりましたよ」

『おお、ガツンと』

雛「ちょ…マジでお願いします…ホント…!」

『弱い!』

雛「土下座でも雨乞いでも何でもしますから!」

『雨乞いってジャンル違う?』

雛「そしたら、彼女はこう言っんですよ」

『おお、何て言った?』

雛「うん、わかった」

『わかつちやったのかよ!』

雛「ねえ、ホントに」

『ホントに、じゃないよ。解決できたじゃないか』

雛「でも雨乞いさせられましたよ」

『俺の雨乞いのイメージは、ヘンな踊りなんですけど』

雛「そうです。恥ずかしい格好で恥ずかしい踊りを」

『…恥ずかしい格好?』



雛「お、食いつきましたね。さすが男子」

『…っ』

雛「よっ、この男子！」

『はやし方が変ですよ』

雛「まあ、恥ずかしいって言っても、ふんどしですけどね」

『…充分だと思いますよ』

雛「それで、訳分かんない呪文を唱えるんです」

『どんな感じですか？』

雛「ザラキーマ」

『はい危ない』

雛「ザキマズン」

『はい混じってる』

雛「ああん」

『…おお…なんかすごくよだれ出てきた…』

雛「って感じですね」

『…喘ぎ声も雨乞いの一環なの?』

雛「それを繰り返しながら、10分くらい踊るんです」

『死の呪文と喘ぎ声を繰り返して』

雛「そしたら、雨が降るそうぞ」

『すぐ降るの?』

雛「一ヶ月後に」

『いや、遅いな!』

雛「ねえ。一ヶ月です」

『結構先を見通さなきゃいけない』

雛「大変ですね」

『ね。君の相手をするのもね』

雛「まあとにかく、気合いで踊りきったんです」

『で、結局、にとりは払ってくれたんですか?』

雛「ええ。話せば分かってくれたんです」

『話以上のことをしてますけどね』

雛「でもまあ、ちゃんと払ってくれましたから」

「払ってくれたんですね」

雛「体で」

「いや、体かよ！ えちいな！」

雛「もうすごかったんですよ」

「いや知らないよ！」

雛「おかげで今日起きるのも辛くて」

「しかも昨日の出来事かよ！」

雛「ねえ、大変でした」

「いやいや、大変でしたじゃなくて」

雛「でも、お金は私が肩代わりしたんですよ」

「あなたが体で払わせるからですよ」

雛「ええ、でもまだ困ったことがあって」

「なんですか？」

雛「椀がね、払ってくれないんですよ」

『お、また払わない人が』

雛「ええ。払ってくれない」

『彼女は何て言ってるんですか？』

雛「体は勘弁」

『あんた体で払わせようとしたんか！』

雛「もちろん」

『いや、もちろんて』

雛「だから私、言っただけですよ」

『はい、何て言っただけですか？』

雛「ザラキーマ」

『いや死んじゃうよ！ いい加減にしろ！』

雛「どうもありがとうございました」

『ありがとうございました』

おまけ 「第7回」おりりんチャンネル（前書き）

燐「あ、もうこんな時間」

さ「あら、本当。私はそろそろ寝るわ」

燐「わかりました。おやすみなさい」

さ「おやすみ、お燐」

ガチャ

バタン

燐「…ふふ…」

あたいは、誰もいなくなった居間から、自分の部屋に戻った。

ガチャ

バタン

燐「…さとり様もちよろいねえ…」

あたいが何をしているのかも知らずに、くまのぬいぐるみでも抱い

て寝ているのだろう。

隣「さ、そろそろ始めるとしますか……」

時は満ちた。

あたいだけの時間、

あたいだけの空間で、

あたいだけの遊びが、

今、始まるのだった。

## おまけ 「第7回」おりんりんチャンネル

燐「じゃじゃ〜ん！ みんなー！ おりんりんチャンネル、はーじまーるよー！

というわけで、パーソナリティの、お燐です。  
んじゃ、早速タイトルコールいつてみようか。  
よろしく、あたい。

承ったよ、あたい。

…こほん…

『おりんりーんチャヌウル！！』

いやあ、緊張するね、これね。

え？ 発音がやけにネイティブだって？  
ありがとうがとう。

でも、そんなに褒めても何も出ないよー。  
なあんてね。

さあ、とりあえず始まったわけだけど…  
とりあえずって何だよ、ってね。ふふ。

えーと、このラジオは、あたのお隣が、やさぐれてるみんなを元氣付けようという番組だよ。

って、わかってるか。

もう8回目だし。

…ん？ どした？ …え、7回目？

あ、ごめんごめん。

みんなごめん。

7回目だつてさ(笑)

いやー、気持ち先走ってるねえ。

先走椋だねえ。

じゃ、早速コーナーの方にいっちゃおうよー。

いっちゃえいっちゃえー。

では…

『教えて、おりんりーん!』

このコーナーは、みんなのいろんな疑問に、あたいが適当に…おつと失礼…あたいなりに答えるコーナーです。

んじゃ、最初のお便りいくよー。

えーと、ラジオネーム、メロンスカッシュさんからのお便りね。

『お隣ちゃん、こんばんは』

はい、こんばんは。



『私は美味しいお店を探すのが大好きです。美味しいご飯は食べられるし、友達にも、美味しいお店教えてー、などと頼りにされて、たくさんいいことがあります。でも、最近体重が気になつてきました…』  
そこで、お隣ちゃんオススメのダイエットとかありますか？  
あつたら教えてください。

お願いしましたよ』

…なんか最後の一文、偉そうじゃない？  
まあ、いつか。

あたかもね、よく美味しいお店とか探してみるんだ。

最近行つてみたのは、ミステリアだっけ？　なんかそんなのの店ね。

あつこは、まあよかつたね。

一応、オススメしとくよ

いやー、ごはんはねー…乙女の悩みの種だよねー。

つてか、この人、女？　だよね？

まあ、いつか。

ダイエットはね、やっぱり運動が理想的かな。

軽くジョギングとかね。

あんまりキツイと続かないからね。

ああ、あとね、階段！

これ結構効果あると思うなあ。

あたいは毎日200往復くらいしてるよ〜。  
ねー。

…っそです…。

ま、でも効果はあると思うから、やってみそ？

はい。こんな感じで。  
どうかな？  
参考になつたかな？

えーと、次のお便りいくよー。  
ラジオネーム、シモネタリウムさん。

『おりんちゃん、こんばんは』

こんばんは。

『僕は小さい女の子が大好きです』

…小さい？

…背の話かな？

『休みの日は、みんなが遊ぶ公園で待ち伏せています』

確信犯だね。

犯罪者予備軍だね。

『ところで、さとりちゃんのパンツはどんな色ですか？  
教えてください』

…こいつ…危ないなー…  
しかも、さとり様幼女じゃないよ？  
いろいろと大人だよ？

パンツの色？

知るか。

自分で確かめれ。

まあでもたぶん…白かな。

はい次。

ラジオネーム、シモネタリウ…ん…？

『おりんちゃん、こんばんは。

さとりちゃんのパンツはどんな匂いですか？

教えてください』

…こいつ…ハガキ何枚出したんだ…

洗剤の匂いじゃない？

はい次、ラジオネーム、シモネ…うわ…。

『ばんわ。さとりちゃんのパンツはどんな味ですか？

教えてください』

味って…こいつ…ダメだ…

洗剤の味じゃない？

次、ラジオネーム、ちょwぬこ風味wさんからのお願い。

『おりんさん、こんばんは』

さん、ってなんか照れるな…

はい、こんばんは。

『この間まで就職活動をしていましたが、やっと内定をもらえました！』

おー！

おめでとう！

ぱちぱちぱちー。

『接客業なのですが、自分はフレンドリーなので、心配していません』

自分でフレンドリーって言うっちゃう？

まあ、図々しいって言われない程度にね、うん。

『めっちゃ頑張ってる、いつか社長になって、金持ちになりたいです』

そかそか。

男の野望だね。

ん？ この人、男？ だよな？

まあ、いつか。

『金持ちになったら、また連絡します。では、さようなら』

終わり！？

質問は！？

…えーと…今日の『教えて、おりんりん！』のコーナーはここまで。  
…いやあ、あたい参っちゃうなあ。

まともなお便りは一通しか紹介できなかったよ…

みんな、いろんな疑問、どしどし送ってね。  
まともなお便り、待ってまーす。

んじゃ、次のコーナーは新コーナーだよ。

『これって僕だけ？ 私だけ？』

えー、このコーナーでは、自分では普通だと思ってたのに、世間では変だったー、って話を募集しまーす。  
ってか、しました。してます。

はい、じゃあ早速記念すべき一通目いくよー。  
ラジオネーム、夕方眠いさんからのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

こんばんは〜。

『僕の家には、こたつがあります。』

(おりんちゃんは、こたつでまるくなるのかな?)  
『

あー、こたつ無いからねえ。

あたいは暖炉のそばでまるくなるかな、うん。

それとも、おにいさんの膝の上でまるくなってあげようか？ うん？

…今のはちょっと調子乗った。  
ごめん。

『僕の家では、こたつに、みかん…ではなく、ふ菓子が付き物です。みかんが定番とは知らず、友達の家で、「おまえの家は、こたつに、ふ菓子無いんだな」と言っしまいました。友達に、年寄りくさいと言われてしまいましたー』

なるほどねえ。

でも、こたつにふ菓子って…合いそう…だよな？  
なんかイメージとしては結構ピッタリじゃない？  
冬にこたつ入って、もしかもしゃやるわけでしょ？

うん、なんか、みかんよりピッタリかも（笑）

全然、変じゃないよ！

ちょっと年寄りくさい感じは否めないけどね！

あと、暖炉にはマシユマロだよね。

…関係ないか。てへ。

はい、では次。

ラジオネーム、味噌おでんさんから。

『おりんちゃん、こんばんは』

こんばんは〜。

『私は女ですが、少年マンガが大好きです。  
必死の努力や熱い友情で、困難に打ち勝つ姿は本当に感動します。  
でも、友人には、暑苦しい、子供っぽい、と言われます。』

やっぱり私が変わるんですかね？  
おりんちゃんはどっ思いますか？』

ふうむ、マンガねえ。

あたいはあくシヨンモノが好きだよ。

やっぱり戦闘シーンは燃えるねー。

でやー、どーん、ぐはー、みたいなのね。

少年マンガは熱いけど、戦闘シーンがぬるいからなあ。

ま、お姉さんの友達は恋愛モノが好きなんじゃない？

うん。

女は現実の恋愛は手堅くいくから、その分、素敵な恋愛は、フィクションでしてるんだと思うよ。

あたいももっぱら官の…失礼。小説で恋愛だなあ。

あたいに、いい人は現れるんでしょうか！

つてな感じで。

少数派だけど、人それぞれだから大丈夫！

…それ言ったらこのコーナー意味ないじゃんね（笑）

はーい、じゃ次〜。

…ん？ あ、次でラスト？

やー、早いねえ。

ラストっ、ラジオネーム、ももちゃんさんからのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

はーい、こんばんは〜。

『私は説明書が大好きです。』

特に、故障かなと思つたら、が好きです。そらで言えるくらい読みます。

時々、変なことが書いてあつて面白いですがあし！

聞いたところによると、説明書を全く読まない人も多いとか…  
おりんちゃんは読む派？ 読まない派？』

故障かなと思つたらを、そらで言えるつて（笑）  
すごいけども（笑）

やー、あれつて結構変なこと書いてあるよね。

この前、電子レンジで

『Q・時間になつても、チンと鳴りません

A・このレンジの加熱終了音はピーです』

だつて（笑）

いや、いらんだろーつて。

ね。

あたいは…うーん…モノによつては読まないかなあ。

使い方が明らかになつとかね。

説明書つて、ブ厚いじゃない？

全部読む気にはならないよ、あたい。

あれ何…あのー…訴訟とかされないように？

ダメつて書いてないじゃん、とか言われたら困るから？

なのかな？

ま、何にせよ読むに越したことはないね、うん。

ちゃんと読んでるお姉さんは偉いぞ！

とゆーわけで、今日のこのコーナーは以上だよ。

君も自分の変態性癖を曝しちゃうおう！

これからも、お便り待つてまーす。



ほいじゃ、次のコーナーは…これだっ！

『新コーナーを募集するコーナー！』

コーナー名がひどいなあ（笑）

ま、とりあえず一通目。

ラジオネーム、ぼん汰さんからのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

はい、こんばんは。

『僕は、おりんちゃんの声が、かわいくて大好きです』

ありがとう！

いやーかわいいかな？（笑）

ふふ。

『そこで、おりんちゃんがかわいいセリフでリスナーを誘惑するコーナーというのはどうでしょう？』

僕が得をします』

ちよ…最後の一文(笑)  
なるほどねー。  
かわいいセリフかあ。  
ちよっとやってみよっか。

…あのね…

…あたいで…いいの…？

さあ、どうでしょうか！

自己評価は90点！

各自で脳内上目づかい補正してね

はい、というわけで、楽しんでもらえた？

あたい、自分じゃわかんないなあ…

これは反響次第でコーナーになるか、ならないかが決まるね。

苦情来たらどうしよう…

あたい、どきどきだよ…

じゃー次のハガキきます。

ラジオネーム、にゃぽんさんのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

こんばんは！

『私はシユールな笑いが好きです。  
奇抜な発想で、一人しりとりはどうですか？』

ひえー（笑）

すごいシユールだよ。

これ、ラジオ向きじゃないなー。  
ちよつとだけやってみようか？

しりとり。

りんご。

ごま。

まご。

ごみ。

みこ。

ごま。

まご。

こめ。

めk…かぶ。

ぶり。

りんす。

すいか。

かえんびょうりん。

…どう？

楽しい？

…これは、キビシイねえ（笑）

公共の電波でやることじゃないね。

やってて、切ないよー。

一人ぼっち感がすっごい。

あたい孤独ーみたいな。

ゲストが来たときにやるっかな。

縛り入れてね。

3文字縛りとか、下ネタ縛りとかねー。

まあ、ゲストが来る予定は…

ありませんっ！

…悲しいねー。

まだこのラジオが有名じゃないからねー。

ゲストが来たら、ね、複数人しりとりなんかやるかも。

楽しみにしておいてちょー。

次のハガキ。

ラジオネーム、ナマステさんからのお便りー。

『おりんちゃん、こんばんは！』

おっ、元気がいい。

こんばんはっ！

『やっぱり、おりんちゃんのかわいさを全面的に押し出すべきだと思います。ゆえに、水着でトークというのはどうでしょう』

出たよ、こっついうわけわからんやつ（笑）

何がしたいんだよ。

あたい寒いだけじゃん。

しかも、ここだけの話、あたい水着持ってないんだよね。  
海無いし。

え？ 血の池がある？

そんなとこ水着で泳いでごらんよ。

地獄絵図とかで一人だけ、はしゃいでたら悲しいじゃん。

あ、この人、地獄を満喫してるー、みたいに。

とにかく水着は無いし、あたいの水着姿は想像にお任せするよ。  
つてか、どうやっても想像だよね（笑）

んでは、次のお便り。

ラジオネ……」

ドンドンー！

さ「おりーん！ 何してるのー！」

燐「げげっ、さとり様………へイみんな、終了時間が迫って……」

ドンドンー！

さ「何時だと思ってるのー！ 静かにしなさいー！」

燐「えー今日のラジオはこ…」

さ「何してるのー？ 入るわよー？」

燐「わわっ、ちょっと待ってください！ もう終わりますから！」

さ「ん？ 何が終わるの？」

燐「じゃあねみんなお便り待ってるよまた会おうすいーゆー！」

おまけ 「第7回」おりんりんチャンネル（後書き）

ガチャ

さ「お燐、何してたの？」

燐「…いやあ、ちょっと本を読んできましたあ」

さ「何時だかわかってるでしょ？ 少し声が大きいわよ」

燐「はい、ごめんなさい」

さ「気をつけてよ？ おくうが、眠れないからメガフレア放つ、つて言い出すのよ」

燐「…気をつけます」

ボタン

燐「…ちえー、せつかくいいところだったのに。そもそもこの家の壁が薄いから音が漏れるんだし、さとり様は忠告しに来るのに枕抱いてくるし、おくうは鳥頭だし……ぶつぶつ……」

# 1 魔理沙と布団とパジャマパーティー、の巻。(前書き)

第二部です。

## 【注意】

- ・このお話はフィクションです。
- ・急いで読むと、あまり面白くありません。
- ・表現の方法が特殊なので、ご注意ください。
- ・下ネタが多いので、苦手な方は特に、ご注意ください。

長々と失礼致しました。

それでは、お楽しみ下さい。



1 魔理沙と布団とパジャマパーティー、の巻。

魔「なあ」

『ん?』

魔「またパジャマパーティーをしようと思っ」

『はは…冗談だよね?』

魔「わかった。じゃあやめる」

『え…やめるの?』

魔「中止だって伝えてくる」

『ちよっ…ホントに?』

魔「嫌なんだろ?」

『嫌って言うか…』

魔「どっちだ?」

『…いつやるつもり?』

魔「明日の夕方に、この家で」

『誰が来るの?』

魔「沢山呼んで来るぜ」

『あんまりたくさん呼ばないでね』

魔「じゃあ私と二人きりで」

『それは生肉の装甲を纏ってライオンの檻に入ると同じくらい危ない』

魔「私を襲う度胸があるのか？」

『……………』

魔「ま、前より人数は減らすつもりだ。じゃ」

『待った』

魔「ん？」

『人にものを頼む態度ってあるでしょ』

魔「……………」

『……………』

魔「……………脱げ、と？」

『……………違います……………』

魔「……うん」

『……………』

魔「おねがい」

『俺に任せてくれ』

魔「よろしくな。じゃ」

…

…

…

『…俺って女の子に弱かったんだな』

魔「私の魅力のせいだ。気にするな」

『ところで、今日は、いったい誰が来るんだい？』

魔「咲夜とか」

『嘘でしょ!?!』

魔「嘘だ」

『…びつくりした』

魔「パチュリーを呼ぶことに成功した」

『まじで!?!』

魔「ああ」

『あの、歩く百科事典と呼ばれる彼女を?』

魔「…近所の頭いいガキか」

『違ったっけ?』

魔「違うっての。ちなみに、後で迎えに行くことになってる」

『そうなのか。それでさ…』

魔「小悪魔は呼んでないからな」

『…訊く前に答えなくてくれ』

魔「他に呼びたいやつはいるか？」

『1』…』

魔「咲夜でも誘ってみるか」

『…無視かよ。しかも咲夜さんが来るわけない』

魔「スカートめくりなんかするから嫌われるんだ」

『…そんな勇気も実力も無いよ』

魔「そろそろ誰か来そうだな」

『布団持参だっって言ってくれた？』

魔「あ…」

『え…』

魔「仕方ない。全員で、お前の布団に集結するか」

『狭いだろ何その夢のような状況』



霊「ちゃんと布団持って来たわよ」

『あ、布団持参だつて知ってたの?』

霊「さつき魔理沙が知らせに来たのよ」

『なるほどね』

霊「まだ誰も来てないの?」

『うん』

霊「魔理沙は?」

『紫さんに布団借りようとしてるらしい』

霊「ふーん。確かに布団の一つくらい余ってそうだけど」

『まあ、とにかくみんな来るまでくつろいでてよ』

霊「あ、神社からお酒持って来てくれない?」

『…パシリっすか?』

霊「うん」

『……………』

霊「……………」

『……………』

霊「おねがい」

『俺に任せてくれ』



## 2 パチユリーと伝言と枕、の巻。

『お酒重い疲れた』

霊「…体力無いわね」

『今日も飲むんだね』

霊「私にとって、酒は水みたいなものよ」

『…くれぐれも健康には気をつけてね』

ガチャ

魔「ただいま〜」

『あ、おかえり』

パ「…くさい」

『凄く失礼な第一声！』

魔「図書館も結構、ホコリやカビくさいけどな」

パ「これが人間の家。…想像を超えないわね」

「すみませんね」

パ「初めて見る機械もあるけど、どうせ大したことないんでしょ  
うね」

「…この人…来たくなかったんだな…」

魔「送迎付きって言ったら、渋々承諾した」

「…筈に二人乗りってこと？」

魔「送迎だからな」

「…なるほど」

パ「久しぶりに図書館の外に出たわ」

魔「不健康だな」

パ「紫外線を浴び過ぎるのも健康とは言えない」

魔「ビタミンDが不足するぜ」

「…魔理沙がまともな話してる…」

魔「おい、失礼だな」

パ「ところで、何か本があったら読んでみたいんだけど」

魔「ほれ」

パ「ぴちぴち女軍曹！我輩もつ我慢ならんでありますー！、だって。変わったタイトルね」

『それ、俺の本と違う！　ってかマニアックすぎる！』

パ「この軍曹さん、ずいぶん薄着ね」

霊「魔理沙、どうしたのこれ？」

魔「紫が布団と一緒にくれた」

『…返して来なさい』

魔「やるよ」

『…いらぬ』

魔「そろそろ布団が届くはずだが」

『届く？』

トサトサ

紫「ここに置いてくわ」

魔「おお、サンキュー」

『…神出鬼没だなあ』

紫「あと、枕いっぱいあったから、あ・げ・る」

ドサドサ

魔「…こんなにいらん」

紫「それではごきげんよう」

魔「置いていったぞ」

『…どうすんの、こんなに』

壺「でも、布団は確保できてよかったわね」

魔「まあな。これで3枚だな」

パ「咳出るから、埃舞わないようにしてよ？」

魔「努力はする」

パ「…すっごく不安」

魔「じゃ、私はもう一人迎えに行ってくるぜ」

『あ、はい。いつてらっしゃい』

霊「誰を迎えに行ったのかしらね？」

パ「ねえ、本貸して」

『あ、そっちの棚に本が』

パ「そう」

霊「迎えに行くってことは、ここを知らない人？」

『まあ、来てのお楽しみみてことぞ』

霊「咲夜とか」

『それは無い』

霊「どうして？」

『俺をひどく嫌ってるから』

霊「何したのよ？」

『優秀な人には、無能な人を見抜く力がある』

パ「あ、そついえば」

『はい?』

パ「パーティー開催について、咲夜から伝言を預かってたわ」

『誰への?』

パ「あなたへの」

『…悪口?』

パ「諷刺」

『…咲夜さんは何と?』

パ「参加出来ず、申し訳ありません。私などが参加せずとも、沢山の美少女があなたを愉しませて差し上げるでしょう。御所望のパジヤマ姿で」

『…最後の一文の重みが凄い…所望した訳じゃないのに…』

パ「あなたの企画でしょう?」

『魔理沙の企画です』

パ「え…」

『え…』

パ「パジャマ持って来てない」

『別にパチュリー様のパジャマ姿が見たい訳じゃないと思います』

パ「…そうなんだ」

『多分』

パ「でももしかしたら」

『いや、無い』

パ「……………」

『……………』

パ「……………」

『……………』

パ「帰る！」

『…落ち着いてください』

### 3 機械と料理とサプライズ、の巻。

魔「ただいま」

『あ、おかえり』

魔「連れて来たぜ」

霊「だれを？」

魔「誰だと思う？」

パ「メルラン・プリズムリバー」

魔「…違うぜ」

パ「秋静葉」

魔「…違うぜ」

に「…もう入っていい？」

霊「あら、にとりじゃないの」

に「お邪魔します」

『あ、どござんどござん』



に「やあ、はじめまして」

『あ、はじめまして』

に「にとりだよ。よろしく」

『うん、よろしく』

パ「また変なのを連れてきたわね」

魔「そうか？」

に「うわ…すごい…本当に機械屋敷だ」

魔「…やっぱり変わってるかもしれない」

に「面白機械がいっぱい…」

霊「にとり以外にもまだ来るの？」

魔「ああ。その予定だ」

パ「うるさいのだったら帰ってもらっけど」

『…結構ワガママですね』

魔「とりあえず、揃うまで暇をつぶそう」

霊「何するの？」

魔「ギャルゲ鑑賞」

『……………』

魔「さあ、遠慮なく美少女を堪能してくれ」

『……………』

魔「私たちは見学してるから」

『……………』

パ「これが噂に聞く恋愛ゲームね」

に「おっ、何なに？」

霊「これなんかいいんじゃない？」

魔「いや、こつちだろ。ミニませ、ミニ」

パ「これをやれば恋愛した錯覚に陥るのね」

に「へえ、この円盤で恋愛ができるんだ」

霊「巫女モノは？」

魔「無いな。メイドはあるが」

パ「現実では絶対に無理だから虚構で恋愛ね…ふっ」

に「お、説明書が付いてる」

霊「この子、私に似てない？ ほら」

魔「ぷははは、同じポーズとるなよ」

パ「ふふふ…憐れな人間。可愛いそう」

に「ふむふむ。これはディスクと言うのか」

霊「この子かわいくない？」

魔「まあまあだな」

パ「虚構の女の子ならオトせるのにね」

に「ふーん。この機械に入れて使うんだ」

霊「あ、この子好きそう」

魔「いやいや、こっちだろ」

パ「現実でも実践してみたら？ 捕まるでしょうけど（笑）」

に「すごいなあ。どうなってるんだろ」

霊「これにしない？」

魔「そうだな。じゃあ、これをプレイしてくれ」

『…お前から帰れよ』

……

魔「今日の夕飯はどうするんだ？」

『今日も作るよ』

パ「…誰が？」

『俺が』

パ「冗談は顔と性格と身長と学力と性癖と要領の悪さだけにしなさい」

『…多い』

パ「で、本当はどうするの？」

『本当に作りますよ』

パ「誰が？」

「俺が」

パ「冗談は顔と…」

「2回も言わないでください」

パ「ねえ、魔理沙」

魔「なんだ？」

パ「この人間、料理なんかできるの？」

魔「できるぜ」

パ「…意外」

「…そんなに何もできなさそうですか？」

パ「ええ」

「……………」

霊「ドンマイ」

「…ありがとう」

魔「パチュリーも食べるのか？」

パ「私だけ食べないのも寂しいでしょ」

魔「まあ、そうだな」

ピンポーン

魔「お、誰か来たぜ」

『はい』

ガチャ

『…あれ？』

霊「どうしたのよ？」

『…誰もいない』

霊「…は？」

『…おかしいな』

ボタン

魔「誰だった？」

「…わからない」

魔「何だそれ？」

「…だって…」

ピンポン

「……………」

霊「……………」

魔「……………」

「…だ…誰ですか…」

ガチャ

「…いない…」

魔「…本当か？」

「…誰もいな」

『…うんうん…』  
「きたよー…」

魔「何が？」

『…うん…』

魔「ん？」

『…まじね…』

「あ、逃げた」

ダッ

『…うん…』

「…うん…まじね」

『…うん…』

「…うん…まじね」



魔「…？」

『しかも勘違いして、パジャマで来たよ！』

魔「誰がだよ？」

傘「うらめしや？」

魔「……………」

霊「ちよつと、室内で傘差さないでよ」

傘「無理無理。からかさお化けなんだから」

『…小傘だ…』

魔「トリップすんな」

傘「いやあ、あんなに驚くなんてね」

『うんうん、ホント驚いたよ』

魔「それ、驚喜だろ」

霊「でも、何でパジャマで来たのよ？」

傘「だってパジャマパーティーでしょ？」

霊「……………」

『じじいところだが、またかわい…』

魔「お前ホントいい加減にしないとぶっ飛ばすぞ」

『…じめんなれ…』

#### 4 謝罪と少女とフライング、の巻。

霊「これで全員？」

魔「いや、あと一人呼んである」

パ「…結構多いのね」

魔「前回よりは少ないけどな」

霊「そろそろご飯仕度始めるわよ？」

魔「そうだな。頼んだ」

霊「ほら、始めるわよ」

『…はい…』

霊「…何落ち込んでるのよ」

『…怒らせてしまった…』

霊「ひいきするからよ」

『…申し訳ない…』

そっ…

霊「…魔理沙はあんたに淡い恋心を抱いてるのよ？」

『！！』

霊「後で魔理沙に、ちゃんと謝りなさい」

『へ？ ……う、うん…』

魔「さて、私は何をしよう」

パ「読書でもしたら？」

魔「パーティーに来て読書はちよつとな」

パ「誰もパーティーらしいことしてないわよ？」

魔「まあ、機械鑑賞してる妖怪とかな」

パ「傘のメンテナンスしてる妖怪とかね」

魔「……………」

パ「……………」

魔「ゲームでもするかな」

パ「ふーん」

に「……………」

傘「……………」

魔「…呼ぶメンツを間違えたかも知れない」

……………

『…魔理沙』

魔「ん？ 何だ？」

『…気付いてあげられなくてごめんね』

魔「は？ 何をだ？」

『魔理沙の淡い恋心』

魔「……………」

『……………』

魔「…ちよっとついて来てくれ」

とくとと

『…洗面所？』

魔「これを見てくれ」

『…鏡？』

魔「この人を見てどう思う？」

『実に残念だと思う』

魔「そうだな」

『うん』

魔「それを踏まえて、宝くじの一等が当たる確率と、私がお前に恋心を抱く確率と、どっちが高い？」

『五分だね』

魔「五分だな。よし戻ろう」

とくとと

魔「で、何が『ごめん』なんだ？」

『生まれてごめんなさい』

魔「…そこまで責めたつもりはないんだが」

『…ひいきしてごめんなさい』

魔「まあ、見ててあまり気分のいいことじゃないからな」

『うん。』ごめん』

魔「ああ。じゃあ、この話は終わりだ」

『ところで、まだ誰が来るの？』

魔「多分な」

『多分？』

魔「なんせよくわからん奴なんだ」

『…誰だろっ？』

魔「それより、退屈なんだが」

『何かする？』

魔「何かあるのか？」

『大人のオセロなら』

魔「…大人ってなんだよ」

『それが大人のリバーシ』

魔「…同じじゃないか」

ピンポーン

魔「お、来たのか」

『はい』

ガチャ



さ「こんにちは」

『おお、さとりんじゃないか!』

さ「その呼び方は…」

『上がって上がって!』

さ「あ…お邪魔します」

『どろどろどろ』

さ「こんにちは」

魔「来ないかと思ったぜ」

パ「ぶっ!」

さ「すみませんね、私のような嫌われ者が来て」

パ「…いや…別に…」

『まさか、さとりんが来るとは』

さ「…その呼び方はやめてください」

魔「これで全員だな」

『今回は、何か企画とかあるの?』

魔「ああ。一つある。楽しみにしとけ」

さ「怪談ですか」

魔「お前！ ネタバレしたな！」

さ「あ…すみません」

『怪談か…妖怪いるしなあ』

魔「いいんだよ」

さ「『女の子が、怖くなって抱きついてきたらいいな』ですか？」

『えー魔理沙そんなこと考えてるのー』

さ「…あなたですよ」

『何も考えるな何も考えるな何も考えるな…』

さ「『さらに、怖くて眠れない、とか言って布団にin』ですか？」

『何も考えるな何も考えるな何も考えるな…』

さ「『俺のお化けキューカンバーが…火を噴くぜ！』ですか？」

『…それは考えてない』

魔「まあ、ひとまず全員揃ってよかったな」

『そうだね』

魔「とりあえず腹減ったな」

『今日はご飯先にする？』

魔「ああ、そうしよう。全ては私の気分次第だ」

『…ですよね』

さ「私も構いませんよ」

パ「……………」

に「……………」

傘「……………」

『…この人たちには確認しなくていいや』

……………

魔「霊夢が静かだな」

さ「姿が見えませんが」

『多分、台所にいるかと』

とくとと」

『あ…』

霊「…すう…すう…」

『疲れて寝ちやっただな。ふふ…』

霊「…すう…すう…」

『台所でうたた寝なんてよっぽど疲…』

霊「…すう…」

『酒が…かなり減ってる…』

霊「…すう…」

『…フライングしおったな』

パ「ねえ、人間」

『はい、何ですかー？』

とたとた

パ「コーヒー」

『…ちよつとイラストときた』

パ「冗談よ」

『ですよね。で、用件は？』

パ「紅茶」

『……………』

パ「……………」

『……………』

パ「おねがい」

『すぐにお持ちします』

## 5 「飯ときゅうりと茄子」の巻。

『はい、紅茶です』

パ「ありがとう」

『あゝあ、頼まれると断れない自分が憎いなあ』

魔「お前がデレデレしてるだけじゃないか？」

『違うよ。それは原因の6割に過ぎない』

さ「さすがエロスマンですね」

『…何それ』

魔「ちなみに残りの4割は？」

『断れないやさしさ』

さ「さすがエロスマンですね」

『…今のはエロス関係ないよね？』

パ「ところで、このお茶、不味そうね」

『あ、ティーバッグで淹れたやつなので、あまり美味し…』

ずずっ…

パ「まずっ!」

『……………』

パ「もういいわ。下げて」

『……………』

パ「代わりにコーヒーを持ってきて頂戴」

『…へいへい。魔理沙と、さとりんも何か飲む?』

魔「じゃあ私はアメリカンで頼むぜ」

パ「あんな薄いのがいいの?」

魔「薄いくらいがちょうどいいんだぜ」

『へえー。さとりんは?』

さ「あ、私はコーヒーは…」

魔「飲まないなら私がもらっせ?」

さ「…やっぱり、せっかくなので頂くとします」

魔「…？ そうか」

さ「イタリアンでお願いします」

『…え…ごめん。わかんないや…』

さ「…じゃあ普通でいいです」

『ごめんね。今、淹れてくるから』

とくとと」

さ「それにしても静かなパーティーですね」

魔「みんな自分の趣味に没頭してるからな」

さ「全員揃ってるんですか？」

魔「ああ、揃ってるぜ」

さ「…静かですね」

魔「…コーヒーを淹れる音がはっきり聞こえるくらいな」

とくとと」



『持ってきたよ』

パ「ん、ありがとう」

魔「さんきゅ」

さ「ありがとうございます」

『そして、とりあえず霊夢をたたき起こそうと思っ』

さ「あんなに腋を露出して寝たら風邪ひきますよ」

魔「…あれでいつも通りだけどな」

とくとくと

『霊夢』

魔「お目覚めのキスとかしないのか？」

『…退治されるわ』

霊「…あれ…」

魔「本当に寝てたのか」

霊「お酒なら飲んでらいわよ？」

『…告白と受け取っていいよね?』

魔「…告白だな」

霊「…らって誰も構ってくれらいし…私…私…ふえーん…」

『…この酔っ払いどうすればいいの?』

魔「…ほっとくしかないな」

パ「ねえ、人間」

『はい』

トタトタ

パ「こぼした」

『…何で魔女ってこうやりたい放題なの?』

パ「大丈夫。服にはこぼしてないから」

『はいはい。床にこぼしたんですね』

に「ねえ、この機械使っていいかい?」

『え、ラジカセの使い方わかるの?』

に「うんにゃ、わかんないよ」

『一応説明書はどっかにしまっただけあるはずなんだけど』

に「見せてくれるの?」

『ちょっと待ってて、今探すから』

パ「早く拭いてよ」

『あ、はい』

霊「先にお酒飲んれいい?」

『…もう飲んでたじゃん』

魔「腹減ったな。飯はまだか?」

『……………』

パ「早く」

に「わくわく」

霊「い〜い?」

魔「メシー」

『…これなんて幼稚園？』

……

『…つかれた…』

魔「じゃあ、夕食の準備も終わったことだし」

霊「早速食べましょう」

魔「それでは、いただきます」

「」「」いただきます「」「」

魔「前回より若干豪華じゃないか？」

『…それでどうしてジト目なのさ』

さ「ひいきじゃないか疑ってるんですよ、というか妬…」

魔「こほん」

さ」……………」

『…？ 前は寿司の予定を急遽変えたからね』

魔「そういえばそうだったな」

パ「本当に料理できたのね」

『…まだ疑ってたんですか』

パ「まあ、咲夜の腕には到底及ばないけど」

『…そんなすごい人と比べないでください』

に「あ、かつぱ巻きだ」

『やっぱり、河童ってきゅっり好きなの？』

に「それは傾向だね。みんな例外なく好きってわけじゃないよ」

『…つりはっ。』

に「だいすき」

『…くそっ…かわいい…』

な」……………」

傘「そつちの焼き茄子取って」

さ「はい、どうぞ」

魔「やっぱり茄子好きなのか？」

傘「…関係ないよ」

霊「そつちのお酒取って」

『…もうやめなよ…』

パ「もうなくなったわよ」

霊「え…」

魔「…一人で飲みすぎだな」

霊「まだ飲みたりない」

『……………』

魔「霊夢はともかく、他の人は飲みたりないな」

さ「私は苦手なのでいいですが」

パ「私も別にいらない」

魔「私は飲みたりないんだよ」

『でも、もうすっからかんかんかんだよ?』

霊「神社にあるわよ」

『…リパシリ?』

魔「頼んだぜ」

『今回はさすがに嫌だよ。食事中だし』

魔「しかたないな、じゃあ…」

『待った! おねがい、は一人一回だ』

魔「…何だ、そのルールは…」

霊「けちー。滅多に見れるもんじゃないわよ?」

『…濫用してるじゃないか』

魔「おまえも何か言ってやってくれ」

傘「私?」

『お』

魔「……………」

『……………』

傘「私は飲まなくてもいいよ」

『くっ……』

魔「……………」

さ「……………」

『……………」

魔「にとりは飲むよな」

に「そうだね」

『…そんなこと言われても』

に「じゃあ、いついつのはどうかな？」

『どういつの？』

に「おねがい」

『えへへ…しかたないなあもー』



## 6 飲酒と泥酔と間接キス、の巻。

『そう、君たちは少々ズルすぎる』

魔「さっそく飲もうぜ」

霊「待ってましたっ」

に「あ、私も私も」

『…無視ですか？』

魔「まあ、お前も飲め」

『あ、どうも』

霊「さど、あんたも飲みなさい」

さ「あ…ち、さど…」

霊「ほら」

とほとほ

さ「あ、ちよっとでいいです」

霊「遠慮しない遠慮しない」

とっとうとっ

さ「あ…ちよ…私あんまり…あ…」

だばだばだば

霊「よし、こんなもんね」

さ「……………」

魔「パチュリーは飲まないのか？」

パ「少しならいいけど」

魔「ついでやるよ」

パ「…うん」

『小傘ちゃんはどっつする？』

傘「飲む」

『お酒、大丈夫なの？』

傘「たぶん」

『じゃあとりあえず、ちょっとだけね』

霊「ほらエロガツパ、あんたも飲みませい」

に「…酔うの早くない？」

霊「かっぱぱーかっぱぱーきゅりのきゅーちゃん、下ネタじやねえか！ あはははははは」

『医者を呼ぼう』

魔「…ほつといても多分大丈夫だ」

パ「そうそう。しらふのときも、こんな感じでしょ」

『…いや、ここまではないかと…』

魔「にとり、ついでやるよ」

に「おっ、どもども」

霊「ふふーん」

傘「この料理美味しい」

『…生きててよかった』

魔「……………」

『…こほん』

傘「特に、このドレッシング」

『市販のやつだ…』

傘「あと、このカキフライ」

『それアジフライだけど小傘ちゃんがそう言うならカキフライでいいや』

魔「……………」

『…こほん』

霊「そうよ私は　　噂のハクレイ」

『…本当に大丈夫なの？』

魔「…多分」

さ「…あの…」

『ん？』

わ「…じ…こね…」

『…大丈夫？』

さ「…わ…私…こんなに…飲めにゃいので…」

『のど?』

さ「…の…残り…飲んでく…ください…」

『あ、うん。了解し…』

ガシッ

『…手を離すのです、霧雨魔理沙』

魔「お断りだ」

『何故です、霧雨魔理沙』

魔「…その喋り方、腹立つからやめてくれ」

『なんで止めるのさ?』

魔「さっき、お前の視線はグラスのふちを一周した」

『……………』

魔「間接キスしようとしたな」

『……………』

魔「私が飲む」

ぐびぐび

魔「ぶはあ」

『…ちよつと頭をかすめただけだもん…』

魔「何か言ったか？」

『…いや、別に』

霊「き…きす！？ らつろもらがだ、であー(？)(？)」

『はいお酒没収ね』

霊「きゃー！ー！ー！」

魔「…どうやったらこんなに酔えるんだ」

パ「ねえ、人間」

『はい』

パ「お酒」

『ああ、はいはい』

に「あ、こっちにも」

『あいよ』

傘「ちようだい」

『あーい』

魔「私も」

『魔理沙もそんなに飲んで大丈夫？』

魔「まあ、大丈夫だな」

『よし、お酒がなくなりました』

魔「これで安泰だな」

『だといいんだけどね』

.....

霊「ラララ〜」

『…静かにして』

さ「うう…気持ち悪いです」

『大丈夫？』

さすさす

なでなで

魔「枕いっばいあるんだから枕投げしようぜ」

『…酔ってるよね？』

魔「いぐぜ私のターン」

パ「ちよつと、ホコリ舞うからやめてよ」

魔「ほれほれ」

ばす

傘「きや〜、やめて〜」

パ「げほげほげほ」



ばすっ

『らじかせはそらたかくまいあがった!』

ガシヤ

『らじかせはめのまえがまみどりになった!』

に「大丈夫。修理は任せて!」

ぐっ!

『お、頼もしい』

ガチャガチャ

『……………あれれ?』

ガチャガチャ

『明らかに中身見たさに解体してるよね?』

に「お、この尻尾をここに挿すのか」

魔「でや〜」

傘「きゃーきゃー」

パ「げほっほっほっほっ」

さ「きゅー…」

霊「うふふ〜ん」

に「うわ、なんか取れた」

『…皆さん、落ち着いてください』

魔「どりや〜!」

傘「きゃーぴー!」

パ「げほげほおぼえー!」

さ「…っぶ…」

霊「今だ! 霊夢! やっつけろー」

に「うわ、火花が散った!」

『…あの…やめて…』

魔「わーわー」  
傘「ぎゃーぎゃー」  
パ「げげげげごほお」  
さ「う…おえっぷ…」  
霊「ラララ〜」  
に「ガチャガチャドカーン」

『……………』

さ「…うっ…」

『俺も投げたいものが一つある』

さ「な…何ですか？」

『おん』

さ「…お気持ち、お察しします…っぴ…」

## 7 入浴とレンジとエロスマン、の巻。

『……………』

魔「どうした？ 元気ないな」

『…早く寝たい』

魔「おいおい、まだ怪談が残ってるぜ」

『疲れちゃったんだもん』

霊「そういえば、晩ご飯って何食べたっけ？」

『……………』

傘「エビフライだよ」

『……………』

さ「…料理、美味しかったですよ」

『…ありがとう、さとりん』

霊「で、この後は怪談？」

魔「の前に風呂だな」

『もう準備できてるよ』

魔「おお、気が利くな」

『…あ…そうかな…?』

に「順番は?」

魔「じゃんけんでもするか?」

パ「私はこの前入ったからいい」

魔「毎日入らないのか?」

パ「動かないし」

魔「確かにな」

パ「まあ、魔理沙がどうしても一緒に入りたいて言うなら入っ…」

魔「言わないな」

『言わないよね』

パ「ま、まあ私も読書に忙しいし他にもあれとかあるし仕方ないわね」

霊「とりあえず、じゃんけんしましょ」

魔「そうだな」

霊「じゃんけん、そおい」

に「あ、霊夢の一人勝ち」

魔「霊夢、じゃんけん強いな」

霊「まあね」

『え……』

さ「……………」

『ああ……』

傘「？」

霊「じゃ、お先に」

とくとくと

魔「うむ、暇になったな」

『……やっとゆっくりできる』

に「ねえねえ、これはなに？」

『電子レンジだよ』

に」「どうやって使うの?」「

『中に物を入れて、ボタンを押すだけ』

に」「するとどうなるの?」「

『物が温まるのである』

に」「どういう仕組み?」「

『中に人が入っていて、体温で温めてくれる』

に」「…意外とアナログだなあ」

パ「…そんなバカな…」

傘「どんな人?」

『かわいい女の子』

魔「お前の、かわいい、ってロリか?」

『…違います』

魔「でも、さとりには妙に優しいじゃないか」

『…さとりんロリじゃないやん』

魔「介抱したりさ」

『それは、しかるべき振る舞いだよね。むしろ褒めて』

魔「どさくさに紛れて、頭撫でたり」

『…よく見てたね…』

魔「背中さするふりして、ブラの線を探したり」

パ「うわ…」

に「わあ…」

傘「……………」

『してない！ 神に誓って、してない！』

魔「どうなんだ？」

さ「…されてないと思います」

『ほらね？』

パ「最っ低」

『されてないって言うてるのに！』



.....

霊「上がったわよ」

魔「よし次のじゃんけんだ」

に「最初はグー、じゃんけん、ぽん」

傘「やった！ 私だ！」

魔「ちえ、負けたか」

『.....』

霊「あの地上のドザエモンは何？」

『.....』

魔「エロスマンだな」

『.....』

霊「また、何かやらかしたの？」

『…前科があるみたいに言わないでください』

魔「お、エロスマンが復活した」

『……………』

魔「少しは節操を持とうな」

『…小傘ちゃん、助けて』

ひよい…

傘「……………」

『……………避け…た…』

傘「…ごめんなさい」

『…ガチで謝られると辛いんだけど…』

傘「…わ…私、お風呂入らなきゃ」

すたすたすた

『……………』

魔「……………」  
霊「……………」  
パ「……………」  
に「……………」  
さ「……………」

『…しりふ…』

魔「…ま…まあ…後で誤解だったって言っとくから、な？」

『…もういいんだ…俺なんか…どうせエロスマンですよ…』

パ「…み…みんな冗談で言ったに決まってるでしょ」

『…もう…いいんだ…俺は…俺は…』

に「…言えばわかってくれるよ！ ……たぶん…」

『…嫌われたんだ…いや…前から嫌われてたんだ…』

霊「…げ…元気出さない！ 何があつたか知らないけど…」

『…俺なんて…封印されればいいんだ…』

さ「…ごめんなさい…私が強く否定していれば…」

『…俺なんか…もう…』

魔「…ほ…ほら、風呂上がる頃には忘れてるって…」

『…ららら〜』

パ「そ…そうよ！ あの妖怪、頭悪そうだし！」

『…ふんふん〜ん』

に「…そうそう！ 心配することないって！」

『…るる〜』

霊「…戻って来なさい」

『…はびはび〜』

さ「…もう放心状態ですね」

『…つふふ〜』

魔「…今回は、からかい過ぎたと思ってる」

8 気絶とトマトと買い物、の巻。

霊「…どうすんの」

魔「とりあえず現世に連れ戻そう」

パ「ハードカバーの本ある？」

魔「こんなときも読書か？」

パ「違う。私に妙案があるの」

に「お、あつたよ！」

パ「そう、これを使って…」

ごすっ

ぱたり…

『 『

魔「おい！ 止まったぞ！」

さ「はわわ…大丈夫ですか!？」

魔「何してるんだ、パチユリー！」

パ「こうするしか…なかったのよ…」

霊「いや、もっと方法あったでしょ…」

に「冷たい水をかけて意識を戻そう！」

だっだっだっ

だっだっだっ

びしゃあ

『！…！』

魔「気付いたか！」

『……………』

に「意識回復率40%…50%…60%…徐々に回復していきます！」

『……………』

に「80%…90%…だめです！ 91%が限界です！ 回復しきれません！…」

『……………』

霊「ほら、しっかりしなさい！」

『…おっ、お酒ですか？』

に「だめだ！ 脳へのダメージが大きい！」

『…おっ、お酒ですか？』

傘「上がったよ」

魔「何かないのか！」

傘「…へっ？」

霊「かくなる上は…鼻にマカロニを詰めるしか……………ない！」

さ「いや、その理屈はおかしい」

に「メーターに変化あり！ 91%から上昇を始めました！」

魔「頑張れ！」

に「94！ 96！ 98…99！」

『…じっ…じっは…』

さ「気付いた!?!」

パ「あなたの家よ。パジャマパーティーよ」

『クツ…シズマレ！ オレノミギミミ！』

霊「よし、戻ったわね」

魔「いや、どう判断したんだ！ 戻ってないだろ！」

『いちご飴マジ天使』

に「だめです！ 残りの1%が…戻りません！」

パ「じゃ、これでいつか」

霊「そうね」

魔「そうだな」

傘「うんうん」

さ「そうですね」

……



『…ひどい…』

魔「戻ってよかったな」

『何か1時間ほど記憶無いんだけど』

霊「うたた寝ってやつね」

『頭の頭痛が痛いんだけど』

パ「ああ、後遺症が残っ…むぐ」

魔「そ、それは酒のせいだな！」

『…あれ？にとりんは？』

傘「お風呂だよ」

『誤解なんだよ小傘あつ！！ ホントに、本当に俺は、やってないんだよお！』

傘「！！！！」

魔「落ち着け！ その件は解決した！」

『…ホント?』

魔「ああ、なんとなか」

『…よかった…』

さ「大丈夫でしたか?」

『もともと大丈夫じゃないけどね。あははははは』

さ「……………」

『関係ないけど、小傘のパジャマかわいいよね』

傘「ありがとう」

『やっぱり水色が似合うね。…何だね君たち』

魔「やっぱりエロスマンか」

『…なんか頭痛が…』

霊「ちょっと、魔理沙」

魔「…ああ」

『パジャマパーティーだから感想が必要かな、と』

魔「まあ、それも一理あるが」

『でしょ？』

とたとた

に「上がったよ〜」

『…え…と…トマト？』

に「ん、パジャマ？ きゅうり柄が無かったからね」

魔「…野菜柄にこだわる必要はなかったんじゃないか？」

さ「というか、トマト柄はあるんですね」

『あと、さっきから気になってたんだけどさ』

魔「なんだ？」

『霊夢のパジャマおかしいよね？』

霊「え？ 後ろ前に着てる？」

『いや、そっじゃなくて』

魔「どこがおかしいんだ？」

『腋を露出してるところ』

パ「あ、本当だ」

魔「言われてみれば」

さ「…気付いてなかったんですか？」

魔「露出してるのが自然だよな」

パ「ええ」

『それ、前回と同じパジャマだよな？』

霊「うん。腋が密閉されるのが嫌で、切った」

『…そんなに嫌か』

魔「ところで、風呂に入らないのか？」

さ「え、私ですか？」

魔「ああ」

さ「…さすがに残り湯は飲まないと思いますけど」

魔「い…いや…一応ヤバいだろ、飲んだら」

『あははは、俺のことじゃないか？』

魔「心当たりがあるんだな」

『…違ひよ』

さ「まあ、それでは、さっと入ってきます」

とたとた

『ところで、怪談って準備とかあるの？』

魔「るるそく」

『…じゅめん。そういつのは何日か前に言っておいて』

魔「ふむ」

とたとた

ひそひそ

とたとた

傘「ねえねえ」

『ん？』

傘「るるそく無しの？」

『うん。うちには1本も無いんだ』

傘「怪談、楽しみ？」

『まあまあね』

傘「買ってこれる？」

『…お店遠いしなあ』

傘「るるそく…ほしいよお」

『…うわ』

傘「…」

『……………』

傘「おねがい」

『…よだれが止まりません』

## 9 ピンクと燭台と河童、の巻。

『ただいま』

傘「おかえり」

『…幸せ』

さ「……………」

『あ、さとりん、もう上がったんだ』

さ「結構前に」

『ピンクのパジャマか。かわいいね』

さ「それはどーも」

に「ろうそくは買えたかい？」

『んもつ、ばつちし』

魔「上がったぜ」

『お、ろうそく買ってきたよー』

魔「お、サンキュー」

『パジャマ、似合ってるよ』

魔「前と同じだけだな」

『二回着たら似合わなくなるわけじゃないし』

魔「…そ、そうか…」

さ「怪談やるなら、さっさと始めないと朝になりますよ」

傘「丑三つ時からやるんじゃないの？」

魔「さすがにそれは遅いな」

に「おねむの時間ももんね」

霊「じゃあ、もう始める？」

パ「そうね。どうせ他にやることないんでしょ？」

魔「そうだな。では、ろうそくを」

『はいよ』

魔「よし。次は燭台」

『…へ？』



魔「へ？」

『燭台？』

魔「燭台」

『……………』

魔「……………」

『……………』

魔「よし、床に立てよう」

『ちょっと待ってよ！』

魔「だって、立てるところ無いぜ？」

『そつだよね』

魔「気付かなかったのか？」

『しめん…』

魔「うーん…じゃあ、ろうそくは使えないか」

『…せつかく買ったのに…』

魔「ああ…悪いな」

『損した気は全くしないから大丈夫』

魔「それはよくわからんが…どうやって雰囲気を出すかな」

に「ランタンは？」

『ないなあ。懐中電灯ならあるけど』

魔「じゃあ、それでいいか」

霊「なかなかいい感じね」

さ「そうですね。雰囲気出てます」

に「ぞくぞくするね」

パ「まあ、悪くないんじゃない」

魔「それでは、怪談を始めませ」

『…結構怖いな』

魔「くじで順番を決めよう」

傘「何番になるかな？」

魔「よし、みんな引いたな？」

『うん』

魔「んじゃ、確認してみてください」

に「あ、最初は私だ！」

魔「じゃあ先頭バッター、にとり、頼んだぜ」

に「任せて」

.....

に「河童の話をするね」

魔「ふむ」

に「合羽じゃないよ？」

『…わかってるわ』

さ「それで、どんな話ですか？」

に「まず、この前…人形を…拾ったの…」

パ「人形…手堅いジャンルで来たわね」

に「その時、私は人形の恐ろしさを知らなかった…」

霊「…ごくり」

に「…人形に改造を施そうとしてしまったんだ…」

傘「きゃー！」

『いや早い早い！ まだ才チじゃないよ！』

傘「あれれ？」

に「…続けていい？」

霊「…うん」

に「私は技術によって動く人形を作ってみたかった」

魔「技術によらないで動く人形ならいるもんな」

に「…どうやって動かすか、一日中考えてみたの」

パ「で、思いついたの？」

に「うん。仕組みについては省略するけどね」

『まあ、聞いてもわからないもんね』

に「もう夜になってたんだけど、その日じゅうに作るうと思ってね」

霊「ふんふん」

に「それで、人形をしまった場所に行ったんだ…」

さ「……………」

に「すると…人形が…」

魔「に…人形が…？」

に「…ばらばらになっていたの」

パ「……………」

魔「…ごくり…」

傘「…ひゃあ…」

霊「……………」

さ「……………」

『……………』

に「幻かな、と思ったよ…」

『…怖い…』

に「まあ、結局は他の河童の仕業だったんだけど」

『え、ネタ明かし!?!』

魔「…いいのか?」

に「だってそんな怪奇現象おかしいじゃない」

パ「それが怪談でしょ」

に「科学的見地から原因を究明しないと」

傘「かつこいいね」

霊「…怪談は?」

に「河童の仕業だと思ったのよ。私の科学的推察は見事の中」

さ「…科学的でしょうか?」

に「まあ、確率から言って、そうだと思ったよ」

『…確率?』

に「今、河童多いからね」

魔「そうなのか？」

に「年間65億くらい増えてる」

パ「…半端ないわね」

に「もう異性とみればガツと」

霊「…下ネタじゃない」

に「…やん…はずかしい…」

さ「エロエロですね」

に「尻子玉とかも抜きまくりだしね」

傘「…なんかえっちな」

に「あ、そうそう…ちょ…これ…言っ…いいのかな…」

魔「なんだよ？」

に「だって…ちよっ…これ…」

魔「何だよ、言えよー」

に「この前さ、私、押し倒されそうになっ…ね」

魔「え、それでそれで？」

に「抵抗しても全然離してくれなくて…」

霊「それでそれで？」

に「すっごいまっすぐ私の目を見つめてくるの」

パ「それでそれで？」

に「熱い吐息が私の顔に当たるのね」

傘「うんうん」

に「彼が手を伸ばして…」

さ「ふむふむ」

に「ついに私の脇腹に触…」

『怪談じゃなくて、猥談じゃん！』



10 嵐と学校と夜道、の巻。

『…河童ってやっぱりエロいんだね』

魔「いいところだったのに」

『…聞く気満々かい』

霊「面白かったじゃない」

パ「初っ端からやってくれるわね」

傘「結局どうなったの？」

『…聞くな』

に「…他の河童に止められちゃった」

『…残念なのかよ…』

魔「とりあえず、次にいつてみよう」

霊「私だわ」

魔「今度は、猥談は無しだぜ」

………

霊「あれは、ひどい嵐の、夜だった」

『…うさんくさい語り口だね』

霊「私はいつも通り、境内の掃除をしていた」

パ「嵐はどうしたのよ」

霊「…間違えた。私は…たしか…お裁縫をしてたのよ」

魔「…フィクションなんだな」

霊「……………」

傘「作り話？」

霊「そうよ！ 悪い!？」

『…全然悪くないから落ち着いてください』

霊「んで、上を見たら雨漏りしてたのあー怖い終わり」

に「…うわぁ…投げやり」

『…酔いが抜けてないのか？』

霊「ふーんだ」

魔「…仕方ないな、次にいこう」

さ「次は誰ですか？」

『あ、俺だ』

魔「よし、期待してるぜ」

……

『これは俺が学校で体験したことなんだけど…』

パ「学校の怪談…手堅いジャンルね」

『友達と廊下を歩いてたんだけど…』

魔「フィクションなんだな」

『…え？』

魔「お前、友達いないだろ」

『…まあ…ほら…これは…昔の話だから…』

魔「昔はいた、みたいな言い方だな」

『……………』

魔「いたのか？」

『…そうだよフィクションだよ…』

さ「……………」

に「……………」

パ「……………」

傘「…かわいそう」

『…本当はいない空想上の友達と階段を上ったんだ』

魔「ふむふむ」

『そしたら、本当はいない空想上の友達が、学校の七不思議の話をし始めて…』

霊「……………」

『本当はいない空想上の友達いわく、上りと下りでは階段の段数が違うんだってさ…』

パ「……………」

『それで、本当はいな…』

魔「そんなに妄想だつてことを強調しなくていいからな」

『…友達と実際に数えてみたら、下りの方が一段少なかったんだ…』

さ「……………」

『おかしいなって思って、何回も数えたけど、結果は同じ…』  
傘「……………」

『以上です。どってんぱらりのぷう』

に「…珍妙な終わらせ方だね」

魔「…こっわあ」

パ「…ええ…これは…なかなかやるわね」

『…え？』

魔「段を数えながら何往復もしたんだぜ」

パ「ええ、信じられないわ。拷問よ、拷問」

魔「怖いな」

パ「ええ、人間のくせに見事な怪談だったわ」

『…いやいや…』

魔「にとりのも怖かったしな」

『いやあれ猥談じゃん』

パ「甲乙つけがたいわね」

『…カイドン違いだよ、とかツッコミしてよ』

魔「よし、いい流れだ。次にいこう」

『…俺の怪談怖かった?』

さ「…いえ…あまり…」

『だよね?』

霊「で、次は誰?」

さ「あ、私です」

………

さ「これはまだ私が小さかった時の話ですが…」

魔「幼女モノだな」

さ「違います」

に「…気にしないで進めていいよ」

さ「私は、外出先から家に帰るところでした」

霊「知らないおじさんに声をかけられたのです。『お嬢ちゃん、お

菓子あげるからカモンウイズミー」

さ「違います」

『…無視していいよ』

さ「すでに夜で、道には誰もいません」

パ「すると、ここぞとばかりに知らないおじさんが『カモンウイズ  
ミー』」

さ「違います」

傘「…忙しいね」

さ「私が歩いていると、後ろから足音がしてきました」

魔「ふむ」

さ「その時はあまり気にしませんでした、だんだん足音が大きくな  
っていきました」

に「……………」

さ「誰かいるのかと思って振り向くと……………」

傘「……………」

さ「…いたんです…顔の無い人が…」

魔「…おお…」

霊「その人は目が無いので、民家の物置にぶつかりました」

さ「違います」

パ「私は心配して駆け寄りました」きゆうん、大丈夫ですか？」

さ「違います」

霊「するとその人が『ああ、なんて美しい幼女だ』」

さ「違います」

パ「『見えてねえだろ』by私」

さ「もうやめる…！」

『…じん、怒っていいよ思っ』



11 向日葵と妖精と小隊の巻。

さ「…くすん…」

『みんなさあ、やるなら真摯な態度で聞こうか』

霊「はい」

『…大丈夫かな…』

魔「私はちゃんと聞いてたぜ」

『まあ、割とね』

傘「私も私も」

に「私も聞いてたよ」

パ「右に同じ」

『パチエはふざけてたよね』

パ「…というか、あなたいつの間にか馴れ馴れしくなってるわね？」

『…敬う必要性を見失った』

パ「…言ってくれるわね」

魔「次いつていいか？」

『あ、いいよ』

パ「私の番よ。名誉挽回だわ」

………

パ「向日葵という花はご存知かしら」

魔「種が食べられる花だな」

『…もうちょっと女の子らしいコメントを頂きたかった』

さ「たしか、花言葉は、光輝とか憧れとか…」

傘「とか？」

さ「あなただけを見つめる…とか…です…」

魔「（／／〇／／）」

霊「（／／〇／／）」

に「（／／〇／／）」

傘「（・・）？」

パ「（／／／／）」

さ「（／＼／＼）」

『…何この甘い空気…』

さ「…そそそ…それで向日葵がどうかしましたか？」

パ「こ…こほん。ええ。向日葵にまつわる話をしようと思って」

霊「向日葵にまつわる話？」

パ「もともと向日葵は妖精たちの道路標識だったの」

『…やべえ』

パ「向日葵の中に、通行止めとかが描かれていたわ」

『まじで!?!?』

パ「あと、上り急勾配ありとか」

さ「…妖精に勾配関係ありますか？」

パ「でも、ある時、とある数学者がそれを変えた」

傘「それはだあれ？」

パ「ピポナツチよ」

『ピポナツチ!?!?』

パ「ええ。芸術性に欠けるといふ理由でね」

霊「芸術？　だつて標識でしょ？」

パ「そうよ。でも彼は変えた。花柄にしたの」

さ「…花に花柄ですか」

に「でも、そんなことしたら…」

パ「ええ。事故が急増したわ」

霊「当然よ！　それくらい予測出来たはずじゃない！」

『…落ち着いて。どうせ嘘話だから』

パ「予測出来たはずね」

傘「だつたらどうして…」

パ「自分の美学を貫くためよ」

霊「そんなの…そんなの自分勝手過ぎる！」

パ「標識に戻せ、つて苦情が殺到したわ」

魔「…あっさり戻したとは思えんな」

パ「そうね。聞く耳を持たなかつたわ」

に「ひどい人だなあ」

パ「やがて妖精たちは蜂起することにしたの」

魔「やむを得ないだろうな」

パ「人間側も受けて立つことにした。人間と妖精の戦争よ」

「……………」

パ「でも、それは遅かった」

霊「…どういう意味？」

パ「妖精の数が減りすぎていたの。彼の目論見通りにね」

傘「事故のせいってこと？」

パ「ええ。だから人間側が圧倒的に有利に思われた」

魔「…引つかかる言い方だな」

パ「結果から言うわ。勝ったのは妖精よ」

に「それで標識に戻したんだね」

パ「いいえ。妖精たちは向日葵を標識にしなかった」

さ「どうしてですか？」

パ「戦争の間に、妖精だけが分かる記号体系を考案したからよ」

に「戦争が科学技術の発展に貢献してるとはよく言ったもんだね」

パ「多くの草花にその記号をあしらって標識としたの」

霊「人間にはどれが標識かすら分からないわね」

パ「ええ。妖精の数も遞増していった」

傘「それで人間は反省して、傘を大切にするようになったのね」

『…趣旨変わってるじゃん』

パ「対して、人間は敗北の悔しさを向日葵に刻みつけた」

魔「向日葵に？」

パ「向日葵の種はらせん状に配置されているわ」

霊「へえ、知らなかった」

パ「それに沿って種を数えると、彼の考案した小隊編成の法則を見出せる」

さ「小隊編成の法則？」

パ「ええ。敗北の原因のね」

霊「…と、言つと？」

パ「小隊の構成も彼が考案したの」

傘「どんな小隊にしたの？」

パ「第一小隊から順に、数が多くなっていくようにした」

魔「初めは40人、次は50人みたいにか？」

パ「いいえ。そうではないの」

「……………」

パ「1 / 1 / 2 / 3 / 5 / 8 / 13 / 21 / 34 / 55 / 89 / ……」

「……………」

に「うん…不思議な増え方」

傘「そのどこがダメなの？」

パ「それは…」

霊「それは？」

パ「それは…」

霊「……………」

魔「……………」

に  
傘  
さ  
……

「一人では小隊とは言えない」

「……おい、怪談はどこに行った」



12 お墓と暗闇と油の巻。

パ「どう？ 見直した？」

『…いいえ』

さ「怪談ではありませんでしたね」

に「そうだね」

パ「私としては94点なんだけど」

『…何を基準にしたのか全くわからない』

霊「で、次は誰？」

傘「私だよ」

魔「期待大だな」

『…そうかな？』

魔「さあ、いってみよう」

……

傘「私がお墓に行ったときなんだけど…」

魔「何しに行ったんだ？」

傘「遊びに」

霊「……………」

魔「……………」

パ「……………」

に「……………」

さ「……………」

『……………』

傘「私は、歌いながらスキップしてたの」

『…カワイイ……………』

魔「字を小さくしても聞こえてるからな」

『…こほん……………』

傘「そしたら誰かが後ろからついて来たの」

『俺じゃないよ』

さ「わかってますから黙ってください」

『…ごめんなさい……………』

傘「だから私は逃げただけ……………」

に「ふむふむ……」

傘「お墓に不思議な音が響いていて……」

霊「……不思議な音？」

傘「うん、不気味な音」

『……どんな？』

傘「カラン、コロン、って」

パ「自分の下駄でしょうが」

傘「ばれたか」

パ「……………」

傘「それでねそれでね」

魔「それで？」

傘「それで、後ろから追ってくるキョーンシーを……」

『言っちゃったよ!』

傘「……あれ？」

魔「……正体バラしてよかったのか？」

傘「大丈夫！ この後が大事！」

霊「どうなったのよ」

傘「返り討ちにした」

魔「……………」  
霊「……………」  
パ「……………」  
に「……………」  
さ「……………」

傘「（ハ―）」

魔「……………」  
霊「……………」  
パ「……………」  
に「……………」  
さ「……………」

傘「（ハワ―）」

魔「……………」

霊「……………」  
パ「……………」  
に「……………」  
さ「……………」  
『……………』

……………

傘「…何がいけなかったんだろう…」

『…幽霊に勝ったら、怪談というより武勇伝だよ』

パ「期待外れだったわ」

『最後は魔理沙だね』

魔「え、いや、もう遅いから寝ようぜ」

霊「え？ 終わり？」

魔「いやー、しかし布団が足りないなー」

に「え？」

パ「何もやらない気？」

魔「明日起きれなくなるぞ」

『…最初から怪談用意してなかったな』

霊「……………」

パ「……………」

に「……………」

傘「……………」

さ「……………」

こくり

魔「…へ？」

霊「何もしないなんて…ねえ？」

『いいわけないよねえ？』

パ「どんな素晴らしい怪談を披露してくれるのか楽しみだわ」

に「そうそう。企画者だもんね」

傘「即興で話せるよね？」

さ「当然この中で1番怖い話ですよね？」

魔「…いや…その…」

『張り切っていつてみよう!』

……

魔「…あ…えと…」

『ほらほら、がんばりなさい』

魔「これは私が、小さいとき…」

さ「幼女モノですね」

霊「フィクションなのね」

パ「それは怪談じゃない」

傘「何しに行ったんだ」

に「猥談じゃないの」

『友達いないじゃん』

魔「いや…お前たち…」

ふっ…

さ「ひゃっ!」

傘「わわ! 真っ暗!」

魔「うわ！ 懐中電灯が消えたんだ！」

霊「何も見えない！」

パ「きゃん！」

に「どうしたの!？」

パ「今…誰かに触られた…」

魔「何だって!？」

霊「きゃ…私も…触られた気がする…」

魔「お前…暗いのをいいことに！ …お…おい…触るな…」

さ「ここはどこ？ 私は誰？」

傘「明かりは無いの？」

に「何かを燃やせば明るくなるよ！」

パ「なんか…硬くて…傘みたいなのが当たって…」

魔「…じゃあ傘だな」

霊「…ひゃ…舐めないで…」

魔「…それも傘だな」



さ「たしかこの辺りにテレビのリモコンが…」

ふらふら

ゴッ

さ「あ痛っ…」

傘「燃やす物は無いの？」

に「油はよく燃えるよ！」

パ「見えない…魔理沙、助けて」

魔「わ…触られた…霊夢、助けて」

霊「きゃ…私も…パチュリー、助けて」

さ「この辺りにお茶が…」

カタン

びしゃ

さ「きゃっ…こぼれた…」

傘「油はどこ？」

に「台所だよ！」

パ「や…誰か触ってくる…魔理沙、助けて」

魔「ひゃ…誰だよ…触るな…霊夢、助けて」

霊「あ…触っ…やだ…パチュリー、助けて」

さ「この辺りにファービーが…」

ぱりっ

さ「あ…お煎餅が割れちゃった…」

傘「台所はどこ？」

に「明かりが無いとわからないよ！」

パ「きゃんきゃん」

魔「きゃんきゃん」

霊「きゃんきゃん」

さ「この辺りにフラワーロックが…」

傘「明かりは無いの？」

に「何かを燃やせば明るくなるよ！」

パチッ

『…何やってんの君たち』

13 スプレーと靴下と背中くらい流してやるよ、の巻。

『…さすがの俺でも触らないよ』

魔「…まあ…疑って悪かったよ」

霊「…ごめん」

パ「…悪かったわよ」

『まったくもう』

傘「油はどこ？」

に「台所だよ！」

『まだやってる！』

霊「もう、早く寝ましょう」

さ「布団は3組しかありませんよ？」

傘「全部くつつけたら、7人とも寝れるんじゃない？」

『…なんていい子なんだ…』

魔「……………」

さ「……………」

『わかってるよ。俺はソファで寝るから』

霊「じゃあ、2人ずつ寝ればいいわね」

魔「グーチーパーで決めよう」

霊「グチパーグチパー合った、ひとつ」

魔「私と、にとりだな」

に「うん」

パ「私は霊夢ね」

傘「それで、私と、さとりんだね」

さ「…さとりん…」

魔「で、布団はどうする？」

霊「どうするって？」

魔「どの布団で寝るか」

霊「私は自分の布団があるから」

パ「そうね。臭そうな布団は勘弁して欲しいわ」

『…ちゃんと消臭スプレーしたけどね』

パ「それでも臭そう」

『…悲しいけど、自分でもそう思う』

さ「私はそっちでも構いませんよ」

『…涙が出そうだ…』

に「私もどっちでもいいよ」

魔「お前はどつだ？」

傘「私もどっちでもいい」

魔「ふむ。私もどっちでもいいんだよな」

に「じゃんけんで決めよう」

傘「よし、じゃんけん、ぽん」

に「あ、負けた」

傘「勝った。私はね、どっちでもいいよ」

に「そっか。私もどっちでもいいよ」

『…何も決まってるじゃないじゃん』

魔「負けたら紫の布団ってことで、もう一回」

傘「じゃんけん、ぽん」

に「あ、負けた」

さ「これで決まりですね」

魔「よし、寝るか」

『俺は風呂に入ってくるよ』

魔「まだ入ってなかったのか」

パ「ばつちいわね」

『片付けに時間がかかったからね！』

魔「あ…スプレー貸してくれ」

『え？ いいけど…はい、どうぞ』

魔「サンキュー」

シュー

霊「何してるのよ？」

魔「紫のにおいがしそうだから」

『もとは紫さんのだからね』

魔「他人のにおいがする布団って何となくいやだろ？」

パ「わからなくもないわね」

『じゃ、俺は風呂に入ってくるから』

霊「私たちは先に寝ましょう」

魔「そうだな。おやすみ」

パ「おやすみ」

に「おやすみー」

傘「おやすみ〜」

さ「おやすみなさい」

.....

「うそ」



傘「ふふふ、驚かしてあげよう」

「ごそごそ」

魔「待て待て。どうやって驚かす気だ」

傘「え？ 急に戸を開けて、わっ！」

魔「…それは問題がある」

傘「へ？」

魔「戸を開けなくても驚かすことはできるぜ」

傘「そのまま、わっ！ ってするの？」

魔「その驚かし方は古いな」

傘「じゃあ、どうやるの？」

魔「ふっふっふっ。私が悲鳴を上げさせてやるっ」

傘「えー本当に出来るの？」

魔「まあ、ここで待ってる」

傘「いいけど…」

魔「まず、靴下を履く」

傘「ふむふむ」

魔「次に、洗面所に行って電気をつける」

とことこ

ぱちっ

魔「おーい」

「ん？ どうしたの？」

魔「…ちゃんと洗ってるか？」

「洗ってるよ？」

魔「…今日は…疲れただろ？」

「はは。まあ、いつものことだけどね」

魔「…悪かったな…ちょっと…はしゃぎすぎた…」

「あ、いや、別に嫌ではないよ」

魔「…お詫びとつかさ…背中くらい…流してやるよ…」

『あはは。それはいいね』

しゅるしゅる

『わ！ ちょっと！ 何、ちょっと待って！ 本気！？ 違つよね！？』

魔「今… 入るからな…」

しゅるしゅる

『ダメだって！ ちょ、誰か！！ 誰か助けてえー！っ！！！！』

傘「本当に悲鳴が上がった！」

14 刃物と食費と夜風、の巻。

霊「夜中に叫ぶとか、どろいっ神経してんのよ」

『…すみません』

パ「うるさくて眠れないわ」

『…すみません』

に「びっくりしちゃったよ」

『…すみません』

さ「……………」

『…すみません』

傘「どうやってやったの!?!」

魔「洗面所の電気をつける」

傘「うん」

魔「すると、風呂の中から、うつすら私のシルエットが見える」

傘「そうだね」

魔「そこで、背中を流してやる、と言う」

傘「うんうん」

魔「そして、靴下を脱ぐ」

傘「どういう意味があるの？」

魔「そのまま私が服を全部脱いで風呂に入ってくる、と思い込ませられるんだ」

傘「なるほど！」

魔「すると、女と風呂入ったことのないこいつは悲鳴を上げる」

傘「天才だ！」

パ「なかなか上手く考えたわね」

『…とにかく、もうしないでね』

霊「くだらないこと考えるわね」

に「他にもいろいろ驚かす方法あったんじゃない？」

パ「そうね。刃物を持ったシルエットを見せるとか」

魔「刃物で驚かすのは芸が無いな」

さ「黙って立ってるだけでも怖いのでは？」

傘「ほう、なるほど」

霊「というか、驚かしたけど、怖がらせたわけじゃないわよね」

パ「そうね」

魔「まあな」

傘「そうだね」

に「化け傘って怖がらせなくていいの？」

傘「驚けば何でもいいんじゃない？」

魔「そんなんだから、お前は大人の世界で危ない目に遭うんだ」

傘「？」

に「ところで、明日は何するの？」

魔「うーん…ビンゴ大会」

『…ビンゴなんて無いよ』

魔「まあ、さとりがまだいるからな」

さ「へ、何ですか？」

魔「まだ権利を行使してないじゃないか」

『お……』

さ「……絶対に言いませんからね」

『……………』

魔「そうか。じゃあビンゴは第3回パーティーでしょう」

『……まだあるの?』

魔「もちろん」

『正直な話、食費とか結構かかるんだよね』

魔「うむ、後で体で払う」

『……嘘つけ』

魔「まあ、何とか負担を減らすように工夫するから」

『……うーむ』

霊「とりあえず、今日は寝ましょう」

魔「そうだな。寝よう」

に「明日のことは明日考えればいいもんね」

傘「うん、じゃあ、おやすみ〜」

ぱたん

さ「…すう…すう…」

傘「…すう…すう…」

に「…すう…すう…」

パ「…すう…すう…」

魔「…すう…すう…」

霊「…すう…すう…」

……

霊「おやすみ」  
魔「おやすみ」  
パ「おやすみ」  
に「おやすみー」  
さ「おやすみなさい」  
『おやすみ』



.....

『.....』

さ「眠れないんですか？」

『わ！ さとりん！ いつの間に...』

さ「...違うみたいですね」

『空が綺麗だな、と思ったんだよ』

さ「はあ...何言ってるんですか...」

『...バレてるもんね。ちょっと考え事してた』

さ「...はは、すみませんね。心が読めて」

『さとりんはどっして...』

さ「...ちょっと目が覚めたら、あなたがいなかったの」

『気にしないで寝ててもよかったのに』

さ「一人でおいしいものを食べてるかもしれませんが」

『はは、なるほどね』

さ「それで、何を考えていたんですか？」

『…なんか怖いなって』

さ「『俺みたいな友達もない奴が、こんなに楽しい思いをするのは変だ』ですか」

『うん』

さ「皆さんは友達じゃないんですか？」

『…どう思われてるかはわからないよ』

さ「そうですか。皆さん、嫌ってはいないようですが」

『…どうかねえ』

さ「『これから嫌われるかもしれない』ですか」

『…うん』

さ「ネガティブですね。好かれるかもしれないとは思えないんですか？」

『あんまり考えないなあ』

さ「…そうですか」

『…うん』

さ「まあ、あまり気に病む必要は無いと思いますが」

『まあ…ね』

さ「ただ、ひとつだけ言っておくとすると」

『?』

さ「私は、あなたを友達だと思っています」

『え…』

さ「そろそろ私は寝ます。明日も大変な一日になりそうですし」

『…あ、うん』

さ「では、おやすみなさい」

『…おせすち』

ムムムムムム

『……………』

『……………』

『…ちんごん…』

『…恋人…』

さ「友達って言ってんだろこのヒロスマン」

15 睫毛とほつぺたと病気の巻。

『ふぁ…んー、朝か』

霊「……………」

魔「……………」

パ「……………」

に「……………」

さ「……………」

傘「……………」

『…まだ誰も起きてないのか』

魔「……………」

『おーい』

魔「……………」

『呼びかけてみましたが、返事はありません』

魔「……………」

『僕は、魔理沙が狸寝入りをしているのではないか、と思って彼女の顔を覗き込んでみたのです。』

すると、すやすやと寝息が聞こえ、どうやら僕の推測が間違っていたのだな、と思うに至りました。』

本当なら、そこで僕は、もう一度彼女を起こすなり、朝食を準備するなり、別の行動に移るべきです。

しかし、僕は彼女の寝顔から目を離せずにしたのでした。

彼女の顔をまじまじと見つめることはありませんから、ちょっと見ていたかったのかもしれませんが。

ですから、彼女の睫毛が意外と長かったことも、今になってようやく気が付いたのでした。

いつもはぱっちりと開かれているその目が、やさしく閉じられています。

少し上の方へ目を移すと、眉は整っていて、少しだけ前髪がかかっているのです。

普段、活発な少女を思わせる金髪は、今は眠っている彼女を綺麗で上品に印象づけています。

また、前髪の間から覗く額もかわいらしく、彼女の魅力のひとつであることを知りました。

僕は彼女の前髪をかき上げて、その額をもっと見たい、と思いました。

ですが、もし彼女が目覚めたならば、額に接吻をしようとしていると思われかねません。

それは困ります。

だから、残念ですが、やめることにしました。

代わりに、ほっぺたをぶにぶにすることにします。

これも、彼女が起きれば、変態などと罵られるかもしれません。

しかし、僕の家泊まって、不用心にもぐっすり眠っているのですから、このくらいの悪戯は当然なのです。

僕は彼女のきれいなほっぺたに狙いを定めました。

緊張の一瞬です。

こんな美少女のほっぺたをつつく事態になろうとは、全く予測していませんでした。

手が震えます。

僕は目を閉じ、深呼吸をしました。

そして、彼女が確かに眠っていることをもう一度確認します。

すると、彼女の唇がわずかに動き、僕はぎょっとしました。

しばらく動けず、黙って見ていましたが、どうやら寝言のようです。

胸を撫で下ろすと同時に、（当然撫で下ろしたのは自分の胸で、魔理沙の胸ではない）自分の視線が魔理沙の唇に釘づけになっている

ことに気付きました。

みずみずしくて、張りのある柔らかそうな唇です。

ここは、他人が決して触れてはならない、乙女の領域です。

さすがの僕でも、自分の欲望のために、彼女を失意のどん底にたたき落としたりはしませんでした。

僕は当初の予定通り、ほつぺたをぶにぶにすることにします。

また手が震えはじめました。

気付くと、腕や肩、足さえも震えています。

頭もぐわんぐわんして、呼吸も苦しくなりました。

ですが、僕は手を引っ込めません。

この身が朽ち果てても、魔理沙のほつぺたをぶにぶにするんだ。

僕はそんなことばかり考えていました。

ついに、僕の指先が彼女のほつぺたに触れました。

彼女の柔らかな肌の上で、僕の無骨な指が、みじめに震えています。

僕は自分を情けなく思いました。

しかし、もうここまできたら、引き返すことはできません。



僕は指に、ほんの少しだけ力を加えます。

すると魔理沙のほっぺたは小さくへこみ、よわく押し返してきました。

僕は感動しました。

魔理沙のほっぺたの弾力は見事なものです。

もう一度押ししてみても、柔らかく、ぷにぷにとした感触が指に伝わってきます。

この柔らかさは例えようもありません！

これは病み付きになります。

まるで、ぷにぷにするためにあるかのようなほっぺたです。

僕は今、世界で一番幸せです。

調子に乗った僕は、今度はほっぺたをつまんでみることにしました。

起こしてしまっただけではいけないので、力を入れすぎないようにします。

魔理沙のほっぺたは、もっちりしていて、指を離すとぷるんと小さく震えました。

この感触もまた、至高のものです。

彼女のほっぺたで、ご飯を茶碗2杯（ふりかけがあれば3杯

（は食べられそうでした。

そして、僕はもう一度同じことをしようと、魔理沙の頬に触れます。  
しかし、僕は固まりました。

なんと、いつの間にか彼女の目が開いているではありませんか！

僕は咄嗟に手を引っ込

魔「おい」

『…な…なんでしょうか』

魔「…お前病気なんじゃないか？」

『どうやら彼女は、まだ寝ぼけてい

魔「おい」

『はい？』

魔「…怖い」



16 冷や汗とウナギと河童膏、の巻。

『いやあ、ちよつとテンション上がったちゃってさ』

魔「…昨日の怪談大会より、ずっと怖かった」

『じめんじめん』

魔「尋常じゃなく冷や汗かいたぜ」

『ちよつとした好奇心でさ』

魔「目が覚めたら、一人でぶつぶつ言ってる半笑いの男に、ほっぺた触られてる恐怖が分かるか？」

『いや、じめんってば』

魔「あの辺とか、寝たフリしながらめっちゃこらえてるぞ」

パ「…っ…く…っ…っ…」

さ「…くくっ…く…く…」

『…本当だ。クールに触ったつもりなんだけどな』

魔「……………」

に「…んにゃ…ん…あ、おはよう」

魔「お、起きたか」

『にとりん、おはよう』

に「ふぁ…二人とも早起きだね」

魔「…まあ、おちおち寝てられないからな」

『ほっぺしか触ってないよ?』

魔「…せめて黙って触ってくれ…」

霊「…ふぁーあ…おはよう」

『あ、おはよウナギ』

霊「何? 朝ごはんウナギなの?」

『いや、そういうわけでは…』

霊「まぎらわしいわね…ん…あれ?」

魔「どうした?」

霊「袖なくした…」

『……………』

霊「あら…どこいったかな…」

パ「むにゃーおはよう」

魔「…今起きたフリするなよ」

パ「な…なんのことかしら？」

さ「…っ…おはようじ…っぶぶ…じれいます」

『…そんなにおかしかった？』

魔「ほら、お前も起きろ」

傘「…すう…すう…」

『…かわいいなあ…』

さ「早く起きないと…」

魔「『俺の折りたたみ傘が…火を噴くぜ！』とかやられるぞ」

『…おい、「折りたたみ」って何だよ』

魔「コンパクトってことだな」

『……………』

傘「…っ…ん…あーおはようー」

に「寝ぼけているね」

『…かわいいなあ…』

さ「……………」

魔「よし、それじゃ、よけてくれ」

傘「へ、何？」

さ「私もですか？」

魔「ああ」

霊「何する気？」

魔「スプレー貸してくれ」

『え？ はい、ぜひぞ』

シュー—————

『へ？』

さ「…私…そんなに体臭きついでしょっか…」

傘「どうして私の布団にスプレーするの？」

『…俺の布団ね』

魔「お前が寝るときに、布団から女の子の匂いがしたら困るだろ？」

『…まあ…そうか…』

魔「だからな」

シューーーーーー…

『…それにしても使いすぎじゃない？』

魔「完全消滅させないとな」

『…これでいいんだ、俺。道徳的には……これでいいんだ、俺』

パ「…唇噛み締めてる人がいるけど」

魔「よし、こんなもんか」

霊「さとりはいつまで枕抱いてるのよ」

さ「あら…本当ですね…」

『さとりんかわいいなあ』

さ「……………」

に「…と…今日はどうするの？」



魔「とりあえず朝メシだな」

『あ、今作るよ』

魔「頼んだぜ」

……

に「3！」

魔「ダウト」

に「ちえー」

傘「あはは、お金持ちだー」

霊「3」

さ「4」

魔「ダウト」

さ「…よくわかりますね」

魔「えっへん」

傘「4」

魔「…5枚出したらバレバレだぜ」

……

トントントントントントント

『〜』

トントントントントントント

『次は、にんじんと』

トントントントントント

『…っ』

魔「お、どうかしたか？」

『あ、いや、別に…』

さ「包丁でケガしましたね」

『あはは…うっかり』

霊「あら、料理上手かと思っただけど」

『そうでもないんだ』

傘「だいじょうぶ？」

『大丈夫だよ。ありがとう』

パ「口寄せの術でも使うの？」

『…違います』

に「お、切り傷だね。私に任せて」

『え…あ…もしかして…』

に「」どれどれ…そんなに深くはないけど、念のためね」

『河童といえば、河童膏っていう切り傷とかによく効く薬があ…』

ちゅっ

に「つばを付けておけば治りが早いからね」

『……………』

魔「……………」

霊「……………」

パ「……………」

さ「……………」

傘「……………」

に「ん、びじしたの？」

『……………』

ばたり

パ「これだけで気絶!？」

17 放置と指フェチと快晴、の巻。

『…ご飯できたよ』

霊「待ちくたびれたわ」

『…放置してトランプはひどくない？』

魔「お前があまりに幸せそうだったからな！」

『…いや…だって…あんないきなり…ほら…』

に「貧血？」

『…ちがうんだ』

パ「指舐められただけで気絶とか……………はっ」

『…俺、恋愛とか無理だわ』

さ「指を舐められて、さぞかし気持ちよかったんでしょっかねー！」

『…え…いや…びっくりして…ね…？』

霊「よかったわね」

『…いや…そういっわけじゃ…ね…ほら…』

傘「よかった？」

『…いや…いいとか悪いとかじゃなくてち…』

魔「メシ食おうぜ」

霊「そうね」

さ「いつまでも指フェ（中略）に構ってられませんからね」

傘「中略って何？」

に「きつと指フェチだね」

パ「…そうかしら？」

傘「ちがうの？」

魔「ドMでパジャマフェチで…」

さ「ド変態のエロスマン。あと指フェ（以下略）」

『俺は女の子によく嫌われます』

パ「君ももうすぐ魔法使い」

……

魔「じゃ、いただきます」

「「「いただきます」」」

『いやー、みんな、あんなに仲良く遊べるんだね』

魔「……」

さ「……」

霊「……」

パ「……」

に「……」

傘「……」

『……………』

魔「……………」

さ「……………」

霊「……………」

パ「……………」

に「……………」

傘「……………」

『THE・無視…だと…』

魔「自分の指でもしゃぶってればいいだろ」

さ「そうですね」

霊「……………」

パ「……………」

に「……………」

傘「……………」

『…包丁で指切って人生終わるとは思わなかった…』



魔「グッドエンドだったじゃないか」

さ「おめでと〜」

ぱちぱち

ぱちぱち

『…う…ぐすっ…ごめんなさい…もう許して…』

霊「…さすがに可愛いそうじゃない？」

魔「うーん…でも自業自得だしなあ」

傘「何か悪いことしたっけ？」

さ「そう言われると…微妙ですけど…」

に「もしかして、私が舐めたことに問題があった？」

パ「…天然なのかしら」

『…くすんくすん…』

魔「…まあ、今回は許してやるけど、以後気をつけるよ？」

『…うん…ごめんなさい…』

霊「これで解決ね」

に「よかったよかった」

『…とじろどね…』

魔「何だ？」

『…具体的には、どう気をつければいいの？』

魔「え…と」

さ「……」

霊「……」

パ「……」

に「……」

傘「……」

魔「…指を切らないとか…かな…？」

『…やっぱり俺あんまり悪くないよね？』

……

魔「まあ、悪かったよ。ちょっと言い過ぎた」

『うん、結構傷ついた』

さ「すみません。あまりにも鼻の下を伸ばしていたので、つい」

『…そんなに伸ばしてないと思うなあ』

霊「まあまあ、過ぎた話はそれくらいにして」

魔「そうだな」

『そうだね』

傘「じゃあ、仲直りの拍手〜」

ばちばち

『…握手じゃないんだ』

パ「ねえ、人間」

『…あ…はい？』

パ「お醤油」

『はい』

霊「あ、私もお醤油」

パ「はい」

傘「お味噌汁おいしいね」

『ありがとう』

魔「出汁…いや、味噌が前と違うな」

『…そっだよ。何でそんなに舌肥えてるのさ…』

魔「えっへん」

『えっへんじゃないよ。うちで食べるすぎだよ』

魔「だって美味しいからな」

『…そっか』

さ「卵焼きは私の方が上手く作れると思いますけどね」

『はは、俺の親もあまり上手じゃなくってね。遺伝かな?』

に「ふあっふあふあふいふあほいふいーほ」

霊「…食べてからしゃべりなさい」

に「…んぐ。かつぱ巻きは美味しいよ」

魔「キュウリが入ってれば美味しいんだろ?」

に「んまあ、ぶっちゃけね」

『あはははは』

さ「…ふふっ」

『ん? どうかした?』

さ「いえ、今日はいい天気だな、と」

魔「お、本当だな。洗濯日和だ」

傘「おっ、唐傘日和だ」

に「…快晴だよ」

霊「というわけで、クリーニングサービスは?」

『…受け付けておりません』

18 かるたと絵本と日傘、の巻。

『13!』

魔「ダウトな」

『ちくしょー』

パ「…憐れね」

霊「半分はあんたが持つてるわよ」

傘「13」

『ダウトっ!』

傘「へへー、ホントでしたあ〜」

『…もうやだ』

さ「とことん弱いんですね」

『そろそろ違うことしよっしょー』

魔「何するんだ？」

『しーんと』

魔「……………」

『…相撲』

魔「お前、最低な」

『…冗談だよ。ほら河童って相撲強いって聞いたことあるから』

魔「そうなのか？」

に「うん、強いよ」

傘「どのくらい？」

に「負けたことないなあ」

パ「…本当でしょうね？」

に「うん。3戦全勝」

『いや少ないな…』

に「でも強いよ。やってみる？」

『え、いや…』

魔「……………」

『うーわ、その目』

魔「…別に」



『やらないよ。やらないから』

魔「まあ、どっちでもいいけどな」

霊「それで、何するの？」

に「んじゃ、サッカーでもする？」

パ「いいわね。あの窓をゴールにしましょう」

『…室内でやらないでね』

傘「かるたは？」

『かるた…』

さ「ダメです！」

『え!?!』

さ「よ…よくないことを考えてます」

魔「やっぱりな」

『…ちよっと小傘と手が触れ合うところを想像しただけだよ』

霊「で、結局どうするの？」

パ「読書会でいいんじゃない？」

魔「それは地味過ぎるな」

傘「百人一首は？」

に「…かるたと同系列だね」

魔「宝探しにしよう」

『やめてね』

霊「やっぱりそういうアレとかがベッドの下とかにアレしてあるの？」

『アレしてません。うちは布団です』

に「鍵のついた引き出しも定番だよね」

傘「開けてみていい？」

『…別にいいけど』

ガラッ

傘「ありゃ、紙がいっぱい？」

に「片面には字が書いてあるよ」

さ「もう片面は真っ白ですね」

『いらぬ紙を入れてあるんだ。メモとかに使えるから』

魔「これは左下に猫っぽい絵が描いてあるぜ」

パ「はっ、さすがの表現力ね」

『…まあ、ね』

霊「こつちには家計簿もあるわ」

さ「意外とマメですね」

魔「三日坊主じゃないのか？」

に「ちゃんと書いてあるよ」

傘「食費とか生活費ばかりね」

パ「娯楽には遣わないの？ 禁欲？」

『本とか買ってるよ』

魔「それ以外は、遊ぶ相手がないから遣わないんだな」

『…残念だけど、その通りだよ』

パ「たいして面白い物は無いわね。魔導書とか無いの？」

『…あってもしやあないし』

傘「あ、絵本だ」

さ「本当ですね」

『あ、それ、この辺で拾ったんだよね』

に「猫のお話ね」

パ「誰かさんの猫もどきとは大違いね」

『…うん』

霊「文字はひとつも書いてないわね」

傘「うーん、よくわかんないや」

パ「……………」

魔「暇つぶしには、ならないな」

さ「どうしますか？」

霊「私はそろそろ帰ろうかしら」

魔「お、帰るのか？」

霊「あまり神社空けてると、紫に小言攻撃されるし」

魔「…そうだったな」

に「もうお開きなの?」

魔「何かしたいことあるのか?」

に「面白い機械はいっぱいあるけど…」

『…ラジカセはあげるよ』

に「本当!?」

『…もう壊れてるからね』

魔「…もしかして私が壊したか?」

『いや、前から調子悪かったんだ。いい機会だよ』

魔「…ごめん」

『いやいや、全然気にしないで!』

パ「そうそう。機械と機会をかけたダジャレ言っくらいだし」

『そういつつもりでは』

魔「今度体で払うから」

『…嘘つけ』

傘「私も帰ろうかな」

『もう一晩泊まっても……』

さ「……………」

『中国の首都マジ北京』

魔「…どんなごまかし方だよ」

……………

霊「じゃあ、帰るわね」

『うん、またね』

魔「じゃあな」

に「私も帰るよ」

『またおいで』

に「うん。らじかせありがとね」

『どづいたしまして』

に「ばいばい」

『ばいばい』

さ「それでは私も失礼します」

『うん、またね』

さ「…少しは元気出ましたか？」

『あはは、そうだね。ありがとう』

さ「そうですか。それでは」

『じゃあねー』

魔「お前、元気じゃなかったのか？」

『いや、元気だよ？』

魔「そうだよな」

『うん』

魔「……………」

『どうかした？』

魔「なあ」

『ん？』

魔「まあ、お前は女好きで、腹立つこともあるけどさ」

『…？』

魔「何かあったら、その…相談に乗るからな」

『……………ありがとう』

魔「じゃあ、私もパチュリーを送って、そのまま帰るぜ」

『うん、またね』

パ「あなたの力が必要な」

傘「うん！ わかった！」

『…？』



魔「…日に当たりたくないから、日傘として使っらしい」

『…いいのか？』

魔「というか、パチュリーも飛べるんだから、送迎いらなくないか？」

パ「それは、まり…魔力の浪費を避けるためよ」

魔「ふーん」

傘「私も乗っていい？」

魔「定員オーバーだな」

傘「えー残念」

パ「じゃ」

『ばいばい』

傘「まったね」

『また来てね』

魔「じゃあ、またな」

『うん、またねー』

ボタン

『ふう、終わった…』

『……………』

『洗濯でもするかな！』

おまけ 紅魔館の夜（前書き）

魔理沙たちがパジャマパーティーをしていた夜の、紅魔館での出来事である。

おまけ 紅魔館の夜

咲「お嬢様、麦茶をお持ちしました」

レ「あら、珍しい物を持ってきたわね」

咲「たまには変わった物も良いかと思ひまして」

レ「ふーん。これが麦茶？」

咲「私が作った麦茶ですわ」

レ「…作った？」

咲「ええ、麦から」

レ「それは嘘ね」

咲「ふふ。ええ、冗談ですわ」

レ「まあ、とりあえず飲んでみるわ」

ずずっ

咲「麦茶というのも冗談」

レ「ぶっ！」

咲「ああ、お嬢様、汚らしい」

レ「汚らしいじゃないわよ！ 何飲ますのよ！」

咲「青汁ですわ」

レ「何なのよ、それは？」

咲「健康に良いのです」

レ「ちゃんとした飲み物なんでしょうね？」

咲「乗り物に見えるなら、お取り替えしますが？」

レ「そりゃ乗り物には見えないけど……」

咲「ご安心ください。この咲夜も味見しました」

レ「…よく見ると毒々しい色してるけど？」

咲「飲んでも勿論、害はありません」

レ「…じゃあ、今度は味わって飲んでみるわ」

ずずっ

咲「クソ不味いですけど」

レ「ぶっ！」

咲「ああ、お嬢様、汚らしい」

レ「汚らしいじゃないわよ！　クソ不味いモン主人に飲ますか！」

咲「ああ、お嬢様、言葉遣いも汚らしい」

レ「…あんた、明日おねしよする運命にするわよ？」

咲「せつかくお嬢様の健康を気遣かって差し上げたのに」

レ「…人が口に含んだ瞬間にクソ不味いって普通言わないでしょう？」

咲「人ではありません」

レ「…今はそんな些細な事に突っ込む場面じゃないでしょ」

咲「お嬢様は青汁お嫌いでしたか？」

レ「まだちゃんと飲めてないわよ」

咲「早く飲めよ」

レ「!？」

咲「ぬるくなつてしまいましたわ」

レ「…暴言が聞こえた気がしたけど、気のせいね」

咲「ええ。さあ、どうぞお飲みになってください」

レ「…そうね」

咲「まだたくさんありますからね」

レ「…ったく、もう」

ずずっ

咲「あと1000袋くらい」

レ「ぶっ!」

咲「ああ、お嬢様、汚らしい」

レ「汚らしいじゃないわよ! 買いすぎでしょ!」

咲「おまけで付いてくる高反発枕が欲しかったもので…」

レ「単品で買いなさいよ!」

咲「限定なのです。凄い反発しますよ。思春期の男の子くらい」

レ「知らないわよ、思春期の男の子なんて！」

咲「とにかく、当分は青汁しかお出しできません」

レ「えー…美味しくないんでしょう？」

咲「はい。しかし健康のためです」

レ「私、健康なんだけど」

咲「健康を維持するためですわ」

レ「…むう、騙されてる気がするわ」

咲「騙してなどおりません。お嬢様を気遣う私の気持ちですわ」

レ「…ならいいんだけど」

ずずっ

レ「ぶっ…」

咲「今回は何も申しておりませんが…」

レ「まずっ！…何コレ！…草じゃん、草！」



咲「クソ不味いと申しましたよ？」

レ「こんなに不味いとは……」

咲「健康のためです。ちゃんと飲んでくださいね」

レ「無理よ、これは……」

咲「じゃあ、あと約1000袋はどうするんですか？」

レ「……お雇い外国人にでもあげれば？」

咲「……美鈴は残飯処理班ではありませんよ」

レ「じゃあどうするのよ」

咲「やっぱり美鈴にあげます」

レ「……あなた切り替え早いわね」

………

咲「いい天気ですわね」

レ「そうね。月が綺麗だわ」

咲「ええ、本当に」

レ「……………」

咲「……………」

レ「……………」

咲「……………」

レ「…ねえ、咲夜」

咲「はい、なんでしょう？」

レ「今、パーティーが開かれているそうね」

咲「パーティー？」

レ「パジャマパーティーよ」

咲「ああ、人間の」

レ「…あなたも人間だったはずだけど」

咲「パーティーがどうかしましたか？」

レ「あなたにも誘いがあったみたいね」

咲「丁重にお断りしましたけど」

レ「ねえ、咲夜」

咲「はい」

レ「…どうして私は呼ばれないのかしら」

咲「うむ…」

レ「…どうしてかしらね」

咲「欠点が少なくイジりづらいのでは？」

レ「なるほど。特徴が無い、と」

咲「そもそも、お嬢様が参加するようなパーティーではありません」

レ「と、言つと？」

咲「パジャマフェチの性欲の捌け口ですから」

レ「魔理沙が、あの人間はパジャマフェチだって言ったのね」

咲「ええ」

レ「…きつと知らないうちに、幻想郷での彼の評価はガタ落ちね」

咲「まあ、友人は選べということですね」

レ「彼も大変ね」

咲「でも、事実、変態ですから」

レ「何かされたの？」

咲「私には、させませんわ」

レ「他の人には手を出しそう、と？」

咲「ええ。お嬢様も気をつけてくださいね」

レ「そんなに命知らずには見えないけど」

咲「後先考えるほど賢くも見えませんが」

レ「そうかしら」

咲「今頃は、

俺のグングニルが…火を噴くぜ！

とかやってるはずですよ」

レ「…あなた下ネタもいけるクチなのね」

咲「まあ、ぼちぼちですよわ」

レ「……………」

咲「……………」

レ「……………」

咲「……………」

レ「どうして誘われないのかしら」

咲「…ずいぶん気にしてらっしゃるんですね」

レ「…いいことを思い付いたわ」

咲「何でしょうか？」

レ「私たちも開くのよ」

咲「パーティーをですか？」

レ「ええ。パジャマパーティーを」

咲「お客様をお招きするのですか？」

レ「うーん…とりあえず、うちだけで」

咲「私は構いませんよ」

レ「じゃ、早速今日開くわよ」

咲「承知しました」

レ「フランと小悪魔とパチエにも伝えておいて」

咲「お嬢様」

レ「ん？」

咲「パチユリー様はお留守です」

レ「は？」

咲「ご不在です」

レ「パチエが外出？」

咲「ええ」

レ「あの世に旅立ったとか？」

咲「…違つと思います」

レ「どこに行ったたつて言うの？」

咲「パジャマパーティーに」

レ「……………」

咲「……………」

レ「……………」

咲「……………」

レ「…パードウン？」

咲「パーティーにご出席されています」

レ「……………」

咲「……………」

レ「……………」

咲「……………」

レ「…嘘おっしやい」

咲「事実でございます」

レ「……………」

咲「……………」

レ「……………」

咲「……………」

レ「何も言えねえ」

おまけ 魔理沙と蒲団と寝巻會、の巻。(前書き)

このお話は、

「1 魔理沙と蒲団とパジャマパーティー、の巻。」  
のアレです。

苦情は受け付けます。

こぞってどござ。



おまけ 魔理沙と蒲団と寝巻會、の巻。

魔「なあ」

『何だい』

魔「まう一遍、寝巻會をしやうと思ふ」

『はは、冗談だらう』

魔「わかつた。では取り止めにしやう」

『何、止めると言つたか』

魔「中止と伝えて来る」

『本当に止めるのかい』

魔「気分では無いのだらう。仕方有るまい」

『さう云ふ訳でも無いのだ』

魔「判然とせぬ奴め」

『予定日は何時だい』

魔「明日の夕方、此の家で開く」

『誰が来るのだらうか』

魔「大勢呼ぼう」

『大勢では都合の悪い事も有ると思ふよ』

魔「然らば私と二人きりで開かう」

『其れは生肉の装甲を纏ひて、獅子の檻に入るが如く危険である』

魔「お前に私を襲ふ度胸が有るか」

『うゝむ』

魔「前度より人数は減す積りだ。ではな」

『待ち給へ』

魔「何だ」

『物を頼むに当りて相應しい態度を示すべし』

魔「ふむ」

『だつする』

魔「脱げと云ふ事か」

『ちつでは無い』

魔「うゝむ」

『判らぬか』

魔「おねがい」

『吾に任すべし』

魔「宜しく頼む。では、また明日」

…

…

…

『吾は少々女子に甘過ぎるやうだ』

魔「私の魅力の所爲だ。お前は氣にせずとも良い」

『所で、今日は一体誰が来るのか』

魔「咲夜などが来る」

『其れは嘘だらう』

魔「さうだ。嘘だ」

『動揺したぞ』

魔「パツリーを呼ぶ事が出来た」

『本当か』

魔「あゝ」

『歩く百科事典と評判の彼女が来るのか』

魔「はゝ、近所の賢い子供か」

『覚え違ひだつたか』

魔「覚え違ひだな。因みに、後で迎へに行く予定だ」

『さうか。ところで』

魔「小悪魔は呼んでゐない」

『尋ねる前に答へないでくれ』

魔「他に呼びたい奴はゐるか」

『1』

魔「咲夜を誘はう」

『吾を無視するか。抑、彼女が来る筈が無い』

魔「お前が洋服を捲るから嫌れたのだ」

『全く身に覚えが無いな』

魔「そろそろ誰か来さうだな」

『蒲団を持参せよと伝へたか』

魔「あ」

『何と』

魔「仕方無い。皆にてお前の蒲団に集結しやう」

『狭からう何と夢の如き状況』

魔「文句と本音とが同時に出てゐるぜ」

『本当はだうする積りだい』

魔「紫から余つてゐる蒲団を借りる。早速行つて来るぜ」

ばたん

『素晴しき決斷力だ』

ぴんぽん

『はい』

がちや

霊「ちあ  
「

『おん、おん、おん』

霊「確かに蒲団を持って来たわ」

『蒲団持参と知つてゐたのかい』

霊「今し方魔理沙が知らせに來たの」

『成る程』

霊「未だ誰も來てゐないやうだわ」

『さうだよ』

霊「魔理沙は何処へ行つたの」

『紫と云ふ女人に蒲団を借りやうとしてゐる』

霊「へえ。確かに蒲団の一つ位余つてさうだわ」

『兔に角、皆が來る迄寛ぎなよ』

霊「あ、さうさう。神社からお酒を持って來て頂戴な」

『使役と云ふ訳かい』

霊「えへ」

『つゝむ』

霊「駄目かしら」

『しんすけに話』

「おねがい」

『しんすけ』



おまけ 魔法少女マジカルさなえ（前書き）

【注意】

いつものことですが、キャラ崩壊が凄まじいので、ご注意ください  
よ。

おまけ 魔法少女マジカルさなえ

ザッザッ

早「…ふう、やっと境内の掃除が終わった。さあ、神社に戻ってお茶でも…」

キラリン

早「…ん？　これは？」

タッタッ

ひよいつ

早「…コンパクト？」

パカッ

キュイーン

早「きゃっ、一体何!？」

「あなたがこのコンパクトを拾ったのですね」

早「み…ミラーに人が…」

神「拾ってくださいると信じていました」

早「あ、神奈…じゃなくて…あなたは？」

神「私は魔法の国の女王です」

早「…夜の国の女王？」

神「…サディストじゃねえか」

早「じゃあ何なんですか」

神「ま・ほ・う・の・く・に」

早「ま…魔法? そんなものあるわけないじゃないですか」

神「そうですね。唐突には信じ難いものと思います」

早「なにか証拠でも見ないと信じられません」

神「わかりました。お見せしましょう」

早「え、本当ですか？」

神「このコンパクトには魔法の力があります」

早「出でよ、リンゴっ！」

神「最後まで聞けや」

早「出ませんね。はい嘘乙」

神「最後まで聞けや」

早「手短に話すなら聞いてあげます」

神「…おまえ…」

早「で、どうやって使っんですか。わくわく」

神「わくわく言っな。まず、使いたい魔法を心に浮かべます」

早「ふむふむ」

神「そして魔法の合言葉を唱えるのです」

早「はんにゃーはーらー…」

神「待てコラ」

早「はい？」

神「貴様、異教徒だな」

早「これじゃないんですか？」

神「…違います」

早「おねがい」

神「それは男相手に使え」

早「それでは魔法の合言葉とは？」

神「お教えしましょう。よくお聞きください」

早「わくわく」

神「『リーヤ・モナ・エーサ』です」

早「リーヤ…モナ・エーサ…？」

神「はい」

早「…あの、非常に申し上げにくいのですが…」

神「なんでしょうか？」

早「ダサいので変えてください」

神「ぶっ飛ばすぞお前」

早「『エム・オー・ピー・エス』にしてください」

神「エムオーピーエス？」

早「ミラクルおっぱいプリティ早苗の略です」

神「…お前のネーミングセンスどうなってんの」

早「嫉妬とは見苦しいですね」

神「ちげえよ」

早「私が、幻想郷の横乳ファンタジスタと呼ばれているからって」

神「呼ばれてねえよ」

早「変えてくれないんですか？」

神「変えません」

早「ちえっ」

神「そして、この合言葉は、みだりに唱えてはなりません」

早「出でよ、リンゴ！ リーヤ・モナ・エーサー！」

ぽんっ

早「出た！」

神「聞け」

早「本当に出ました！」

きゅっきゅっ

神「魔法は存在するのです」

早「はい、信じます！」

ガブリっ

神「まるかじりすんな」

早「んんんーんん、んんんんん？」

神「食いながらしゃべるな」

早「みだり、ってどういう意味ですか？」

神「…ゆとりめ…」

早「あつふうん、ってことですか？」

神「それは、みだら、だろ」

シャクシャク

神「だから食うなって」

早「はぐはぐ」

神「…もうやだこの人…」

早「で、みだり、の意味は？」

神「むやみやたらに、ってこと」

早「うーんリンゴおいしっ  
」

神「興味ねえのかオイ」

早「よし、早速自慢しに行って来よう」

神「お待ちなさい」

早「…まだ何かあるんですかー？」

神「おい、メンドそうな顔すんな」

早「で、何ですか？」



神「絶対に魔法を人前で使ってはなりません」

そっ…

パタ…

神「オイ、閉じようとすんな」

早「…使っちゃ駄目なんですか？」

神「なりません」

早「そんな…男の子のエロ本タイムじゃないんだから」

神「…例え悪いぞ」

早「…もし使ったらどうなるんですか？」

神「二度と魔法を使うことができなくなります」

早「うーわ何そのシステム最悪」

神「…口悪いな」

早「しかたない。こっそり私利私欲のために使おう」

神「……………」

早「もう閉じていいですか？」

神「私が言ったこと、守ってくださいね」

早「はい」

神「それでは、またお会いしましょう」

早「はい。さようなら、悪い魔女さん！」

神「おいコンパクト返さ……」

パタン

早「ふう。いいモノ手に入れちゃった」

タッタッ

早「さっ、まず何をしてみようかな」

タッタッ

早「そっだ！ あれを……ふふ……」

## おまけ 「第8回」おりんりんチャンネル

燐「じゃじゃ〜ん！ みんなー！ おりんりんチャンネル、はーじまーるよー！

というわけで、パーソナリティの、お燐だよー。  
ではでは、タイトルコール、いっくよー。  
よろしく、あたい。

承ったよ、あたい。

…じほん…

『おりんりんっつ…』

チャンネルエール！』

いやあ、溜めたね、今のはね。  
爆発するんじゃないかってくらい。

いや、爆発はしないけどね。

そうそう、爆発といえば、レンジで卵温めたら爆発するんだよ。

ぼむ！ ってね。

常識か。

とにかく、危ないから、やったらダメだよ。

お隣との約束だよ？

さあ、始めました、おりりんチャンネル。

このラジオは、あたのお隣が、やさぐれてるみんなを元気づける番組だよ。

んまあ、毎回言ってるけどねー。

もう8回かあ。

あ、確か、前回間違えたよね。

7回目なのに、8回目って。

今度こそ真正銘8回目だよ！ ……ね？

うん、あってます。はい。

そうそう。

今回は嬉しいニュースがあってね！

なんと…おりりんチャンネルの続編希望の声があったそうです！

はい拍手ー！

ぱちぱちぱちー、いえーい！

いやー、ありがたいねえ。

テンション上がるねえ。

ふー！ うほーい！  
テンション上がるーっ！！」

空「お燐うるさーい！」

燐「うわ、文句言われた。

音入「っちゃうじゃんよー。

まったく、おくうは…。

すみませんね、皆さん。

おくうのバカみたいな声が入っちゃって。

いやー、でもね、これからあたいの人気も出てくるのかもね。

さとり様なんか本編出ちゃってね。

あたいの出番あるの？ ないの？

みたいなね。

いや、多分ないけどさ。

噂だけどね、なんか、3部にも地霊組から一人出るとか出ないとか。

誰だろね？

ま、とりあえず？

コーナー行っちゃいます？

行っちゃおー。

『教えて、おりんりーん！』

みんなの疑問に、あたい、お燐が一つずつ答えていくコーナーだよん。

では、最初のお便り。

ラジオネーム、シユガー太郎さんからのお便りだよ。

『お燐ちゃん、こんばんは』

はい、こんばんは。

『僕は旅行が大好きです』

ほお、あたいもちろん旅行好きだよ！。

もう幻想郷で行ってないところは無いね。

下は旧地獄から上は地上まで！

え？ 狭いって？

気にしない気にしない。

『外国には、まだ行ったことはありませんが、国内では本当にたくさん旅行をしています。』

車、電車、飛行機などなど、どれも乗り慣れていきます。

顔パスで乗れるくらい』

…いや、交通機関を顔パスは無理っしょ。

『ですが、一つ苦手なものがあります。』

それは…船です！

あの絶妙な揺れ具合は驚異的です。

酔わない方法はありませんかね？

どうか知恵を貸してください』

なるほどねー。

船かぁ。

あたいは乗ったことないからなぁ。

いやー…どうしたらいいんだろうね。

確かね、乗り物酔いしたときは、親指あるでしょ？

その第一関節のところを噛むといいらしいよ？

うん。って聞いたことがある。

でもさ、どう見ても、指しゃぶってるように見えるよね（笑）

周りの人から見たら、

『あら、あの子、船が怖くて幼児化しているわ』

って感じだよな。

まあ、やる勇気があったら試してみてもいいんじゃない？

私は無理だなあ（笑）

あと考えられる方法としては、酔い止めだね。

うん、現代の科学技術最高。

あたいが思いつくのは、こんなもんかなー。

あ、いよいよとなれば、ムラサ船長さんに聞いてごらんよ！

はい、参考に、なったかな？

ほいじゃ、次のお便り。

ラジオネーム、どろどろどろりんさんのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

はい、こんばんは。

『うちな、大阪がめっちゃ好っきゃねん。

どうしたらいいですか。

教えてください』

ちよw

意味わからんw

こつちが、どうしたらいいですか、だよ。

えー…この質問めつちや難しいな。

タコ焼きを食べる…とか普通か。

うーん…あ、都知事になるとかは？

あ、府知事か。

うん、あなたは街を愛してる。

そんなあなたは知事になる。

はい、オツケー。

あたいさいきよー。

んじゃ、次のお便り。

ラジオネーム、一輪ちゃん大好きさんからのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

はい、こんばんは。

『僕は一輪ちゃんが大好きです』

すーごいストレートだね。

いや、いいけどさ。

『ですが、あまり共感してくれる友達がいません。

みんな早苗さんが好きです。

早苗さんの可愛さは認めます。

しかし、一輪ちゃんの魅力をもっとわかってもらいたいです。



どうして伝わらないのでしょうか？

一輪ちゃんの人気を集める方法はありませんか？  
教えてください』

なるほどね。

これ、あたいにはどうしようもないよね？

自分で、漫画とか小説とか書いてみたら？

そして友達に見せつける。

どうだー、みたいだね。

でもさ、そもそも、他人にわかってもらう必要ないんじゃないかい？

だって、好きなんですよ？

その一輪って子のことが。

誰か知らないけど。

自分が愛せたらいいじゃん。

たくさんの人が、その子のこと好きだったら取り合いたよ？

少ない方が、君が選ばれる確率が上がるんだよ？

そう考えるとき、いい人を選ぶって難しいよね。

いい人でも、めっちゃ人気のある人だったら、自分は恋人になれな

いことも多いよねー。

逆に、人気のない人なら、可能性高いつてわけ。

あー、でも、好きになっちゃったら仕方ないか。

たとえば自分と釣り合わなくても、好きなものは好きだもんね。

そしたらそこでどう落とすかが肝心だよね。

やっぱし色仕掛けかな。

ただセクシーなんじゃなくてね、こう、姿勢っていうの？ それを

可愛く。

ほら、可愛い仕草とかって、可愛い女の子しかできないじゃない？

あたいたいのがドジしても、ふーんってカンジですよ。

だから、ひたむきにね、あなたが大好きです、って姿勢を示すわけ

よ。

するとほら、ちよつとずつ愛着が湧いてくると思うのよ？

気付いたら、あ、この子かわいいかも、みたいに思われちゃったりね。

大事なのは、そこだと思うなあ。

顔とか体とかよりもね。

そもそも男なんてバカだよお？

本当、おっぱいのことしか考えてないからね。

んで偉そうに、巨乳がどうか抜かし始めるでしょ？

あれ、どうしようもないよね。

あの人は巨乳が好きらしいから私は無理なのね…とか思う必要は全く無いからね。

ほとんどの男は、実際おっぱいを前にすれば関係ないからね、大きさは。

とにかく触らせてください状態だから。

偉そうに、こういうのはダメとか言っても、すぐひるがえすからね。

だってさ、たいして長く生きてるわけでもないくせに、そんな議論

できるわけないじゃんね（笑）

それなのに、『最低Fカップは欲しいよね』だと？

ふざけんなー！

って話だよ。

本っ当に。

うん、だから体をキレイは後回し。

心をキレイが優先だね。

…あれ…待てよ…何の話だっけ？

えーと…人気アップの話か！

そうだったねー…いつの間にか脱線しちゃったね。

まいったまいった。

えー、結論は、人気は上げなくていいっ。

好きならそれでよしっ。  
ということだね、はい。

え？ 時間が押してー…るね。はい。  
ちょっと話し過ぎちゃったなあ…にやはは。

えー、では、今日の『教えて、おりんりん！』のコーナーはここのま  
で。  
みんなの疑問、待ってるよ〜

んじゃ、次のコーナーは…これだっ！

『これって僕だけ？ 私だけ？』

このコーナーは、自分では普通だと思ってたのに、世間では変だっ  
たー、そーなのかい、って体験を送ってもらってるよ。

では、1通目。

ラジオネーム、ホワイトボードデカさんからのお便り。

『おりんちゃん、高橋さん、八嶋さん、こんばんは』

…他の2人は誰なの？

『おりんちゃんは焼きそばは好きですか？』

僕は大好きです』

私もたまに食べるよ。  
美味しいよね、焼きそば。

『青のりや紅シヨウガをのせるのは普通ですよね。  
でも僕は、かつおぶしをたっぷりかけるんです。  
香ばしくて好きなんです、他の人はあまりやらないみたいです。  
でも本当に美味しいので、おりんちゃんも一度試してみてください。』

なるほど。

ごめん。

私もすでにやってる（笑）

やっぱ、かつおぶし美味しいもん。

好きなんだー、私も。

何にでもかけるね。

前、プリンにかけたよ。

うん、さとり様にあきれられた。

プリンとかつおぶしは、方向性の違いを感じたわー。

焼きそばはねえ、あー、タバスコとかかけてみたことある。

まんまだわ、あれはね。

んー、それくらいかな。

ま、何か他にもいいのを見つけたら、教えてね。

んでは、次ー。

ラジオネーム、とびうおパンダさんからのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

はい、こんばんはー。

『私はお風呂が大好きで、一日に何回も入ったりします。私にとって、お風呂が1番リラックスできる場所です。ところで、体を洗うときに、右足からとか決めている人ってたくさんいますよね。』

大体は腕か脚から洗うみたいです。

でも、私は、必ず背中から洗うんです。

これって変なのかなあ？

おりんちゃんはどこから洗いますか？』

ほおほお。

背中が珍しいかもね。

そうだねえ、あたいも決めてるわけじゃないけど。

そうだなあ…まず泡立てて…こっやって…こっ…じゃ首か。

うん、あたいは首から洗ってるっぽい。

っぽい、ってね（笑）

大体は、上から下に洗っていく感じかな。

はいはい、うん、そんなもんで、ええ。

あまり色っぽい回答じゃないかもだけど。

そんな感じだよー。

というわけで、今日の『これ僕』はここまでっ。

勝手に略すなよって？

ま、あたいのラジオだしー。

なんてね。

ではでは、次のコーナーへ。

『新コーナーを募集するコーナー!』

というわけだね。

募集はするけど、基本、採用はされない、ってコーナーですけど)  
笑)

じゃあ早速。

ラジオネーム、ナマステさんからのお便り。

『おりん! 俺だ! 結婚してくれ!』

えー、お断りします。

ねえ(笑)

『やっぱり、おりんちゃんのかわいさを全面的に押し出すべきだと思います。ゆえに、水着でトークというのはどうでしょう』

あ、この人、前回もハガキくれた人か。

しかも、おんなじ内容?

だからあたいは水着持っていないんだってばー。

…おっと、まだ続きがあった。

『水着を持っていないということなので、送ります。  
どうぞ着てください』

ええーっ!?

ってホントに送ってるし！

これか！

ちよ、ホンマかい！

え、ちよっと開けてみるね。

…よつと。

あ…こつか。

テープが…お、開いた開いた。

…おおー…。

すごい…これ…。

ちよつ…みんなわかんないよね。

これね…、いや普通さ、なんか…。

何て言うのかな…あたいさ、ハイレグか、スク水が来ると思ったわけよ。

ネタでね、来るんじゃないかと。

そしたらさ…これ多分ガチだね。

本気で見繕ってきたね、これ。

すごい。

めっちゃかわいいもん。

よく見つけたなあ。

こいつ…本当に男か？

うわー、すごいかわいい。

…ちよっとうれしいもん（笑）

赤のね、セパレートっての？

いやいや…これね、着るわ（笑）

したら、今回は無理だけど。

今ここで着替えるわけにいかないからね。

今度、着るわ。

着てラジオやるよ。

水着ラジオね（笑）

ま、どうせ伝わんないけどさ。

一応ね、感謝の気持ちを、物もらったわけだから、  
というわけで、ナマステさん、ありがとー！

次回ね、着てラジオやるから。

… あればね、次回が。

ほい、それでは、次のお便り。

え？ おお、もうこんな時間か。んじゃあ、これがラスト。  
ラジオネーム、本能寺の変態さんからのお便り。

『おりんちゃん、こんばんは』

はい、こんばんはー。

『僕はよく友達から、滑舌が悪いと言われます。  
そこで、最近早口言葉の練習を始めてみました。  
これがなかなか、思ったより難しいです。  
おりんちゃんも、是非やってみてください』

早口言葉。

なるほどねえ。

どれ、やってみますか。

なまむぎなまごめなまたまご！  
なまむぎなまごめなまたまご！  
なまむぎなまごめなまたまご！

うん、完璧。

あたい出来る子だわ。

次いってみよー。



バスガス爆発！  
バスガス爆発！  
バスガス爆発！

おお、完璧。

次いってみよー。

東京特許許可局！

東京特許きよきや局！

東京都つ許可局！

うん、完璧完璧。

次いってみよー。

諏訪子ぴよこぴよきよ三きよほきよほ、合わせてぴよこぴよこ六こ  
ぴよこほー！

諏訪きよほきよ…きよ…三ぴよこぴよこ、合わせてほこぴよこ六こ  
よこぴよこー！

諏訪子ぴよこぴよこ三、ぴよこ、ぴよこ。合わせて、ぴよこぴよき  
よ六ぴよこぴよこー！

…ふう。

結構出来てたんじゃない？

まあ、9割くりやい。

…くらい。

…噛んでないよ？

ほら、あたい猫舌だから、アレがアレでや。

ね、とにかく、みんなも早口言葉、やっつけてらん！

いっぱい練習して、皆に自癒してもらい！

はい、というわけですね。

そろそろ、お別れの時間が近づいてきましたけども。

ねー、早い早い、時間が経つのは。

というわけで、最近暑いけど。

まあ、熱中症とか気をつけて、ね。

水をこまめに飲むとか。

あ、だからってね、体冷やし過ぎたらダメだよ？

健康第一で。うん。

はい、じゃあ時間となったので、今日のおりりんチャンネルはここまで。

以上、火焰猫燐がお送りしました！。

んじゃあ、まったねー！

ばいばい！

1 時には辛いこともある、の巻。(前書き)

お待たせいたしました。  
第3部です。

下ネタとキャラ崩壊的なものに気をつけながら、どうぞお楽しみください。

また、数名の方からリクエストを頂きましたが、第3部に登場するとは限りません。

ホントごめんなさい。

申し訳ありませんが、しばしお待ちを。

1 時には辛いこともある、の巻。

魔「なあなあ」

「ん？」

魔「またパジャマパーティーしていいか？」

「…もう諦めたよ。いいよ、楽しければ何でも」

魔「悪いな。何か食材は持って来るから」

「それは助かる」

魔「他の人からも参加料として徴収しよう」

「こつちが招待してるんじゃないの？」

魔「いや、結構参加の申し込みが来てる」

「え、どうして？」

魔「文が記事に取り上げたんだ」

「…嫌な予感しかしないけど、どんな内容？」

魔「男女入り乱れてアレする、なんとかパーティー、って」

『最悪だ!』

魔「そしたら…」

『そしたら?』

魔「参加希望者が激増した」

『そんな欲求不満な幻想郷やだ!』

魔「ところで、なんとかパーティーってどういう意味だ?」

『…ししし知らない』

魔「そうか、知らないか」

『うん、知らない』

魔「とにかく、明後日にパーティーをする予定だ」

『新聞を見て参加を決めた人は、連れて来ないでね』

魔「…?」

『連れて来ないでね』

魔「まあ、よくわからんが、準備は頼んだぜ」

『わかった』

…

…

…

『…今日は誰が来るんだろう…不安でいっぱいだ…』

ピーン ポーン

『お、誰か来た』

ピーンポーン

『はーい』



『…俺は早くも心が折れたよ、パルスィ…』

橋「食材」

『え…あ、おお、ありがとう』

橋「それと美味しいケチャップ」

『え…いいの？』

橋「高い物じゃないけど」

『や、でも、うん、ありがとう』

橋「あと、クッキー焼いてきた」

ガサガサ

橋「はい」

『え、いや、ひとかけ取り出されても…』

橋「口開けて」

『…え…』

橋「何よ」



『え……いや……そんな……初っ端からサービスシーンですか……』

橋「何ニヤニヤしてんの。食べるの？ 食べないの？」

『……じゃあ……いただきます』

ぱくっ

『……えへへ……ひあわへ……』

しゃくしゃく

橋「世の中そんなに甘くないわよ？」

しゃくしゃく

『.？』

しゃくしゃく

橋「クッキーもね」

しゃく……

『……………』

橋「……………」

『!?!』

橋「お味はどう?」

『かあい!』

橋「ふふ…唐辛子たっぷりよ」

『かあい! □がひいひいすゆ!』

橋「はい、飲み物」

『はんきゅー!』

プシッ

『じゅー!』…

橋「サイダーだけど」

『っ!?!』

……

『……………』

橋「何、アホ面こいてるのよ」

『……………』

橋「口閉じたら？」

『……………口の反乱をしじゅめてゆよ』

橋「あなたと赤ちゃんプレイするつもりはないんだけど」

『……………こいちゅ』

橋「他の人は？」

『まだ来てにゃいよ』

橋「いつ来るの？」

『うーん…わかやにゃいなあ』

橋「じゃあ暇を潰すもの貸して」

『うん』

とたとた  
とたとた

がさごそ

『はい』

橋「ゲームね。ありがとう」

てーんてん

『…はあ…口痛い…』

橋「……………」

『…ご飯支度でもするかな』

ピンポーン

『あ、はい、誰ですかー？』

「私だぜー。開けてくれー」

『はいはー…いや、ちょっと待てよ』

「何だよ、早く開けてくれ」

『名を名乗りなさい』

「…わかるだろ。霧雨魔理沙だぜ」

『いや、偽物かもしれない』

「…は？」

『貴様、本当に魔理沙なのか？』

「当たり前だろ…」

『証拠は？』

「見ればわかるな」

『そう言っただアを開けさせようとしているな？』

「本物だからな」

『本物なら、合言葉を知っているはずだ』

「…決めてないな」

『合言葉は？』

「うーん…パジャマパーティー？」

『ブブー、違いまーす』

「いいから早く開けてくれ」

『本物なら、俺の長所が言えるはず』

「Mド」

『…長所じゃない』

「もう満足だろ。開けてくれ」

『本物なら、俺の好きなものかわかるはず』

「…まだやるのか」

『これ最後だから』

「うーん…」

『……………』

「イヌミミミ、だな」

魔「…お前、プライドとか無いのか？」

『…正解です』

ガチャ

「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」  
「……………」

## 2 だって携帯ゲーム機なんだもん、の巻。

『じょ…じょじょじょ冗談だけどね』

魔「…いや、そうでもない…ってか、むしろ大好きだろ」

『そ…それより、布団持って来たんだね』

魔「ん、ああ。結構大変だったぜ」

『それって、紫さんから借りたやつでしょ？』

魔「まあ、実質もらった物だけどな」

『確か、神社で保管することにしたんだよね？』

魔「それがどうかしたか？」

『言ってくれたら俺が運んであげたのに』

魔「だってお前、布団嗅ぐだろ？」

『でも今日ホントいい天気だよね』

魔「…ごまかしたな」

橋「あなたたち仲いいわね」



魔「そうか？」

橋「ええ」

『ところで、今日は何人呼んだの？』

魔「4人だぜ」

『ということは、あと3人来るのか』

魔「そうだな」

『もうご飯作り始めた方がいい？』

魔「まだいいんじゃないか？」

橋「まだ食材集まってないじゃない」

『あ、そうだった』

魔「じゃ、みんな来るまで何かして待とうぜ」

『そうだね。オセロでもするか』

魔「いいぜ。私は黒な」

.....

ぴりぴり」

橋「……………」

魔「うーん、どこに置くかな」

『そことかどうかな？』

魔「じゃあこり」

『うわ……白がなくなりそう』

ぴりぴり」

橋「……………」

『パルスイ大人しいな』

ぶーぶーぶーぶーぶーぶー…

『…ゲームの音か』

魔「ほら、お前の番だぜ」

『ああ、はいはい。じゃあ…。』』

魔「お…やばい」

橋「……………」

とじとじ

橋「ねえ」

『ん?』

橋「税率50%にしたら人が来なくなった」

『…税率50%にしたからだね』

橋「下げればいいの?」

『最初は低くてもいいよ』

橋「わかった」

とじとじ

『…夢中になってるなあ』

魔「はい、お前の番だぜ」

『どれどれ…ん？』

魔「どうした？」

『今どこに置いた？』

魔「うーんと、この辺」

『いや、この辺で…。ここ白じゃなかった？』

魔「えー知らないなー多分黒だったぜー」

『あつね、そうだった？…？』

魔「だぜだぜ」

わーわーわーわーわーわー…

『…ゲームの音か』

橋「……………」

魔「ほら早く」

『あ、うん。むむむむ……ど……ど……ど……ど……』

魔「そことかどうだ？」

『角取られるじゃん』

橋「……………」

と……と……

橋「ねえ」

『ん？』

橋「税率0%にしたらお金足りなくなった」

『……税率0%にしたからだね』

橋「上げればいいの？」

『とりあえず、3%くらいでやってみたら？』

橋「わかった」

と……と……

『ゲームにハマっちゃったか？』

魔「ほら早く早く」

『あ、じゃあ…』

魔「私はここに置く」

『うわ…もう俺の負けじゃない？』

魔「ふつ、余裕だったぜ」

『…何か腑に落ちないなあ』

ピンポーン

『お、誰か来た。はいはい』

ガチャリ

ナ「やあ」

『おお、ナズ。いらっしやい』

ナ「布団も持って来た」

『あ、お疲れさま』

ナ「お邪魔するよ」

『びびびび〜』

とととと

『……………』

ナ「……………」

とととと

『ねえ、ナズ』

ナ「ん、何だい？」

『…尻尾触っていい？』

ナ「…なっ！ ……ひ…人前だぞ！」

『…え？』

ナ「…私は…その…人前でそういうのは…好きじゃない…」

『…あ…尻尾ってかなり大事な部位なのか…』

ナ「今回は…その…なんとか抑えてくれ…ごめん」

『…俺がエロいこと吹っかけたみたいになっちゃったよ…』

とてとて

どきっ

ナ「ふう…布団持参はつらいな」

『はは…ごめんね』

魔「お、来たか」

ナ「来たよ」

橋「あら、はじめまして」

ナ「ふむ、君もパーティーの参加者かい？」

橋「ええ。パルスィよ。よろしく」

ナ「ナスリーリンだよ。よろしく」

魔「魔理沙だけ。よろしく」



ナ「…君とは面識があるけどね」

ぴりぴり」

橋「……………」

魔「パルスィは、さっきから何やってるんだ？」

橋「……………」

ナ「おっと、食料を渡してなかったな。はい」

『おっ、サンキュー』

ナ「さてと、少し休ませてもらうかな」

……………

橋「……………」

ぴりぴり」

魔「飛行場建てようぜ」

橋「さっき建てたじゃない」

魔「もっといるって」

橋「いやよ。ここは森にするの」

魔「えー飛行機飛ばそうぜー」

橋「いいの。ここは森林公園」

魔「飛行機の方がカッコイイぜ」

橋「いいの。こっちが厚別」

魔「あつべつ？」

橋「それよりあなた、顔が近いのよ」

魔「こうしないと画面が見えないからな」

橋「そして香水つけすぎなのよ」

魔「え…そうか？」

橋「妬ましいくらい甘い香りがするわ」

魔「つけすぎかな……くんくん……」

『うん、仲良くゲームしてるみたいだ』

ナ「そのようだね」

『どれ、俺も仲間に入ろうかな』

ナ「下心が見え見えだよ」

『ちょっと女の子と仲良くゲームしたいだけだよ？』

ナ「君は変態だな？」

『……………』

ナ「……………」

『……………』

ナ「……………」

『ナズのジト目かわいい』

「ゆるぎない！」

3 夏の季語だとかそつでもないとか、の巻。

『冗談だけどね』

ナ「…そつか」

『うん』

ナ「まだ他にも参加者はいるのかい？」

『あと2人だつてさ』

ナ「そつか」

『うん』

ナ「……………」

『……………』

ナ「…暇だな」

『オセロでもするっ?』

ナ「してあげてもいいけど、私に勝てるのかい？」

『え、そんなに強いのか?』

ナ「負けたら、君の命令を一つ聞いごう」

『…凄い自信だね』

ナ「まあね」

『ひざ枕もいいの？』

ナ「いいだろう」

『お風呂は？』

ナ「いいだろう」

『…いや、冗談だよ。ツッコミ入れてよ』

ナ「で、君が負けたら、何をしてくれるんだ？」

『うーん…』

ナ「」

『ひざ枕とかは？』

ナ「」…別にしてほしくない」

『ですよね』

ナ「」

『……………』

ナ「……………」

『…悪かったよ。反省してるからそんな目で見ないで…』

ナ「…まあいい。君も、負けたら命令を聞いてもらおう」

『オーケー』

ナ「君は黒でいいな？」

『うん、いいよ』

ナ「それじゃ、いざ尋常」

『勝負っ！』

……………

『…驚きの白ね』

ナ「…君には脳ミソが入っていないのか？」

『スポーツマンシップにのっとなってちゃんとやったよ』

ナ「…オセロはスポーツじゃないよ」

『しかし、黒が全滅するとは…』

ナ「弱いにもほどがある」

『という訳で、お仕置きは何ですか？』

ナ「…誰もお仕置きするとは言っていないよ」

『……………』

ナ「…マゾヒストめ」

『言い間違えただけだもん』

ナ「どうだろうね」

『ってか、あと2人遅いね』

ナ「そうだね。そろそろ夕飯時だっていうのに」

『魔理沙く、あと2人はいつ来るの？』

魔「消防署は建てたか？」

橋「ああ、そうだったわね」



ナ「何にそんなに夢中になっているんだ？」

橋「ちょっと、影になってるわよ」

ナ「私か？ それはすまない」

『魔理沙ってば』

魔「ん、何だ？」

『あと2人はいつ来るの？』

魔「まあ、ちょっと遅い時間かも知れない」

『そっか』

魔「ああ」

ナ「これは何だ？」

橋「こつちが需要で、こつちが供給」

ナ「ふーん。なるほど」

『仲良く遊んで、ほほえましいな』

魔「お、駅建てたのか」

橋「ええ」

ナ「これのことかい？」

橋「そうね」

『…俺だけ一人ぼっちで、ちょっと寂しい』

ナ「こっちは学校？」

魔「それは図書館だな」

橋「ちよつ、狭いわよ」

魔「パルスィが画面に顔を近付け過ぎなんだ」

『…ああ、退屈だなあ』

橋「あんた、耳ぴこびこして気になるのよ」

ナ「私か？ 動くものは仕方ないじゃないか」

橋「もうちよつと離れなさいよ」

ナ「そんなこと言うなら、香水がきつい人だっているじゃないか」

魔「え？ 私か？ そんなにきついか…？」

ナ「あの人間に確認してもらおうといいさ」

魔「…そんなハレンチなことはさせないけどな」

橋「……………」

『…誰か構ってくれないかなあ』

ナ「お、何か飛んでいる」

魔「飛行機だぜ」

ナ「ほお、飛行機か」

魔「かつこいいだろ？」

ナ「まあまあだな」

橋「ちよ、近いつてば」

『…くそ、寂しい』

.....

『水道管繋げた？』

橋「あ、まだだった」

魔「お前、いつの間に来たんだよ」

『別に寂しかったわけじゃないよ？』

ナ「じゃあ離れてくれ。ただでさえ狭いんだ」

『頼むから構って』

魔「そんなに顔を近付けるな」

『うっ……ごめん』

橋「あなたの息、コーンポタージュの匂いがするのよ」

『え！？ 本当？ 飲んでないのに……』

橋「嘘だけど」

『……びっくりした』

ナ「ちょっとその魔法使いを嗅いでみてくれ」

『え…いいの?』

魔「いいわけ無いだろ!」

ナ「香水付けすぎだと思わないか?」

『まあ、いつものことだけどね』

魔「ふえ!? 前からそうだったのか!?!」

『…まあ』

魔「つ…早く言ってくれ…。風呂に入ってくる」

『え? 別にくさいって言ってるわけじゃないよ?』

魔「でも、つけすぎだと思っただろ?」

『まあ、男の子的には、そう思っつ』

魔「じゃあ風呂に入ってくる」

『お湯沸かしてないよ?』

魔「シャワーだけでいいや」

とくとくと

『…怒っちゃったかな？』

ナ「君の好みに合わせてるんじゃないか？」

『それはないと思うけどなあ』

橋「ねえ、刑務所いるかしら？」

『いや、まだ1カ所で十分だよ』

橋「刑務所。あなたが入る場所」

『…失礼だな』

……

魔「上がったぜー」

『早いね』

魔「まあ、シャワーだけだからな」

ナ「そんなことより、あと二人はまだ来ないのか？」

橋「……………」

魔「んー、そろそろ来るかもな」

『ずいぶん遅いんだね』

魔「楽しみにしとけ」

『そういえば、俺に1枚だけ招待状書かせたよね』

魔「ああ、そうだな」

『何か意味があるの？』

魔「招待状を貰わないと気が済まないらしい」

『ふーん。誰だろう』

ナ「お腹すいたな」

橋「……………」

『そうだね。先に晩ご飯作っとくかな』

魔「うーん…食材を待った方がいいんじゃないか？」

『そう？　じゃあご飯、少し遅くなるよ？』

魔「多少は仕方ないな」

『そっか。わかった』

橋「……………」

魔「どうなった？」

橋「……………」

ナ「徐々に人が増えているよ」

魔「お、本当だな」

ピンポーン

魔「ん、いよいよ来たんじゃないか」

『はいはい』

ガチャ



咲「いんばんは」

『ちっちゃん！..?』

咲「...誰よ、ちっちゃんって」

#### 4 濃いのがいい、の巻。

『本物の咲夜さんですか？』

咲「偽物に見える？」

『いえ…じゃあ、それも本物ですか？』

咲「あん？」

『な…何でもありません』

咲「別に帰ってもいいのだけれど」

『あ、いや、どうぞゆっくりして行ってください』

咲「まあ、そこまで言うのなら仕方ないわね」

『布団も持って来たんですね』

咲「ええ、何か文句でも」

『…なんでそんなに俺に突っ掛かるんですか』

咲「とにかく上がるわね」

『どござどござ』

レ「待ちなさい。主人である私への挨拶は無いのかしら？」

『そ…その声は！』

レ「ふふ、そうよ。永遠に紅い幼き月、レミリア…」

レ「スカーレットよ！」

びしっ

『決めポーズ取ってるみたいですけど、咲夜さんの布団の死角になつて何も見えません』

レ「くっ…咲夜」

咲「はい？」

レ「三步下がりなさい」

咲「はい」

すたすたすた

レ「よし。永遠に紅い幼き月、レミリア…」

『くんばんは、レミリアさん』

レ「あ、はい、どうもくんばんは。……っつ、空気読みなぞいよー」

『どござ上がってください』

レ「くっ、なんて男なの……」

咲「お邪魔します」

『どござー』

レ「はい、招待状」

『あ、これ、レミリアさんに届いてたんですね』

レ「確かに渡したわよ。上がっていいわね？」

『どござ』

レ「お邪魔します」

咲「なんてチンケな家なの」

魔「お、来たか」

咲「こんばんは」

ナ「お、最後の二人か」

橋「メイド」

咲「布団はどこに置けばいいのかしら」

『あ、どこかその辺りに』

咲「指図しないでくれる？」

『…えーっ…何このめんどくさい人…』

レ「ごきげんよう」

魔「よっ」

橋「ヴァンパイア」

ナ「なんだ、子供も参加するのか」

レ「…失礼な口を利くネズミね」

『ケンカしないでね』

橋「あ…火事…」

ナ「なんだって！」

魔「どれどれ」

レ「…何してるのよ、あなたたち？」

橋「消防署、消防署」

ナ「まだ火は小さいぞ」

魔「でも少しずつ広がってるぜ」

レ「……………」

橋「あとどこに建てたっけ」

ナ「もっとこっちだよ」

魔「おお、燃えてる燃えてる」

レ「…私も見たい」

……………

橋「鎮火したわ」

ナ「ふう、ようやくか」

魔「意外とかかったな」

レ「消防署の数が足りてないんじゃないの？」

橋「だって普段使わないんだもん」

ナ「非常時になってから慌てても遅いよ？」

魔「それより飛行場にしようぜ」

レ「そんなものもあるの？」

橋「ちよつと、狭いって」

ナ「ここは子供の来る場所じゃないよ」

レ「…なんですって」

ナ「狭いんだ」

レ「あなたが離ればいいでしょ」

ぐい

ナ「私はさっきからここにいた」

ぐぐい

レ「私だってっ…見たいのよっ」

ぐぐぐい

ナ「…見たってっ…わからないだろうっ…」

ぐぐぐぐ

レ「じっじっじっ」

ナ「ぐむむむむ」

ぐぐぐぐぐぐぐ…

橋「ちよっど、暑苦しいわよ」

魔「ケンカするなら、よそでやってくれ」



レ「……………」

ナ「……………」

レ「ふん！」

ナ「ふん！」

『何してんだ、あの子たち…』

咲「この家は、お客様にお茶も出さないのかしら」

『…どうして、ふんぞり返ってるんですか』

咲「お客様は神様でしょ」

『…うち、商売じゃありませんけどね』

咲「お茶」

『くそ…なんて態度のでかいメイドなんだ…』

とじとじ

じゃばば

とじとじ

『はい』

咲「何これ」

『水道水』

咲「しばくわよ」

『……………』

とじとじ

ばっせ

とじとじ

がたん

とじとじとじとじ

ばたん

とじとじ

『ほれ』

咲「これは？」

『オレンジジュース』

咲「いただきます」

じぎゅじぎゅ

咲「これ、100%じゃないでしょ？」

『はい』

咲「薄い」

『すみませんね』

咲「100%がいい」

『…じゃあ、それは飲まないんですね？』

咲「飲むけどね」

『くそ…この人めんどくさい…』

………

橋「そろそろゲームやめようかしら」

魔「そうだな。疲れたもんな」

レ「もうやめるの?」

ナ「ずっとやってたからね」

橋「ああ、肩が凝ったわ」

魔「腹も減ったな」

ナ「確かにそうだ。おい、ご飯はまだかい?」

『今、作り始めるところだよ』

咲「食材なら冷蔵庫に入れておいたから」

『い…いつの間…』

咲「私が作ってもいいけど？」

『たまには、ゆっくりしてください』

咲「そうね。人間の食べられる料理を作ってよ？」

『了解です』

橋「さて、私たちは何をしようかしら」

魔「ちよつと休憩だな」

ナ「ふぁ…何もしていないと寝てしまいそうだ」

レ「まあ、退屈ね」

橋「私は家の中を散策でもしてるわ」

魔「私は…そうだな…ふぁ…眠い…」

ナ「ふぁ…ダメだ、眠い。私は寝る」

レ「私も寝ようかしら」

魔「……………わたしは……………ねないぜ……………」

うしうしうしうし

レ「……………眠そうよ？」

魔「寝ない…すう…ねない…」

レ「…寝てるわね」

魔「…すう…すう…」

レ「よっぽど疲れてたのね」

……

咲「いろいろあるわね」

『あ、咲夜さん』

咲「この調味料は初めて見たわ」

『それ結構使えますよ』

咲「ふーん。媚薬とかもキッチンにあるのね」

『……………はっ』

咲「さすがの変態ね」

『いやいやいや…何をおっしやってるのか…』

咲「これよ」

『ぶっ！ 誰だよ、塩の瓶に「媚薬」って書いたのは！』

## 5 ナント力財宝伝説殺人事件、の巻

咲「塩なの？」

『いや、わかってましたよね……』

咲「まあね」

『たぶんパルスイがやったな』

橋「……………」

『ちよつと、パルスイ』

橋「何よ」

『塩の瓶に「媚薬」って書かなかった？』

橋「ああ、うん。親切心で」

『…親切心って何さ』

橋「怪しげな粉末があったから」

『いたって普通の塩だよ！』

橋「くす…あら、そうだったの」



『もう…しかもマジックで書いて…消えないじゃん』

いっいっ

橋「大丈夫よ、水性だから」

『うわ！ 手が真っ黒になった！』

……

『パルスイのいたずらには困ったもんだ』

咲「本当にいろいろあるわねえ」

『興味津々ですか』

咲「猫に小判……失礼。アホには勿体ないくらいね」

『…言い直した方が失礼ですけど』

橋「ねえ」

『ん？』

橋「軍曹さんと少将さんと、どっちが好き？」

『…は？』

橋「これよ、これ」

『これって…うわっ！』

橋「さすがに少将クラスだとミサイルを搭載してるのね。この辺に」

『ちよっ…どこから持って来たのさ！』

橋「本棚」

『くそ…捨てるの忘れてた…』

咲「何それ？」

橋「ぴちぴち女軍曹、我輩もつ我慢ならんでありますー」

咲「エロ本？」

橋「エロ本」

咲「最低ね」

橋「最低よ」

『それ俺のじゃないんだって!』

咲「……………」

橋「……………」

『本当に!』

咲「…誰のせいにするつもりかしら」

橋「責任転嫁って…ちょっとねえ」

『ちが…そうじゃなくて…魔理沙が…』

咲「……………」

橋「……………」

『俺を…からかつた…に…』

咲「……………」

橋「……………」

『……………』

……………

咲「本当でしょうね？」

『本当です』

橋「うわ…す…」

『もう見ないでよ！』

橋「わかったわよ」

咲「後で魔理沙に確認してみないと」

『はい、そうしてください』

咲「それにしても、お嬢様たちが静かね」

『言われてみると…』

とじとじ

『あ…』

魔「…すっ…すっ…すっ…」

ナ「…すう…すう…」

レ「…すう…すう…」

『…仲良く寝ております』

橋「よし、叩き起こすわね」

『何で!?!』

橋「妬ましいから」

『…やめてあげようね』

橋「冗談よ」

咲「お嬢様の寝顔…」

『吸血鬼も寝顔は穏やかなんですね』

咲「写メ撮っとこ」

ぴろりろりん

『それ俺の携帯じゃん!』

咲「後で送っというて」

『咲夜さん、携帯持つてるんですか？』

咲「いや、印刷して送ってよ」

『…本気で言ってます？』

咲「ジョークよ」

『あ、ジョークって言い方カッコイイ』

咲「ジョーク」

『ジョーク』

咲「ジョーク」

『今度から、冗談って言い方やめて、ジョークって言おう』

咲「っていうのも？」

『ジョーク…いやいや、本気ですけどね』

咲「ちえっ」

『あと、写真って撮られた人の魂が…』

咲「…ぷっ」

『…その軽蔑の眼差し』

橋「あんまり騒ぐと起きちゃっわよ」

『あ、せやね』

咲「…何で訛ったのよ」

……

『よし、できた』

咲「オムライスっぽい何か？」

『…オムライスです』

咲「ふーん」

『ケチャップケチャップ…パルスィ、もらったケチャップ使うよ？』

橋「どーぞ」

ぴりっ

ぱかっ

だー！ー！ー！

『わっつあー！？』

橋「…くす…」

『うわわわわわ…』

咲「どうしたのよ…うわ…血まみれ…」

『ケチャップです…いや、ケチャップじゃないかも…』

咲「ちょっと、なんじゃこりゃーって言うてみて」

『なんじゃこりゃー…いやいや、ふざけてる場合じゃなくて…』

橋「…くすくす…」

『ちょっと、パルスィ、何入れたのさ』

橋「トマトジュース」

『くっそ…どつりで…』

魔「う…ん、私、寝てたか…」



咲「あら、起きたの？」

魔「ああ…って、うわ…血…おい、大丈夫か!？」

『え、あ、だいじょばないよ』

魔「ななな何があったんだ!？」

咲「仕方なかったのよ」

魔「さ…咲夜…？」

咲「この家の下には財宝が眠っている」

魔「お前…まさか、そのために…」

咲「ええ、だから彼は邪魔だった」

魔「だ…だからって…刺すことないだろ!」

咲「仕方なかったのよ」

魔「おまええっ!」

『ちよっ…何言ってるんですか…』

魔「大丈夫か!？」

『ケチャップだよ、刺されてないよ』

魔「…へ？」

『だから、ケチャップ…じゃなくて、トマトジュースなんだったば』

魔「…トマトジュース…？」

『トマトジュース』

魔「…トマト…本当…っぽいな…」

『……………』

魔「…ふう…よかったあ…」

『……………』

魔「ま、まあ心配はしなかったけどな」

橋「してたじゃない」

魔「してないっての」

橋「してたわよ」

魔「してない」

橋「してないわよ」

魔「してた……………あれ？」

『…魔理沙…ありがとう…』

魔「おい、余計な勘違いをするな」

橋「ラブいわね」

魔「全然違うっつの」

『まあ、いいや。とりあえず着替えて来ないと…』

咲「待って、その前に…」

『はい、何ですか？』

咲「なんじゃこりゃー、って」

『…そんなに言わせたいですか？』

………

『まさか咲夜さんが悪ノリするとは』

咲「てへ」

『そして魔理沙が心配してくれるとは』

橋「ラブいわね」

魔「だから違うっつの」

『よし、これで完成っ。ご飯できたよー』

魔「待ちくたびれたぜ」

咲「お嬢様、起きてください」

レ「…ん…ああ、咲夜」

咲「ご飯です」

レ「うん…ふああ…」

『ナズも起きてー』

ナ「…ああ…夕食か…」

魔「よし、みんな揃ったな」

レ「…まって…てえあらってくる…」

ふらふら

『…そっち玄関ですよ』

レ「あ…こっちか…」

とじとじ

きゅっ

ぴちゃぴちゃ

きゅっ

とじとじ

レ「スタンバイOKよ」

『あ』

レ「ん、何よ？」

『もしかして、あれ要ります？』

レ「あれ？」

『ここにかける…えーと…』

レ「？」

『こぼしても服汚れない…あれ…名前何だっけ…』

レ「??？」

『ほら、あのー…布ですよ、布』

レ「????」

『…えーと…』

レ「えーと？」

『よだれかけ？』

レ「…貴方、いい度胸してるわね」

6 「じょじょじょじょじょじょ」の巻

レ「…貴方、いい度胸してるわね」

『…すみません。2回も言わないでください』

魔「…くすくす…」

レ「そこ、笑わない」

ナ「ふっ、よだれかけ…ぴったりじゃないか」

レ「何ですつてえ?」

『名前はともかく、あれ必要ですか?』

レ「別にいららないわよ、あんなもん」

『ケチャップ使ってますよ? こぼしたら落ちにくいですよ?』

レ「こぼさないで上手に食べられるわよ」

『それならいいんですけど』

橋「ねえ、早く食べたいんだけど」

魔「そうだな。んじゃ、食べるぜ」

『あ、うん、そうだね』

魔「いただきます」

「「「いただきます」」」

魔「オムライスか」

『オムライスだよ』

レ「あら、ケチャップでコウモリのイラストが」

咲「あら、本当ですね」

レ「ふーん。なかなかシャレてるんじゃない？」

『あ、ありがとうございます』

ナ「私のは普通のなみなみだよ」

橋「私もなみなみ」

咲「私も同じく」

魔「私のは星だぜ」

橋「意味深な星印…ラブいわね」



『…いや、何でそっちに持っていきたがるのさ』

魔「何で自分ののは、ぐちゃぐちゃなんだ？」

『…俺のはトマトジュースだからね』

橋「…くすくす…」

ナ「君はオムライスにジュースをかける派閥なのかい？」

『…いや、そうじゃないけどね』

レ「まあ、でも庶民の料理もなかなか趣があるわね」

魔「だろ？」

ナ「…どうして君が得意げなんだか」

橋「メイドの料理は、もつと高級なの？」

レ「ええ。咲夜の料理は天下一品よ」

咲「光荣ですわ」

『へえ。今度は是非食べてみたいな』

咲「それはご遠慮願いたい」

『……………』

レ「まあ、でも、あなたの料理もそこそこよ」

『…勿体ないお言葉です』

魔「あんまり褒めると調子に乗るぜ」

レ「私は褒めて伸ばす方針なのよ。咲夜を見なさい」

咲「キリッ」

魔「それはモトが違うからだな」

ナ「まあ、こっちはモトがよろしくないからね」

『……………』

橋「大丈夫よ。外見と中身さえ直せば、いい男だから」

魔「確かにな」

『…もうそれ他人じゃん』

レ「褒めるべきところは褒めないと、愛想尽かされるわよ」

橋「破局の危機ね」

魔「別にそんなんじゃないけどな」

『褒めてくれないと、もうご飯作ってあげないよっ…』

魔「それは困るな。食費が浮くから」

咲「…ふーん」

魔「な、なんだよ」

咲「いや、別に」

橋「ところで、この野菜炒め、ちよつと薄味ね」

『え、そうかな?』

橋「食べてみなさいよ」

『どれどれ』

ぱくっ

むぐむぐ

『うーん…言われてみると、そんな気もするかも』

橋「塩コシヨウ足りないんじゃない?」

『そうかな?』

橋「まあ、かけてみなさいって。はい、コシヨウ」

『うん、じゃあ』

かた

どばあっ

『わっつあっぷー!?!?』

橋「…くすくす…」

魔「何やってるんだ?」

『フタが! コシヨウのフタが取れて…!』

咲「たくさんかけたのね」

『こんなにかけるつもりなかったのに!』

橋「…くす…ドンマイ」

『…パルスィ、フタ緩めたでしょ?』

橋「ごめんごめん。はい、次は塩」

『どっせ、またフタが緩いんですよ』

きゅっきゅっ

『やっぱり。同じ手は二度も食わないよ』

橋「…あら、そう」

『うん、そう』

パッパッ

『よしよし、塩は大丈夫だ。いただきます』

ぱくっ

『…』

橋「…くすっ」

『甘い』

ナ「酷い味音痴だね」

『これ…うわ…砂糖だ!』

橋「…くすくす…」

レ「塩と砂糖の見分けもつかないの?」

『くっ…フタに気を取られてた…』

魔「…お前、いたずらのプロだな」

橋「ふふ、朝飯前よ」

ナ「なかなか緻密に考えているね」

『…やられる方は大変だけどね』

魔「お…そういえば…」

咲「どうかしたの?」

魔「…酒が無い」

『もうお酒はダメ』

魔「もう、って飲んでないぜ?」

『前回の反省を踏まえて』

魔「霊夢の酒乱か」

『…あんたもね』

ナ「ワインくらい用意してもよかったじゃないか」

橋「ぶーぶー」

魔「酒ー酒ー」

『くっ…』

レ「ふふっ…仕方ないわね。咲夜」

咲「承知しました」

がさがさ

ことん

魔「おお、ワインだ」

レ「高級品よ」

ナ「すごいな」

橋「存在感が違うわ」

レ「さあ、みんなで飲むわよ」

『…まあ、ワインなら大丈夫か』

咲「え？ あなたは、いらないんでしょ？（笑）」

『…あー、そういうパターンか…』

魔「ウマイウマイ」

橋「深みが違うわ」

ナ「チーズに合いそうだ」

レ「さすが私の持って来たワインだわ」

咲「ええ、全くその通りですわ」

『お茶だっっておいしいもん』



咲「あー美味しい。すっごい美味しい」

『…お茶だって…お茶だって…』

魔「仕方ないな。私のを少しやろう」

『…まりさ…』

橋「間接キスね！ ラブいわ！」

『この人、もう酔ってる！』

橋「でも妬ましくない！ 不思議！」

『…酔っても悪口ばかりだ』

魔「おい、飲まないのか？」

『あ、いや、飲むよ。ありがとう』

魔「グラスは？」

『はいよ』

ちびっ

魔「ほらよ」

『え…あ…少…いや、ありがとう』

ナ「おいおい、ケチだなあ」

魔「私か？」

ナ「私だったら、くちうちゆしであげるのに」

『こつちも酔ってる！』

ナ「嫌か？」

『…嫌とかじゃなくてさ』

ナ「ネズミだけに、チュー、なんてな。あはははははは」

『…しかもダジャレかよ…』

7 さっちゃんには敵わない、の巻。

魔「いやー、食った食った」

ナ「君は、おっさんみたいだな」

『…人のこと言えるの?』

レ「ふう。ご馳走様でした」

『あ、はい、お粗末様でした』

橋「ごちそうさま」

ナ「ごちそうさま」

咲「ごちそうさま」

魔「ごちそうさん」

『はい。俺もごちそうさまでした』

橋「で、この後は何かやるの?」

魔「ビンゴ大会だぜ」

ナ「へえ。景品なんかもあるのかい?」

『あるよー』

レ「ふふ。それは楽しみね」

『とりあえず、夕食の片付けしちゃうね』

魔「おう、頼んだぜ」

咲「…何か手伝ったりしないの？」

魔「しないな」

咲「お嫁に行けなくなるわよ？」

魔「家事のできる人を婿にするぜ」

咲「ふーん、そう」

橋「ねえ、暇なんだけど」

魔「ん、そうだな。何かするか」

………

咲「てや」

カキーン

ナ「くっ……」

『お風呂、お湯入ったけどー？』

魔「ナズーリンでもダメか」

ナ「ち、ちょっと油断しただけだよ」

『誰か、お風呂入らないの？』

魔「私はシャワー浴びたから、いい」

ナ「じゃあ私が入って来よう」

『びびぞいゆっくら』

ナ「うむ」

とじとじ

魔「次はどうする？」

橋「ソレにやらせたら？」

魔「そうだな。ちょっと来てくれ」

「…ソレって俺かよ」

魔「咲夜と試合してみてくれ」

「ん？ ああ、パワp…野球ゲームか」

レ「咲夜に勝てるかしらね」

「一応、俺のゲームですからね。自信はありますよ」

橋「ほら、さっさとプレイボーイしなさいよ」

「…プレイボールね」

………

魔「息詰まる投手戦だな」

レ「今、どっちが勝ってるの？」

橋「まだどっちも無得点じゃない」

レ「わ、わかってるけどね」

『咲夜さん、上手ですね』

咲「……………」

『…めっちゃ集中してるし』

咲「……………」

カキーン

『よし、一塁打だ。1点入った』

魔「おお、さすがだな」

咲「くっ……………」

レ「で、今どっちが勝ってるの!?!?」

橋「……………」

……………

ナ「上がったよ」

『よし…最終回だ』

ナ「ん？何をやっているんだ？」

魔「ここで打たないと咲夜の負けだな」

咲「くっ…」

ナ「ふむ。さっきのゲームか」

『抑えを投入しよう』

レ「ピッチャーを代えてきたわ」

ナ「左の代打を出した方がいいんじゃないか？」

咲「そうね」



『この回を抑えれば、パーフェクトな咲夜さんに勝てる!』

咲「…絶対にこんな粗末な男には負けたくない!」

『ふっ、今のうちに、ほざくがいいさ。ていつ!』

ボール!

咲「…ふう」

『次投げるよ』

ストライーク!

咲「……………」

橋「手に汗握る戦いね」

『ほいつ』

ストライーク!

咲「…くっ…」

レ「追い込まれたわね」

魔「頑張れ、咲夜！」

『行くよっ』

カキン！

ぽすっ

びゅっ

ぱしっ

アウト！

ナ「セカンドゴロか」

『ふっふっふ、あと2人だ』

咲「……………」

魔「まだだ、まだチャンスはある！」

レ「貴女の手、見せてあげなさい」

『投げるよー』

カキン！

…

ぱすっ

橋「レフトフライね」

『うひょー、あと一人だ！』

咲「…負け…る…」

魔「諦めるな！」

レ「そうよ、貴女には運命の女神、すなわち私がついてるわ！」

ナ「なに、ホームラン1本で同点さ」

橋「しかも次は4番だし」

咲「みんな…」

『…俺、完全にアウエーなんだね』

咲「さあ、来なさい」

『おう、でやっ』

咲「てーいつ！」

キン

ぱすっ

びゅっ

ぱ…

咲「はーくしょん」

プッチン

『…へ？』

しーん

『…うん、画面が真っ暗だ…』

しーん

『…電源を…切った…だと…』

咲「くしゃみが出てしまいましたわ」

『…俺…勝ちそうだったのに…』

レ「まあ、くしゃみなら仕方ないわね」

橋「そうね。仕方ないわ」

魔「じゃあ引き分けだな」

ナ「そこそこいい勝負だったね」

『…俺…勝ちそうだったのに…』

橋「生理現象だから仕方ないじゃない」

『本当のくしゃみならね!』

咲「私のくしゃみが嘘だって言うの?」

『嘘だったじゃないですか!』

レ「咲夜が嘘をつくはずないでしょ」

『…そもそも、くしゃみとスイッチを押す因果関係がわからない』

橋「押ささつちやったんでしょ」

『そんな馬鹿な…』

魔「まあ、次回、頑張れ」

『…うう…』

ナ「残念だったな」

『…あと1人だったのに…あと1人だったのに…』

魔「じゃ、次は誰と誰がやる？」

レ「私がやるわ」

ナ「私は遠慮する」

橋「私はお風呂に入ってくる」

咲「私は休憩するわ」

『…あと1人だったのに…』

魔「ふむ、じゃあ私がやるわ」

レ「それじゃ、レッツスタートね」

魔「よし、負けないぜ」

レ「とじるぞ」

魔「ん？」

レ「フライって何？」

魔「…さっきまで何を見てたんだ」

8 くるくるまわレミリア、の巻。

『…あと1人だったのに…』

ナ「まだ言ってるのか」

『…あと1人だったのに…』

ナ「そんなことより、ほら、私を見てくれ」

ゆさゆさ

『…あと1人…ん、何さ？』

ナ「どうだい、このパジャマは？」

『ああ、似合ってるし、かわいいけど』

ナ「ネズミ柄にしてみたんだ。かわいいだろ、このキャラクター」

『うん、かわいいけど』

ナ「知っているかい？ このキャラクターの名前は、ミッ…」

『ああ、知ってるから言わなくて大丈夫だよ！』



ナ「どうしたんだ、急に大きな声を出して？」

『いや、なんかね、ほら……』

ナ「ん？ よくわからないが……」

『とにかく、似合ってるよ』

ナ「そうか。なら、まあ、よしとしよう」

『…ふう。セーフ……』

橋「上がったわよ。次どうぞ」

レ「咲夜、先に入る？」

咲「一緒に入っても構いませんけど？」

レ「…私は構うわ」

咲「そうですか。ふむ……」

レ「まあいいわ。私が先に入ってくるから」

魔「早くしないと、ビンゴする時間が無くなるぜ」

レ「そう。じゃあ少し急ぐわね」

てちてちてち

橋「上がった」

『あ、うん。上がったね』

橋「パジャマ着た」

『あ、うん。着たね』

橋「……………」

『…もしかしてコメント待ち？』

橋「……………」

『その格子縞、パルスィによく似合ってるよ』

橋「ふーん」

ナ「格子縞って言い方は…」

咲「ナウくないわね」

『そうなの？』

魔「今は、ストライプって言っぜ」

『…それ違う柄じゃん』

魔「ところで、ビンゴ大会の準備はしないのか？」

『え、準備なんてほとんどないよ？』

魔「照明とかは？」

『…そんなに大々的にやるつもりだったんだ』

橋「華々しくていいわね」

『いや、照明は無いよ』

橋「あら、そうなの」

『悪いけど、安物のビンゴだよ』

魔「そうか。まあいいや」

咲「でも景品はあるのよね？」

『まあ、一応ありますよ』

咲「いいもの？」

『たぶん、いいものだと思いますけど』

咲「そうに決まってるわよね。物凄く期待するわ」

『…プレッシャーかけないでください』

ナ「どんなお宝だろうね」

橋「金銀財宝とかかしら」

魔「そんなもの手に入るわけないぜ」

ナ「じゃあ何なんだ？」

橋「貧相な男でも手に入るお宝？」

魔「飴玉とかじゃないか？」

ナ「ひょえー、それでお宝とは…」

『…違うけどね』

橋「秘蔵のエロ本かも知れないわ」

魔「いや、こいつはエロ本とか持ってないぜ」

ナ「え…健全な男子は皆持っていると聞いているよ？」

橋「さっきあったわよ？ 軍曹さんの」

咲「これね」

『…わざわざ持って来なくてもいいですよ』

魔「これは紫が拾ったやつを私がプレゼントしたただけだぜ」

橋「…まさかの」

咲「…本当だったのね」

『やっぱり信じてなかったんですね』

ナ「…うわ…すごい…」

『読まなくていいってば!』

ナ「…わ、私はあんなの無理だよ」

『やれって言ってないからね!』

魔「結局、お前は読んだのか?」

『読むわけないよ。マニアックだし』

魔「まったく。せっかくあげたっていうのに」

橋「って言いながら、どうして満足げなのよ」

魔「まあ、これは今度紫に返して来よう」

『そうしてください』

咲「後悔するんじゃないの?」

『しませんよ』

ナ「…寄せて…こんな感じだったか…」

『だから真似しようとしなくていいよ!』

……

レ「上がったわよ」

魔「次は咲夜だな」

咲「そうね。入ってくるわ」

すたすた

レ「上がったわよ」

橋「ねえ、これどついう意味?」

『あー、これは、こっちの人が前のページで……』

橋「ここに?」

『そうそう。言ってることが逆でしょ?』

橋「うん」

『それで、こっちと同じじゃん』

「ああ。なるほど。くすっ…それは面白いわ」

レ「上がったわよ」

ナ「私はここに置こう」

魔「くっ…やられたぜ」

ナ「君たちはオセロが下手だな」

レ「上がったわよ」

橋「あはははっ! 見てこれ、この顔!」

『…まあ、うちのマンガだから俺も何回も見ただけどな』

橋「この…あははは! おもしろい!」

『俺もそのページは笑ったなあ』

レ「上がったつつつてんでしょ！！ このクソ人間！！」

『は…ははい、なななんでしょうか!?!?』

レ「何か言うことは無いのかしら?。」

くるりん

ぴたっ

『…何で一回転したんですか』

レ「何かコメントは無いのかしら」

『パジャマ姿ですか? とってもかわいいと思いますよ』

レ「…は?。」

『…え?』

レ「いやいや、何を言ってるのかしら」

『え? 俺、変なこと言いました?』



レ「きつと聞き違いね。もう一回、はい」

『…かわいい、と言いましたが？』

レ「は？」

『えっ…』

レ「いやいや、そっじゃないでしょ」

『…え？ どうしてじゃないですか？』

レ「いい？ もう一度回るわよ？」

くるりん

すちゅっ

レ「ね？」

『…くっそ…全然わからん…』

レ「ほら感想は」

『ダブルトゥーループですね』

レ「は？ 訳わかんないんだけど…」

『あー、フリップだったかあ。間違えちった』

レ「クイズじゃないわよ。しかも私ジャンプしてないし」

『うーん…もう一度回ってもらえますか？』

レ「これが最後よ？」

くるりん

ぴっ  
っ

『さっぱり、かわいいと思います』

レ「…違うわね」

『…じゃあ何ですか？』

レ「…どう考えても」

『…どう考えても？』

レ「エレガントでしょう？」

『  
…知るか』

9 みんな輪になり仲良く「んん」の巻。

レ「まったくもう」

『…いや、普通わかりませんって』

ガラッ

咲「上がったけど」

魔「おお……」

ナ「ふむ」

橋「……………」

レ「完璧ね」

『すごい……パジャマ咲夜さん……』

咲「これ、似合ってるのかしら？」

『写真集出したらすごく売れそうです』

咲「それはないでしょ」

魔「ただ、完璧すぎて面白みがないな」

レ「なるほど。一理あるわね」

咲「自分ではわからないのですけど…」

レ「咲夜、あなたは完璧よ」

咲「…そうでしょうか？」

レ「ええ。細くて長い脚、整った顔立ち、一カ所飛ばして、ウエスト、ヒップ」

咲「あとでシバきますからね」

レ「じょ…冗談よ」

咲「……………」

レ「と…とにかく、貴女には遊び心が必要だわ」

咲「遊び心？」

レ「ええ。こんなこともあるかと、貴女用にもう一着持って来ているの」

魔「着せる気満々じゃないか」

レ「さあ、それに着替えて一味違う咲夜を見せるのよ」

咲「はあ。わかりました」

すたすた

ばたん

橋「着替えてるところ想像してるでしょ」

『…してないよ』

ナ「いや、このアホ面は何も考えていない顔だ」

『…失礼だな』

ばたん

すたすた

咲「……………」

『!』

魔「!」

橋「!」

ナ「!」

『着ぐるみパジャマ!』

レ」そうよ。どうかしら？」

『…しかもそれ…』

咲「……………」

『…ワニ？』

チツチツチツ

咲「ノンノンノン」

『え？』

咲「クウオコダイル」

『古い！ 古いCMじゃん！』

橋「知らないんだけど」

魔「そして、もの凄く暑そうだな」

咲「暑いわ、これ」

ナ「…確かに珍しいが、これは…」

レ「ブラボーよ、咲夜」

咲「そうでしょうか…」

『まあ、それはそれでかわいいと思いますよ』

咲「あなたにそう言われると虫酸が走るわ」

『……………』

魔「とにかく、咲夜も上がったことだし、あと風呂に入っていないのは…」

橋「これ」

『俺はみんなが来る前に入ったよ』

咲「寝る前には入らないの？」

『一回入りましたからね』

咲「やだ、不潔」

『…じゃあ入ります』

咲「やだ、私の後に入らないでほしい」



『……………』

魔「入らないならビンゴ始めるぜ」

『あ、うん。始めようか』

ナ「お宝お宝」

橋「気合いで勝つわ」

レ「わくわく」

『…結構みんな期待してるんだね』

……………

『じゃあビンゴ大会を初めまゝす』

魔「よし、優勝してやるぜ」

レ「ふふっ。ビンゴで私に勝てるかしら？」

『ちなみに運命を操るのはナシですよ』

レ「…!？」

『いや、そんな「マジで!？」みたいな顔されても…』

咲「でも、6が出たら、6を開けるわよね?」

『自力で出すのは控えてください』

レ「結構シビアね」

『…これが普通なんです』

咲「それじゃあ実力が反映しないじゃない。ぶーぶー」

『…この二人には気をつけよう』

ナ「普通にやるのかい?」

魔「確かに、ちょっと物足りないな」

橋「色気が足りないわ」

『…ビンゴに色気は必要ですか?』

魔「じゃあ、自分のに無い数が出るたびに、パジャマのボタン1個開けるルールで」

ナ「…6回くらいで全開になるよ?」

『…ボタン、開けないでね』

咲「というか、私ワニのままやるんでしょっか？」

レ「もちろん。似合ってるわよ」

咲「すでに汗かきはじめたんですけど…」

魔「あ、酒も足りない」

『いらぬいよ酒なんて。酒なんていらぬい』

魔「ちょっと、ちょっとだけ。眺めるだけ」

『…どっしりいよわ』

魔「景品に、景品にしよっぜ、じゃあ。な？」

『…うーん…仕方ないなあ』

魔「よし、じゃあ、ここに置いておっし」

『ぬるむけどいいの？』

魔「いいぜ」

橋「ぬるむ」

『…なにわ』

魔「よし、とにかく始めよっぜ」

『そうだね、では始めますよー』

レ「よっし、ヴァンパイアの威厳を見せつけるわ」

咲「頑張ってくださいね」

橋「私も頑張る」

ナ「お宝お宝」

『くれぐれも反則しないよう、お願いします。それでは……』

ガラガラ

『46番です！』

魔「…無いな」

レ「私も無いわ」

咲「同じく」

橋「私も無い」

ナ「無い…か」

『…あれ…俺のやつ、穴だらけじゃん』

橋「あ、出そうな所、先に開けておいてあげたから」

『うーわ伏兵…』

魔「お前、反則で、その紙無効な」

『…1回目で負け決定かよ』

橋「ドンマイ」

『…あんたのせいだよ』

ナ「ん？」

魔「どうかしたのか？」

ナ「おっ！」

魔「なんだ？」

ナ「ロッドが景品の隠し場所を探し当てたみたいだ」

『当てんな』

橋「もうあなたの紙、全部開けておくわね」

『開けんな』

魔「まあまあ、この酒でも飲んで落ち着けよ」

ぷしっ

『開けんな』

レ「数字無かったからボタン開けなきゃ」

『開けんな』

ナ「冷蔵庫か。どれ景品は何かな」

『開けんな』

咲「いいから早く進めてくれる？」

『…はい』

橋「怒涛のツッコミだったわね」

咲「…あなたたちが言わせたんですよ」

『次いきますよー』

ガラガラ

『23番です』

ナ「お、あつた」

魔「ない…」

レ「ないわね」

咲「私も」

橋「私もない。これ壊れてるわ」

『… たつた2回で壊れてるとか言わないでね』

ナ「私は、お宝に一步近づいたわけだな」

『そうだね。では次いきます』

ガラガラ

『53番です』

魔「おお！」

『え、どうしたの？』

魔「リーチ！」

『…ありえないからね』



10 四郎兄さん（ry）の巻。

魔「間違えちったぜ」

橋「どう間違えたのよ」

咲「はい、次、次」

『はいよ』

ガラガラ

『39番です』

レ「39番？ くすっ……」

ナ「何がおかしいんだい？」

レ「ふふっ…あはははははははははは……」

魔「何だ、何だ？」

橋「ちよっと、翻訳してよ」

咲「私だってわからないわよ」

レ「あはははははは…ふう…」

『…どうしたんですか？』

レ「ぜんぜん当たらないじゃないのっ！…！」

ばしっ

『ちょ…用紙を投げないでください』

レ「もうやめてやる…！」

魔「……………」

橋「……………」

咲「……………」

ナ「……………」

『落ち着いてください！ まだ4回目ですから…！』

レ「もうどっせ当たらないもん…やめる」

『ほら、トマトが赤くなると医者青くなるって言っじゃないですか』

咲「…関係ないじゃない」

レ「ちやくや、どっしたらいいと思っしっ…」

咲「やめても、やることありませんよ？」

レ「たしかにそうね……」

咲「それでもやめますか？」

レ「うーん……」

咲「……………」

レ「仕方ないわね。続行してやるわ」

『……………このメンバーめっちゃ疲れるんだけど』

……………

『44番です』

ナ「よしっ！ ビンゴだ！」

魔「くっ、負けたか」

橋「私なんかリーチもないのに」

レ「キーッ！」

咲「落ち着いてくださいね」

ナ「お宝お宝」

『おめでとつ。では「ちんぷん」』

とことこ

とことこ

がたん

『好きなもの1個選んで』

ナ「ほお、ふむふむ…どつするかな…」

魔「何なんだろうな」

橋「気になるわね」

レ「…くやしいわ…」

咲「運ゲーですけどね」

ナ「よし、これにしよう」

『はい、どござ』

ナ「うん、うふふ…」

カチャカチャ

魔「あ、向こうで食べてる」

橋「見えないわ」

レ「美味しいものかしら？」

咲「そうなのでしょうね」

とことこ

『はい、続きをやりまーす』

魔「まだ景品はあるのか？」

『あるよー』

橋「あと何人分？」

『ひみつ』

レ「恐らくは、あと1、2くらいね」

『再開するよー』

ガラガラ

『57番』

魔「あ、デュアルリーチ」

橋「何でカッコつけたのよ」

レ「あ、私もあった」

咲「私はありません。あと2つでリーチなのに」

レ「…2つしか揃ってないじゃない」

ナ「むしゃぶむしゃぶ…んまいなあ…」

魔「美味そうに食べやがって」

橋「妬ましいわ」

レ「私も食べたいわ」

咲「私が勝つたら半分差し上げますね」

魔「ずるいぜ。私にも半分くれ」

咲「何だよ。私はお嬢様の従者よ」

魔「レミリアの従者は、私の従者だぜ」

橋「…横暴過ぎるでしょ」

『次いつていい?』

魔「おう」

橋「うん」

レ「よし、来なさい」

『いきまーす』

ガラガラ

『13番です』

魔「やったぜ！ ビンゴだ！」

橋「いいな」

レ「うう…くやしー…」

咲「よし、あと1つでリーチ」

レ「…あなた、マイペースね」

魔「ビンゴだぜ、ほら」

『どれどれ…うん、オッケーだね』

魔「やったぜ」

『どつぞつちらへ』

とんとんと

『はい、一つ選んでね』

魔「なるほどなるほど。お前にとっては頑張ったな」

『ぶつちやけ、高かったよ』



魔「じゃあ私は…これ！」

『はい、どござ』

魔「いえーい」

カチャカチャ

橋「うらやましいわ」

レ「次こそは…」

咲「ここが開いたらリーチなのに」

『次いくよー』

ガラガラ

『6番』

橋「ないわ」

レ「私毛」

咲「あつ」

レ」「ん、どじしたのよ?」

咲「これ、平仮名の『へ』に見えませんか?」

レ」「……………」

……………

ナ「君のはクリームばかりだな」

魔「甘くて美味しいぜ」

橋「はむはむ」

ナ「確かに美味しそうだ」

魔「美味しいぜ」

橋「んぐんぐ」

ナ「うん」

じいーっ

魔「な、なんだよ。やらないぜ」

ナ「べ、べつに欲しいなんて言っていないよ」

魔「そうか。ぱくっ」

じいーっ

魔「……………」

ナ「…じゅるり…」

魔「しかたないな。一口だけだぜ」

ナ「本当かい？ いや、ありがたい」

ひよい

ぱくっ

ナ「うん、うまい」

橋「もぐもぐ」

魔「パルスイのは何だ？」

橋「栗」

魔「うまいか？」

橋「とつても」

レ「くっ…ものすごい敗北感だわ」

咲「うーん…」ま『は作れないかしら」

レ「…この子ピュアすぎる…」

『まだ景品はありますからね』

レ「もしかして全員分あるの？」

『はい』

レ「なんだ…競うまでもないじゃない」

『でも選ぶ順番がありますから』

レ「あ、そっか」

『では、次いきますよ』

ガラガラ

『17番』

レ「ないわ……」

咲「あ……」

レ「……まさか……」

咲「……すみません。ビンゴ……」

レ「……私が……ビリ……」

咲「すみません、お嬢様」

『はい、確かにビンゴですね』

とんとんと

『どねにしますか？』

咲「そうね…これにするわ」

『はい、どつぞ』

咲「いただきます」

カチャカチャ

『…もうやめますか？』

レ「…悔しいから、上がるまでやるわ」

『わかりました』

ガラガラ

『22番』

レ「ないわ」

ガラガラ

『3番』

レ「ないわ」

ガラガラ

『61番』

レ「…ない…」

ガラガラ

『50番』

レ「……………」

ガラガラ

『…12番』

レ「……………」

『……………』

レ「……………」

『……………』

レ「……ドロップアウトします」

『……了解です』



11 あまあまスイーツ、の巻。

『どつちにしますか』

レ「そうねえ…タルトを頂こうかしら」

『はい、どうぞ』

レ「うん、美味しそうだわ」

カチャカチャ

『では、俺は余ったやつを…』

魔「じいっ」

ナ「じいっ」

橋「じいっ」

咲「じいっ」

レ「ぱくぱく」

『……………』

魔「お前のも美味しそうだな」

ナ「果物がたくさんだ」

橋「じいーっ」

咲「じいーっ」

レ「もぐもぐ」

『…なんか…あれ…やばい…?』

ナ「毒味が必要なんじゃないか?」

『…いらんいらん。安全だよ』

魔「まずかつたら困るだろ?」

『いや、まずくないよ』

橋「美味しそう」

『同感です』

咲「?」

『ワニさん、どうして首を傾げるんですか』

ナ「ちょっとだけ…だめかな?」

ちらり

『うーわ、上目づかいとか卑怯…』

魔「…ぜ？」

ちらり

『ぜ、って何や…』

橋「……………」

しよぼん

『ああ、そんな悲しそうな顔しないで…』

咲「…？」

くいつ

『その首を傾げるのをやめてください…』

ナ「たのむよ」

魔「ちよつとでいいぜ」

橋「ひとくち」

咲「おいしそう」

『こんなときばかり色気をフル稼動しやがって……』

……

ナ「五等分だと結構小さいな」

魔「まあ、ありがたく頂くぜ」

橋「おいしい」

咲「もぐもぐ」

レ「私までもらっちゃったわ」

『…これでいいんだよ、俺』

ナ「君の好感度が上がったよ」

『…即物的だね』

魔「それなりに得もしたじゃないか」

『まあ…そつだね…』

橋「はい」

すっ

『えっ？』

橋「かわいそうだから、ひとくちあげる」

『…いや…でも…』

橋「あーん」

『…えっと…』

魔「……………」

橋「私のは食べない？」

『そんなことは…』

橋「あーん」

『…あーん』

ひよいつ





ナ「考えてなかったのかい？」

レ「まったく…女性に配慮しなさいよ」

『…すみません』

橋「とりあえず、ごちそうさま」

ナ「私もごちそうさま」

レ「私も」

『はい、お粗末さまでした。咲夜さんはまだ…』

咲「…っ…ぷっ…あは…！」

『もう忘れてくださいよ…！』

……



魔「さあ、何をするか」

橋「もう企画はないのよね？」

魔「そうだな」

ナ「もうゲームも飽きたよ」

レ「そうね」

咲「何かありますかね？」

魔「ガールズトークでもするか」

レ「女子会ね！」

橋「一人、男もいるけど？」

『……………』

魔「出ていってもらおう」

『えっ……………』

ナ「じゃあね」

『え……………マジで言ってるっ……………』

ひそ…

橋「出ていかないつもりみたいよ」

ひそ…

ナ「そのようだね」

ひそ…

魔「エロスマンだからな」

ひそ…

レ「そういう年頃なのよ」

ひそ…

咲「暑いから着替えていいですか？」

『あの一…俺はどじすねば…』

ひそ…

橋「何か言ってるわよ」

ひそ…

ナ「どうするんだ？」

ひそ…

魔「ガールズトークに男は入れないぜ」

ひそ…

レ「薬で眠らせたら？」

ひそ…

咲「サウナ状態なんですけど…」

『…もしもし…』

ひそ…

橋「それとも、このままする？」

ひそ…

ナ「なるほど。それもアリだな」

ひそ…

魔「なんで私たちがこそそしなきゃならないんだよ」

ひそ…

レ「男子禁制だもの」

ひそ…

咲「多分、そろそろ1キロ痩せましたよ」

ひそ…

橋「そもそも、何を話すのよ」

ひそ…

ナ「普通はオスの話をだな…」

ひそ…

魔「おいおい、言い方がエロいぜ」

ひそ…

レ「あの男のことを好きな人がいたら困るから、排除するのね？」

ひそ…

咲「あ…汗が目」

ひそ…

橋「あんなのが好きな人なんかいるの？」

ひそ…

ナ「ん」

魔「私！？ 好きなわけないだろ！」

ひそ…

レ「声が大きいわよっ」

ひそ…

咲「いたたた…しみる…」

ひそ…

ナ「違うのか？」

ひそ…

魔「別に好きじゃないぜ、あんなマゾヒスト」

ひそ…

橋「マゾヒストなの？」

ひそ…

魔「新聞見なかったのか？」

ひそ…

レ「あ、見たわ。アレね」

ひそ…

ナ「ああ、あの踏み台のやつか」

ひそ…

橋「風見幽香とのアレね」

ひそ…

咲「…ふう……やっと目が開けられる…」

ひそ…

レ「でも、あれ本当なの？」

ひそ…

魔「写真も載ってたじゃないか」

ひそ…

橋「高い所の物取ってた」

ひそ…

レ「何か、やむを得ない事情があったかもしれないわ」

ひそ…

橋「ああ、やむを……………」

橋「つて、や…やむを得ない情事!？」

魔「じよ…情事じゃなくて事情だつての!」

12 君こそマソヒストだ、の巻。

ひそ…

橋「失礼。情事と聞いて取り乱したわ」

ひそ…

魔「…誰も言っていないけどな」

ひそ…

橋「エロスかと思って」

ひそ…

レ「…違つわよ」

ひそ…

ナ「違つのか。なんだつまらない」

ひそ…

咲「あれ？ 今みんな、何の話してるのよ？」

ひそ…



レ「とにかく、アレだけではマゾヒストかどうか分からないわ」

ひそ…

橋「普通の人間は妖怪には逆らえないものね」

ひそ…

ナ「ならば私が試してこよう」

ひそ…

魔「あ…おい…！」

すたすた

『あ、ナズ、どうしたの？』

ナ「ちよっとそこに座ってらん」

『…え？』

ナ「いいから」

『あ…はい…』

ナ「正座だよ、正座」

『え…あ、はい…』

ナ「君は、実に顔が悪いね」

『え…』

ナ「何か、それをカバーできる特技はあるのかい？」

『あ…ありません』

ナ「ふつ。やっぱりか」

『すみません』

ナ「君はダメな子だ」

『すみません』

ナ「のろまだし」

『すみません』

ナ「こんなに私を困らせて…本当に悪い子だ」

『……………』

そっ…

ナ「君みたいな悪い子には、お仕置きが必要だね」

『…っ』

ナ「これだけ言われて反論の一つもないのかい？」

『…あ…ありません』

ナ「実はもっと罵られたいんじゃないのかい？」

『…違います』

ナ「いいや、きつとそうだ。君はマゾヒストなんだ」

『…違う…と…思います』

ナ「絶対に違うと言えるのかい？」

『…た…たぶん…』

ナ「お仕置き、してほしいんじゃないのかい？」

『…く…』

そっ…

ナ「君はどつしどつもないマゾヒストのようだ」

『…っ』

ナ「ほら、お仕置きをしてあげよう」

『…はい…』

ナ「とりあえずズボンを脱い…」

スパーン！

魔「やめんか」

ナ「あいたっ…」

橋「脱がせてあげる」

『いや、ちよっと…』

咲「…あなたもやめなさいよ」

橋「冗談よ、ワニさん」

魔「まったく…何をやってるんだか…」

『…ごめん。雰囲気流された』

レ「あれじゃあ、気弱かマゾヒストかわからないわ」

『…マゾヒストじゃないです』

魔「よし。じゃあ、こんな質問をしよう」

『なに?』

魔「ここに、知らないおっさんと、幽香とがいるとする」

『…え? …はあ…』

魔「前者の抱擁と、後者の足蹴ではどちらの方がいいか」

『!?!?』

魔「どっちだ?」

『くっ…俺は自ら足蹴を望もうとしているというのか…』

魔「じゃあマゾヒストだな」

『…はい、俺はマゾヒストです』

レ「…いや、ハグと足蹴とを比べたんじゃないでしょ」

咲「野獣と美女の比較ですわ」

橋「こんな質問じゃ参考にならないわよ」

ナ「まっただな」

魔「これじゃあダメなのか？」

『…よかった…俺はマゾヒストじゃないんだ…』

魔「じゃあどうやって調べるんだよ？」

咲「そもそも、マゾヒストかどうかなんて興味ないんだけど」

橋「確かに」

レ「…身も蓋も無いわね」

魔「じゃあガールズトークの続きに戻るか」

『あの一…ちよつと待って…』

魔「なんだ？」

『できれば…できればいいんだけど…』

魔「うん」

『俺も参加できるやつがいいな…』

魔「えー…別にお前と話したくない…」

『…なんか…さっきから魔理沙冷たくない？』

魔「いつも通りだと思うけどな」

『…何か怒ってる？』

魔「いや、別に」

レ「仲間外れはかわいそうだし、皆でおしゃべりにしましょう」

橋「そうね、仕方ないわ」

ナ「まあ、それもいいだろう」

咲「えー」

『…咲夜さん、俺のこと嫌いですか？』

咲「べーっ、だ」

『…もうやだ』

……

魔「とりあえず寝る準備をして話すか」

『洗面所狭いから、順番に使ってね』

ナ「じゃあ、私が最初に使おう」

とたとた

咲「お嬢様、布団はどこに敷きましょうか？」

レ「そうね、窓側がいいわ」

咲「承知しました」

ととと

魔「じゃあ私は」

どとと

橋「私、布団持って来なかったんだけど」



『ああ、じゃあ俺のを貸すよ』

橋「え…ああ…うれしいわあ…」

『…その不快感を全面にたたえた顔で言わないで』

橋「だって、くさいんでしょ」

『…みんなそう言っただね』

橋「汗くさそう」

『一応、消臭はしてるから』

橋「じゃあありがたく借りるわ」

『了解。どこに敷く?』

橋「そこ」

『はい』

とさっ

ナ「洗面所、使い終わったよ」

魔「次は私が使うぜ」

とたとた

ナ「お、みんな布団を敷いたのか」

『ナズは布団持ってきてたよね』

ナ「うん。私はここに敷こう」

とさっ

『咲夜さんはどうするんですか？』

咲「ソファでも借りようかしら」

レ「え、この布団で寝ればいいじゃない」

咲「しかし…いいのですか？」

レ「そんなこと、遠慮する必要ないわよ」

咲「私、ワニですよ？」

レ「いいわよ」

咲「かさばりますよ？」

レ「いいわよ」

咲「汗かいてますよ？」

レ「いいわよ」

咲「それではお言葉に甘えて」

魔「終わったぜ、次の人ー」

レ「じゃあ私が使っわ」

てちてち

『あ、魔理沙、着替えたんだね』

魔「ああ、着替えたぜ」

『似合ってるよ』

魔「おいおい、3回目だぜ」

『パジャマパーティーだから、パジャマへのコメントを欠かす訳にはいかない』

魔「…そうか」

橋「イチャつくな！ ラブいわ！」

『…だからそついつのじゃないって』

### 13 カリスマティック ガールズトーク、の巻。

レ「オツケー？ 準備はオツケー？」

魔「いいぜ」

橋「いい」

ナ「いいよ」

咲「オツケーです」

『オツケーだよ』

レ「こほん。それでは…」

レ「レミリア・スカーレットのカリスマティック女子会フューチャリングガールズトークを始めるわ！」

『…見つらい』

ナ「…フューチャリングの意味はわかっているのかい？」

橋「なんでテンション高いのよ」

咲「他との交流が減多にないからじゃないかしら」

『強者の悩み…か』

魔「それで、何を話すんだ？」

レ「女子っぽいことよ。上げるわよ、女子力」

ナ「私は、チエダーよりゴルゴンゾーラが好きだ」

レ「なんでチーズの話なのよ！」

ナ「女子はチーズが好きじゃないか」

レ「はい、あんた、女子力5」

ナ「5段階評価だよな」

レ「100点満点よ」

ナ「……………」

レ「はい、他の話題」

橋「最近、暑い」

レ「そうね」

橋「終わり」

レ「…無理にしゃべり出さなくてもいいわよ」

魔「この前、山の方まで行ってきたぜ」

レ「へえ、何か用事でもあったの？」

魔「珍しいキノコでも探そうと思ってな」

レ「はい、下ネター。下ネタは女子力ゼロー」

魔「…し…下ネタ？」

ナ「キノコを下ネタとか言うのが下ネタじゃないか」

レ「はい、ほら、次」

『あ』

レ「はい、あんだ女子力ゼロー」

『…え…男の子だもん…』

レ「はい、次ー」

咲「私が紐パンを初めて買ったのは…」

レ「咲夜!？」

咲「はい？」

レ「そんなセクシーな話じゃなくていいのよ!」

咲「女の子らしい話ですよ?」

レ「女の子らしければ何でもいいわけじゃないのよ」

咲「難しいですね」

レ「…この子、危ないわ」

魔「文句ばかり言うなら、自分で話してみたらどうだ?」

レ「そうねえ…やっぱりオトコの話かしら」

ナ「ありきたりじゃないか」

レ「ありきたりでいいのよ」

橋「男」

『あ、俺?』

魔「かろうじてな」

『いや、バリバリの男ですけど』

咲「イケメン(笑)」

『…まあ、イケメンではありませんね』

レ「とにかく、理想の男性像について話すわよ」



ナ「当然だが、財力、知力、権力、イケメン力は欠かせないな」

魔「…イケメン力ってなんだよ」

『そういえば、恋愛っていいの？ ほら、宗教的に』

ナ「さあね。ちゃんと訊いたことはないな」

咲「そんなものなのね」

ナ「でも、問題ないと思うよ」

レ「何でそう思うのよ？」

ナ「いざというときに頼れる人がタイプだって、ご主人様も言っていたからね」

『え、言った覚えはないよ？』

ナ「いや、いつから君は私の主人になったんだ！！」

『あ、主人って俺のことじゃないの？』

ナ「当然じゃないか！」

『てっきり俺のことかと』

ナ「…君は本当に気持ちの悪い人間だね」

『てへ』

魔「もうお前は黙ってる」

レ「…はい、他の理想の男性像は？」

橋「ん」

ぴっ

『…え、お…俺？』

橋「こくり」

『いや…そんな…』

橋「この真逆がいい」

『……………』

咲「ああ、わかるー」

『……………』

レ「…あまりいじめたら駄目よ」

魔「私は…」

レ「私は？」

魔「一緒にいて疲れない奴がいいな」

レ「なるほど。初のもともな意見だわ」

魔「あと、イケメンで家事ができて金持ちで強くて優しく楽しくて…」

レ「…贅沢ね」

魔「あと、何かあったかな？」

レ「もういいわよ。はい、次」

咲「私は、高橋くんがタイプです」

『誰!?!』

咲「惚れる」

『いや、誰その人!?!』

咲「あ、間違えた」

『でしょうね。そんな人知りませんもん…』

咲「高橋くんじゃなくて…」

『なくて?』

咲「ツルハシくん」

『ツルハシ!?!』

咲「掘れる」

『ダジャレじゃん!』

レ「…咲夜がボケを担当するとは」

『あ、関係ないんだけど、ワニってタマゴの孵化する温度で雌雄が決まるらしいよ』

魔「へえ」

橋「へえ」

ナ「へえ」

咲「へえ」

レ「どうでもいいわよ! タイミングおかしいでしょ! あんたらも感心すんな!」

『…すみません』

魔「文句ばかり。お前はどんな男がいいんだよ」

レ「そうねえ、やっぱり強くなければいけないわ」

橋「何が」

レ「何って…戦闘が、でしょ」

ナ「力があることが、本当の強さなのかい？」

レ「…はっ！」

咲「本当の強さとは、大切な人を守り抜く、意志の強さのことではないでしょうか。力はその一部に過ぎないのかもしれない」

レ「…そう…そうだったのね…私…間違ってた」

ナ「だからさ、大切な人を守ろうとする意志なら、この人間が一番だ」

『…え？ 俺？』

橋「ほら、本当に強い人よ」

レ「う…うん。あ…あのね、人間…」

『ひゅい！？』

レ「私…その…あなたみたいに強い人が…えっと…す…す…す…」

『……………』

レ「…好き…です…」

『……………』

レ「ってバカヤロー!!!」

ガシャン

『ああ、リモコン投げないでくださいよ!』

「何言わせんのよ!! 好きなわけないでしょうが!」

魔「ノリツツコミだな」

橋「楽しそうだったじゃない」

ナ「ノリノリだったね」

咲「輝いてましたわ」

レ「好きなわけあるか!! こんな何の取り柄も無い、至極残念な男を!!」

『……………』

咲「お嬢様、もっと言ってやってください」

魔「…泣くから、そのくらいにしてやるっぜ」

レ「はっ、夜だからついテンションを上げてしまったわ」

橋「ねえ」

レ「な、なによ？」

橋「眠い」

レ「はっ、何を軟弱なことを言ってるのよ。今夜はオールナイトよ」

橋「……………」

ナ「やはり、ヴァンパイアは夜行性なんだな」

魔「ネズミもだろ」

ナ「私は昼も活動できるよ」

魔「ふーん」

『ん？ そういえばレミリアさん、よく夕方に来られましたね』

魔「たしかに。いつもは寝てるんじゃないのか？」

レ「え…ええ。今日のために昼夜の生活を逆転させたわ」

『どっやってですか？』

レ「べ…別に、普通によ」

魔「普通？」

咲「どうやら前日はワクワクして、昼に全く眠れなかったそうで…」

レ「咲夜！ それは秘密って言ったのに！」



## 14 胸がときめくおまじない、の巻。

ナ「お子様だな」

レ「うるさい」

魔「そういえば、物凄く参加したがってたもんな」

レ「したがってない」

魔「『何か面白いイベントはないかしら。パジャマパーティーとか、パジャマパーティーとか、パジャマパーティーとか』って」

レ「な…何のことかしら？」

橋「そんなに来たかったの？」

レ「ししし知らないわよ」

咲「今日の昼の、お嬢様のはしゃぎようつたら…」

レ「もう言っな…！」

魔「来られてよかったな」

レ「ほっとけ！」

咲「でも、今日のこと、フレンドールお嬢様には秘密ですよ？」

レ「わかってるわよ」

魔「そういえば、フランは連れて来なかったな」

レ「ギャグマンガみたいに一日で家が元通りになるなら、連れて来たわ」

『…なりませんね』

ナ「家を壊すのかい？」

橋「すごい」

魔「さすがにそんなことはしないだろ」

レ「多分ね。絶対とは言えないから」

咲「とにかく、絶対に秘密ですからね」

レ「ええ。バレたら、うちがギャグマンガになるわ」

咲「絶対に、ぜえーったいに秘密ですよ」

魔「どれだけ念を押すんだよ」

『……………』

レ「それで…ふぁ…何の話だっけ」

橋「あくび」

ナ「眠いんじゃないかい？」

レ「眠くないわよ。はい、何の話だっけ？」

魔「…ふあ…聖書の話だな」

『「の中で罪を犯したことの無い者が、この女に石を投げ…」』

レ「ぎおえー！ 聖書の話をするな！」

咲「すごい声出ましたね」

レ「はい…次、次」

『「最近、うちの近くに綺麗な花が咲いたんですよ」』

レ「はいキモい。次」

『「…泣いていい？」』

ナ「もう話すことなんてないよ」

『「…あ、しかも俺無視なんだ」』

レ「…ふあ…なんか頑張って話さないよ」

咲「うーん…何かあったかしら…」

橋「私は思い浮かばない」

咲「…何か面白い話題…」

『…ふあ…』

レ「はい、そこあくびしない」

『あ、すみません。眠くて』

ナ「ふあ…私も眠くなってきた」

レ「あなたたち…ふあ…今日はオールナイトって言ったでしょ」

すうすう

ナ「そんなこと言われても」

橋「眠い」

レ「かーっ、咲夜、何か言ってやって」

咲「寝ませんか？」

レ「そうよ、寝…え？」

すうすう

咲「お嬢様も眠そうですね?」

レ「私は…別に…」

橋「というか、さっきから寝息が聞こえるんだけど」

ナ「私じゃないよ」

『俺でもないよ』

レ「私も違うわ」

咲「私でもありません」

すうすう

『…』  
『…』  
『…』

橋「魔法使い」

ナ「本当だ」

魔「…すう…すう…」

橋「かわいい寝顔して…豆があったら鼻に詰めてるわ」

『…ダメだよ』

レ「寝るなんて…起こしてやるわ」

咲「あ、お嬢様」

レ「…何よ」

咲「寝かせておいてあげましょう」

レ「……………はあ。仕方ないわね」

『それじゃ、俺たちもそろそろ寝ませんか？』

レ「えー…うーん…でも、話すこともないか…」

ナ「そうと決まれば早速」

橋「おやすみ」

『おやすみなさい』

咲「おやすみなさい」

レ「…はあ…仕方ないわね。おやすみ」

魔「…すう…すう…」

……

魔「……すう……すう……」

橋「……すう……すう……」

ナ「……すう……すう……」

咲「……すう……すう……」

『……すう……すう……』

ぱたん

……

レ「……」

『眠れないんですか？』

レ「夜は目が冴えるのよ」

『…あくびしてたくせに…』

レ「パチエもこの月を見ているかしら」

『…絶対に見てないと思います』

レ「それより、今日は楽しかったわ」

『楽しんで頂けてうれしいです』

レ「ええ、咲夜も楽しそうだったわ」

『…そうでしょうか？』

レ「あんな表情はなかなか見られないもの」

『俺のこと、嫌ってると思うんですけど』

レ「あら、そうでもないわよ」

『いえいえ…そうとは思えませんが…』

レ「本当に嫌いなら、口も聞かないもの」

『そうですかね』

レ「ええ。あれも咲夜の一つの顔、私には見せない、ね」



『うーん…』

レ「あの子は、優秀よ」

『そうですね。それはひしひしと感じます』

レ「だから、貴方に見せるような顔を、私には見せない」

『ふむ…』

レ「少しだけ、そんな咲夜を引き出せる貴方がうらやましくもあるわ」

『…え…』

レ「…くすつ。何を言ってるのかしらね、私は」

『……………』

レ「今のは忘れて頂戴」

『…わかりました』

レ「……………」

『……………』

レ「ねえ」

『はい?』

レ「どうするつもり?」

『え?』

レ「咲夜は、貴方に会ってから少し変わったわ」

『…そうなんですか?』

レ「ええ。もしかしたら…」

『もしかしたら?』

レ「咲夜は貴方を思っているのかも知れない」

『…!?!』

レ「もしそうなら、貴方は彼女の気持ちを受け止める覚悟はあるの?」

『いや、ちょっと待ってください。絶対にそれはないです』

レ「そうかしら」

『はい。絶対に』

レ「時々ね、夜、彼女はこっそり神社に行ってるみたいなのよ」

『…はい』

レ「じつじつじつと、貴方に言っているのかわからないけど…」

『…はい』

レ「ある時、私は何のために神社に行くのかを尋ねた」

『…はい』

レ「そしたら、はにかみながら、『おまじないです』だって」

『…おまじない?』

レ「貴方への、ね。恋のおまじないかしら?」

『……………』

レ「それで、貴方に思いをかけていると感じた。そのおまじないの名前はね…」

『……………』

レ「丑の刻参り」

『…かけてるのは呪いですね…』

15 鳥取砂丘でカバディしてる事でしたわ、の巻。

……じゅじゅん

『……すす……』

……じゅ

橋「……すす……すす」

……じゅ

ナ「……すす……すす」

……んじゅ

魔「……すす」

……じゅあああ

レ「っ誰よ！　うるさいわね！」

ナ「ふああ…ん…どうしたんだい…？」

橋「…朝…」

魔「…なんだなんだ…」

レ「誰よ、唸ってるのは！」

『…すう…すう…』

魔「こいつじゃないな」

橋「メイド」

レ「そんな、咲夜が唸るわけ…」

咲「…う…うあ…んう…」

レ「Wow…！」

魔「…何だそのリアクションは」

ナ「うなされているな」

橋「やっぱり、ワニが暑いんじゃないの？」

魔「多分そうだな。すごい汗だ」

咲「…づい…づう…」

レ「ど…どつしよつ…」

ナ「起こした方がいいのかな？」

橋「わからない」

魔「起こしてみるか」

レ「そうね。咲夜、朝よ…」

咲「…カバディカバディ…」

レ「…何か言ってるわよ」

橋「暗号？」

魔「古代魔法じゃないか？」

ナ「カバディって言ってないか？」

レ「咲夜、咲夜、しっかりして」

咲「…っ…はっ！」

橋「気付いた」

魔「大丈夫か？ うなされてたぜ」

咲「…頭がぼーっとするわ」

ナ「すごい汗だよ。着替えてきたらどうだい？」

咲「そうね。シャワーを浴びてくるわ…」

ふらふら…

レ「あのパジャマは危険ね」

魔「…もっと早く気付いてやれよ…」

ナ「そして君はいつまで寝てるんだ」

げしげし

『…ん…なななんだなんだっ…』



げしげし

『あ……うあ……呪いか……呪いの効果か……!?!?』

ナ「何を言ってるんだ。朝だよ。いつまで………ぶっ!」

『…え、なに?』

橋「くす……」

魔「ぶっ……」

レ「ふふっ……」

『え? 何なに?』

ナ「ふふ……いや、おはよう……爽やかな朝だね……」

橋「……ぶ……似合っ……ふふ……」

魔「……っ……くふ……」

レ「ふふ……」

『……?…?…?』

ナ「ふふふ……」

橋「……ふっ……す……」

魔「…くす…」

レ「…うふふ…あなた、面白いわ…」

『え…何が…』

すたすた

咲「上がった…」

『…あ…』

咲「…ぷっ…」

『…え…』

咲「…くすっ…」

『…顔か？ …何か付いてるのかな？』

たっ たっ たっ …

………

たっ たっ たっ !

『誰だよ！ 俺の額に「魚肉」って書いたのは！！』

ナ「…くすくす…」

『くすくすじゃないよ！』

魔「…くす…ナイスボケだぜ」

『俺のボケじゃないけどね！』

レ「…ふふっ…ヘルシーでいいわね」

『よくないですよ！』

咲「…くす…みすぼらしい家」

『今は、家は関係ありません！』

橋「…くす…ウケる」

『ウケるじゃないよ！ もしかしてパルスイじゃないの、これ！』

橋「うん」

『うん、じゃないよ！ 魚肉って何さ！』

橋「肉だと強そうだから」

『弱そうにしないでよ！』

ナ「魚肉バスターを見せてみてよ」

『無いよ、そんなの！』

咲「…くすくす…」

『…もう笑わないでくださいよ…』

咲「…くす…ダサイパジャマ」

『だから着目点が違いますってば！』

………

『…はい、ご飯できました』

魔「お、メシか」

『ぶんぶん』

魔「面白かったぜ」

『俺は面白くないもん』

レ「とりあえず、冷めないうちに朝食を頂くわよ」

咲「そうですね」

魔「じゃあ、いただきます」

「」「」「いただきます」

ナ「で、どこに使われてるんだい？」

『魚肉は入ってません』

橋「まだ怒ってる？」

『ちよっとね』

橋「悪かったわよ」

『…まあ、いいけどさ。あんなのいつやったのさ』

橋「夜、暑くて目が覚めちゃったから、つい」

『…因果関係がわかりません』

魔「あ、そっちのドレッシング取ってくれ」

『え、あ、はい』

ナ「もぐもぐ」

レ「このドレッシング美味しいわね」

咲「そうですね。このドレッシングの味だけは認めますわ」

『…そんなに美味しいか、これ』

魔「美味しいぜ」

『むう…ドレッシングばかり…』

橋「でも、あなたの料理だって」

『あ、ありがとう』

橋「中の上」

『…あ、そんなに褒めてないんだね』

ナ「でも、まあまあだよ」

『うーん、そっかあ。もっと上手く作れるといいな』

レ「咲夜に弟子入りしたら？」

咲「はw」

『…は、って何ですか…』

魔「もぐもぐ」

ナ「君はよく食べるな」

魔「私か？」

ナ「太るよ」

魔「な…べ、別にどうでもいいけどな…」

ナ「そっか」

魔「ああ。どうでもいいな。し…し…ちそうさま」

ナ「…気にしてるじゃないか」

『魔理沙、もういいの？』

魔「あ…ああ。もう食べられないぜ…」

レ「地味に乙女ね」

咲「…『地味に』は失礼ですけどね」

橋「むぐむぐ」

『あ、そういえば…』

橋「…何」

『丑の刻参りをされたら、どうすればいい？』

橋「はい？」

『なんかさ…俺…呪われてるみたいでさ…』

橋「ふーん」

『うん…』

橋「もぐもぐ」

『いや、聞いてよ…』

魔「誰に呪われてるんだ？」

『わっちゃん』



魔「…本当か？」

咲「ああ、あれね。1日しかしてないけど」

レ「ふーん。そうだったの。残念ね」

『だから、恋のおまじないじゃありませんって。…ってか、1日やっっちゃったんですね』

咲「さすがの私でも、呪いのかけ方はよく知らないからやめたの」

ナ「もし知っていたら？」

咲「……………」

ナ「……………」

咲「……………」

ナ「……………」

咲「…も…もぐもぐ…」

ナ「…やっていたんだな」

16 はづ・とう・かーす、の巻。

レ「ふう、ごちそうさま」

『あ、はい。お粗末様でした』

咲「お粗末様」

『…人の料理に粗末って言わないでくださいね』

ナ「ごちそうさま」

『はい』

橋「ゴチ」

『…ゴチって』

魔「お前はまだ食べてるのか？」

『…うん』

魔「マイペースだな」

『俺、食べるの遅いんだよね』

ナ「手伝ってあげようか？」

『いや、大丈夫だよ』

橋「私はもう手伝った」

『え？』

橋「デザートを食べておいてあげた」

『それはご親切にどうも！』

……

魔「あ、そうだそうだ」

レ「どうしたのよ？」

魔「スプレーをしておかないとな」

とじとじ

とじとじ」

シューーーーーー………

橋「……………」

ナ「どういう意味なんだ？」

魔「あいつが道を踏み外さないようにな」

咲「女性の匂いに興奮しそつだものね」

ナ「ああ、なるほど」

レ「…本当に信用が無いのね」

咲「信用に足る部分が全くありませんわ」

魔「前から気になってたんだが」

咲「何よ？」

魔「どうしてそんなに嫌ってるんだ？」

咲「いや、なんか、生理的に無理」

魔「…厳しいな」

ナ「まあ、容姿はよくないね」

橋「下の中」

レ「あまり悪口を言っではダメよ」

咲「あと、優柔不断そうなところとかも腹が立つ」

魔「確かに、あいつは優柔不断だ」

レ「まあ、それは一目で感じるわね」

ナ「優柔不断オーラを放っているからね」

橋「うん」

咲「他には、私のボケにツッコミを入れてくるところとか」

魔「…じゃあボケるなよ」

レ「彼がいなかったら、たぶん無法地帯になるわよ」

咲「あとは、下ネタが多いところとか」

魔「…今回は1回も言っただけだな」

咲「他には…」

『…もうやめてもらえます?』

魔「お、片付けは終わったのか?」

『うん。なんで俺の欠点を片っ端から吟味してるの?』

咲「喜ぶかな、と」

『…喜びません』

レ「ところで、この後は何をするのかしら?」

魔「……………」

ナ「何もないのかい?」

魔「…無い」

橋「解散?」

魔「自由解散だな。帰っても、まだ帰らなくてもいいぜ」

レ「そう。私は、せっかくだからもう少し残るわ」

咲「そうですか。私は先に帰ります。じゃ」

レ「…待ちなさい」

咲「ふえ?」

レ「『ふえ？』じゃないわよ。残りなさいよ」

咲「これと同じ空気を吸いたくないので……」

『……………』

橋「あ、涙目ー」

『…俺が何をしたっていうんだ』

……………

ナ「…退屈だな」

魔「まあな」

ナ「そろそろ帰るかな」

魔「帰るのか？」

ナ「いつまでも遊んでるわけにはいかないからね」

『布団、運んであげようか？』

ナ「いや、さすがに嗅がれたくない」

『…嗅がないよ』

魔「話し合いの結果、お前は匂いフェチという結論に落ち着いた」

『何をどう話し合ったのさ!』

ナ「じゃあね。お邪魔したよ」

魔「おう、じゃあな」

『…じゃあね』

ナ「ドアを開けてくれると助かる」

『あ、はい』

ガタン

ナ「またね」

『うん、ばいばい』

ボタン



魔「一匹減ったな」

レ「やっと帰ったわね、あのネズ公」

『…まだ根に持ってたんですか』

橋「ねえ」

『ん？』

橋「この4巻は？」

『たしかまだ出てないと思うな』

橋「読みたい」

『…俺に言われてもなあ』

橋「描いて」

『…無理です』

咲「おい」

『…いよいよ高圧的ですね』

咲「卒アルは無いのかしら？」

『ありませんよ』

咲「恥ずかしい写真を探してやるつもりだったのに」

『残念でしたね。もうあんな冊子、シュレッダーでミンチにしてやりました』

レ「…そんなに消したい過去のね」

咲「通知表は？」

『残念でしたね。もうあんな冊子、シュレッダーでミンチにしてやりました』

レ「…いじめられてたのかしら」

咲「何か面白い物は無いの？」

魔「あんまり無いな」

咲「じゃあ、いつもあなたは何してるのよ」

魔「へ…」

レ「確かに、気になるわね」

魔「…言われてみると、そうだな」

『大体、ずっと何か食べ…』

ギロリ

『……………』

魔「ゲームしたり、マンガ読んだりかな」

レ「ふーん。二人で出かけたりはしないの？」

魔「最近はしないな。前は色々案内したが」

レ「貴女が誘って案内したの？」

魔「ああ。誘われたことはないぜ」

橋「キスは？」

魔「…は？」

橋「キス」

魔「あああるわけないだろ…」

咲「本当は？」

魔「ななななないっての！」

レ「ふふ。真つ赤よ」

魔「いいいいきなり変なこと言うからだろ！」

レ「ねえ、人間、本当にないのかしら？」

『ありませんよ』

レ「……………」

『どうしました？』

レ「え…なんか…いやに冷静ね」

『まあ、ありませんからね』

レ「そ、そうかしら？」

『そういつのとは無縁だよね』

魔「…まあ…」

『……………』

魔「…そう…だよな…」

『……………？』

咲「……………」

レ「……………」

橋「……………」

『……………』

魔「……………」

咲「……………」

レ「……………」

橋「……………」

レ「……咲夜、時を戻しなさい」

咲「……止めてません」

……………

レ「そ……それじゃ、そろそろ帰るわね」

『気をつけて帰ってくださいね』

レ「このあとは神社にでも遊びに行こうかしらねー」

咲「そうですね」

橋「私も帰る」

『うん、忘れ物は無い？』

橋「無い」

『そっか』

魔「帰る」

『うん、またね』

レ「そういえば、布団なんてどうやって持って帰るのよ」

魔「神社に置くんだけ」

レ「そう。それなら神社まで一緒ね」

魔「そうだな」

ガチャ

レ「それじゃあ、世話になったわね。また遊びに来るわ」

『はい、またどうぞ。…出来れば今度は一人で…』

咲「お邪魔しました」

『はい。さようなら』

橋「じゃ」

『うん、じゃあ、またね』

魔「……………」

『魔理沙も、またね』

魔「…ああ」

ボタン

咲「ねえ」

橋「ん？」

咲「丑の刻参りってどつちやるの？」

『聞かないでください!』

橋「まず準備するのは…」

『教えないでよ!』

魔「私にも教えてくれ」

『なんで魔理沙まで!』



16 はづ・とう・かーす、の巻。(後書き)

ご愛読ありがとうございます。私です。

これにて第三部は一応終了となります。

例のごとく第四部が未完成もいいところなので、少々おまけを投稿した後は、しばらくお休みになります。申し訳ない。

何かお気づきの点などございましたら、どうぞ遠慮なくお申し付けくださいませ。

それでは、第四部もお楽しみに！

おまけ あなたに届け、プレゼント（前書き）

とても短いです。

まさにおまけって感じですよ。

おまけ あなたに届け、プレゼント

ボタン

『ふう…なんかめっちゃ疲れたな…』

とくとくと

『魔理沙も機嫌悪かったみたいだし…ふて寝しよう…』

とくとくと

『……あれ？』

たつ たつ たつ

『…何だ、この箱？』

ぺらぺら

『あ、手紙が付いてる』

ペリっ

『なににー？』

「昨日と今日と、本当に楽しかったわ。」

パジャマパーティーなんか初めてだった。

どんなパジャマがいいか迷ったけど、似合ってるって言うてくれて悪い気はしなかった。

のんびりおしゃべりするのも、たまにはいいものね。

本当に楽しかったわ。

沢山イタズラしちゃって、ごめんなさい。

本当は自分で渡したかったけど、素直になれなくて渡せなかった、この箱を置いていきます。

「パルスィ」

『ふーん』

ばたむ

『……………』

『…っつて、え!?!?』

びらり

『…これ…ん? ……素直になれなくて…?』

『……………』

『なん…だと…』

ばたむ

びらり

ばたむ  
びらり

ばたむびらりばたびらばたびらばた…

『え…いやあ…まさかねえ…』

びらり

『…確かに、あんなにイタズラをするなんて不思議だった…』

ばたむ

『いや…でも…え…まさかまさか…』

じとじ

『何だろ、この箱』

アアアアアアアア

『うーん…何だろっなあ？』

コトコトコトコト

『まさか…！？』

『エンゲージリング！？』

『…いや、それはないか…』

コトコトコトコト

『…音だけじゃ分からないな。うん、開けてみよっ』

ぱかっ

びよっん…！…！

『…!…!』

びよんびよん…

『…びっくり…箱…』

びよんびよん…

『…びっくりした…』

ひらり

『…あ…紙が入ってたのか…なにになに?』

ひらり

「おバカ」



『…くっ』

『くっそおおおおー！』

『してやられたぜ…ん…？』

「P.S  
」

『お…追伸の部分が折ってある…』

『あ…まさか…！？』

『こっちに甘い言葉が…？』



おまけ あなたに届け、プレゼント（後書き）

橋「今頃どうなってるとかしら。アレでひっかかるなら、相当おバカね」

おまけ 君を乗せてラララ二人ならきつとどこにだって手が届くから

『シュークリームです。どうぞ』

幽「あら、ありがとう」

『突然来るなんて、どうしたんですか？』

幽「特に用事はないわ。ちょっと来てみただけ」

『そうでしたか。でも、うちには、あまり面白いものはありません  
』よ

幽「いいのよ。喋りに来ただけだから」

『ああ、そうですか。俺でいいならいいんですけど』

幽「で、最近どう？」

『おかげ様で無事に過ごせてます』

幽「別に私のおかげじゃないでしょ」

『まあそれは。幽香さんはどうですか』

幽「植物の世話ばかりしてるわ」

『なるほど。結構忙しいんですか？』

幽「ええ。なかなか大変よ」

『働き過ぎないように、気をつけてくださいね』

幽「まあ、世話しないわけにもいかないし」

『それはそうですね…』

幽「今度手伝ってもらおうかしら」

『ええ、はい。喜んで』

幽「あ、そういえば、シュークリーム頂くわね」

『ごっごっごっご』

はむ

もぐもぐ

『あ、飲み物がありませんでしたね。今持ってきます』

幽「悪いわね」

とたとた

がさがさ

『…お、ティーバッグが切れてる』

がさがさ

『買い置きしてあったはずだけど…』

がさがさ

『どこ置いたっけ』

がさがさ…

『あ、上の棚か…台が無いと届かないんだよな…』

幽「どうかしたの?」

『いえ、ティーバッグがあそこにあるので』

幽「届かないの?」

『…なにぶん背が低いもので』

幽「まあ、確かにクソチビよね」

『…言い過ぎですよ』

幽「婉曲的に言ったつもりだけど」

『それで!?!?』

幽「ええ」

『というか、ティーバッグのお茶でよかったですか?』

幽「それは構わないけど」

『ちょっと待ってくださいね』

幽「どこ行くのよ」

『今、台を持ってきますから』

幽「あら、その必要はないわよ」

『…え? どうしてですか?』

幽「私が取ってあげる」

『届きますか?』

幽「そのままでは届かないわよ」

『やっぱり台いますか?』

幽「いいえ」

『え? じゃあどうするんですか?』

幽「あなたが届かせればいいのよ」

『…届かす?』

幽「届かす」

『「高い高い」をすればいいんですか?』

幽「違うわよ。大体、持てると思ってるの?」

『いえ、あんまり女の子にはモテないですね』

ゴッ

『っ!』

幽「くだらないボケはいいから、早く」

『早く、何ですか?』

幽「ん」



ぴっ

『え、床を指差して…台を持って来いってことですか？』

幽「ん」

ぴっ

『いや、俺を指差されても…』

幽「ん」

ぴっ

『…床？』

幽「ん」

ぴっ

『…俺？』

幽「ん」

ぴっ

『もしかして、俺に台になれと?』

幽「あら、なってくれるの?」

『…急に笑顔になりましたね』

幽「そんなことないわ。ささっ、急いで」

『…むう…』

とすっ

『…これでいいでしょうか』

幽「上出来よ」

『それはどうも』

幽「乗るわよー」

『優しくしてくださいね』

どげんか

『 かつはあっ!?!? 』

幽「うん、届きそうだな」

『 …っ…ぐ…っ… 』

幽「どうかした?」

『 …あ…足…思い切り…乗せましたね… 』

幽「えっと、この棚ね」

『 …内臓にひびいた… 』

幽「お、あったわ」

ギゅむっ

『 …ぐっ… 』

幽「届くかしら」

ギゅむっ  
ギゅむっ  
ギゅむっ

『 …背伸びのふりして…爪先をえぐり込ませないでください… 』

幽「うーん」

おやおおやおおやおお

『くっくっくっくっ…』

幽「あやちやうや」

じやうや

『…ははは跳ねないでください…ああ危ないですよ…』

じやうやじやうやじやうやじやうや

『あははははははは…』

幽「っふう。下じりるわね」

とた

『…なんとか助かったぜ…』

幽「お疲れ様」

『…あれ、ティーバッグは…』

幽「取れなかった」

『な、なんだってー!?!?』

幽「まあ、仕方ないわよね」

『…俺の苦痛は何だったんだ…』

幽「どうだった?」

『主に、痛かったです』

幽「上見た?」

『え、見てませんけど?』

幽「惜しかったわね。せつかくパンツ見れたのに」

『…それどころじゃありませんでしたよ』

幽「ちょっと乗っただけじゃない」

『脊椎動物の象徴が粉碎しそうでした』

幽「まあいいわ。今日は帰るわね」

『え！？ もう帰るんですか？』

幽「何よ、満足できなかったの？」

『…いや、そういう意味ではなく』

幽「シュークリームありがとう。じゃ、ごきげんよう」

『…え…あ、はい。さようなら』

ガチャ

ボタン

『…何しに来たんだ…』

『……………』

『…幽香さんの足…』

『…あつたかかつ（以下略）』

…

文「ふふふ…見いちゃったー見いちゃったー」

おまけ 君を乗せてラララ二人ならきつとどこにだって手が届くから（後書き）

【注意】

このお話はフィクションです。

いじめやハラスメントを受けている方は、新しい境地を見出さずに、大人しく専門の機関に相談しましょう。



おまけ 紅魔館の夜2（前書き）

レミリアたちがパジャマパーティーから帰った日の夜の、紅魔館での出来事である。

おまけ 紅魔館の夜2

レ「咲夜、今日の夕食は何かしら」

咲「まだ決めておりませんよ」

レ「あら、そうだったの」

咲「何か召し上がりたいものがあるのですか？」

レ「うーん、そうねえ…何がいいかしら…」

とてとて

フ「あ、お姉さま、帰ってきてたのね」

レ「あら、フラン。おはよう」

フ「うん、おはよう。もうご飯？」

咲「いえ、今メニューを考えているところです」

レ「フランは食べたいものある？」

フ「ん〜と、プリン」

レ「はいはい、それはデザートね」

フ「あとは、アイス」

レ「それもデザートでしょ」

フ「お姉さま、文句ばかりね」

レ「あなた、普通そこは……」

フ「そこは？」

レ「パフェ でしょ」

フ「そっか！」

咲「それもデザート……」

フ「ねえねえ、それよりどこに行ったの？」

レ「別に。ただの散歩よ」

フ「それなら、わたしもつれて行ってくれてもよかったじゃない」

レ「来ても面白くなかったわよ」

フ「なんかあやしー」

レ「べ、別に怪しくないわよ」

咲「…それで、夕食は何を作ればいいのでしょうか？」

レ「そ、そうよ。夕食ね。夕食の話をしてたんだったわー」

フ「…じーっ」

レ「パスタなんかいいんじゃない？ おほほほ…」

咲「パスタですね。かしこまりました」

すたすた

フ「…じーっ」

レ「何よ」

フ「べっにー」

レ「フランは何をしてたの？」

フ「なにもしてない」

レ「そんな何もしてないことはないでしょ？」

フ「してない。ひとりじゃ、なにもたのしくない」

レ「……………」

フ「つまんなかった」

レ「…そう…そうよね…」

フ「わたしもお姉さまといっしょに行きたかった」

レ「…そうね。今度は一緒に行きましょうね」

フ「うん!」

レ「…ふふっ」

フ「ん?」

レ「…もしかしたら、杞憂だったのかもしれないわね」

フ「きゅっってなに?」

レ「いいえ、何でもないの」

フ「ふーん。へんなお姉さま」

すたすた

咲「お持ちしました」

レ「相変わらず早いわね」

咲「お待たせするわけには参りませんので」

フ「わたしのはー？」

咲「はい、こちらですよ」

フ「おいしそうね」

咲「ありがとうございます」

レ「それじゃ、頂くわね」

フ「いただきまーす」

咲「どうぞ召し上がってください」

レ「うん。美味ね」

咲「ありがとうございます」

フ「咲夜、のみものを持って来てちょうだい」

咲「はい、只今」

すたすた

レ「もぐもぐ」

フ「おいしいわね」

レ「そうね。やっぱり咲夜の料理が一番ね」

フ「もぐもぐ」

レ「フラン、こぼしてるわよ」

フ「んぐんぐん」

レ「食べながらしゃべってはダメよ」

フ「はい」

すたすた

咲「お待ちどうさまでした」

レ「ありがとうございます」

フ「ありがとうございます」

レ「もぐもぐ」

フ「もぐもぐ」

レ「ほらフラン、左手はどこに行ったの」

フ「ぶう」

レ「まったくもう…っとと…」

フ「あ、お姉さま、こぼした」

レ「こ、これは、その…そういう運命だったのよ」

咲「ああ、お嬢様、服にはこぼしてませんか？」

レ「…うん」

フ「くす。お姉さまも人のこと言えないわね」

レ「う、うるさいわね」

咲「今、テーブルを拭きますからね」

レ「…ええ、悪いわね」

フ「あ、そういえば、お姉さま」

レ「なあに、フラン」

フ「きょうはどこに行ってたの？」

レ「だから、さっきから言ってるでしょ。ただの…」

フ「ただの？」



レ「ただのパジャマパーティーだって」

咲「お嬢様あッ！」

レ「あ……」

フ「やっぱり……じぶんだけ……」

レ「……あ……あの……」

フ「わたしに……ないしょで……」

レ「……これは……」

フ「パジャマ……パーティー……」

レ「ちゅちゅちゅちゅちゅ……？」

咲「どどどどどっつって言われましても……」

フ「……っ……」

ぎろっ

レ「ふぉあぁあぁ……」

ジャジャジャジャーン！

レ「あ、今ベーターヴェンの『運命』が聞こえた！ もうやばいんだ！ うああああ！」

咲「おおお落ちちゆいてください！」

フ「……………」

レ「うああああ！ 来るな！ 来るなヨオオオオ！」

咲「お嬢様！ これですわ！」

レ「なによ、どうせもうダメな運命なのよ！」

咲「この美味しいパスタを食べて一言！」

レ「なるほど！ 美味しい物を食べれば元気が出るわね！」

咲「はい、あーん！」

レ「あーん！」

ぱくっ！

もぐもぐ……

レ「  
……」  
咲「  
……」  
フ「  
……」  
レ「  
……」  
咲「  
……」

レ「超うんめー」

レ「うん、このパスタ……」

フ「……チッ……」

レ「うぴいイイツ！ 逆効果アアアッ！」

咲「おおお嬢様責任取って下さいよ！」

レ「違うのよフラン！」

フ「………」

レ「これは……！」

フ「………」

レ「これは美味しいって意味と私の能力をかけて……！」

咲「説明し始めた……！」

フ「………」

レ「………」

咲「………」

咲「＼(^o^)／」

フ「チッ！」

咲「……」

レ「……」

フ「……」

ある雨の日に 前編（前書き）

あまり長くはありませんが、前・中・後編に分かれています。  
相変わらず彼は二重カギカッコですが、楽しんでいただければ幸いです。

## ある雨の日に 前編

『まいったなあ……』

突然の雨だった。

ちよつと買い物に出掛けた帰りに、暗くなったかと思うと、急に降り出してしまった。

俺は今、買い物袋をぶらぶらさせながら、大きな木の下で雨宿りをしている。

『はあ、まいったなあ』

特に困ることもないけれど、もう一度言ってみた。

おそらく夕立ちだろうから、しばらく待てば雨はやみそうだ。退屈なので辺りを見回すが、別段面白いものはなく、小さな雨粒が水たまりを打っているくらいだった。

他にやることもないので、その音に耳を傾ける。どこか懐かしく、少しだけ寂しい音がした。

『たまには、こういうのも悪くないな』

心から、そう思った。

俺が小さかった頃は、よく雨の日に外を眺めていた気がする。退屈そうだけれど、そのときは今の俺とは違った光景を見ることができたんだろう。

『そんなこともあったなあ』

いつから雨が好きじゃなくなってしまったのだろうか。

そんなことを思うと、成長するというのは、なんだか寂しいことだった。

今だけは、雨に心を洗い流してもらおうとしよう。

俺は音に合わせて鼻歌を口ずさみ、雨がやむのを待つ。

無駄な時間に思えるかもしれないけれど、それでいいと思った。

『雨宿りもいいもんだ』

俺は歌うのをやめて、もう一度アマオトに聴き入った。

そのうちに、俺はなんだか楽しくなってしまった。

すると、この曲に歌詞があったかのように聞えてくる。

まるで誰かが、歌っているかのように。

雨の中で、歌っているかのように。

「たーら、たーら、たったーたーたーたー」

どうやら、本当に誰かが歌っているらしい。

声からして、少女のようだ。

鈴を鳴らしたような澄んだ声は、アマオトの中でもはっきり聞えた。

俺はそんな声に聞き覚えがあった。

「たーらたーら、たららたらりら」

次第に、はっきりと姿も見えてくる。

紫色の風変わりな傘を差している。

そして彼女は、いかにも慣れていないというようなスキップをしていた。

というよりも、履いている下駄がスキップに不向きなのだろう。

俺はその姿に、しばし見とれていた。



「あ」

彼女は一音節だけ声を発する。  
どうやらこちらに気付いたようだ。

「へへ……」

彼女の口元に、にやっとした表情が浮かんだ。

そのいたずらっぽい笑みのまま、こちらへと走り出した。  
水たまりをもともせず、びしゃびしゃと音を立てながら駆けてくる。

下駄は走りにくくないのだろうか、と疑問に思ったが、現代っ子の俺にはその実際は不明である。

その姿が少しずつ近づいてきた。  
俺の緊張も徐々に高まってくる。

しかし、彼女は次第にゆっくりになって、ついに途中で止まってしまった。

「ふう……ふう……」

どうやら疲れてしまったようだ。

呼吸を調整しているらしく、膝に手をつけて休んでいる。

しばらくして、ひとつ大きく息を吸うと、ふたたび走り出す。

こちらに近づくとつれて、彼女はだんだん楽しそうな表情になってきた。

そして、目の前まで来ると、元気よく一言。

「ばあっ!」

これには困った。

正面から来て、驚かしてくるとは思いもしなかった。  
心臓が跳ねているのは確かなのだが。

『いや、俺も気付いてるからね』  
「おどろかなかった？」

彼女は俺の言葉に、一転して悲しげな表情を浮かべる。  
俺は慌ててフォローを入れた。

『そんなことないよ。結構驚いたよ』  
「そっか。よかった」

彼女は胸を撫で下ろすと、笑顔に戻った。  
やっぱりこの子は笑顔が一番似合うと思う。  
俺は、彼女にびくびくしながら生きることを決心した。  
そうすれば、彼女の笑顔がもっと見られるはずだから。

「ねえ、なにしてるの？」  
『雨宿りしてるんだよ』  
「あまやどり？」  
『急に降ってきたからね。参っちゃったよ』

参っちゃったぜ、と言おうか迷ったが、キザなのでやめた。  
彼女への対応は、クールではなく、ナチュラルにと決めていたから  
だ。

「ふうん。あまやどり」  
『うん、雨宿り』  
「これから帰るところ？」  
『そうだよ。買い物に行ってたんだ』

買った物袋をちよつと持ち上げて、彼女に見せたが、袋にはあまり興味はないようだ。

彼女はこちらへ近寄ると、驚くようなことを口にした。

「帰るんなら、送ってあげる」

「…………え？」

「傘の出番だもん。送ってあげる」

とてもうれしかった。

夢にまで見た相合傘。

こんな幸福があつていいものだろうか。

あまりの喜びに、俺の思考は絡まった糸のようになっていた。

『あ、あつ、ああ、あの……………』

この上ないカツコ悪さである。

優しくされたとき、うまく反応できない。

うれしいのに、ありがとうが言えない。

ああ、またやつちやつたな。

人付き合いが苦手な俺は、こんなことを人生で何回も繰り返してきた。

いつも答えにまごついて、その場を気まずくした。

また、同じことをしている。

一番見せたくなかった相手に。

俺は答えることができなかった。

「ね、ね、帰らないの？」

それでも、彼女は笑っていた。

彼女は俺にも分け隔てなく接してくれる優しい女の子だった。笑顔に元気をもらった俺は、一生懸命に頭を整理する。

『あ、えっと……』

送ってほしい。

一緒に帰りたい。

ちゃんと答えるんだ。

『えっと……送ってもらえると、助かる』

「うん！」

頑張ったよ、俺！

やったよ、ご先祖さま！

俺にとって、大きな一歩を踏み出した。

これも彼女のおかげだ。

ちらりとそちらをうかがうと、俺が傘に入るのを待っているようだった。

俺は慌てて傘の端っこに滑り込んだ。

「そんなに離れてたら、ぬれちゃうよ」

『あ、うん、そうだね』

半歩ほど彼女との距離を詰める。

思ったよりも近くなり、少しだけ俺の体はこわばった。

『あ、ありがとう。助かるよ』

「へへ、どういたしまして」

ちょっぴり自慢げに、彼女は胸を張った。

俺はそんな彼女に、思わず笑顔になっていた。

「じゃ、いっつか」

『うん、行こう』

彼女の言葉に、ひとつ俺が頷いて、ふたり歩きだす。

## ある雨の日に 中編

「ねえねえ」

彼女が前を向いたまま、話しかけてきた。

「なにを買ったの？」

『あ、食べ物だよ』

買い物袋の中には、大根、にんじん、もやし、ピーマンなんかが入っている。

それを伝えると、彼女はなるほど頷いた。

「じゃあ、今日はカレーだね」

『えっと、よ、よくわかったね』

ホームズもびっくりの推理力である。  
今日の晩ご飯はカレーに決まった。  
彼女がそう言うんだから、仕方がない。

「あ、すごい料理思いついちゃった」

『え、なになに』

「へへ、教えてほしい？」

彼女が得意そうに笑みを見せる。

その料理とやらに自信があるのだろう。

俺はとても気になった。

『うん、教えてほしい』

「えー、どうしよつかない」

もったいぶって教えてくれない。

そんなふうになると、余計に知りたくなるものだ。

『そこをなんとか』

「ふっふっふ。しかたないなあ」

どうやら教えてくれる気になったらしい。

俺はわくわくしながら、彼女の発表を待った

「こほん。その料理は」

『料理は？』

「カレーひやむぎ」

『カレー、ひやむぎ』

びちゃ、ってなると思った。

『きよ、今日は、ひやむぎを買わなかったから』

確かに、斬新な発想だとは思いつし、存在すると聞いたこともある。カレーとめん類という目の付け所は悪くない。

ただ、ひやむぎの水分とかを考えると、個人的にはあまりおいしくない気もする。

「そっかあ。今度やってみてね」

そう言って舌をぺろりと出して、ウインクをする。

これは彼女のくせらしい。

初めて見たときは、意識がフェードアウトしたものだ。

ホント参っちゃうぜ。

『う、考えておくよ』

口の端のよだれを拭って、適当に答える。

変な方向に妄想が膨らみつつあった俺は話題を変えることにした。

『そういえば、最近暑いよね』

「いまは、すずしいよ」

『それはまあ、雨降ってるからね』

傘の外では雨粒が地面に降りそそいでいる。

雨脚は、まだ強くなりそうだった。

『えっと、今じゃなくて、昨日とか暑かったじゃない』

「うん、そうだね」

『体調には気をつけてね』

「たいちよう？」

『ほら、熱中症とか』

言いかけて、しょうもない考えが浮かんでしまった。

ゆっくり『熱中症』と言わせてみたい。

妄想を避けるべく変えた話題で、一層妄想が炸裂している。

妄想デフレスパイラルである。

そんな心が黒く染まりつつある俺に、彼女は首をかしげて尋ねる。

「とか？」

『ね、ねえ、あのさ』

「ん、なあに？」

『ね、ね、熱中症って、その、ゆっくり、えっと』



「うん？」

『あの、その』

「うん」

『……いや、なんでもない』

見事、挫折した。

とんだ腰抜けである。

あるいは自制心がはたらいたのだろうか。

そう思いたいところだ。

ちなみに成功していたら、今頃二本足で立つことはあたわなかっただろう。

「なんでもないの？」

『うん』

「ふうん」

『……』

「……」

俺が余計なことを言わせようとしたせいで、会話が途切れてしまった。

雨の音ばかりがよく聞える。

自分が本当にダメなやつだと痛感した。

このまま沈黙が続くと、彼女にもつまらない男だと思われてしまう。何か話さなければ。

『あ、そういえば、傘、俺が持とうか』

俺は唐突に、そんなことを口にした。

おそらく紳士的なところを見せようと思ったんだろう。

気に入ってもらいたい、という打算があったのかもしれない。

俺の言葉に、彼女は明らかに驚いた様子だった。

「え……」

そこまで驚くことを言ったのだろうか。

このときの俺には、彼女の気持ちが変わらなかった。

彼女は一瞬考えた後、穏やかに首を横に振りながら答えた。

「うんと、わたしが持つ」

『えっと、そう？』

遠慮しているのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。彼女は、ずっと先の方を見つめていた。

「あのね、これは、大切なものだから」

俺は自分の軽率さ加減によく気付いた。

そうだった。

彼女は妖怪だった。

その傘は、ただの傘ではなく、彼女自身でもある。

俺にとってはちょっととした親切のつもりでも、彼女にとっては文字通り身を預けることになる。

軽々しく言つべきことではなかったのに、何も考えずに言ってしまった。

デリカシーのない男だと思ったことだろう。

『い、ごめんね。図々しいこと言って』

「ううん。いいの」

そう言った彼女の笑顔は、いつの間にか少しきこちなくなってい

た。

どうしよう。

調子に乗りすぎた。

馴れ馴れしくすぎた。

そう考えると、怖くてしゃべり出すことができなくなった。

次は長い沈黙が続く。

時折水たまりを避けるために、右へ寄ったり、左へ寄ったりするだけ。

また失敗しちゃったな。

今度こそ、嫌われたかもしれない。

ふと見ると、雨は激しく降っていた。

ある雨の日に 後編

「ねえ」

『ん、何？』

久々に彼女の声を聞いた気がする。

「雨、あたってるよ」

『あ、本当だ』

俺は気づかないうちに、そでが雨に濡れるくらいに彼女から遠ざかっていった。

やはり緊張と気まずさから、無意識に距離をとってしまったのだろう。

俺に相合い傘は荷が重すぎたのかもしれない。

「もっとこっちにおいでよ」

『うん』

俺はなんとか距離をつめる。

彼女の周りには酸素が少ないのかな、と思った。

近寄るとなぜだか息が苦しくなるからだ。

「ねえねえ」

『はいよ』

「私、役に立ってる？」

『え？』

今度は彼女が、突拍子もないことを言い出した。

雨が防いでいるかを確認したかったのだろうか。それとも、褒めてほしかったんだろうか。

『役に立って、どういう意味？』

「あなたにとって便利ってことかな」

俺にとって便利な女になりたいのだろうか。

『便利って、あれかな、役に立って意味かな？』

「はじめからそう言ってるよ」

会話は堂々巡りになってしまったが、なんとなく意味はわかった。傘があつて助かったか、ということだろう。

彼女を役立てるといふ発想がなかったから、最初はわからなかったんだ。

でも、彼女が道具であったことを考えると、人の役に立ちたいというのは、自然な願望なのかもしれない。

『傘がなかったら帰れなかったからね。すごく助かってるよ』

「そっか。よかった」

彼女はそう言ったものの、安心しているようには見えなかった。もしかすると、何か悩んでいることでもあるのだろうか。

俺に話してくれるかは微妙だったが、一応訊いてみることにした。

『どうかしたの？』

俺の言葉に、うーん、と曖昧な返事をした。

そして少しためらった後、結局彼女は話してくれる気になったようだ。

傘に雨粒が当たる音が聞えていた。

「雨、すき？」

『うん、結構好きだよ』

「私もすき。おんなじだね」

『ああ、うん。おんなじ……』

「でも、雨にぬれると寒いよね」

『そうだね。確かに濡れたら寒いね』

「ぬれると困る。だから傘が生まれた」

彼女は少し間をあけると、また話を続けた。

「ということは、ぬれて困らない人は、傘を使わないわよね」

『そりゃ、濡れていいなら、そうかもしれないけど』

「どしゃぶりのときは、傘差してもぬれるし」

『たまにだけど、そういうこともあるね』

「片手がふさがって、荷物になるし」

『まあ、そうかもしれないね』

「雨がツパとかもあるし」

『うん、まあ』

「じゃあ」

『ん？』

彼女は一度息を吸つと、ちょっとふてくされたように言った。

「傘って、ほんとうに必要なかな」

俺は驚いた。

いつも明るい彼女が、こんな言い方をするのを初めて聞いたからだ。彼女にも悩みがあるなんて、普段は思いもしなかった。

『珍しいね、そんなこと言うなんて』  
「わたしだって、なやみはあるもん」

そう言つて、彼女は頬をふくらませた。

ころころと表情が変わつて、見ていて飽きない。本当に悩んでいるのか、よくわからないくらいである。でも、彼女は捨てられ、忘れ去られた傘だそう。自分の存在を、何度も疑問に思ったことだろう。そして今は、傘自体の存在をも疑っているようだった。

『傘、あつた方がいいと思うよ』

「でも、なんかもつとすごいのも作れそう」

『すごいのか？』

「持たなくていいやつとか」

言われてみると、想像したことがある気がする。

刀よろしく、傘を振り回していた幼少の頃に。

『そんなのできるかな？』

「わかんないけど」

『うーん』

「うーん」

『どうか』

「もしできて、傘が使われなくなったら、さみしいな」

彼女の傘を持つ手には、わずかに力が入っていた。

不安そうな彼女の表情を、今はじめて見た。

これまで、彼女が俺に見せてくれたのは笑顔ばかり。

新しい表情を見せてくれたことが嬉しかった。

なんとか元気づけてあげたい。  
きつと、じょうずなことは言えないと思うけれど。

『でも』

「あ……」

俺は彼女の手から、そつと傘を取った。  
彼女が握っていたところは、人間と変わらないぬくもりが残っていた。

『傘がないと作れない思い出もあるよ』

例えば、好きな女の子と並んで歩けたりとか。  
それはあくまで例えだが、決して間違っではないだろう。  
ただ、いざ口に出すと、不思議と想像していたよりもずっと恥ずか  
しかった。

「おもいで？」

彼女は小首をかしげた。

やはり彼女は知らないのだろう。

「ふうん」

彼女は気の抜けた返事をする。

俺の言葉から、果たして何か伝わっただろうか。

「おもいで」

かみしめるように、もう一度口にする。



そして彼女は、ふとこちらを向く。  
そのアメ玉のような、透き通ったオッドアイで俺の方を見つめてくる。

彼女は一体、何を思っているのだろうか。  
時が、止まったような気がした。

「……………」

『……………』

二人とも、何も言わなかった。

そのまま、静寂に包まれる。

世界から音が消えたように錯覚するほど、静かだった。

風や雨は、いつたいどこへいったのだろうか。

そんな沈黙を破ったのは、彼女の、あつという声だった。

「雨、やんでる」

『あ、本当だ』

話しているうちに、雨は上がっていたらしい。

二人ともそれに気づかないくらい、夢中だったようだ。

俺たちの背中の方から、傾きかけた夕日が差ししていた。

「雨、上がったね」

彼女は少し早口でそう言うと、舌を出した。

時々、変なタイミングで舌を出すのが、何か意味があるのだろうか。  
それから俺の方に手を差し出してきた。

「はい」

どうやら、今俺が持っている傘を返せというこらしい。  
なんとなく名残り惜しかったけれど、やんでしまったのだから仕方  
がない。

『はい』

「うん、ありがとう」

何がありがとうなのか、よくわからないが、彼女はそう言って傘  
をたたんだ。

これで至福のひとときもおしまいか。

俺がこっそり落ち込んでいると彼女がまた、あっと声を上げた。  
忙しい子だな、と思いながら、俺は声をかける。

『どうしたの？』

「みてみて！」

彼女がうれしそうに指差した先には、大きな虹が架かっていた。  
二人であかね色に染まり始めた空を見上げる。

『うわあ、すごいなあ』

「きれいだね」

雨上がりに現れた虹は、遠くまでつながっている。

虹なんか見たのは、もう何年ぶりかわからない。

こんな素晴らしい日に、こんなに縁起のいいことが普通あるだろう  
か。

俺は勝手に運命を感じて浮き足立っていた。

「きれい」

彼女はすっかり虹に見とれていた。

反対に俺はというと、そんな虹さえも目に入っただけはなかった。残念ながら状況に流されやすい男なのだ。

「へへ。なんか、いいことありそうだね」

俺は彼女の言葉に答えることができなかった。

その横顔を見つめながら、人知れず一大決心などをしてきたからだ。もしかすると、本当に何かいいことがあるかもしれない。

俺はつばを飲み込むと、大きく空気を吸い込んだ。

『あ、あの』

「ん？」

思ったより大きな声が出てしまった。

彼女はそれを気にした様子もなく返事をした。

『ええっと』

「うん」

彼女がゆっくりとこちらを向く。

自分の体が、さらに緊張するのを感じた。

『て、てっ』

「て？」

彼女はその汚れのない瞳に、俺を映す。

俺は拳を握りしめて、勇気を振り絞った。

『手を、つなぎませんか』

彼女の驚いた顔は、夕日のせいで少しだけ朱く染まっていた。

風が木の葉をやさしくなでる音だけが聞える。

一瞬だけ、ずっと遠くに、気の早い一番星が光っているように見えた。

今夜は、そんな星を見ながら歌うのもいいかもしれない。

こんな日常が、ずっと続くことを願いながら。

「また、こんどね」

そう言って、多々良小傘は困ったように、はにかんでみせた。

おまけ 秋来にけらし

妹「ふえつくしゅ！」

すたすた

慧「大丈夫か、妹紅？」

妹「うう、なんか最近寒くなってきたなあ」

すたすた

慧「そろそろ秋だからな」

妹「もう秋か。早いなあ」

すたすた

妹「永く生きてると一年は、あっという間だよ」

慧「私でも短く感じるくらいだからな。妹紅にしてみれば一瞬なんだろうな」

妹「うん、本当にそう」

すたすた

慧「そういえば、この辺りも少しずつ秋らしくなってきたな」

妹「確かに…あれ？」

たっ たっ たっ

慧「突然走りだして、どうした？」

妹「ちよつと来てみて！」

慧「何だ？」

妹「これ」

慧「これは…梅の木か？」

妹「こんな所に梅なんかあったっけ？」

慧「うーん…今までは気づかなかったが…」

妹「梅か…」

慧「さすがにこの季節だと、梅も寂しいものだな」

妹「……………」

慧「どうした？」

妹「…うん、別になんでもない」

慧「そうか？」

妹「枝、落ちてないかな」

慧「折ってもいいんじゃないか」

妹「そうだよね」

べき

妹「よし」

慧「花も咲いてないのに、どうするんだ？」

妹「ちよつとさ、手紙でもくれてやるうかな、って」

慧「手紙？」

妹「うん、手紙」

……

輝「ぶえつきし！」

永「……………」

輝「どうかした？」

永「…もう少しかわいくできないんですか？」

輝「くしゃみを？」

永「ええ、おっさんみたいでしたよ」

輝「失礼ね。お姫様よ」

永「じゃあ、お姫様らしくしてください」

輝「ちゃんとお姫様らしく屋敷にこもってるわよ」

永「働いてください」

輝「…どっち？ それ難題？」



たっ たっ たっ

鈴「師匠！、こんな物がー」

たっ たっ たっ

永「あら、きしめん」

鈴「：せめて、うどんって呼んでください」

輝「いいじゃない。私は獣耳好きよ？」

鈴「きしめんから離れてください」

永「それより、何か用事があつたんじゃないの？」

鈴「あ、そうでした。こんな物が届いています」

永「封筒？」

輝「誰宛て？ 私宛て？」

永「ええ、そのようです」

輝「手紙もらうのなんか久しぶりね」

鈴「そうなんですか？」

輝「昔は凄かったんだけど、最近は無いわね」

永「…怠惰な生活を送ってるからだと思いますけど」

輝「男さえいれば、みんな私に言い寄るはずよ」

鈴「…本当ですか？」

輝「本当よ。過去に実際あったんだから」

永「まあ、その自慢話は聞き飽きてますけどね」

鈴「なんだか今では信じられませんか」

輝「…どういう意味よ」

鈴「い、いえ、別に…」

輝「……………」

鈴「あ、そういえば、手紙と一緒に木の枝が届いてますよ」

輝「ん、それは梅かしら」

永「そうですね」

輝「夏に梅とか、どういうセンスしてるんだか」

鈴「…実はもう秋ですけどね」

輝「え…世間は秋なの？」

鈴「……………」

永「……………」

輝「まあ、いいわ」

鈴「…いいんですか？」

永「箱入り娘だからいいのよ、たぶん」

輝「誰からかしら？」

永「書かれてないんですか？」

輝「あ…妹紅からだわ！」

鈴「どうします？ 燃やしますか？ 茹でますか？」

永「…茹ではしないでしょ」

輝「あの鼻タレ妹紅から手紙なんて…何かあるに違いないわ」

鈴「じゃあ私はこれで」

だっ！

がしっ！

永「こらこら、逃げるんじゃないの」

鈴「えー…だって爆発しますよ、きっと」

永「大丈夫よ。ちゃんと控えてなさい」

鈴「…師匠がそう言うなら…」

永「そう。それでいいの。じゃ、私はこれで」

だっ！

がしっ！

鈴「どうして逃げるんですか」

永「……………」

鈴「師匠とはいえ、逃がしませんよ」

永「くっ…」

輝「…漫才は終わった？」

永「ええ、まあ」

輝「とにかく、この手紙を開けようと思っの」

鈴「大丈夫なんですか？」

輝「大丈夫よ」

永「…本当に大丈夫なんですか？」

輝「うん。永琳、よろしく」

永「…自分では開けないんですね」

輝「べ、別に怖いわけじゃないんだからね！」

鈴「誰ですかそのキャラ」

永「それで、本当に開けていいんですね？」

輝「ええ、一発かましなさい」

永「かましたくないんですけどね」

鈴「師匠、師匠のことは忘れませんから」

永「いや、変なフラグ立てるのやめて」

輝「じゃあ、永琳、いざ、オープンよ！」

永「…いきますよ」

鈴「…ごくり…」

輝「……くり……」

永「せえいつ！」

鈴「……………」

輝「……………」

永「……………」

鈴「……大丈夫……みたいですね……」

輝「ふう、緊張したわ」

永「それじゃあ、中を確認しますね」

輝「ええ、気をつけるのよ」

鈴「何が入ってるか、わからないですもんね」

永「……………」

輝「どう?？」

永「いえ、普通に手紙だけですな」

輝「なんだ、拍子抜けしたわ」

鈴「そうですね。師匠の悲鳴が聞けると思ったのに」

永「…あなた、意外とサドっ気があるのね」

輝「で、手紙には何て書いてあるの？」

永「ええとですね…」

「輝夜へ

お元気ですか。

私は元気です。

もう秋ですね。

妹紅より」

永「だそうですね」

輝「何それ？」

鈴「意外と穏健ですね」

輝「いや、何か裏があるはずよ」

永「あ、もう一枚ありました」

輝「ほら、みなさい」

永「なにやら、良い香りのする紙が」

輝「もしかして、歌かしら？」

永「ええ、その通りのようです」

輝「腐っても貴族なのね」

鈴「あの人も腐女子だったんですか？」

輝「…そういう腐ってるじゃないわよ」

永「というか、あの人『も』って、他に誰がいるのよ」

輝「まあ、いいわ。とりあえず読み上げてちょうだい」

永「私がですか？」

輝「ええ」

永「では、失礼して。こほん…」

輝「……………」

永「春のみぞ…」

輝「あははは！ 春だって！ 何を言ってるのかしらね！ 今は秋だっていうのに！」

鈴「…自分だって、さっきまで夏って言ってたくせに…」



永「とりあえず最後まで聞いてください」

輝「そうね。どんなバカ丸出しの歌なんだか楽しみだわ」

永「では。こほん……」

春のみぞ盛りに匂ふ梅の花秋になりては誰たが香をかぐや

輝「……………」

永「……………」

鈴「……………」

輝「もぉ〜「お〜うっ〜!!」

鈴「お…怒った!?!」

輝「今日という今日は許さないわ!」

鈴「『かぐや』が入ってたのはわかりますけど、どどういう意味ですか?」

永「梅は春にしか香りがしないから、秋にその香りを楽しむ人はいないって意味よ」

鈴「それで、どうして怒るんですか？」

永「梅に喩えられてるからよ」

鈴「といますと？」

永「『秋』に『飽き』が掛かっているね」

鈴「飽き？」

永「昔は男も寄ってきたのに、今はもう…つぶつぶ。って」と

鈴「へえ、そうなんですか」

輝「今回はかりはやつつけてやるわ！」

永「…それ、今までに100回は聞きましたよ」

輝「ほつぺたをつねって、タテタテヨコヨコマルかいてチョンしてやるわ！」

永「…まあ、いいですけど」

鈴「歌は返さないんですか？」

輝「なるほど。その手があったわね！」

永「教養の見せ所ですね」

輝「ふっふっふ。私を怒らせたことを後悔させてやるわ!」

永「頑張ってくださいね」

鈴「ホントに歌なんか詠めるんですか?」

輝「私を誰だと思っているの?」

鈴「死なない人」

輝「…いや、もっとあるでしょ」

鈴「髪が長い人ですか?」

輝「……………」

永「まあまあ、実力を見せてあげたらいいじゃないですか」

輝「そうね。見てなさい、きしめん!」

鈴「私、きしめんじゃありません」

輝「永琳、書くものを」

永「こちらにありますよ」

輝「オツケー。妹紅の悔し泣きする姿が目には浮かぶわ!」

……

妹「うぶぶぶW」

慧「うぶぶぶW」

妹「今頃どんな顔してるんだか」

慧「きつと悔しがっているさ」

妹「いやー、今日は気分がいいな」

慧「してやったもんな。赤飯でも炊こうか」

妹「そうだね」

慧「めでたいめでたい」

妹「ちゃんと返事は寄こすかな？」

慧「ぐうの音もでないかもしれないぞ」

妹「だよー。あははははは」

慧「あははははは」

ぴゅー

チ「そのあなた、止まりなさい！」

妹「……………」

チ「あなた、妹紅ね」

妹「…うん、まあ……」

チ「はい、手紙よ」

妹「…ああ、ありがとう……」

チ「じゃあ、はい、いいものちょうだい」

妹「…は？」

チ「手紙届けたらいいものくれるって言われたのよ」

妹「…輝夜だな」

チ「はやく」

妹「ほら、魔法の石だ」

チ「何これ、ただの石じゃない」

妹「三日持ち続けないと魔力が宿らないんだ」

チ「ふうん、なるほどね。いいものもらったわ。じゃあね！」

ぴゅー

慧「ただの石だよな？」

妹「うん。三日もすれば忘れるだろうから」

慧「そうだな」

妹「それより、この手紙だよ」

慧「何でチルノに持たせたんだろうな？」

妹「もしかしたら、返歌と関係があるのかも」

慧「早速見てみるか」

妹「そうだね」

ぴらり

もみぢ葉の頃はさらなりうぐひすは春だに鳴かずかくや言ふらむ

妹「かあ〜くう〜やあ〜!」

慧「お…怒った!？」

妹「今日という今日は許さない!」

慧「うぐいすは春さえ鳴かないで、こんなことを言っているのか。ということか？」

妹「うん、ホント生意気な奴め！ 私の春を知らないくせに！」

慧「妹紅にも春があったのか…」

妹「何か言った!？」

慧「い、いや、何も…」

妹「しかも折り句になってるのよ!」

慧「え？ ああ、本当だ…ってかバカって幼稚だな…」

妹「今回ばかりはやつつけてやるわ!」

慧「そうか。私も手伝うか？」

妹「いや、私一人で十分！」

慧「わかった、頑張ってくるんだぞ！」

妹「じゃあ行ってくる！」

慧「晚ご飯までに帰ってくるんだぞ！」

妹「わかってるー！」

……

どーん

妹「おんどりゃー輝夜ワレー！」

鈴「うわわわわ…なんか広島弁風の人が来ましたよ！」

輝「あら、来たわね妹紅！」

妹「てめえ、あんなこと書きやがって！」

輝「先に言い出したのはあんたでしょ！」



妹「ほっぺた出せコラー！」

輝「上等やー！」

がっ！

妹「いぎぎぎぎー！」

輝「うぐぐぐぐー！」

妹「わらひのじえんしえーきはしゅごかったのよー！」

輝「は、ろっせ、ぶしゃいくなおとこばっかりれひよー！」

妹「しよれはあんたれひよー！」

輝「わらひはイケメンばかりよー！」

妹「は、しよの顔で？」

輝「あんらがひっはるかられひよー！」

妹「ぶーしゅ、ぶーしゅー！」

輝「あんららって変な顔よー！」

妹「これがかあいい顔らのー！」

輝「は、自分れ言うとか！」

妹「らによー！」

輝「ほつちこそ、らによー！」

妹「いぎぎぎぎぎー！」

輝「うぐぐぐぐぐー！」

妹「いぎぎぎぎぎー！」

輝「うぐぐぐぐぐー！」

鈴「…仲がいいんだか、悪いんだか…」

永「ほつときましょ。疲れるだけだから」

鈴「それで師匠」

永「なあに？」

鈴「オチはどうしましょうっ？」

永「別にいいんじゃない？」

鈴「投げっぱなしですか？」

永「自然に落ちるわよ。秋だもの」

鈴「え？ それってどういっ…」

永「ほら、早く戻って実験の続きよ」

すたすた

鈴「あ、待って下さいよ！」

たっ たっ たっ

鈴「あ！ もしかして！」

たっ たっ たっ

鈴「秋（fall）！！」



おまけ 秋来にけらし(後書き)

チ「…あたい関係ないじゃん…」

1 おせんべい、の巻。 (前書き)

お久しゅうございます。

みなさん、お元気でしたか？

私は愚かにも体調を崩してしまい、更新がここまで遅れることと相成りました。

申し訳ございません。

しかも、第4部は途中までしかできていないのですが、投稿しながら執筆した方が具合がよさそうなので、そうします。

途中で更新が停滞しないようがんばりますので、お付き合いくださいませ。

長々と失礼しました。

それでは、お楽しみください。

## 1 おせんべい、の巻。

『皆さんどうもー。』

レポーターの俺です。

今日は俺のお宅に来ておりまーす。  
早速入ってみましょう。

こんにちはー』

ガチャ

魔「…おかえり」

『うーわ、いるしー!』

魔「…お前…大丈夫か…?」

『いや、ほつといてよ! 一人だと思ったの!』

魔「一人でもやらないだろ…!」

『今日は自分を解放する日なの!』

魔「…そろそろ帰るぜ。じゃ」

『待ってよ! 安全だから!』

魔「…本当か？」

『台風の可航半円くらい安全だよ』

魔「…あんまり安全じゃないな」

『お菓子あげるからさ』

魔「じゃあ残る」

『…即答ですか』

魔「もらえる物はもらっておくぜ」

『煎餅だけど、いい？』

魔「おいしい？」

『おいしい』

魔「じゃあ食べる」

『うちに来てから、ちゃんと手洗った？』

魔「洗った洗った」

『うそつき。ちゃんと洗ってきなさい』

魔「ちえーっ」



とじとじ

とじとじ

魔「なんでついて来るんだよ」

『俺も手洗わないと』

魔「ああ、そうか」

キュッ

ザー

じじじじ

じじじじ

キュッ

ふきふき

じじじじ

じじじじ

魔「洗ったぜ」

『よし、オーケーだ』

がさごそ

『はい、どーぞ』

魔「たしかに、うまそうだな」

『でしょ？』

魔「いただきぜ」

『召し上がれ』

バリボリ

『おいしい？』

魔「おいひい」

『お茶、ジュース、紅茶』

魔「お茶」

『了解』

とくととこ

バリボリ

魔「うん、うまいうまい」

とくととこ

『はいようっ』

魔「お、はんきゅー」

『ブレーブス』

魔「？」

『いや、気にしないで』

バリボリ

魔「んぐんぐ」

『どれ、俺も』

バリボリ

『おお、イケる』

魔「だろ？」

『うん』

バリボリ

バリボリ

『んまい』

魔「海苔があったら、もっとうまいんじゃないか？」

『はふほほ、ほっへほほー』

とじとじ

がさこそ

とことこ

『はいよ』

魔「よし、これを巻いて、っと」

『俺も、巻いて、っと』

バリボリ

バリボリ

魔「んまいな」

『んまいね』

バリボリ

バリボリ

魔「明日パジャマパーティーだから」

バリボリ

『はい』

バリボリ

魔「うまいうまい」

バリ…

『…いや、ちょっと待って』

魔「うまいな」

『うん。うまいけども』

魔「どうした？」

『どうしたって…さっきなんて言った？』

魔「大丈夫か？」って」

『それ、冒頭じゃん。もっと後』

魔「『大丈夫か？ って』 って」

『いや、面倒くさいな…』

魔「明日パジャマパーティーって」

『本気？』

魔「本気だぜ」

『…何も準備してないよ？』

魔「きつと、なんとかなるだろう」

『なるかなあ』

魔「なるって。煎餅もこんなにうまいんだ」

『そっだよね』

魔「ああ、きつと、な」

『あははははは』

魔「あははははは」

『あははははは』

魔「あははははは」

……

『…煎餅関係ないじゃん』

魔「今気付いたのか？」

『イエス』

魔「ニブいな」

『くそ…悔しい』

魔「で、開催しても大丈夫なのか？」

『キャンセル利くのか？』

魔「不可能だな」

『…なんで確認した』

魔「一応な。念のため」

『今回は誰が来るのか？』



魔「いつも通り、秘密だぜ」

『そっかあ』

魔「でも、今回は3人しか呼んでないから」

『あ、そうなんだ。ちょっとラクかも』

魔「そうでもないと思うけどな……」

『え?』

魔「いや、何でもないぜ」

『そっ? ならいいけど』

ピンポーン

魔「お、誰か来たぜ」

『はいはい』

ガチャ

咲「……………」

『ちっちゃん!?!』

咲「……………」

『…ひどく憔悴してますね』

咲「…いろいろあったのよ」

『……………』

咲「…いろいろ、ね」

『さ…咲夜さん、パーティーに参加するんですか?』

咲「ううん、私じゃないわよ」

『じゃあ…誰が…』

ひよこっ

フ「わたしよ!」

『フ…フランちゃん!?!』

咲「おしとやかに振る舞ってくださいね」

フ「うん! おじやましませーす」

『うん。あ、靴は脱いでね』

フ「はい！」

すたたたた…

『……………』

咲「……………」

『…やっぱりバレましたか』

咲「…ええ。惨劇寸前だったわ」

『パーティーへの参加を条件に折り合いを付けた、と』

咲「そうよ。これ、布団と食材ね。じゃ、頑張って」

『…はい』

すたすた

『…覚悟を決めるんだ、俺』

ボタン

とことこ

『…ふう』

フ「魔理沙、あそぼうよ」

魔「いいぜ。弾幕以外な」

フ「えー」

魔「そうだ。凄い魔法を見せてやろう」

フ「なにになに!?!」

魔「こうやって…左手の親指が…」

フ「うんうん」

魔「ほら、伸びた」

フ「えー、うそだー。そっち見せて」

魔「ダメダメ。こっちは見せられないぜ」

フ「なんか変だったもん」

魔「魔法だからな」

フ「えー、魔法じゃなかったわ」

『…意外にも魔理沙に任せておけば大丈夫そうだ』

フ「あ、そういえば」

魔「ん、どうした?」

フ「いつしよに遊ばないの?」

魔「ん? あいつか?」

フ「うん。3人で」

魔「いや、やめといた方がいいぜ」

フ「どうして?」

魔「実はあいつは…」

フ「あいつは?」

魔「ロリコン野郎なんだ」

『…聞こえてるよ』

魔「違うのか？」

『……………』

魔「……………」

『…違う』

魔「…絶対こっち来るなよ」

## 2 ひじょうじき、の巻。

フ「ろりこんって何？」

魔「こついうカッ「悪い男のことだぜ」

『……………』

フ「なるほど」

『ああ、納得しちゃうんだ…』

魔「こんなやつには近寄らないで、私と遊ぼうな」

フ「うん！」

『…くつ、俺の何がいけないというんだ』

魔「全部だな。全部」

フ「ぜんぶだなぜんぶ」

『…ひどい』

魔「絵本でも読むか」

フ「どんなの？」

魔「確か本棚に…あったあった」

フ「ふーん。こんながあるのね」

魔「どうだ？」

フ「クライじゃないわね」

魔「…レミリアみたいな言い方だな」

フ「ねこの話ね」

魔「ああ、そうだったな」

フ「ふーん」

魔「面白いか？」

フ「きよーみぶかい」

魔「それならよかったぜ」

ピンポーン

『おっ』

魔「来たか。ちょっとそれ読んでてくれ」

フ「うん」



『今出まーす』

魔「私も出るぜ」

『ほいほい』

すたすたすた

ガチャ

輝「こんばんはー」

『輝夜さん!』

永「こんばんは」

『八意先生!』

魔「ようやく来たか」

輝「ようやく来たわよ」

『…まさかの輝夜さんだ…』

輝「ちゃんともてなしてよ？」

『が、頑張ります』

輝「お姫様なんだからね」

『はい、頑張ります』

輝「それはそれは極上の待遇を……」

永「はいはい。いいから自分で布団を持ってください」

輝「お姫様に布団持たすかね」

永「はあ……ここまで運んだのは誰だと思ってるんですか」

輝「ふふ、冗談よ。ありがとう」

永「じゃ、私はこれで」

魔「え、帰るのか？」

永「ええ、用事が入ったのよ。ごめんなさいね」

魔「うーん……じゃあ仕方ないか」

『八意先生も参加する予定だったの？』

魔「そうだったんだけどな」

永「ま、おてんば姫をよろしく頼むわ。じゃ、また」

すたすた

輝「まったく。誰がおてんばよ」

『お二人とも仲いいんですね』

輝「そう？ べつに普通よ？」

魔「とりあえず中に入ろうぜ」

『そうだね』

ボタン

『それにしても、輝夜さんが来るとは』

輝「こつ見えても結構ヒマなのよ」

魔「まあ、ちゃんとヒマそうに見えるけどな」

『この間の、おまけでの活躍はすごかったですね』

輝「ああ、聞いたのね、その話」

魔「苦情が殺到しなくてよかったな」

フ「ねー、つぎのページまだー？」

天「待つて。私はまだ読んでるの」

輝「布団はどこに置けばいいかしら？」

『あ、その辺りにどうぞ』

輝「はいはい」

フ「あ、もどってきた」

魔「戻って来たぜ」

天「ねえ、飲み物ちょうだい」

『あ、うん、わかったー』

すたすた

『…っつて、てんこちゃん!?!』

天「なによ」

『待つて! どうしているの!?!』

天「だって今日はパーティーなんでしょ」

『え…あれ？ 魔理沙が呼んだの？』

魔「…全く呼んでないぜ」

天「じゃあ何よ、呼ばれなかったら来ちゃダメなわけ？」

『いや、そこまでは言わないけどさ』

魔「…というか、普通はダメだけどな」

『まあ、それは百歩譲るとしてもさ』

天「なによ」

『どっから入って来たの？』

天「どっからって、そんなもん…」

『そんなもん？』

天「窓から」

『不法侵入！』

天「まあ、許しなさいよ」

魔「…上から目線なところがイラッとくるな」

『…ってか…窓から入るって…』

天「なによ?」

『うーわ、土足じゃん!』

天「それが?」

『「それが?」じゃないよ!』

天「何、大声出してんのよ」

『足跡ついちゃってるじゃん!』

天「うん」

『…くっ…こいつ…』

天「何か文句あんの?」

『あるよ!』

天「あるの!」?

『いや、何で驚くの!?』

天「えー…なんか私が悪いみたいな言い方…」

『いや、悪いよー!』

ピンポーン

『え、あ、はい』

たっ たっ たっ

ガチャ

衣「どうもこんばんは」

『え、あ、衣玖さん、こんばんは…』

衣「あの…総領娘様が勝手にお邪魔してませんか？」

『はい、勝手にお邪魔してます』

衣「すみません。私の監督不行き届きで」

『いえいえ。衣玖さんは全然悪くありませんよ』

衣「いえ、すみませんでした」

『…まあ、それよりその小脇に抱えてるパジャマらしきものが気に

なるんですけど』

衣「あ、これはネグリジエです」

『あ、そうでしたか…あははは…』

衣「では、お邪魔します」

すたすたすた

『…つて、え？』

とてとて

『…もうなんでもいいや…』

天「あら、衣玖」

衣「ああ、やつぱり…」

天「衣玖も窓から入れればよかったのに」

衣「いけませんよ、そんなこと」

天「えー、いいじゃーん」



衣「もつと行儀よくお願いします」

天「面倒だなあ」

衣「床もこんなに汚して…」

天「ああ、そうね」

衣「靴をそのままに入ったらダメですよ」

天「へえ、知らなかったわ」

衣「いいですか、総領娘様」

天「何よ」

衣「人の家にお邪魔するときはですね」

天「ときは？」

衣「靴は、こつこつ風ですね…」

天「こつこつ風に？」

衣「泥を落とすんです」

『つて、衣玖さんも土足かよ！』

### 3 ちょうせんしゃ、の巻。

衣「申し訳ありません。土足禁止と存じ上げなかったもので…」

『いえ、いいんです。お気になさらず』

天「そうそう。気にしない気にしない」

『てんちゃんは、もっと反省しようか』

天「はいはい」

『…反省してないな』

衣「本当にすみませんでした」

『気にしないでください。雑巾がけまで手伝って頂きましたし』

天「そんなことより飲み物ちょうだい」

『そんなことって…』

天「ジュースがいい。炭酸じゃないやつね」

『まったくもう…わがままなんだから』

衣「ご迷惑をおかけして、すみません」

『あ、いえいえ。大丈夫ですよ』

天「なんで衣玖には優しいのよ」

『…当たり前だと思うなあ』

天「ははあん。さては惚れたのね。うわ、キモ」

『……………』

衣「すみません。幼児だと思って無視してください」

『…はい』

天「誰が幼児よ!」

『…くっそ、うっとうしい……』

……………

『はい、オレンジジュース』

天「遅い」

『それはすみませんね!』

天「まあ、いいけど」

『衣玖さんもオレンジジュースでよかったですか?』

衣「あ…実は私…その…」

『え、はい』

衣「大変申し上げにくいのですが…」

『…な、なんでしょう?』

衣「オレンジジュースは…」

『オレンジジュースは?』

衣「大好物です」

『…ああ、そうですか…紛らわしい…』

衣「では、いただきます」

『フランちゃんと魔理沙も同じでいいよね?』

フ「うん」

魔「いいぜ」

『はい、どーぞ』

フ「ありがとう」

『…えへへ…どういたしまして』

魔「ロリロンめ」

『いや、違うよ。そういうのじゃなくてね』

魔「なんだよ」

『子供の純粹さが…ほら、ね？』

魔「お前よりも、ずっと年上だけどな」

『まあ、とにかく、魔理沙も飲みなよ』

魔「仕方ない。そうするか」

『はいよ』

魔「サンキュー」

『輝夜さんもオレンジジュースでいいですか？』

輝「ええ、いいわよ」

『どござ』

輝「ありがとう」

『ふう、俺も飲むとしよう』

ごくごく

天「ねえ」

『ん?』

天「何か面白いものはないの?」

『マンガならあるよ』

天「そう。じゃあそれを読むわ。貸して」

『そっちの本棚にあるからね』

天「はいはい」

フ「ねえ、魔理沙」

魔「ん、どうした?」

フ「わたしも読みたい」

魔「あー…フラン向きのマンガってあったか？」

『うーん、多分ないかな』

魔「そうだよな…」

フ「ないの？」

魔「しいて言うなら、これぐらいか」

フ「これ？」

魔「とりあえず読んでみるか？」

フ「うん、読んでみる」

天「へえ。それ、面白そうね。貸して」

『……………』

魔「……………」

輝「……………」

衣「……………」

フ「うん、いいよ。はい」

天「よし。じゃ、あんたはこれでも読んでなさい」



フ「うん。ありがとう」

『……………』

魔「……………」

輝「……………」

衣「…恥ずかしい限りです…」

『なんとコメントしたもので…』

魔「天人って、皆あんななのか？」

衣「いえ、まさか」

輝「なかなか豪胆ね」

『…なんか先が思いやられる』

魔「頑張れよ」

『ありがとう』

魔「さて、私も何か読むか」

『新しいマンガが右の方にあるから』

魔「お、じゃあそれにしよう」

衣「私も、本をお借りしていいですか？」

『あ、どうぞどうぞ』

衣「では、お借りします」

輝「ところで、私も何かしたいのだけれど」

『あ、はい。マンガでも読みます？』

輝「いや、ゲームがしたいわ」

『どんなのがいいんですか？』

輝「パ○プロあるんでしょ？ それやるわ」

『…野球ゲームやるんですか？』

輝「ええ。何かおかしい？」

『いえ、まあ、とにかく今準備しますんで』

輝「対戦しましょ。あなた強いのか？」

『初心者よりは強いと思いますけど』

輝「ふふふ。私をナメてるわね」

『いえ、ナメてるというか…』

輝「まあいいわ。始めましょ」

『電源入れますよ』

輝「ええ、楽しみだわ」

『つてか、パーティーなのに二人用のゲームやってて大丈夫ですかね？』

輝「私がゲームしたいんだから、いいんじゃない？」

『…さすがお姫さまですね』

輝「とにかくプレイボールね」

……

『…強すぎ…』

輝「もうちょっと頑張ってほしかったわね」

『0対27つて…』

天「あはは、負けてやんの」

『だって輝夜さん強いんだもん』

天「持ち主でしょ。頑張りなさいよ」

『じゃあ自分がやってみなよ』

天「いいわね。そうするわ」

輝「やる？」

天「ええ」

輝「ふふ、受けて立つわ」

天「私がコテンコパンコにしてやるわ」

『「コ」はどこから来たんだ…』

輝「で、やり方わかるの？」

天「知らないけど、すぐできるようになるわ」

輝「…どこから来る自信なのかしら」

天「それで、やり方は教えてくれるの？」

輝「いいわよ」

天「そうねえ、じゃあ、まず…」

輝「まず？」

天「まずわからないのは……」

輝「ええ」

天「あなた誰？」

輝「帰れ、お前」

#### 4 ぶんすかぶん、の巻。

天「帰らないわよ」

輝「何なのよ、あんたは」

『まあ、野球わからない女の子は多いと思いますよ』

輝「…いや、野球以前の問題でしょ」

天「いいからいいから。はい、教えて」

輝「教えてって…どこから教えればいいのよ？」

天「一から」

輝「…何時間かかるかしら…」

『…じゃ、頑張ってくださいね』

輝「あ、逃げるのね…裏切り者ッ…」

『…聞こえない聞こえない…』

すたすた

『衣玖さんに、ちょっとかい出してごよー、っと』

すたすた

衣「……………」

『…読書姿が絵になるなあ…』

衣「あ、どうかされましたか？」

『いえ、どんな本を読んでらっしゃるのかな、と』

衣「大法峠です」

『…あ、マンガでしたか』

衣「はい。これは面白いです」

『まあ、喜んでいただけで何よりです』

衣「サブミッションは素敵ですね」

『…幽香さんみたいにならないでくださいね』

衣「…といたしますと？」

『いや、まあ、うん、じゅっくりお楽しみください』

すたすた

『フランちゃんは何読んでるの?』

フ「マンガよ」

『面白い?』

フ「ええ」

『そっか。それはよかった』

フ「うん」

『……………』

フ「……………」

『夢中みたいだ……………』

フ「……………」

『今度は魔理沙だな』

魔「ん、何か用事か?」

『何読んでるのかな、って』

魔「マンガだぜ」



『面白い?』

魔「まあまあだな」

『そっか』

魔「ああ」

『……………』

魔「……………」

『……………』

魔「……………」

『そういえば、その2巻面白かったよねー』

魔「んー」

『ほら、タライが落ちてきたやつ』

魔「んー」

『あれは大笑いしちゃったよ』

魔「んー」

『でもさ、その後の桶が落ちてきたやつも……………』

魔「あとにしてくれ。今マンガ読んでるから」

『…はい』

魔「……………」

『……………』

とぼとぼ

『…魔理沙は、俺よりマンガが大事なんだ…』

とぼとぼ

『輝夜さん、調子はどうですか？』

輝「この子、弱すぎるわ」

天「…私、初心者なんだけど」

輝「手加減してるじゃない」

天「ルールわかんないんだもん」

『ちゃんと教えたんですか？』

輝「……………」

『…教えなかつたんですね』

輝「インフィールドフライは教えたわよ」

『初心者には難しいと思いますけど…』

天「あ、じゃあ、あんたがルール教えなさいよ」

『え…』

天「何よ」

『……………』

天「……………」

『あ、俺、衣玖さんと約束あるんだった！　じゃあね！』

だっ！

ぐっ！

天「待ちなさい」

『…なんや』

天「ルール教えて」

『えー…やだな』

天「なんでよ」

『だって、てんこちゃん頭悪そうだもん』

天「…ストレートに言うわね」

『てんこちゃんには難しいよ』

天「くっ…あんたねえ…」

『何?』

天「てんこって呼ぶな!」

『いまさら!?!』

天「ちゃんと天子様って呼びなさいよ!」

『いや、そんなこと言われても…』

天「何で天子様って呼ばないのよ」

『だって…』

天「だって何よ?」

『だって俺の天使は小傘ちゃんだし…』

天「何をわけのわかんないこと言ってるのよ!」

『まあ、「てんこ」の方がかわいいって』

天「せめて『様』をつけなさい」

『てんこ様』

天「よし。オツケー」

『…いいんだ』

天「あと、お風呂入りたい」

『…これまた唐突だね』

天「いいでしょ別に」

『いや、まあ、いいけどさ』

天「もう入れるの?」

『いや、そしたら今用意するよ』

天「ふーん。早くしてね」

『はいはい』

すたすた

天「さあ、ゲームの続きをやるわよー」

輝「……………」

天「つて、なんで一人でやってるのよ!」

輝「いや、あなた、おしゃべりに夢中だったから」

天「やめるとは言っていないわよ!」

輝「ふーん。でももうやめちゃったし」

ぴりぴり

天「ったく、おとなしいと思ったら」

輝「……………」

ぴりぴり

天「私のやることなくなっただじゃない」

輝「……………」

ぴんぴん

天「…完全に無視してるし…」

輝「……………」

天「……………」

輝「……………」

天「えい」

ぷちっ

ぷっん

輝「…っ!?!?」

天「あはは、電源を切ってやったわ!」

輝「……………」

天「私を無視した罰よ!」

輝「……………」

天「…何よ、その反抗的な目つきは…」

輝「……………」

天「…あ…あんたが悪いのよ…無視するから…」

輝「……………」

天「…ちよっ…ちがっ…間違えたのよ…わざとじゃなくて…」

輝「……………」

天「…わわわわたしが悪かった、悪かったわよ、ね。うん。あはは  
…」

輝「……………」

天「……………」

輝「覚悟はいい？」

天「……………うん」

……………



『てんこちゃん、お湯沸いたよー』

輝「ふんふふーん」

『あれ、てんこちゃんは？』

輝「さあ」

『どこ行っちゃったんだろ…』

天「…こ…ここに…」

『お風呂沸いたよ。何してんの？』

天「…ぶたれた…」

『へえ。お風呂はどうすんのさ』

天「痛くて立てない…」

『立てるって』

天「立てない」

『だいじょぶだいじょぶ。いけるいける』

天「大丈夫じゃない！ 痛い！ 骨折した！」

『あつそ。いいから早く入ってきてくれる?』

天「…ひどい…」

## 5 せくしーポーズ、の巻。

天「上がったわよ」

『長湯だったね』

天「まあね。で、どうよ？」

『何が？』

天「パジャマに決まってるでしょ、ほら」

『何そのポーズ』

天「はっ、知らないの？ セクシーポーズでしょ」

『セクシー？』

天「セクシー」

『衣玖さんに同じポーズやってもらおうといいよ』

天「は？ 何でよ？」

『その後で、自分の姿を鏡で確認してごらん』

天「？」

『まあ、そういうことだから』

すたすた

天「どういうことかしら？」

すたすた

天「衣玖ー、ちよつとー」

衣「なんですか？」

天「セクシーポーズしてみて」

衣「…はい？」

天「セクシーポーズ。こつやつて」

衣「…こつですか？」

天「うん。セクシーね」

衣「はあ、ありがとうございます…」

天「次は鏡ね」

すたすた

天「よっ、と」

すちや

天「うん、私かわいい」

すちや

天「しかし何か足りない」

すちや

天「…いや、私は認めない。やっぱり私はセクシーだわ」

すたすた

天「やっぱり、ちゃんとセクシーだったわ」

『輝夜さん、次お風呂入りますか？』

輝「ええ、じゃあそつするわ」

天「無視するな」

『どつかした？』

天「私はセクシーだって報告してるでしょ」

『タクシーの間違いじゃない？』

天「…意味分かんないんだけど」

『まあ、うん』

天「で、晩ご飯はまだ？」

『…もうやりたい放題だね』

天「お腹すいた」

『はいはい、後で作るから』

天「唐揚げお願いね」

『わかったわかった』

すたすた

『てんこちゃんといるとロクなこと無いよ』

すたすた

『魔理沙ー』

魔「ん、なんだ？」

『魔理沙は、ご飯とお風呂、どっち先にする？』

魔「もう入れるのか？」

『うん。今は輝夜さんが入ってるから、そのあとになるけど』

魔「じゃあ先に風呂に入るとしよう」

『オツケー。フランちゃんはどうする？』

フ「いっしょに入る」

『魔理沙と？』

フ「あなたと」

『……………』

魔「……………」

『フランちゃん、それはやめておこうね』

フ「わたし、男の人とお風呂に入ったことないの。入ってみたい」

『別に楽しくないんだよ』

フ「そうなの？」

『全然面白くないよ』

フ「なーんだ。じゃあ魔理沙と入る」

魔「そうしような」

フ「うん」

『じゃあ、俺はこれで失礼するよ』

すたすた

『…よく耐えた俺』

すたすた

『衣玖さん』

衣「はい」

『「ご飯とお風呂、どっち先にしますか？」』

衣「ええと、どちらの方が都合がいいですか？」



『どっちでも大丈夫ですよ』

衣「そうですね…では、食事を先にいただきます」

『了解です』

衣「それにしても、いろいろな本がありますね」

『冊数は多くありませんけどね』

衣「哲学書や画集もあるんですね」

『…画集？』

衣「こちら、画集って書いてありますよ？」

『…うわやべえ…ギャルゲの原画集だ…』

衣「すごいですね」

『そ、そんなの見てもつまらないと思いますよ』

衣「そんなことは、ありませんよ」

『あ、えと、衣玖さんには面白くないと思います』

衣「いえ、興味深かったです」

『ああ…もう見ちゃってたんですね…』

……

輝「上がったわよー」

『意外と早いんですね』

輝「そうね。で、どうかしら、このパジャマ」

『桜ですか。似合ってますよ。季節外れですけど…』

輝「あはは、そこは大目に見て頂戴」

『ええ、わかりました。次は誰が入るー？』

フ「はいはいー！」

魔「いや、私たちはあとにしよう」

フ「なんで？」

魔「ゆっくり入りたいたろ？」

フ「うん」

魔「先に入ったら、急いで上がらないといけないからな」

フ「そっか」

『あとでいいんだね』

魔「そうしてくれ」

『じゃあ、衣玖さんどうぞ』

衣「わかりました。では、お借りします」

『どうぞいゆっくじ』

衣「あ」

『どうしました?』

衣「もし良かったらですけど」

『はい、何でしょう?』

衣「一緒に入りますか?」

『え!?!?』

衣「どうですか?」

『え、いや…あ、あの…その…』

衣「ふふ。冗談、ですよ」

『…あ…えつと…』

衣「それでは、失礼しますね」

すたすた

『……………』

天「ぷははははは！」

輝「見事に手玉に取られたわね」

『…はい』

魔「ああいうのをダメ男っていうんだぜ」

フ「かつこわるいね」

『……………』

天「あはははは！ これは傑作ね！」

輝「こんな男も世の中にいるのね」

魔「ひどすぎて目も当てられないな」

フ「あたられないな」

『……………』

天「ねえ、ねえ、今どんな気持ち!？」

『…うるさいわ』

輝「それより、お腹へったわね」

『あ、じゃあ今から作りますね』

天「ねえ、どんな気持ちなのよ」

輝「ええ、頼んだわ」

『よし、じゃあ作るぞー』

天「で、どんな気持ち…」

『もうほっといてよー!』

## 6 みずでっぼう、の巻。

衣「上がりました。次の方どうぞ」

『…くは…すごいエレガント…』

衣「どうかしましたか？」

『いえ、どこかの自称エレガントとは比較にならないな、と』

衣「自称？」

『いえ、なんでもありません。魔理沙ー、お風呂空いたよー』

魔「よし、入ってくるか」

フ「うん」

『すぐご飯食べられるようにしとくからね』

魔「わかった。頼んだぜ」

すたすた

天「で、唐揚げは？」

『作るから！ 作るからもう黙ってて！』

天「なによもう。私がつるさいみたいに」

衣「総領嬢様、あまり迷惑をおかけしてはいけませんよ」

天「迷惑なんてかけてないわよ！」

『……………』

天「なによ」

『…誰か俺と代わってくれ』

……………

天「ああーひまー」

衣「寝そべらないでください」

天「だってひまなんだもー」

衣「なんだもー、と言われましても…」

天「しかし風呂場が騒がしいわね」

衣「楽しそうではないですか」

天「なんかしゃくに障るわ」

衣「その性格は直した方がいいですよ」

天「ほつといてよ。で、衣玖はひまじゃないの?」

衣「ゆっくり過ごすのもいいと思いますけど」

天「えー、なんか年寄りみたい」

衣「……………」

天「そっちのあなたは、ひまじゃないの?」

輝「……………」

天「ちょっと、聞いているの?」

輝「……………」

天「ねえってば」

輝「…ぐう…ぐう…」

天「座ったまま寝てる!」

衣「すごい特技ですね」



輝「…ぐう…ぐう…」

天「信じられないわ」

衣「いたずらしたらいけませんよ」

天「……………」

衣「いけませんよ」

天「…ちよつとだけ…」

フ「魔理沙すごい!!」

天「うわ、何!?!」

衣「お風呂場からですね」

天「ちよつと見に行つてく…」

『「」飯できたよー』

天「あ、ご飯だつて」

衣「ええ、そのようですね」

輝「…ぐう…ぐう…」

天「ほら、ご飯だつてば」

ゆさゆさ

輝「…はっ！ 私寝てた？」

天「がつつり寝てたわよ」

輝「いやー、疲れてるのかしらね」

天「あんた、ゲームしかしてないじゃん」

輝「で、何か用事？」

天「ご飯だつてさ」

輝「ああ、はいはい」

すたすた

天「じゃ、早速食べるわ」

衣「全員揃うまで待ちませんか？」

天「えー、もうお腹へったんだけど」

『まだ魔理沙たち、上がってないの?』

衣「はい」

天「お風呂ではしゃぐ声が聞こえるでしょ」

『じゃあ、もう少し待ってみるか』

輝「それがいいわね」

『……………』

輝「どうかした?」

『…輝夜さん』

輝「なに?」

『…よだれ、たれてますよ』

輝「……………」

……………

フ「魔理沙、すごい！」

魔「まあな」

フ「もう一回やって！」

魔「いいぜ」

びゅっ

フ「わたしもみずでっぼじゃる」

魔「手をこごするんだ」

フ「こごっ？」

魔「すき間を作らないと、水が出ないぜ」

フ「こごっ」

魔「よし、それで水を出すんだ」

フ「えいっ」

魔「違う違う。こごやって押すんだぜ」

びゅっ

フ「こっぴつ」

魔「ちょっと手を貸してみな。こっぴつ」

フ「こっぴつ」

魔「そうそう」

フ「えいっ」

びゅ

フ「できた！」

魔「よかったな」

フ「うん。でも魔理沙のほつがとぶね」

魔「フランも、すぐ飛ぶようになるって」

フ「ほんと？」

魔「ああ。そのためには練習あるのみだ」

フ「あしたから練習する」

魔「のぼせないようにな」

『…すいませーん、ご飯できてますけどー』

魔「あ、悪い悪いー。今上がるぜー」

フ「ごはんの時間ね」

魔「長湯しすぎたか」

ガラガラ

フ「きょうはかわいいパジャマを持ってきたのよ」

魔「そうか。その前にちゃんと体を拭こつな」

フ「うん。魔理沙、背中ふいてあげる」

魔「お、サンキュー」

フ「ふけたよ」

魔「次は私の番だな」

フ「うん、おねがい」

魔「任せてくれ…よっ、拭けたぜ」

フ「ありがとう」

魔「じゃ、パジャマ着て、ご飯を食べに行くか」

フ「うん。これがわたしのパジャマよ」

魔「花柄か。かわいいと思うぜ」

フ「うん。魔理沙のもかわいい」

魔「そうか。ありがとうな」

フ「それじゃ、ごはんね」

魔「そうだな」

ガラガラ

魔「上がったぜ」

『ずいぶん長かったね』

魔「悪い悪い。ちよっと時間を忘れてた」

天「まったく。ご飯が冷めちゃうところだったじゃない」

衣「まあ、そう言わずに……」

『フランちゃん、お風呂は楽しかったかい?』

フ「うん!」

『それはよかった』

輝「それじゃあ、そろそろ食べましょ」

『そうですね。みんな準備はいい?』

魔「オツケーだぜ」

『それでは、みんな仲良く、いただきます』

魔「いただきます」

フ「いただきます」

天「いただきます」

衣「いただきます」

輝「いただきます」

天「お、ちゃんと唐揚げがあるわね」

『たくさん作ったからね』



天「なかなか気が利くじゃない」

『あはは、そりゃどうも』

魔「もぐもぐ」

フ「もぐもぐ」

『どう、おいしい?』

魔「まあまあだな」

フ「おいしい」

『そかそか』

輝「私も唐揚げもらっわね」

『どうぞどうぞ。衣玫さんも遠慮せず食べてくださいね』

衣「ありがとうございます」

天「あ」

『どうしたの?』

天「……………」

『……………』

天「えっと、今起こった出来事なんだけどさ」

『うん』

天「唐揚げあるでしょ？」

『あるね』

天「唐揚げを…」

『うん』

天「床に落とした」

『おい、掃除しろ』

7 どうぼつさん、の巻。

天「ねえ」

『ん？』

天「たしかに私にも非があったかもしれないけどさ」

『…他の誰に非があるのさ』

天「なんか私にだけ当たり強くない？」

『…んー、仕方ないと思うな』

天「何、差別なの？」

衣「まあ、いいじゃないですか。今晚は無礼講で」

魔「そうだな」

輝「いいわね」

フ「おにくおいしい」

天「私の味方はいないんだ…」

フ「ねえ魔理沙、これは何？」

魔「普通の野菜スープじゃないか」

フ「ふーん。咲夜のはちがうのね」

魔「どこが違うんだ？」

フ「咲夜のはコガネ色にかがやいてたわ」

魔「へえ。さすが咲夜だな」

『おいしいんだろうな』

衣「このスープも、とってもおいしいですよ」

『あ、ありがとうございます』

魔「そういえば、マヨネーズはどこだ？」

『え、何にかけるの？』

魔「もちろん唐揚げにだぜ」

『…カロリーとか高そうだよね』

魔「う…まあ…な」

『とりあえず持ってくるけど、かけすぎないようにね』

すたすた

すたすた

『はい』

魔「サンキュー」

輝「あ、ちなみに」

『え、なんですか？』

輝「私はご飯に、さくらでんぶをかける派閥なんだけど」

『…無いです』

天「あ！　そういえば、私、お酒持ってきてたのよ！」

衣「つえええつ！？」

天「…何よ。　つてか、ご飯粒飛んできたんだけど…」

衣「そそそそんな礼儀、どこで覚えたんですか？」

天「…私のことを何だと思ってるのかしら…」

魔「で、どんな酒なんだ？」

天「ふっふっふ。あんた達が飲んだことないくらいの上物よ」

輝「それはいいわね。早速頂きましょう」

フ「おさけー」

魔「フランはやめておこうな」

フ「私ものみたい」

魔「別においしくないぜ」

フ「いいの。わたしものむ」

『フランちゃん、よく冷えたやつがあるよ』

フ「ほんと？ おさけ？」

『うん。ちょっと待っててね』

すたすた

すたすた

『はい』

フ「わーい。ありがとう」

魔「…お…お…」

『何?』

魔「…お前…いつの間にそんなものを調達したんだ…」

『子供のビールのこと?』

魔「ああ」

『…まあ、咲夜さんがフラグ立てたから…』

魔「お前の用意のよさは見直したぜ」

輝「じゃ、早速酒宴といきますか」

衣「そうですね」

フ「わたしがカンパイって言う!」

『爛は?』

魔「とりあえず飲もうぜ」

天「あつためなくても、おいしいらしいわよ」

『…ウワサか』

衣「あの、お酒ついでおきましたからね」

『え、おお…衣玖さんマジ女神…』

魔「……………」

フ「もう言っていていい？」

『あ、うん、どうぞ』

フ「じゃあ、カンパニー！」

「『『カンパニー』』」

魔「おお、これは」

輝「いいわね」

『ごんなの初めて飲んだよ』

天「ふふん。でしょ？」

衣「おいしいですね」

フ「ほんと、おいしいわ」

魔「唐揚げがよく合うぜ」

『あ、みんな、唐揚げ以外も食べてね』



魔「……………」

天「……………」

『だから唐揚げばかり食べないでってば!』

魔「やっぱり肉だよな」

天「な」

『な、じゃないよホントに』

輝「ちゃんと野菜も食べないと、キレイになれないわよ」

衣「そうですよ。サラダもこんなにおいしいのに」

『この二人が言うと言得力あるな…』

フ「わたしもちゃんと食べてるよ」

『うんうん、偉いね』

魔「マヨネーズは野菜に入らないのか？」

『…かすりもしてないね』

輝「あ」

魔「なんだ？」

輝「くしゃみ出そう…」

魔「そうか。頑張れよ」

『…その返答はおかしいよね』

輝「ふぁ…ふぁ…」

天「……………」

衣「…なんで緊張してるんですか」

天「…いや、なんか」

輝「ふぁっ…！」

『……………』

魔「……………」

天「……………」

衣「……………」

フ「もぐもぐ」

輝「……………」

『え…終わったんですか？』

輝「不発だった」

『…ああ、そうでしたか』

魔「…なんでみんな緊張したんだろうな」

衣「すごい一体感でしたね」

天「一体感って…」

フ「ねえねえ」

『フランちゃん、どうしたの？』

フ「それとって」

『これ？』

フ「うん」

『はいどーぞ』

フ「あーん」

『…食べさせなアカンのかい』

魔「おい、あんまり調子に乗るんじゃないぜ」

『いや、わかってるけどち…』

フ「あーん！」

『ああ、はいはい』

フ「あー……」

魔「……………」

『はいはい、あーん』

フ「あーん……」

ぱくっ！！

フ「！！！」

輝「！！！」

天「！！！」

衣「！！！」

魔「……もぐもぐ……」

『……え……っと……』

フ「ま……魔理沙が……魔理沙が……」

『あ……フランちゃん……泣か……』

フ「魔理沙がわたしのとつたあああああ！　うわあああああん！」

『ちよ……魔理沙、何してんのさ』

魔「お前が鼻の下を伸ばしてたからだな」

『伸ばしてないよ!』

魔「幻想郷の風紀を守るために仕方なかったんだ…多分」

『もー、フランちゃん泣いちゃったじゃん』

フ「びええええええ!」

魔「…うん。お前が悪い」

『…衣玖さん、こづいづのどごう思います?』

衣「…え…あ…う…」

『…どうして目を逸らすんですか』

フ「びええええええ!」

魔「泣くなよ…私が食べさせてやるから」

天「あ、わかった! ジェラシーね!」

魔「…は?」

天「こんなチビっこい子に妬いたのね!」

『ああ…わけわかんないこと言い出したよ…!』



天「そつちがその気なら…！」

ぽいつ

魔「くっ…お前！」

『ちよ…やめ、やめなさい』

天「あんたが先に投げたんでしょ！」

魔「お前が変なこと言うからだ！」

『ちよ、輝夜さんも何か言ってやっ…あれいない？』

ぴりぴり

輝「ふんふーん」

『いつの間にかゲームしてるし！』

フ「びええええええ！」

『ああ…フランちゃん、もう泣かないで…』

天「アツいわねー、ヒューヒュー！」

魔「そんなんじゃないって言ってるだろ！」

『ケンカしないで、ほら、ね？』

衣「…青春、ですか。私にも青春時代がありました。昔はいろいろな無茶をしたものです。懐かしいですね…」

『…何言ってるんですか？』

輝「ふんふふーん」

『あの、輝夜さん、力を貸して下さいよ…』

フ「びええええええ！」

『…フランちゃん、まだ唐揚げはあるから…』

天「仲良しこよしー！」

魔「誰がこんなのと仲良しなもんか！」

『…こんなのって…』

衣「…例えば、深夜に学校の窓ガラスを残らず叩き割ったり…」

『…それ、話盛ってますよね？』

輝「ああっ、こら、エラーしてる場合じゃないでしょー！」



『いや、ゲームしてる場合じゃないでしょ……』

天「キスしなさいよ、キス！」

魔「するか、そんなこと！」

『…ケンカ…やめて…』

フ「びええええええ！」

天「ぎゃあぎゃあ」

魔「ぎゃあぎゃあ」

衣「若さとは食欲なのかもしれません」

輝「ふふふふーん」

『……………』

『…助けてママん』

8 どあしまります、の巻。

『……………』

天「なんか疲れたわ」

魔「誰のせいだよ」

天「あんたのせいでしょうが」

衣「もうケンカしないでくださいね」

輝「ふんふーん」

フ「ねえ、だいじょうぶ？」

つつん

『……………』

衣「放心状態ですね」

天「まったく。頼りないわね」

魔「おい、しっかりしろー」

『…なんだい』

魔「食事が終わったぜ」

『…ああ、やっと終わったか…』

天「で、このあとは何するの？」

魔「特に決めてない」

フ「なんかしてあそびましょ」

魔「そうだな」

すたすた

『…はあ…後片付けか…』

かちやかちや

『…がんばって片付けるか…』

かちやかちや

『よっ、向こうのお皿を取っ…』

すっ

『え…』

衣「お手伝い、しますよ」

『…い…衣玖さんっ…!』

………

魔「さあ、何をするかな」

フ「たのしいことがいいわ」

天「楽しいことって何よ」

フ「おもしろいこと」

天「同じじゃん」

フ「なにがたのしいと思う?」

天「世の中全て思い通りになったら楽しいと思う」

フ「あっそ」

魔「じゃあ双六でもするか」

輝「博打ね。懐かしいわ」

魔「双六だつての」

フ「やるうやるう。はやくやるう」

魔「そうだな」

天「コマとかは？」

フ「ごーっ、しゅーとー！」

魔「おいおい、そのコマじゃないぜ」

輝「あるもので代用すればいいわね」

天「盤は？」

魔「無い物は自分で作るんだぜ」

天「はは、何それビンボーくさーい」

魔「じゃ、お前不参加な」

フ「はやく、つくろつよ」

魔「そうだな」

輝「一人一枚ずつ紙に書いて、繋げるっていつのはどいつ？」

魔「お、それはいいな」

フ「わたしが1番おもしろいをつくるわ」

魔「よし、じゃあ早速作ってみるか」

輝「どんなマスを作ろうかしら」

魔「私は、あとの二人に話してくるぜ」

すたすた

『それで、断ったんですけど、ついてくるんですよー』

衣「まあ、ふふふ。それは大変でしたね」

『だから言っただけやりましたよ』

衣「どのようですか？」

『俺はマイケルじゃないよ！』

衣「…くすっ…ふふ…それはまた…」

『そしたら向こうも同じように…』

魔「せいっ」

『ぎゃあー!』

魔「いつまでしゃべってるんだ」

『…い、いきなり膝がつくんしないでね』

魔「双六をやるから早く来てくれ」

『すじろくっ!』

衣「懐かしいですね」

『双六セットあるの?』

魔「作る」

『へえ、なるほどね』

衣「なんだか童心に戻りますね」

魔「たまには子供っぽいのもいいだろ」

『せやね。んじゃ、やろうか』

衣「小さいときは、全部のマスイベントで埋めましたよね」

『ああ、そうなんですよ。3マス進む、の先が5マス戻るだったり

とかね』

衣「あと、ゴール直前に、スタートに戻る、とか」

『ありましたありました。ものすごく腹立ちますよね』

衣「ええ。泣きたくなくなります」

『あと他には…』

魔「せいっ」

『ぐえっ！』

魔「早く居間に行こうぜ」

『…ひ、膝かっくんは…やめて…』

魔「他の人が待ってるからな」

『はいはい』

すたすた

輝「うーん…使えそうな紙は無いかしら」

『うわっ！ ちょっと…』



輝「ん、どうしたの？」

『かかか勝手にあさらないでくださいよ！』

輝「見られて困るものでもあるの？」

『ありますよ！』

天「あ、わかった！ エロ本ね！」

輝「紙が無いと双六ができないのよ」

『それは俺が出しますから！』

天「私がエロ本のありかを暴いてやるわ！」

輝「気がはやっちゃって」

『まったくもう』

天「さあエロ本はどこにあるのかしらね」

輝「あの子はもう使っちゃってるけど」

『えー！』

フ「ふんふふーん」

『ふ…フランちゃん、それは何の紙かな？』

フ「ふつうの紙よ」

『あ、コピー用紙か。ならいいや』

魔「私たちの紙はどこだ？」

『はい、これ使って』

魔「よし。早速作るぜ」

『はい、どーぞ』

輝「ありがとう」

『衣玖さんも、どーぞ』

衣「ありがとうございます」

『ではでは、俺も作り始めるとしよっ』

天「まだ私もらってないんだけど」

輝「ねえ、筆はどこ？」

『…鉛筆でいいですか？』

輝「ええ、いいわよ」

『その鉛筆立てにありますから』

輝「ああ、了解したわ」

天「私の紙は？」

衣「消しゴムのカスは床に捨てても大丈夫でしょうか？」

『…だいじょびません』

衣「では、ごみ箱に捨てるのでしょうか？」

『…はじめからそうしてください』

天「あのー…私の紙、無いの…？」

フ「できた！」

魔「お、やけに早いな」

輝「先に作り始めてたからじゃない？」

フ「はやく始めようよ」

魔「待て待て。まだ皆できてないんだよ」

フ「えー、早くやろう」

魔「ちょっとだけ待っていてくれ」

フ「はい」

天「……………」

フ「？」

『よし、できた』

魔「…早いな」

『まあね』

魔「じゃあ、フランの相手をしててくれ」

『あいよ』

フ「ねえ、あそぼうよ」

『じゃあ、折り紙でもしよっか』

フ「うん、いいよ」

『何作りたい？』

フ「うーんとね、飛行機！」

『紙飛行機か。こっやって、こっやって…』

フ「こっっっ…」

『そっそっ、それでこっっ』

フ「こっつ…できた！」

『うん、じょうず』

フ「びゅーん」

『すごいねー。飛んでるねー』

フ「びゅーん」

『ふう…大人しく遊んでくれそうだ』

フ「びゅーーーーーーん、どっ！ーん！」

どっ！ーん！

『かはっ…！』

フ「きちょー、何かにぶつかりました！」

『…つく…』

フ「しんぱいするな、ただの事故だ！」

『…あ…安全操縦をお願いします』

フ「はい」

『…痛かった…』

フ「じえいあーる！」

『…ただの長方形じゃん…』

フ「しゅっしゅっぽっぽー」

『汽車と間違えてるみたいだけど、まあ、いいか』

フ「ううううおん！」

『それ、F1の効果音だね』

フ「ぽっぽー…、どーん！」

どーん！

『ぐおっ…』

フ「しんぱいするな、ただの事故だ！」

『…っあ…っほっ…』

輝「あ次は、あ白っ石、白石につ止まりっます。降り口、右側、です」

フ「じょうず！」

魔「何のマネだ？」

衣「電車のアナウンスですね」

魔「何だそりゃ」

フ「もう一回やって！」

輝「ダァーッ、シエアリアス！」

フ「おーっ、ぱちぱちぱちー」

衣「ぱちぱちぱちー」

魔「…似てるのか？」

輝「ふっ、ありがとうみんな！」

『…誰か俺を心配してくれ…』

9 いかいやすみ、の巻。

魔「よし、皆準備できたな」

天「…あの…私まだなんだけど…」

魔「じゃあ始めるか」

天「待つて！ 何で無視するのよ！」

魔「……………」

『…ちゃんと大人しくできるの？』

天「するから無視しないでよ！」

魔「うーん…」

天「あ、まだお酒があるわよ！ ほら、だから私も仲間に入れてよ！」

魔「…どうする？」

輝「別にいいんじゃないの？」

衣「うーん…」

天「衣玖まで…」



フ「はやくはじめようよー」

魔「仕方ない。6人全員でやるか」

天「仕方ないってというのが気になるけど…」

輝「私のが、1面ね」

『それじゃ、俺は2面で』

魔「私のは3面にしよう」

フ「わたし、4番目」

衣「私のが最後になってしまいましたか」

天「だから、私がいるってば…」

魔「作ってあるのか？」

天「ううん。だって紙もらってないし」

魔「じゃあ不参加でいいな」

『そうだね。じゃあ始めようか』

天「待って！ 何でいじめるのよ！」

『すぐ作るっ？』

天「すぐ作る」

『じゃあ2秒以内ね。よーい…』

天「え！ ちよっ…」

『どん！ はい、終わりー』

天「早すぎるわよ！」

『しかたないなあ、はい、紙』

天「急いで作るわ」

フ「ねえ、はやくはじめようってば」

輝「コマは？」

『クリップがありますよ。はい』

衣「こんなカラフルなクリップがあるんですね」

魔「ちゃんと5色あるな」

『それぞれ自分が使うクリップ決めてね』

魔「了解だぜ」

輝「あと、お酒も準備しておきましょう」

『みなさん、飲み過ぎには注意してくださいね』

フ「おさけー」

『フランちゃんのも、まだあるからね』

フ「うん」

魔「よし、じゃあ始めるか」

『てんこちゃん、できた？』

天「あとちよっと」

魔「先に始めてるからな」

天「…はい」

『順番はどつやって決める？』

輝「やっぱりサイコロじゃない？」

衣「目の大きかった人からですね」

フ「え？ 目って、きゅっ、っつするあの…」

『…フランちゃん、勘弁してね』

フ「ちっ」

.....

『じゃあ順番は魔理沙から時計回りだね』

魔「よし、始めるぜ」

フ「はじめるぜ」

魔「えいつ」

コロコロ

魔「6だ」

輝「幸先いいわね」

衣「イベントはありませんね」

フ「はい、つぎの人」

『あ、俺だね。行くよー』

コロコロ

『…1か』

輝「かわいそうに」

衣「2回休み、だそうです」

『え、2回？』

フ「おやすみなさーい」

魔「幸先いいな」

『…よくないよ』

輝「次は私ね」

コロコロ

輝「2だわ」

『イベントなしですね』

魔「次はフランか？」

フ「わたしよ。ダイスロールっ！」

コロコロ

フ「やった、6！」

『魔理沙と同じマスだね』

フ「なかよしね」

魔「6分の1だけだな」

衣「では、次は私が」

コロコロ

衣「あ、1です」

輝「2回休みね」

『あ、な、なかよしですね』

衣「……………」

『……………』

衣「……………いいえ」

『…っ…いいえって言われた…』

魔「…ぷ…」

フ「つぎは魔理沙よ」

魔「そうだな。てやっ」

コロコロ

『5だね』

魔「1回休みか…」

衣「次はどなたですか？」

『俺は休みだから、えっと』

輝「ああ、私ね」

コロコロ

輝「4が出たわ」

フ「なかよしね」

輝「ええ、そうね」

フ「つき行くよ。えい」

コロコロ

フ「3だわ」

『着実に進んでるね』

フ「えっへん」

魔「衣玖が休みで、次は私だな」

天「ちよつと待ったあ！」

魔「お？」

『できたの？』

天「できたわ」

輝「じゃあ、それを6面にしましょ」

天「よし、ラスボスね」



『それじゃ、6面も完成したことだし』

魔「ああ、お疲れさん。先に寝ていいぜ」

天「あ、うん。わかった。おやすみなさーい」

フ「おやすみー」

天「つて、ちよつと！」

衣「どうしました？」

天「何で寝かせようとするのよ。参加させてよ！」

魔「えー……」

天「いったい何が気に入らないのよ？」

魔「お前のパジャマ、カブってるんだよ」

天「桃柄が？」

魔「青地が」

『あ、本当だ』

フ「魔理沙のは、お星さま」

天「…それだけの理由で、仲間外れにしないでよ」

魔「なんか気に入くないんだよな」

天「あんた、酔ってるんじゃないの？」

魔「そうか？」

『とにかくやるんなら、衣玖さんの後が、てんこちゃんのターンね』

天「オツケー。私のコマは？」

『……………』

魔「……………」

輝「……………」

衣「……………」

フ「……………」

天「無いの!?!」

輝「これでいいんじゃないの、はい」

天「ちょっと、これ糸クズじゃん！」

魔「お似合いだぜ」

天「何で私だけこんな扱いなのよ！」

『いじられキャラだよ』

天「違うわよ！」

衣「総領嬢様、酔ってるんですか？ ……ひっく」

天「酔ってるのはあんたでしょ！」

輝「あなたに1つだけ忠告しておくわ」

天「な、なによ……」

輝「私たちは確かに酔っ払っている」

天「…認めるんだ」

輝「ただ、そういうあなたも酔っ払っているんじゃないか？」

天「酔っ払ってないわよ」

輝「だってあなた……」

天「な、何？」

輝「あなた……」

天「……………」

輝「チャック全開よ！」

天「えええっ！？」

ぱっ！

天「…って…」

輝「…くすすす…」

天「チャックなんか、もともと無いわよ！」

『…夜だから静かにしてね』

## 9 いつかやすみの巻。(後書き)

こんばんは、私です。

この度は、東方寝巻巻。をご覧頂き誠にありがとうございます。

みなさんのおかげで、いよいよユニークアクセスが10,000を突破しました。

10,000ではありません。ええ。

ご報告とともに感謝申し上げます。

本当にありがとうございます。はい。

たくさんの方に読んでいただき、大変光栄であります。

ところで、最初の投稿から半年以上が経ちますが、いまだに思うことがあります。

この小説、はたして本当に面白いんでしょうかね…。

10 よっぴらい、の巻。(前書き)

(注) カオスです

10 よつぱらい、の巻。

天「…私を愚弄して楽しいの?」

『まあまあ、皆酔っちゃってるんだよ』

天「酔っちゃってるって…」

魔「ほら、やるんなら早くやってくれ」

天「はいはい。よっ」

コロコロ

天「5だわ」

衣「1回休みですね」

魔「…休み多くないか?」

輝「てへ」

天「あーあ、初めからツイてない」

フ「つぎは魔理沙よ」

魔「私は休みだぜ」

『俺も休み』

輝「じゃあ私ね」

コロコロ

輝「5だわ」

『あの…』

輝「どうしたの？」

『1回休みですよ』

輝「…作りすぎたわね」

……

『くそ…全然進まない…』

魔「お前、バツグンに遅いぜ」

『それはいいんだけど、魔理沙飲み過ぎじゃない？』



魔「別にいいじゃないか。な、フラン」

フ「うー、ひっく」

『…そっちはアルコール入ってないんだけどな…』

天「ああ、やっと1面を抜けたわ」

衣「なんだかんだで、トップになりましたね」

天「それはいいんだけど、衣玖飲み過ぎじゃない？」

衣「ええ。ちよつと飲み過ぎてるかもしれませんがね」

輝「と言いながら、飲み続けるのね…」

『次、てんこちゃんの番だよ』

天「ああ、はいはい」

コロコロ

天「6！」

輝「無駄に運がいいわね」

衣「ホント、酸素と食料と水の無駄ですよね」

天「…どうして6出ただけでそこまで言われなきゃならないのよ」

魔「お菓子…」

天「…は？」

魔「お菓子が食べたい！」

輝「もう完全に酔っ払ってるわね」

『魔理沙、お酒はほどほどにしときなよ』

魔「ほどほどにするから、お菓子が食べたい！」

フ「みぎにおなじ！」

魔「甘いもの！ あまあまのお菓子！」

『はいはい』

フ「血の入ったお菓子！」

『…ありません』

フ「じゃあ、あなたの血…」

『え…それはちょっと…』

フ「…はマズそうだからいいや」

『…せつない…』

………

衣「私、ポツキーは好物なんですよ。まず、ポツキーって名前が  
超力ワイイですよね」

『ああ…衣玖さんが完全に酔っている…』

衣「食感もポリポリしていて最高れすよね」

『とりあえずポツキーくわえながら喋らないでくださいね』

天「やっと3面が終わったわ」

輝「結局あなたが一番マジメにやってるわね」

天「そう？」

『まあ、たしかにそうかも』

魔「お前の2面は、戻るばかりなんだよ！」

『ちよ、絡んでこないでよ』

魔「ネガティブなお前の性格がよく出てるな！」

『ほっといてよ』

魔「奥手でチキンなお前の性格がよく出てるな！」

『悪かったなチキンで』

天「そういうあんたのは、進むばかりだったわよ」

魔「私は前進あるのみ！ 覚えておけ！」

『どっぴいっことね...』

フ「よっぱらっちまったわ」

輝「...この子も雰囲気にもまれてるわね」

『ってか、もうやめて寝ない?』

魔「最後までやるっぜ」

『できるの?』

魔「たぶん！」

輝「たぶんって…」

天「次は誰の番？」

『てんこちゃんの番だよ』

天「え、そうだったけ？ まあ、いいや」

コロコロ

『4だね』

輝「……………」

天「…ポッキーゲームだって」

『は？』

フ「ポッキーゲーム！」

魔「なななななんだぜ！」

衣「ポッキーゲーム？」

『誰さ、こんなマス作ったの！』

ひよこっ

フ「わたしよ！」

『フランちゃん、こんなの作っちゃダメでしょ』

フ「えー。だってお姉さまはしてるわよ」

『えっ、誰と!?!?』

フ「一人で」

『…一人?』

天「あれって一人でできるの?」

輝「できないわよ」

『…フランちゃん、ポツキーゲームってどんなゲーム?』

フ「ポツキーのチョコの部分だけなめとるゲーム」

輝「…間違ってるじゃん」

『何しとんねん、レミリアさん…』

天「ぺろぺろ。はい、舐めとったわよ」

フ「あなた、色気がないのね」

『てんこちゃんは、キュートがウリだもんね』

天「フォローしたつもり？ キモいんだけど」

『……………』

天「私だってもっとセクシーに舐められるわよ」

『そんなもん誰も見たかないわ』

天「…ほお、噛み付いてきたわね、駄犬」

フ「だけん、つてなに？」

輝「しつけのなっていない不出来な犬のことだわん」

フ「なるほどだわん」

『てんこちゃんに色気なんか微塵も無いわん』

天「そんなわけないわん」

『パジャマも子供丸出しだわん』

天「は、これが私の魅力が一番引き出すんだわん」

衣「ポツキーおいしいわん」

魔「…わん？」

『衣玖さん、ちょっとポツキー舐めてみてくださいわん』

衣「わかりましたわん。はむ、れる…」

『…うあ、えろい!』

天「…ぐ…」

衣「ぺるぺる」

『…こ…これが本物のセクシーでござるか』

天「…ぐう…ちきしょーっ!」

輝「相手が悪かったわね」

フ「やっぱりガキはガキね。つぎは魔理沙のターンよ」

魔「ああ…うー」

『大丈夫? 飲み過ぎて具合悪いんじゃないの?』

魔「いや、大丈夫だ。てやっ」

コロコロ

魔「しゃんだぜ」



『…3ね』

天「ポージングって書いてあるわよ」

『え…』

衣「恥ずかしながら、私が作りました」

天「…言わなくてもわかるわよ」

魔「ポージングか…よつと」

すつく

フ「魔理沙がんばれー」

魔「いくぜ」

ビシッ

魔「衣玖のまねー」

フ「かつこいいー」

天「あはは、似てる似てる」

衣「ふふ…ちょっとだけ違いますけどね」

魔「そうか？ もっとこんな感じだったか？」

衣「そんなにガニ股ではありませんよ」

魔「こづか」

衣「ええつとですわね…」

すたすた

天「おつ、本家が」

輝「始動したわね」

『…なんか嫌な予感がするぞ…』

魔「こづか？」

衣「ひじはそんなに曲げませんよ」

魔「伸ばすんだな」

衣「足の位置も違います」

天「あはは、衣玖きびしいわねー」

輝「こだわりってやつね」

フ「こだわり？」

』……………』

魔「足の位置？」

衣「ええ、肩幅より広いくらいです」

魔「こうだな」

衣「ですから、そんなにガニ股にはならないんですって」

魔「じゃあこんな感じか」

衣「ほら、今度はひじが」

魔「ええと、こうか？」

衣「腕が下がってますって」

魔「ああ…すまん」

衣「だから足が違いますって!」

魔「あ…えつと…」

天「…あはは…」

輝「……………」

フ「……………」

『……………』

衣「まったく、何度言えばわかるんですか！」

魔「ああ…すまない…」

衣「ああもう、腰が入ってない！」

魔「…あ…あの…」

衣「重心が左に寄りすぎ！」

魔「…もう…やめたい…」

衣「腕が下がってるったら！」

『……………』

天「……………」

輝「……………」

フ「……………」

『このままでは魔理沙が泣いてしまっ…』

魔「……………」

衣「足！」

天「……………」

『とりあえず、てんこちゃん、謝ってきなよ』

天「なんで私が……」

『普段から迷惑かけすぎなんじゃないの？』

天「…まあ…そうかもしれないけど……」

『そのストレスで衣玖さんがあんな風に……』

じろり

衣「何ですか？」

天「ひいひい！」

『ひいひい！』

衣「何見てるんですか!」

天「あ…いや……」

衣「見世物じゃないんですよ!」

『え…えつと……』

衣「それとも何ですか！ 誰かがこの小娘と代わりますか！」

天「わわわ私は代わらないわよ！」

『お…俺は…』

衣「何ですか！」

『俺は…その…び…び…』

衣「はつきり言いなさい！」

『びしびしお願いしますっ！』

天「マゾだこいつ！」

11 せんめんじよ、の巻。

『…ああ…腰が…』

天「…あんたバカじゃないの」

『こりゃ明日は筋肉痛だ…』

輝「なかなか見応えのある光景だったわね」

フ「おつかれさまー」

衣「ふう。なんだか頭がくらくらします」

天「飲み過ぎなのよ」

衣「そうでしょうか」

天「そうよ」

『まあ、たしかにそうかも』

魔「なあ、おまえ、私のために代わってくれたんだな…」

『え、何のこと？』

魔「そ、そういつの、ずるいぜ…」

『…？』

輝「貴方、根は優しいの？」

『マゾヒストではないですね』

輝「…そんなこと訊いてないわよ」

フ「はやく続きしようよー」

天「言われなくてもやるわよ」

衣「まだやるんですか？」

天「もちろん。私のステージに行っていないもん」

衣「それはそうですけど…」

『次って俺のターンだよな？』

フ「そうよ。はい、サイコロ」

『お、ありがとう。せいっ』

コロコロ

『1だ…』

天「あんた、ホントのろまよね」



『かなしいよ…』

魔「まだ3面なのか？」

フ「おそいね」

輝「この双六、いつ終わるのかしら…」

……

天「やった、ゴール目前よ！」

『元気だね、てんこちゃん…』

天「あんたたちが疲れすぎなのよ」

魔「なんか気分がすぐれないぜ…」

フ「飲みすぎね」

魔「そんなに飲んだかな…」

天「ま、とにかくほら、あんたの番よ」

魔「はいはい…」

コロコロ

魔「7だ」

天「無いわよ、そんなん」

魔「眠い…」

天「6でしょ、6。ちゃんと進みなさい、ほら」

衣「ぐだぐだになってきましたね」

輝「…だいぶ前からだけどね」

『てんこちゃん、早く上がって』

天「どうして、やる気無くしてるのよ」

『だってだってなんだもん』

天「意味わかんないし。はい、次誰の番？」

『あ、俺か』

コロコロ

『4だ』

フ「3マスすすむ、だって」

『はいよ。1、2、3つと』

魔「5マス戻るだって」

『え、マジで?』

輝「誰よ、こんなまどろっこしいの作ったのは」

衣「……………」

『……………』

衣「…こほん」

『…まあ、いいや』

輝「次は私ね」

コロコロ

輝「6だわ」

魔「何も無いな」

『はい、次はフランちゃんだね』

フ「うん。くらえー！」

びゅんっ！

ガッ！

『イテッ！』

フ「あれ？」

『フランちゃん、そんな具体的にサイコロ投げないで…』

魔「サイコロは転がすものだけ」

天「ってか、そんなボケは序盤でやりなさいよ」

フ「…あん？」

天「ひゃっ、なっ、ななな何よお…！」

フ「まちがっちゃっただけだもん」

『そうだよ。フランちゃん、やさしい女の子だもんね』

フ「そうよ。べつにすぐろくに飽きたわけじゃないのよ」

『ててんこちゃん、一刻も早く上がってちょうだい』

天「そ、そんなこと言われても……」

『ほら、てんこちゃんの番だよ』

天「え、違うでしょ」

衣「違います違います」

輝「そうそう」

天「違うって。私さっきやったもん」

魔「やらないんなら飛ばすぜ」

フ「とばすぜ」

天「え、ちょ、私だっけ？」

『いいから、ほら』

天「あ、うーん……」

コロコロ

天「よし、6よー!」

『……………』

輝「……………」

衣「……………」

魔「……………」

天「なによ」

『ねえ、てんこちゃん…』

天「だから、何よ」

『…てんこちゃん、バカでしょ？』

天「バカじゃないわよ。何なの、さっきから」

『じゃあ6マス進んでっらん』

天「いいわよ。1、2、3、4…」

フ「あ、スタートに戻るだって」

天「……………」

『何でゴール直前に、スタートに戻るを作るのさ…』

衣「バカなんですよ」

輝「これはひどいわね」

魔「じゃあ、てんこだけ上がるまでやることにして、私達はもう寝ようぜ」

『さんせい』

フ「さんせい」

衣「そうしましょうか」

輝「ああ、疲れたわ」

天「は、意味分かんないし！ あんたたちも上がるまでやりなさいよー！」

魔「解散、かいさーん」

天「ちょっと、なんで！ 本気なの！？」

『洗面所は一人ずつ順番に使ってくださいね』

輝「じゃあ、私をはじめに使っわ」

魔「急いでくれよ。後がつかえるから」

輝「わかってるわよん」

魔「ホントに分かってるのか…」

天「ガチで寝る準備してるし…」

衣「総領嬢様、とつととやらないと朝になりますよ？」

天「衣玖までそんなこと言うの？」

衣「自業自得です」

天「ちよつと遊び心を入れただけじゃない」

衣「ま、がんばってください」

天「あ、ちよつと！ 待ちなさい、衣玖、行くなー！」

輝「ねー、うがいをしたいんだけど、あなたのコップ使っているのー？」

『あ、ちよ、今持って行きますからー！』

天「…なんで私がこんな目に遭わなきゃなんないのよ」

フ「ねえねえ」

天「なによ、チビっ子。あんたも続けるの？」

フ「ううん、ちがう」



天「じゃあ何よ」

フ「あのね」

天「うん」

フ「ばーか！」

天「…この…クソガキ…」

## 12 ひつじかぞえ、の巻。

『みんな、洗面所使い終わった？』

魔「使い終わったぜ」

『よし。じゃ、布団敷こうか』

魔「そうだな」

輝「どこに敷けばいいのかしら？」

『あ、どうぞお好きな所に』

輝「そう。じゃあ窓の側にするわ」

『べつぞべつぞ』

フ「わたしは魔理沙のとなり」

魔「いいぜ。その代わり、大人しく寝てくれよ」

フ「うん」

衣「あの…」

『はい、どうしました？』

衣「布団を持参しなかったのですが…」

『ああ、そういえば、そうでしたね』

衣「やはり床で寝たほうがよいのでしょうか」

『いえ、俺の布団でよければお貸ししますよ』

衣「え、でも…」

『大丈夫ですよ！ 消臭スプレーはしてますよ！ 汗臭くありませんよ！』

魔「何でそんなに必死なんだよ…」

『いや、毎回臭いって言われるから…』

衣「しかし、お借りするのは、悪いのでは？」

『俺はソファで寝るから大丈夫ですよ、多分』

衣「そうですか。それではお言葉に甘えて」

『そうと決まれば、ねえ、てんこちゃん』

天「え、何、やめていいの!?!」

『いや、布団敷くから、向こうでやってて』

天「ああ、そういっ…」

『よっ…はい、敷きましたよ、衣玖さん、どうぞ』

衣「わざわざありがとうございます」

『いえいえ、どういたしまして』

魔「それじゃ、そろそろ寝るか」

『俺は、お風呂に入ってくるね』

魔「そういえば入ってなかったな」

輝「私たちは先に寝てるわよ」

『はい、どうぞ。おやすみなさい』

輝「襲わないですよ？」

『…襲いませんよ』

魔「じゃ、おやすみ」

フ「おやすみー」

輝「おやすみ」

衣「おやすみなさい」

『はい、おやすみなさい』

すたすた

『おっふるー、おっふるー』

天「ねえ」

『ん？』

天「もうやめたい」

『上がったらね』

天「…つらいんだけど」

『はいはい。頑張つて』

天「…くっ…なんで私がこんなこと…」

すたすた

ガラガラ

『今日も大変だったなあ』

ガラガラ

『お風呂で疲れた体を癒……』

『……………』

『……じん……』

『……湯舟にお湯が無いや……』

……………

ガラガラ

『ふう。もう皆寝てるかな』

天「お、上がったのね」

『ああ、まだやってたんだ』

天「もうやめていいのよね」

『え、上がったの？』

天「今、上がったでしょ」

『いや、知らんがな』

天「お風呂から出てきたじゃん」

『俺が？』

天「うん。上がった」

『ああ、俺がお風呂から、ってこと？』

天「うん」

『屁理屈こねてないで、早くやりなよ』

天「…ぶう」

『さ、ちょっと優雅に休憩したら寝るかな』

天「暇ならあんたもやりなさいよ」

『ふんふーん』

天「…無視とか…」

とくとと」

フ「ねえ、あそぼーっ」

『フランちゃん、もう寝ないとダメだよ』

フ「ねむくない」

『ああ、吸血鬼だからか…』

フ「あそぼー」

『そうは言っても、俺は眠いんだよね』

フ「やだ。だめ」

『ダメと言われましても…』

フ「つまんない。あそぼっよ」

『うーん…そうだなー…』

フ「なにしてあそぶっ?」



『じゃあとりあえず、布団で横になってできることにしようか』

フ「たのしいこと?」

『うん。多分』

フ「じゃあ、布団に行きましょう」

とてとて

とことこ

ごそごそ

フ「はい、横になった」

『よし、じゃあ...』

がしっ

魔「おい、変なことはするなよ」

『わ、魔理沙…起きてたの?』

魔「私が起きてたら不都合なのか?」

『そうじゃないけどさ…もっと信用してよ』

魔「なんか危険な気がしてな」

『いや、俺、何か悪いことした？』

魔「まあ、してないけど…」

『変なことしないから』

魔「本当か？」

『もちろん』

フ「はやくあそぼうよ。魔理沙もあそぼう」

魔「いや、私は寝るぜ。なんか頭が痛いんでな」

『うん、飲み過ぎだね』

フ「そっか、魔理沙は寝ちやうんだ」

魔「んじゃ、おやすみ」

フ「うん、おやすみ。じゃあ、はい、あそぼう」

『あ、うん。しりとりでもしようか』

フ「ふじうの？」

『普通の』

フ「つまんない」

『じゃあ、ラ行以外の音禁止で』

フ「じゃあ、しりとりなの『り』から始めて

『りりりりール』

フルール」

『……る……る……』

フ「………」

『………』

フ「………」

『……ぐー……』

フ「寝たらダメ！」

『……はっ！……ね、寝てないよ』

フ「『る』だよ」

『る……る……る』

フ「ラ行以外だめ」

『無いよ、もう』

フ「じゃあ負け」

『うあー負けたーじゃあ寝ようかおやすみー』

フ「だめ！」

『…ねむいー…』

フ「寝たら指ちぎる」

『ー！？』

フ「なにしてあそぶ？」

『夢の中で一緒に遊ぶってのは？』

フ「いいけど、指ちぎる」

『よし、別のにしよう』

フ「なに？」

『クイズにしようか』

フ「うん、いいよ」

『スリランカの首都はどこでしょう？』

フ「次のもんだいは？」

『…ちよつとは考えてよ』

フ「つぎ」

『えつと、タイの首都は？』

フ「知らないもん。つぎ」

『えー、デンマークの首…』

フ「えいっ！」

ぐぐぐ…

『いったいたいたい！ ゆゆ指が逆に曲がる！』

フ「もつとちゃんとしたやつにして」

『うーん…じゃあ次は、あれやろつか』

フ「なあに？」

『羊を数える遊び』

フ「何それ」

『まず、目を閉じます』

フ「うん」

『そして羊を数えます。間違えて執事を数えてはいけません』

フ「メイドは？」

『メイドもダメです』

フ「はい」

『では、用意はいいですか？』

フ「うん」

『1から順番に数えるんだよ。よーい、スタート』

フ「one sheep, two sheep」

『うんうん』

フ「three sheep, four sheep」

『そっそっ』

フ「five sheep, a wolf came, and  
at the sheep」

『1じ1じ』

フ「なに？」

『食べちゃダメ』

フ「えー。ふつうに数えるとねむくなる」

『いいんだよ、眠くなって』

フ「じゃあ、魔理沙を数える」

『…うん、まあ、好きにして』

フ「魔理沙がひとり、魔理沙がふたり」

『……………』

フ「ふたりは魔理沙…」

『…ん？』

フ「魔理沙が三人…魔理沙がよにん…」

『うんうん』

フ「魔理沙がごにん…まりさがりよにん…」

『うん、りよにん』

フ「…まりさ…ななにん…」

『うん』

フ「…はちにん…」

『……………』

フ「…ん…」

『……………』

フ「……………」

『…お、案外あっさり寝ちゃったみたい』

フ「…すう…すう…」

『ふぁ……………』

フ「…すう…すう…すう…」

『俺も寝なきや……………』

フ「…すう…すう…すう…」

『…ん…おやすみ……………』

フ「…すう…すう…すう…」



『……………』

たっ たっ たっ

天「終わったわよっ」

フ「…すう…すう…」

『…すう…すう…』

天「……………」

フ「…すう…すう…」

天「…なんかちょっと兄妹みたいね」

『…すう…すう…』

フ「…んう…むにゃ…」

天「ふふっ…さ、私も寝よつかしら。ええっど…」

衣「……………」

輝「……………」

天「うーんと…」

魔「…すう…」

フ「…あむ…」

「…すう…」

天「…私の寝床は？」

13 あれの11はぐの巻。

魔「おい」

『…むにゃ…』

魔「おいつてば」

『…あどいぶん…』

魔「何でおまえがフランの布団で寝てるんだよ」

『…ねてないよ…』

魔「いや、寝てるって」

フ「んう…あ…まりや…」

魔「フラン、どうしていつがここで寝てるんだ？」

フ「…んー…」

魔「んー？」

フ「…すーすー…」

魔「寝ほけてたのか」

『…ぐーぐー…』

魔「おーきーろーよー」

『…なにさ…朝は弱いんだよ…』

魔「何でここで寝てるんだよ」

『フランちゃんの遊びに付き合っただけ気付いたら寝たたぐいしてるの巻』

魔「…お疲れさん」

『…ぐーぐー…』

魔「朝ごはんはどつするんだ？」

『…パンでも食べて…』

魔「作らないのか？」

『…いと眠し…』

衣「ひゃあっ！」

魔「お、なんだ？」

『びつくりした…』

衣「な、なんで隣で寝てるんですか!？」

天「…え、私？」

衣「びつくりするじゃないですか！」

天「いや、私の寢床が確保されてなかったから」

衣「だからって入って来ないでください！」

天「いいじゃん、ちよつとくらいさー」

衣「まったくもっ…」

天「朝ごはん、まだー？」

『パンでも食べてや』

天「…何よ、その態度は」

『眠いんだよ』

魔「こいつは朝に弱いからな」

天「お腹すいたー」

『つるひゃいづるひゃい』

天「衣玖も、お腹すいたでしょ？」

衣「そうですねえ、まあ、少しだけ」

『く…』

天「お…」

魔「……………」

天「衣玖は、パンと手づくり料理なら、どっちが食べたい？」

衣「えっと…でも、その、悪いですし…」

『……………』

天「あんたはどうなのよ」

魔「私は和食がいいな」

『……………』

天「まあ、私たちがいくら望んでも、無理に起こすのは、かわいそうよね」

衣「ええ」

魔「そうか？」

天「おとなしくパンを食べることにするわ。残念だけど」

『……………』

天「おとなしくパサパサしたパンをついばむことにするわ。みんな  
本当に和食が食べたかったけど！」

『……………』

……………

魔「やっぱり和食だよな」

衣「おいしいですね」

天「この女好きめ」

『…ちがうよ、やさしいんだよ…』

魔「もぐもぐ」

『輝夜さんは？』

魔「まだ寝てるんじゃないのか？」

天「いや、ゲームしてるわよ」

『…朝っぱらから…』

衣「もうひとかたも見えませんが」

魔「フランは寝てるな」

『輝夜さん、フランちゃん、ご飯だよ』

輝「今セーブするー」

『…ああ、このセリフは、15分くらいやり続けるぞ』

魔「なあ」

『ん？』

魔「おかわり」

『ああ、はいはい』

天「私もジュースおかわり」

『はいはい』

衣「え…じゃ、じゃあ私は…その…お、お味噌汁あたりを…」

『…いや、無理におかわりしなくてもいいですよ』



衣「一応、空気を読んだのですが」

『…使いどころ間違ってます』

魔「ところで、フランが起きてこないな」

『ん、たしかに。おい、フランちゃん』

フ「……………」

『フランちゃん、ご飯だよ』

フ「…つるせえ…」

『……………』

フ「…むにゃむにゃ…」

『…寝かせとこつ』

魔「起こさないのか？」

『無理に起こさない方がいいね』

天「どれ、ここはひとつ私がひっぱたいて起こしてやるわ」

『…やめれ』

天「起きなさい、ちびっ…」

『やめてー!』

天「なによ」

『ただでさえ危ないのに、寝起きで機嫌悪かったらどつするのさ』

天「逆に安全になる」

『…バカだこいつ』

天「誰がバカよ!」

魔「ごちそうさん」

『あ、食べ終わったの?』

魔「食べ終わったぜ」

衣「私も、ごちそうさまでした。おいしかったです」

『あ、はい、お粗末さまでした』

天「あんたが執拗に話しかけるから、私だけ取り残されたじゃない」

『お・れ・の・せ・い・か・よ!』

天「うん」

『くう…なんて癪に障る天人だ!』

輝「ごぱん、ごぱん」

『わ！急に現れた！』

輝「私のご飯は？」

『あ、ありますけど…』

輝「じゃあ用意してちょうだい」

『あ、はい。ゲームやめたんですね』

輝「いや、セーブして置いといたわ」

『ゲームばかりしていると、頭パーになりますよ』

輝「あなたみたいに？」

『そうそう。俺みたいに。あはははは………って、余計なお世話ですよ！』

輝「いただきます」

『スルー！？ 渾身のノリツッコミをスルー！？』

天「ねえ」

『ん、どうしたの？』

天「……………」

『……………』

天「食事中だから、静かにしてもらえないかしら」

『……………いつかほったつねってやる……………』

## 14 あぶりこつと、の巻。(前書き)

突然休んで申し訳ありませんでした。

14話が完成していなかったため、更新が遅れてしまいました。本当に申し訳ありません。

気を取りなおして、14話をお楽しみ下さい。

14 あぶりじつと、の巻。

輝「ごちそうさま」

天「ごちそうさま」

『はい、お粗末さまでした』

天「さ、何して遊ぼうかしら」

輝「私はゲームの続きを」

『よし、俺は後片付けだ』

かちゃかちゃ

『がんばって片付けるか』

かちゃかちゃ

『よっ、っ、向いっつのお皿を取っ…』

すっ

『え……』

衣「お手伝い、しますよ」

『……い……衣玖さ……』

天「それ昨日のくだりじゃん！」

……

『それで、断ったのに、帰らないんですよー』

衣「まあ……それは困ってしまいますね」

『だから、言っただけじゃありませんよ』

衣「」どのようにですか？」

『俺はフライパンは買わないよ！』

衣「」……」

『……』

衣「…あ、あはは…おもしろいですねー…あは…」

『…無理しなくていいです…』

衣「…すみません。私のユーモアのセンスが不足していて」

『いえ、俺がスベったんです…』

衣「しかし…」

魔「なあなあ」

『お、どうしたの、魔理沙』

魔「退屈だぜ」

『お皿拭きでもやる？』

魔「いや、いい」

『まあ、そりゃそっか』

魔「何かしよつぜ」

『せやね』

魔「とりあえず、居間に行こう」



すたすた

すたすた

輝「もう継投すれば？」

天「いや、こいつでいく」

『…まだゲームやってたのか』

魔「そういえば、最近キャッチボールしてないな」

衣「キャッチボール？」

『夏には、たまにしてたんですよ』

魔「秋からは、ほとんどしてないけどな」

衣「青春ですね」

『そうですかね？』

フ「ん…」

魔「お、起きたか」

フ「んー…」

『…何やら機嫌悪そうだ…』

フ「…んっ…」

魔「眠そうだな」

フ「ねむい…」

『「」飯食べるかい？』

フ「パン…」

『ああ、はいはい、パンね』

フ「アプリコットジャム…」

『ごめん、ないなあ、それは』

フ「クランベリージャム…」

『ごめんね、それもないんだ』

フ「なんにもないじゃん…」

『ブルーベリージャムならあるよ』

フ「いらない。アプリコットジャムがいい」

『ブルーベリージャムもおいしいよ』

フ「アプリコットジャムじゃなきゃたべない」

『むむむ…』

魔「ブルーベリージャムもおいしいぜ」

フ「じゃあそれでいいや」

『……………』

魔「どうした？」

『…俺って何…』

フ「パンは？」

『今、準備するよ』

フ「はやくしてね」

魔「その間に着替えてきたらどうだ？」

フ「うん」

……………

天「あー、また負けた。これコントローラー壊れてるわ」

輝「壊れてないわよ」

衣「…そんなにずっとやってて、飽きないんですか？」

天「勝てないし飽きてきたかも」

輝「ふーん。じゃ、やめれば？」

天「……………」

輝「やめればいいじゃない」

天「…いや、やめない」

衣「また意地張って…」

輝「いいわよ、別に強制じゃないんだから」

天「やめない。次は勝つし」

衣「なんて単純な…」

輝「あつちの人たちと談笑でもしたらいいじゃない」

『はい、フランちゃん。パンだよ』

フ「いただきます」

魔「いい匂いだな」

天「いや、私はあんたに勝つまでやるわ」

衣「……………」

輝「ふふ。なら、やってみなさい」

天「ええ、望むところよ」

……………

『フランちゃん、おいしいかい?』

フ「びみょー」

魔「平民の家の食事だからな」

『…失礼だね、いつも食べてるくせに』

魔「まあ、そうなんだが」

フ「食べ終わったら、わたしもゲームする」

『野球わかるの?』

フ「わかる」

『…うーん、本当だろうか』

魔「もぐもぐ」

『…って、なんで魔理沙も食べてんの？』

魔「…なんか見てたら食べたくなった」

『…まあ、育ち盛りだから大丈夫か』

フ「ごちそうさま！」

『あ、はい、お粗末さま』

魔「私もごちそうさま」

『一枚でいいの？』

魔「おいおい、人を大食いみたいに言うなよ」

『…勝手に食べてたくせに』

フ「ゲームする」

『はいはい』

魔「そうだな」

すたすた

輝「……………」

天「きーっ！」

フ「ねえ、わたしもゲームやりたい」

輝「あ、いいわよ」

プチッ

天「ちよつと、なんで電源切るのよ！」

輝「いや、もう勝ち目なかったじゃない」

天「あと33点取れば逆転したわよ！」

衣「…それを勝ち目がないと言っただけ？」

フ「やり方は？」

輝「ええと、まず打つのが…」

天「ああ、悔しい…」

輝「走るのが…」

フ「うんうん」

天「あ…そうだ…」

衣「…何か企んでますね」

輝「守備は…」

フ「うん、わかった」

天「ねえ、ちびっ子」

フ「なに？」

天「私と…」

フ「うん」

天「勝負しなさい！」

衣「おとなげない！」



15 はつくしよんの巻。

天「あはは。超たのしー」

フ「ううー」

『…何この天人』

魔「器が小さいな」

輝「まっただわ」

衣「…はずかしい…」

天「ほら、また1点入ったわよー」

フ「うううー!」

『…フランちゃん、俺が手伝ってあげようか?』

フ「じぶんでやるー!」

『あ、そう…がんばって…』

輝「さすがのプライドね」

魔「それに比べて、こっちときたら…」

衣「…はあ…」

天「やった、またヒット！」

フ「うああああ！」

『フランちゃん、ゲームじゃなくて別の遊びでも…』

フ「うっさい！」

ごすっ

『…つかはっ！』

魔「だ…大丈夫か？」

『……………』

魔「息、ちゃんとできるか？」

『……………』

魔「おい、ほんとに大丈夫か？」

輝「お腹だったわね」

衣「大丈夫…なのでしょうか…」

『…っ…』

魔「か、顔が青いぜ……」

『……だいつ……じょ……』

輝「しゃべった……わよね？」

魔「そうだな。大丈夫なのか？」

『だい……じょう……ぶ』

天「あ、やった、初ホームランよ！」

フ「うぎゃあああああああ！」

すっ！

がしっ！

『ちよ、コントローラーを振りかぶらないで！』

フ「びええええええええええ！」

魔「あわわ、泣くなよ、フラン」

天「そうそう、みつともないわよ」

衣「……もうやだこの人……」

輝「そんなときには飴玉よ」

『おお、さすが輝夜さん!』

フ「びえええええええ!」

『フランちゃん、ほら、飴玉だよー』

ひよいつ

ぱくっ

ガリガリガリ…

フ「びえええええええ!」

『泣きやまない! しかも露骨に噛み砕いた!』

魔「仕方ない、お前の血でここはひとつ!」

『え…う…背に腹はかえられないか…』

魔「フラン、血を吸って機嫌を直してくれ!」

フ「うっ!」

『……………』





天「なにキレてんのよ」

『キレルよ！ だいたい輝夜さん、なんてことさせるんですか！』

輝「いや、まあ、ああするしかなかったのよ」

『ああ、窓が…』

輝「ここで一句」

『詠まなくていいです』

輝「割れた窓過ぎる秋風身に染みて」

『…残酷なまでに侘び寂びを感じます』

衣「あ、俳句なら私も知ってますよ」

『…別に知らなくてもいいですよ』

衣「すずめの子そこのけそこのけ舌切るぞ」

『舌切りすずめ！…？』

魔「それは間違ってるな」

衣「えっと、違いましたか？」

魔「正解はこうだな」

『言わなくていいよ』

魔「すずめの子豆が欲しいかそらやるぞ」

『ハトじゃん…』

魔「あれ？」

フ「はつくしよん！」

天「マジで寒いわね」

『…ホントだよ』

輝「命が助かったと思えば、ほら、ね？」

『まあ、そうですね…』

フ「さむい」

魔「窓を割るからだな」

衣「へくちゅっ！」

『っ！』

天「なんか悶えだしたやつがいるんだけど」



魔「……………」

衣「えっと、どうかされましたか？」

『く…くしゃみひとつで…この破壊力…』

魔「よし！ 寒いからそろそろお開きにするか！」

輝「あら、ずいぶん唐突ね」

魔「じゃ、かいさんかいさーん」

『え、もう帰るの？』

魔「ほら、フラン、帰るぜ」

フ「うん、でもお昼だよ」

魔「曇ってるし、傘差せば大丈夫じゃないか？」

フ「もってきてない」

魔「玄関にあるぜ」

『俺の傘がね』

輝「私も風邪引かないうちに帰ろつかしら」

『…窓はどつすねばいいんですか』

輝「形あるものは、いつか朽ちる運命にある。これが世界の真理よ」

『…あんたが言うなよ』

輝「それじゃお邪魔しましたご馳走様でした美味しかったです！」

『あ、ちよっ…！』

たっ たっ たっ

ばたん！

天「逃げたわね」

魔「フラン、準備はできたか？」

フ「うん」

魔「じゃ、こんな所はとっと立ち去ろうぜ」

フ「うん、おじゃましました」

『あ、え、じゃ…じゃあね、フランちゃん、魔理沙』

フ「ばいばーい」

魔「……………」

すたすた

ばたん！

『…無視…だと…』

天「怒らせたんじゃないの？」

『俺、なんにもしてなくね？』

天「知らないわよ。とにかく、私も寒いから帰るわ。おみやげちょうだい」

『うん、早く帰れ』

天「けち」

『二度と来んな、あほ、まぬけ、あんぽんたん』

天「なっ、私に向かって何てことを…」

衣「はいはい、いいからおいとましますよ」

天「だってあいつ私にアンパンマンって…」

衣「言ってますせんよ。耳腐ってるんじゃないですか？」

天「え…」

衣「それでは、お騒がせしました」

『あ、帰っちゃうんですか』

天「何よ、やっぱり私が帰るのは寂しかったのね」

『衣玖さんなら、うちで暮らしてもらっても構いませんけど』

天「私は無視かい。ってか、暮らすとか意味不明なんだけど」

衣「やはり暮らすわけには参りませんので」

『そうですか…残念です』

衣「では、また今度お会いしましょう」

『はい、絶対また来てくださいね』

衣「…前向きに検討します」

『…はい』

衣「それでは」

『はい、また』

天「んじゃね。また来るわ」

『……………』

天「はい、無視キタコレ」

衣「ほら、帰りますよ」

天「ちょ…待つ…」

衣「ほらほら」

天「絶対また来るから覚悟しときなさいよーッ！」

『くんな、あほ！』

ばたん！

『ああ…みんな嵐のように去っていったなあ…』

ぴゅ

『…魔理沙は何で機嫌が悪かったのか』

ぴゅ



## 15 はつくしゅん、の巻。(後書き)

こんばんは、私です。

これにて第4部は終わりです。

読んでくださって、ありがとうございました。

今後の予定について、お知らせがあります。

手が離せない用事がありまして、おまけの投稿はあるかもしれませんが、何ヶ月かお休みになります。

申し訳ありません。

用事が済みましたら、第5部も書きたいと思っておりますゆえ、もしよろしければ、その時はご覧になってください。

ちなみに、第5部の登場人物については、菅原道真もびっくりない白紙ですので、リクエストなどがございましたらどうぞ。登場するやも知れませんが。

あたたかい冬 前編（前書き）

みなさん、おひさしゅう。私です。

今回のお話は、前・後半に分かれております。

今年最後の投稿になるうと思えますゆえ、楽しんでいただければ幸いです。

それでは、どうぞ。



## あたたかい冬 前編

『ああ、ついに完成だ』

くたくたになつて時計を見上げると、12時半を過ぎていた。ど  
うりで眠いわけである。

本を閉じてマフラーの出来ばえを確認すると、はじめよりは上手  
く編めているようだ。

『やっとできた。何日かかったことか』

最後に彼女と会つたのが秋の終わりだったから、もう一ヶ月くら  
い作つていたことになる。そう考えると、達成感もひとしおである  
が、そんなことより眠かった。

真つ赤なそれを丁寧にたたんで立ち上がると、少し足がふらふら  
した。今日こそは早く寝るとしよう。

『よし、寝る。おやすみ』

目覚まし時計をセットして、敷いておいた布団に横になった。朝  
にはめつぽう弱く、どうせ二度寝するから、目覚ましは特に意味は  
ない。つまり起こし損である。哀れ、時計。

いよいよ明日はクリスマスイブだ。前日まで終わらないとは思わ  
なのだが、時間がかかったのには、ひとつ理由があつたのだ。とも  
かく、ちゃんとプレゼントが完成してなによりだ。

『ふああ』

ひとつあくびをすると、布団をかけなおす。なんとなく気持ちが悪く、落ち着かず、そわそわしてしまう。

先月のある曇った日、買い物の帰りに、通らなくても帰れるお寺のそばを通ったところ、彼女に会った。

秋風が吹きすさぶのに、彼女はいつもの服装だったので、妖怪は寒さを感じないのかと目をほとんどまるくした。

本人いわく、あまり寒くないそうだが、せつかくの機会なので、今まで無縁の行事にかこつけて、あたたかいものを贈ろうと決めたのだった。

.....

朝、ジリリと目覚まし時計が鳴ったので、止めて二度寝する。次に起きるのは9時ころだろうな、と思いながら、やわらかなまどろみに溶けていく。

『つと、あぶねえ』

跳ね起きた。そうだ、二度寝している場合じゃなかった。マフラーを出しっぱなしだ。魔理沙に侵入されて、知られては困る。私のぶんはないのか、とか、この女好きめ、とか罵詈雑言を浴びせてく

るに違いない。

眠い目をこすりながら、すでに止まっている時計を3回止める。もう止まっているから、当然何も起きない。自分が何をしたいのか把握できないまま、目覚ましを5分間叩き続けた。

『うん、ごはんの時間だった』

さきほどの件は無かったことにして、スマートに朝食の支度をはじめ。

セットしていた炊飯器は、今日もしっかりと時間通りに仕事をこなす。すばらしい。ほめてやるうとその頭を撫でると、蒸気口に触れてしまって、やけどした。もう二度と撫でない。

フライパンを準備して、ささつと目玉焼きを作り、トマトやちぎったレタスを添えて、食卓の方に持っていった。おっと、ふりかけが足りない。戸棚から探して、ごはんにかけた。

『いただきます』

目玉焼きの黄身の部分に、つぶりと箸を入れると、中からとろとろあふれた。口に運ぶと、濃厚さが舌いっぱいに広がった。じつにうまい。ごはんにひじょうによく合う。

朝食の目玉焼きは、やはり格別だ。ただひとつ残念なのは、しょうゆをかけ忘れていたことに気付いたのが、食後だったことだろうか。

.....

結局、マフラーをしまい忘れたままだった。そもそも、あわててしまふ必要はなかったのである。

この家の主人がねぼすけだというのは有名らしく、午前中には魔理沙を含めて来客はほとんどない。眠っている人間の上に座りにくる非道な妖怪も中にはいるが。

『あ、もうこんな時間か』

昼間のうちに買い物を買ってすませておこう。そのあとには、やることがあるのだし。立ち上がって、厚手の上着を身につけた。

今日の晩ごはんは少し豪華にしたいものだ。献立は例えば、そう、ええと、まあいいや。出かけてから決めよう。タンスから財布を探し出して、エコバッグを持って家を出た。

『うわ、寒いや』

吐いた息が白い気体となって空中に溶けた。ポケットに突っ込んであった手袋を取り出して、自分の手にはめる。はやく行って、はやく帰ってこよう。

『ちむいどいぢねる、ちむいどいぢねる』

ほんとうに冬らしい寒さだが、今日は雪は降っていないようだ。でも夕方からは降る。といいな、と思ってみたり。空を見上げてみると、晴れていた。

そういえば、マフラーを持ってくれば、一旦帰ってから出直す手間が省けたのではなかるうか。いや、それはダメだな。買い物袋をぶら下げたままプレゼントを渡すわけにはいかない。

上を見ながら、ぼんやりしたこら歩いていると、唐突に前方から声がかかった。

「やあ、そんなふう歩いてちゃあ、あぶないじゃないか。なにか面白いものでも見えるっていうのかい」

見ると、大きな耳だった。

『ああ、ナズじゃないか。いやあ、雪が降らないかと空を見ていたんだよ』

「空を見てただって。雪が降っているかなんて、地面を見たってわかるじゃないか。まったくきみはおかしなやつだな。きみに会うなんて、良くないことでも起こりそうだし」

ナズーリンは怪訝そうな顔を見せながら、そう言った。

『ひとを凶兆みたいに言わないでよ』

「おっと、違ったかな。それともきみは、自分のことを吉兆だとも勘違いしているのかい。言っておくけどね、きみは決して良いことの前ぶれなんかではないよ」

あいかわらずのすごい口撃だが、口の悪いのは彼女のコミュニケーションションであり愛嬌だ。

『まあ、吉兆でもないけどさ。ふつうに買い物に向かうところなんだよ』

「ははあ、なるほど。そのいでたちは夕食の食材を買いに行くんだ

な。おおかた焼きそばでも作るんだろう。そんな顔をしている。焼きそば顔だ。でもね、はじめに言っておくけど、私はそこまで焼きそばが好きではないよ。まあ嫌いというわけではないけれど。だから夕食への招待ならあらかじめお断りしておく。べつものなら食べてもいいけどね」

ほんとうによくしゃべる妖怪だ。だれも夕食に誘うとは言っていないのに、図々しいかぎりである。そもそも、焼きそば顔とは失礼な。

『とにかく、俺は急いでいるから、これで失礼するよ』

「急いでいるだなんて、なにをそんなに急ぐことがあるっていうんだい。きみなんかより私のほうがずっと忙しいんだぞ。それなのにきみにかまってあげたんだ。ちょっとは感謝してほしいものだね」  
『はいはい、ありがとう』

ぷりぷりしているナズーリンを、てきとつにあしらって歩き去ることにする。彼女と話していたら、買い物に行く前に日が暮れてしまふ。それはまずい。今日ばかりは、やることあるんだ。ごめんね、ナズ。

無事に彼女をふりきって、夕食の献立を考えた。やはり七面鳥を食べるべきなのか。平生あまり肉を食べないので、そんなものがここの肉屋に売っているのかよくわからない。なかつたらチキンでいいや。

『さて、こんなもんか』

このまましばらくおいておけば、晩ごはんまでには味がよくしみているだろう。

ちなみに予想通り七面鳥はなかったため、ノーマルな鳥肉で代用することになった。

それはいいのだが、八百屋があまりに白菜白菜いうので、白菜を買いすぎてしまった。だから、今晚のメニューはロール白菜になった。和風である。おのれ八百屋め。

『そろそろ出かけるかな』

時計を見ると、ちよっぴり早いような気もしたが、どうせそわそわして何も手につくまい。

町で買ってきた紙袋の中にマフラーを入れたが、思ったより袋が小さくて難儀した。

こんな荷物を持っているときに知り合いに会ったりしたら、それは怪しまれそうだ。その袋は一体なんなのか、と。

『よし、忘れ物はないな。いってきます』

知り合いに、とりわけ白黒い魔法使いと、おしゃべりなネズミさんと、いたずらぬえ娘とには絶対に遭遇しないように祈りながら家を出た。

外は存外に暗く、冬の日の短さを感じた。これならお墓に行けば、

きつといるだろうな。

というのも、彼女は妖怪なので、夕方ごろのエンカウント率が高  
かるうと思って、聖夜というにはやや早いこの時間にしたのである。  
まあ、朝にも昼にも会ったことはあるが。

『なんか緊張してきたな』

「何が緊張するんだい」

ああ、終わった。バッドエンドへようこそ。

紙袋を大事そうに抱えて、せかせかと意味もなく早歩きをしてい  
たのだから、不審者のように見えたらう。知り合いとか関係なく、  
人に会いたくない、と思っていた矢先に、ごらんの有様だよ。

「一日に二回も会うもんだから、それだけでもおかしいけれど、さ  
つきにもまして奇怪な様子だね。一体何を企んでいるんだい。その  
紙袋には何が入っているんだい。ああ、わかった。お布施だな。い  
や助かるよ。やはり信心は形にすべきだからね。どんなご馳走が入  
っているのか、じつに楽しみだ。さあ、その紙袋を渡してもらおう  
か。さあ」

お布施を受け取るとき、こんな悪党みたいなセリフを放つものな  
のだろうか。

『いやあ、違うんだよ。これはあれだよ。ほら、本だよ』

苦しい言い訳である。

「そうか。それで、どんな本なんだい」

『ええと、それは、あのう』



困ってしまった。

「なんだい。見せてごらんよ」

『あ、えと、宇宙物理学の本なんだ』

ちよつと嘘をついた。

「ふうん。そんなつまらないものじゃあ、お布施にならないよ。次はもっといいものを頼みたいところだね」  
『う、うん。ごめんね。それじゃ、また』

ナズーリンに手を振って、さっそうと走り去る。

そうだ、人に見つかつたら宇宙物理学の本だと言えはいいんだ。

ミミズだって、オケラだって、アメンボだって、物理は嫌いなはずだもの。

ひとついいことを学んで、自信がついたもんだから、今度はずんずんお墓の方へ歩いて行った。

あたたかい冬 後編

『ちょうどいい時間かな』

お墓の入り口についた頃には、だいぶ日が暮れていた。

きよろきよろと辺りを見回すが、彼女の姿は見えず、ひたすらに墓石が立ち並ぶ光景は、やはり不気味だった。

なるほど、ここなら人間を驚かしやすいだろうな。だって怖いもん。

『おつい、小傘ちゃん、いないのかい』

少し声がふるえてしまっている。夜中でもないのに、ここまでびびっているのだから情けない。ただ、意外にも怖がりで得したこともある。

驚かせば必ず驚くものだから、彼女は気を良くしたようで、新しい驚かし方を考えては実験台にするようになったのだ。

人間、いつ短所が活きるときがくるか分からないものだと言った。

『それにしても寒いなあ』

『そうだねえ』

『うわああああああ』

『ひゃあっ』

驚いた。

妖怪が出た。

妖怪も驚いた。

それもまた驚きだ。



思い切って、用件を切り出す。

『あ、あのね、小傘ちゃん、今日は、そのう、クリスマスなんだよ』  
「くりすます」

予想通りだが、知らなかったようだ。

厳密に言っと、クリスマスイブだが、そんな細かいミスに気づく  
余裕はなかった。

『おめでたいお祝いの日で、えっと、人にプレゼントとかする日な  
んだ』

「ふっん。そうなんだ」

物知りだねといわんばかりの相づちである。

紙袋を抱えた人間に対して、あまりに鈍すぎるのではなからうか。

『それでね、ええと』

緊張でふるえる手から手袋をはずし、ポケットに入れる。

『待ってね』

がさがさと音を立てて、紙袋からマフラーを取り出す。

『これ』

彼女に差し出す。

『プレゼント』

真っ赤なマフラー。

「えっと」

不思議そうな顔をする。

「これは、なあに」

マフラーを知らないらしい。

『それはマフラーって言って、首に巻くものだよ』

彼女は手を伸ばす。

「巻くもの」

マフラーを受け取ってくれた。

『巻いてごらん。あつたかいよ』

彼女はうなずいた。

「巻いてみる」

なぜか緊張した面持ちを見せる。

「うんしょ」

細く白い首にぐるぐる巻いていく。

『どうかな』

巻き終えた彼女に尋ねる。

『あつたかいでしょ』

彼女は、まばたきをする。

『えっと、あつたかいよね』

彼女は、しゃべらない。

『ええっと、あつたかかないかな』

もしかしたら、気に入らなかったのだろうか。ここまでこぎつけて、失敗したのだろうか。

彼女の顔が、しだいに紅潮していく。まさか、怒っているのだろうか。

『き、気に入らなかった、かな』

おそるおそる尋ねてみる。

「う」

彼女と目が合った。

そして彼女は、うめくように声を出した。

「くぐぐぐ」

アホだ、この子。

『つよく巻きすぎだよ。ほら、大丈夫かい』

マフラーをほどくのを手伝う。端から端まで全部巻き付けていたので、ほどくのが大変だった。

「ふう、空気がおいしい」

なんとも調子を狂わせてくれるものだ。失敗したかと思ったじゃないか。

「まふらー、むずかしいね」

『そんなことないよ。どれ、俺が巻いてあげる』

ほどいたマフラーを、彼女の首に巻こうと一歩前に出た。寒さで赤くなった頬が近くなる。ふと、鼻腔をくすぐる匂いに気づいた。

たぶんそれは、女の子のやさしくて甘い、ほのかな香りではなかった。場所がら染み付いたのであろう、かすかに薫る線香のそれであつた。

また、大変だったのは、首のうしろに巻くときに、彼女のうしろへと腕をまわさなければならぬことだった。彼女を抱くような恰好で、おでこがくつつきそうな距離になったから、手がすっかりふるえてしまった。

『あとちょっと』

「うん」

しずかに答えると、こそばゆそうに目を細める。まつげが長くて、きれいだった。

手際の悪さにも限度があるので、いつまでもこうしてはいられない。マフラーの左右の長さを調節すると、巻き終えたことを告げて、彼女から一歩離れる。

『はい、終わったよ』

しばらく端っこのほうを、もふもふやったり、ふにゆふにゆやりながら、ほおほおとか、なるほどとかつぶやいていた。

色白な彼女には、鮮やかな赤がよく映えていた。満足するまでさわると、ようやく顔を上げてこちらを向く。

顔をほころばせて、大きくひとつ、白いため息をついた。

「ほんとうに、あったかいね」

やわらかくほほえむ彼女の肩に、白い妖精が舞いおりて、幻想のようにふわりと消えた。

次々と現れては、また消えていく。

『降ってきたね』

「うん、降ってきたね」

彼女は手をお椀のようにして、それを受けとめる。

北風が吹いて、赤いマフラーが揺れた。

「雪」

ほっそりとした指先に、ひとひら、ふたひら、舞い散っては溶ける。

「降ってきた」



ちいさく、ちいさくつぶやいた。

『あ、あの』

やっとのことで声を発すると、彼女に尋ねてみる。

『雪も降ってきて寒いから、今日はうちで晩ごはんを食べないかい』

じつは今までプレゼントに気を取られて、彼女を夕食に誘うことなどすっかり頭から抜け落ちていた。おかげでハイカラさに欠くロール白菜なんか作ってしまった。

『どうかな、晩ごはん』

彼女は少し考えるそぶりを見せたあと、首を横に振った。マフラーがふるふると動く。

「今日はね、人が来るの」

驚愕で心臓が飛び出そうになった。誰かと逢う約束をしているのかと思っただからだ。

「お墓参りに来るんだって。だから、驚かさなきゃ」

そう聞いて、胸をなでおろした。やれやれ、まぎらわしい言い方をしないでほしいものだ。

彼女が墓参りの情報をどこから手に入れたのか、少しだけ気になったが、そんなことを聞いてもしかたがない。なんとか食い下がるう。

『でも、寒いよ』

「だいじょうぶだよ。まふらーがあればさむくないもん」

誰だ、余計なものを贈った奴は。うれしいはずの言葉も、今はうれしくなかった。

しかし、彼女の存在意義であるミッションよりも、クリスマスデイナーを優先しろというわけにもいかない。残念だが、今回はあきらめるよりほかなさそうだ。

『そうか。ちょっと残念だなあ』

「またこんど誘ってね」

たしかに、今日しか一緒に食べられないわけではない。マフラーを受け取ってもらっただけでも良しとしよう。

『じゃあ、暗くなってきたし、俺はそろそろ帰るね』

長居して彼女の仕事に差し支えるのも悪いので、おとなしく撤退することにした。

今日は、半分成功、半分失敗といった結果であった。及第点としよう。

「あ、待って」

踵を返して、帰ろうと歩き出したところを呼び止められた。

なんだろうと思って振り返ると、彼女は満面の笑みを浮かべていた。

「まふらー、ありがとう」

彼女につられて、思わず笑ってしまう。もしかすると、半分どころか、大成功だったのではないだろうか。

『どういたしまして』

よかった。よろこんでもらえた。

彼女に手を振ると、ゆっくりと歩き出す。ばさり、という音が途中で聞えたので振り返ると、いつもの傘を差していた。雪よけにも使ったんだな、と思った。舌がしもやけになりそうだけど。

お墓を出て、家へと歩いていく。ときどきスキップしそうになったが、みっともないのでこらえた。

今度はナズーリンには会わなかった。さすがにいつも徘徊しているわけではないようだ。

『ちょっと急ぐかな。もう晩ごはんの時間だ』

はやく帰って、ごはんにしよう。おなかがへった。

地面には少しだけ、雪が積もりはじめていた。風もさっきより強くなっている。吹雪にならないければいいが。

空を見上げると、星がきらきら光っていた。雪が降っているのに、星がよく見えるなんてめずらしい。

『ただいま』

ドアノブに手をかけると、静電気が走った。冬の風物詩である。

さつさと家の中に入り、手を洗って、うがいをする。

出かける前に、ごはんの準備はほとんどすんでいたもので、わりとすぐに食事でありつけそうだ。

『あとは、あつためなおすくらいかな』

その間に、二人分の食器を用意する。サラダなんかは、もう盛りつけちゃっていいか。

炊飯器をチエックすると、ちゃんと炊けている。もう撫でないけど。

時計を見ると、そろそろではないかと思った。気まぐれなので、確証はないが。

『よおし、これでだいたいオツケーかな』

あらかた支度をすますと、椅子に座って待つことにした。

あ、シャンペンがない。まあいいか。ジュースで間に合わそう。飲酒運転は危険なもの。

しばらくすると、ベルが鳴り、主の許可無くドアが開いた。

「遊びに来てやったぜ」

それはそれは、雪の降る中ご苦労なことだ。

『ちようどよかったね。今、ごはんができたところだよ』

「おお、そうか。そうだと思って来たけどな」

帽子についた雪をぱんぱんと払ってから、家の中へと上がりこむ。そのまま、手を洗うために洗面所に向かっていった。

「そういえば知ってるか。今日はクリスマスイブって日なんだぜ」  
『バカにしないでよ。知ってるよ』

言い方からするに、魔理沙のほづが詳しくなさそうだ。  
そんなことを気にする様子もなく、魔理沙は話を続ける。

「まあ、お前には縁遠いイベントだけどな」  
『ふ、それはどうかな』

軽口を叩く彼女には悪いが、たった今、クリスマスイブを堪能してきたところである。

「え、それってどういう」  
『いやあ、別に大したことじゃないさ』

多少うまくいったもんだから、得意になっていた。  
そこで、そうそう、と思いだして立ち上がり、ダンスへと向かう。

「なんだ。はやく食べようぜ」  
入れ替わるように、魔理沙は席に着いて、文句を言う。  
はやく特製のロール白菜が食べたいのだろう。無理もない。

『魔理沙、ちよっと来て』  
「なんだよ、もうおなかぺこぺこだぜ」

ひょこつと立ち上がると、ぶつぶつ言いながらも、いちおうこち  
らへ来た。

『はい、これ』  
「え、っつと」

渡したのは、青色の手袋。

「こ、これは、ええっと」

魔理沙は目をぱちくりさせている。  
どつやら驚いてくれたようだ。

『魔理沙』

「へ、なんだ」

魔理沙は頓狂な声をだすと、手元の手袋から、こちらへと視線をうつす。

『メリークリスマス』

たまには、こんなサプライズもいいだろう。

魔理沙は、どどろかなくてもしかして、などと意味不明なことを言っていたが、しだいにくちをぱくぱくさせはじめ、突然こくりとつばを飲みこんだ。

「あ、い、今何か持ってくるっ」

大きな声でそう言うと、弾かれたように玄関の方に走り出し、ドアを蹴破るようにして外へ出ていった。

『ああ、ちよっとっ』

魔理沙を追いかけて外へ出る。

『晩ごはん、冷めちゃうよおおお』

一瞬で箒に乗り、飛び去っていく魔理沙の背にさげんだが、そのまま行ってしまった。

『まったくもう。そそっかしいんだから』

魔理沙が開け放ったドアを閉め、椅子に座って待つことにした。テーブルに、ほおづえをつくると、魔理沙の驚いた顔がよみがえってきて、笑ってしまった。

そんなに手袋が欲しかったのなら、もっと手芸の得意なのがいただろうに。

寒空の下でさえ寒いのがから、魔理沙が飛んでいる寒空の上はさぞ寒かるう。素手では大変だ。

だから手袋を受け取ったとき、今日の夜空のように目を輝かせていたのだろう。

ちなみに、飛んでいる魔理沙のもつと上に見えた気がする、あの赤い影は、きつと幻想に違いない。そうでなければ、UFOの間違いだ。

だって、寝て待つだけでプレゼントが置いてあるなんて、あまりにも夢がなさすぎるもの。

## あたたかい冬 後編（後書き）

読んでくださって、ありがとうございます。

今年一年、多くの方に読んでいただいたり、感想を頂いたり、大変充実した一年になりました。

また、この度、PVアクセス100,000を突破しました。

ご報告とともにお礼申し上げます。

本当にありがとうございます。

来年もどうぞよろしく願いたします。

それでは、みなさん、よいお年を！

P S ・暇な方は後ほど活動報告をご覧頂きたい。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2599s/>

---

このまま東方寝巻巻。

2011年12月25日00時56分発行